

函館市

# 中野 B 遺跡 (Ⅲ)

函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第 1 分冊

- I 遺跡の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺構と遺構出土の遺物

平成 7 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

函館市

# 中野B遺跡(Ⅲ)

函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第1分冊

- I 遺跡の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺構と遺構出土の遺物

平成7年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





竪穴住居跡群（平成7年度）



H-73



H-408



H-73 出土土器



H-73 床面出土石器

## 例 言

1. 本書は平成7年度に函館空港拡張整備工事用地内において、財団法人北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した函館市中野B遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査および報告書の作成は、第1調査部第1調査課が行った。中野B遺跡の発掘調査は平成4年度からの継続事業であり、堅穴住居跡や土壌、Tピット、焼土などの遺構番号は基本的に平成4年度からの連番である。
3. 遺構の原稿は、調査を担当した職員がそれぞれ執筆し、各遺構の文末に文責者名を記している。ただし、Tピットについては和泉田毅が、土壌と遺構・包含層出土の土器については富永勝也が、石器については笠原興が分担、執筆した。そのほかの各章・節の主担当は以下のとおりである。  
I・II-1：越田賢一郎、II-2・3：花岡正光、VI-1：和泉田毅、VI-2：富永勝也、VI-3：笠原興
4. 遺構図は、調査を担当した職員がそれぞれ整理し、第2原図を作成したものを、和泉田毅・山本泰子がトレースなどを行い、和泉田毅が遺構図版の取りまとめを行った。
5. 土器の接合、復元、拓本には、主に手島敦子・貝田和子・波多野にな子・高橋慶子・種市伊津子・前川紀子・松井公子・永野公美子が従事し、土器の実測・トレースは、主に山下かず子・飯田由紀乃・澤田直美・進藤恵が行い、これらの作業を富永勝也が統括した。
6. 石器の計測、集計等は、主に服部たえ子と辻村智枝子が従事し、石器の実測・トレースは渡部久美子・細田美佳子・柳谷りさ・福島千智が行い、これらの作業を笠原興が統括した。
7. 遺物分布接合図、遺物・遺構図版、集計表等の整理、作成には大坂篤美・尾見里子・石澤一恵・田中美佐・長崎亜希子・服部佐也子が従事し、和泉田毅と越田雅司が統括した。
8. 現地の写真撮影は調査を担当した職員が行い、遺物の写真撮影は越田雅司・笠原興・富永勝也が行った。口絵の遺物写真の撮影は菊池慈人が行った。アルバム整理、写真図版の作成は、主に尾見里子が従事した。
9. フローテーション試料の大きな選別作業には、田中美佐・大坂篤美が従事した。
10. V章の各種分析・同定については、次の方々に執筆を依頼した。  
山田 治（京都産業大学理学部）、薬科 哲男・東村 武信（京都大学原子炉実験所）、  
吉崎 昌一（札幌国際大学）、奥水 達司（立教大学原子力研究所）
11. 石材鑑定は、花岡正光が行った。
12. 調査にあたっては、下記の機関および人々の指導ならびに協力を得た（順不同、敬称略）。

文化庁、奈良国立文化財研究所、北海道教育委員会、函館市教育委員会 田原良信・中村公宣・佐藤智雄・落合治彦・野辺地初雄・佐々木日登美、市立函館博物館 野村祐一、函館北方民族資料館 長谷部一弘、七飯町教育委員会 石本省三・横山英介、上磯町教育委員会 森 靖裕、戸井町教育委員会 古屋敷則雄、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・山口 敦・小林 貢、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則、大矢内愛史、森町教育委員会 藤田 登、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、知内町教育委員会 高橋豊彦、松前町教育委員会 久保 泰・前田正恵、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斎藤邦典・佐藤一志・松田輝哉・柳沼弥生、乙部町教育委員会 森 広樹・前田 巧、江差町教育委員会 藤島一巳、今金町教育委員会 寺崎康史、倶知安町教育委員会 矢吹俊男、余市町教育委員会 宮 宏明、小樽市教育委員会 石川直章、札幌

市教育委員会 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・千歳市教育委員会 大谷敏三・田村俊之・高橋 理・豊田宏良・恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一・森 秀之・江別市教育委員会 高橋正勝・直井孝一・園部真幸・野中一弘・稲垣和幸・石狩市教育委員会 石橋孝夫・工藤義衛、伊達市教育委員会 大島直行、苫小牧市教育委員会 佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤 肇・渡辺俊一・二階堂啓也・鈴木耕栄・赤石慎三、平取市教育委員会 森岡健治、静内町教育委員会 蔵中剛志、旭川市教育委員会 斎藤 傑・瀬川拓郎・友田哲弘、富良野町教育委員会 杉浦重信、名寄市教育委員会 氏江敏文・鈴木邦輝、稚内市教育委員会 内山真澄、枝幸町教育委員会 佐藤隆広、紋別市教育委員会 佐藤和利、常呂町教育委員会 武田 修、斜里町教育委員会 金盛典夫、羅臼町教育委員会 涌坂周一、美幌博物館 小林 敬、浦幌町教育委員会 後藤秀彦、帯広百年記念館 北沢 実・山原敏朗、釧路市立郷土博物館 西 幸隆・松田 猛・石川 朗、北海道開拓記念館 野村 崇・平川善祥・山田悟郎・右代啓視、国立歴史民族博物館 西本豊弘、東京大学常呂研究室 宇田川洋・新見倫子、早稲田大学 金子浩昌、北海道教育大学函館分校 千代 肇、札幌大学 木村英明、札幌医科大学 石田 肇、静修女子大学 吉崎昌一・長崎潤一・椿坂恭代、北海道大学 大井晴男・菊池俊彦・林 謙作・天野哲也、青森県立郷土館 福田友之、青森県埋蔵文化財調査センター 成田滋彦・三浦圭介・鈴木克彦、三沢市歴史民俗博物館 長尾正義、八戸市教育委員会 小笠原義範、市川市立博物館 領塚正治、道立アイヌ民族文化研究センター 古原敏弘、文化財保護協会 竹田輝雄・大島秀俊、鹿児島県歴史資料センター黎明館 牛ノ濱 修、鹿児島県立埋蔵文化財センター 中村耕治・富田逸郎、鹿児島県加世田市教育委員会 上東克彦、鹿児島県指宿市教育委員会 下山 覚（所属は調査時点）

## 凡 例

1. 遺構は、以下の記号によって表記し、原則として発掘調査順に番号を付した。

H：竪穴住居跡                  P：土墳                  T：Tピット                  F：焼土  
HF：住居に伴う焼土および炉跡                  HP：住居に伴う小ピットおよび柱穴

2. 遺構図中の方位は真北を示し、レベルは標高（単位m）である。

3. 掲載した実測図等の縮尺は、原則的には以下のとおりであるが、必要に応じてそれぞれにスケール・バーを明示してある。

遺構図：1/40    遺構図中の遺物出土状況図：1/20    土器実測図：1/4    土器拓影図：1/3  
石器実測図    剥片石器・石斧：1/2    礫石器：1/3    土・石製品：1/2

4. 遺構の規模は、以下のように計測値を表示した。

検出面での長軸長/床（墳底）面での長軸長×検出面での短軸長/床（墳底）面での短軸長×検出面からの最大深（単位m）。また一部埋されているものは現存長および復元推定値を（ ）で示し、不明の場合は—の記号で表示した。

5. 遺構覆土等における土層の混合状態を表現するため、以下のように表記している場合がある。

A+B（A≒B）：AとBがほぼ同量にまじる    A>B：AにBが少量混じる  
A≧B：AにBが微量まじる。

6. 出土遺物分布・接合図等では、各遺物を次の記号で表示し、必要に応じて別種の記号を用いた。

床面出土    土器●    剥片石器▲    礫石器■    磨製石器★  
覆土出土    土器○    剥片石器△    礫石器□    磨製石器☆

また、遺構図中のPは土器、Sは石器、Fは剥片石器を示している。

# 分 冊 目 次

## 第1分冊

□ 絵 1～4 (カラー)

例 言

凡 例

分冊目次

第1分冊目次

挿図目次・表目次

|                |    |
|----------------|----|
| I 調査の概要        | 1  |
| 1 調査要項         | 1  |
| 2 調査体制         | 1  |
| 3 調査の経緯        | 1  |
| 4 調査の方法        | 6  |
| 5 平成7年度調査の概要   | 10 |
| 6 遺構・遺物の分類     | 18 |
| II 遺跡の位置と環境    | 23 |
| 1 遺跡の位置と周辺の遺跡  | 23 |
| 2 地形・地質        | 26 |
| 3 土 層          | 26 |
| III 遺構と遺構出土の遺物 | 43 |
| 1 D地区          | 44 |

## 第2分冊

凡 例

第2分冊目次

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| III 遺構と遺構出土の遺物               |     |
| 1 D地区【続：(1)住居跡 H-505～】       | 357 |
| 2 E地区                        | 485 |
| 3 F地区                        | 504 |
| IV 包含層出土の遺物                  | 521 |
| 1 土 器                        | 521 |
| 2 石器等                        | 569 |
| V 自然科学的手法による分析結果             | 597 |
| 1 放射性炭素による年代測定結果-1           | 597 |
| 2 放射性炭素による年代測定結果-2           | 599 |
| 3 函館市中野B遺跡出土黒曜石のフィッシュントラック年代 | 601 |
| 4 函館市中野B遺跡出土の黒曜石製造物の原材産地分析   | 603 |
| 5 函館市中野B遺跡出土炭化植物種子同定結果       | 615 |



|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 6 中野B遺跡におけるヒエ属種子の検出 .....  | 617 |
| 付記 中野B遺跡出土のヒエ属種子に関して ..... | 623 |
| VI ま と め .....             | 627 |
| 1 遺 構 .....                | 627 |
| 2 土 器 .....                | 629 |
| 3 石 器 .....                | 648 |
| 引用・参考文献 .....              | 653 |
| 一覧表 .....                  | 655 |

### 第3分冊

写真図版目次

写真図版

報告書抄録

# 第1分冊目次

口 絵 1～4 (カラー)

例 言

凡 例

分冊目次

第1分冊目次

挿図目次・表目次

|                |    |
|----------------|----|
| I 調査の概要        | 1  |
| 1 調査要項         | 1  |
| 2 調査体制         | 1  |
| 3 調査の経緯        | 1  |
| 4 調査の方法        | 6  |
| (1) 調査区の設定     | 6  |
| (2) 発掘調査の方法    | 6  |
| (3) 整理の方法      | 9  |
| (4) 遺物とデータ類の保管 | 9  |
| 5 平成7年度調査の概要   | 10 |
| 6 遺構・遺物の分類     | 18 |
| (1) 遺 構        | 18 |
| (2) 遺 物        | 18 |
| II 遺跡の位置と環境    | 23 |
| 1 遺跡の位置と周辺の遺跡  | 23 |
| 2 地形・地質        | 26 |
| 3 土 層          | 26 |
| III 遺構と遺構出土の遺物 | 43 |
| 1 D地区          | 44 |
| (1) 住居跡        | 46 |

# 挿 図 目 次

|            |                                             |       |            |                          |       |
|------------|---------------------------------------------|-------|------------|--------------------------|-------|
| 図 I - 1    | 遺跡の位置                                       | 3     | 図 III - 15 | H-73出土石器 (1)             | 59    |
| 図 I - 2    | 函館空港用地内の遺跡の位置                               | 5     | 図 III - 16 | H-73出土石器 (2)             | 60    |
| 図 I - 3    | 調査区の呼称                                      | 7     | 図 III - 17 | H-73出土石器 (3)             | 61    |
| 図 I - 4    | 平成7年度中野B遺跡調査区設定図                            | 8     | 図 III - 18 | H-73床面出土土器分布・接合図         | 62    |
| 図 I - 5    | 函館空港用地内の遺構の分布                               | 11・12 | 図 III - 19 | H-73床面出土土器分布図            | 63    |
| 図 I - 6    | 平成7年度調査区の最終面地形図と<br>遺構位置図 (1) 住居跡           | 13・14 | 図 III - 20 | H-73覆土出土土器分布・接合図         | 64    |
| 図 I - 7    | 平成7年度調査区の最終面地形図と<br>遺構位置図 (2)<br>土壌・Tピット・焼土 | 15・16 | 図 III - 21 | H-73覆土出土土器分布・接合図         | 65    |
| 図 I - 8    | 石器の計測方法の模式図                                 | 22    | 図 III - 22 | H-74実測図                  | 66    |
| 図 II - 1   | 周辺の遺跡                                       | 24    | 図 III - 23 | H-74出土土器                 | 67    |
| 図 II - 2   | 発掘調査区の位置と周辺の地形                              | 27    | 図 III - 24 | H-74出土土器                 | 67    |
| 図 II - 3   | 基本土層模式図                                     | 29    | 図 III - 25 | H-74出土土器分布図              | 68    |
| 図 II - 4   | 遺跡周辺の地形分類図                                  | 30    | 図 III - 26 | H-74出土土器分布図              | 68    |
| 図 II - 5   | 地形断面と地質柱状図                                  | 31    | 図 III - 27 | H-118実測図                 | 70    |
| 図 II - 6   | D地区土層柱状図                                    | 32    | 図 III - 28 | H-118出土土器                | 71    |
| 図 II - 7   | E地区土層断面図 (1)                                | 33・34 | 図 III - 29 | H-118出土土器                | 71    |
| 図 II - 8   | E地区土層断面図 (2)                                | 35・36 | 図 III - 30 | H-118出土土器分布・接合図          | 72    |
| 図 II - 9   | E地区土層断面図 (3)                                | 37・38 | 図 III - 31 | H-156実測図                 | 73    |
| 図 II - 10  | F地区土層断面図 (1)                                | 39・40 | 図 III - 32 | H-156出土土器                | 74    |
| 図 II - 11  | F地区土層断面図 (2)                                | 41    | 図 III - 33 | H-156出土土器                | 75    |
| 図 III - 1  | D地区の遺構位置図 (1) 住居跡                           | 44    | 図 III - 34 | H-156出土土器分布図             | 76    |
| 図 III - 2  | D地区の遺構位置図 (2)<br>土壌・Tピット・焼土                 | 45    | 図 III - 35 | H-402実測図                 | 78    |
| 図 III - 3  | H-34実測図                                     | 46    | 図 III - 36 | H-402出土土器                | 80    |
| 図 III - 4  | H-34出土土器                                    | 47    | 図 III - 37 | H-402出土土器                | 80    |
| 図 III - 5  | H-34出土土器                                    | 47    | 図 III - 38 | H-402出土土器分布・接合図          | 81    |
| 図 III - 6  | H-34出土土器分布・接合図                              | 48    | 図 III - 39 | H-402出土土器分布図             | 81    |
| 図 III - 7  | H-40実測図                                     | 50    | 図 III - 40 | H-405実測図                 | 83・84 |
| 図 III - 8  | H-40出土土器                                    | 51    | 図 III - 41 | H-405覆土2層上面<br>遺物出土状況実測図 | 85    |
| 図 III - 9  | H-40出土土器                                    | 51    | 図 III - 42 | H-405出土土器 (1)            | 87    |
| 図 III - 10 | H-40出土土器分布・接合図                              | 51    | 図 III - 43 | H-405出土土器 (2)            | 88    |
| 図 III - 11 | H-73実測図                                     | 53・54 | 図 III - 44 | H-405出土土器 (3)            | 89    |
| 図 III - 12 | H-73出土土器 (1)                                | 56    | 図 III - 45 | H-405出土土器                | 91    |
| 図 III - 13 | H-73出土土器 (2)                                | 57    | 図 III - 46 | H-405出土土器分布・接合図          | 92    |
| 図 III - 14 | H-73出土土器 (3)                                | 58    | 図 III - 47 | H-405出土土器分布図             | 93    |
|            |                                             |       | 図 III - 48 | H-405出土土器分布図             | 94    |
|            |                                             |       | 図 III - 49 | H-406実測図                 | 97・98 |
|            |                                             |       | 図 III - 50 | H-406出土土器                | 99    |

|       |                     |           |        |                    |           |
|-------|---------------------|-----------|--------|--------------------|-----------|
| 图Ⅲ-51 | H-406出土石器           | 99        | 图Ⅲ-86  | H-451出土石器 (1)      | 144       |
| 图Ⅲ-52 | H-406出土器物分布·接合图     | 100       | 图Ⅲ-87  | H-451出土石器 (2)      | 145       |
| 图Ⅲ-53 | H-408实测图            | 102       | 图Ⅲ-88  | H-451床面出土器物分布图     | 146       |
| 图Ⅲ-54 | H-408覆土 3 层上面       |           | 图Ⅲ-89  | H-451覆土出土石器分布图     | 146       |
|       | 器物出土状况实测图           | 104       | 图Ⅲ-90  | H-451覆土出土石器分布·接合图  | 147       |
| 图Ⅲ-55 | H-408出土石器 (1)       | 105       | 图Ⅲ-91  | H-453实测图           | 149       |
| 图Ⅲ-56 | H-408出土石器 (2)       | 106       | 图Ⅲ-92  | H-453出土石器          | 150       |
| 图Ⅲ-57 | H-408出土石器 (1)       | 107       | 图Ⅲ-93  | H-453出土石器          | 151       |
| 图Ⅲ-58 | H-408出土石器 (2)       | 108       | 图Ⅲ-94  | H-453出土器物分布·接合图    | 152       |
| 图Ⅲ-59 | H-408覆土 3 · 4 层出土石器 |           | 图Ⅲ-95  | H-454实测图           | 155 · 156 |
|       | 分布·接合图              | 109       | 图Ⅲ-96  | H-454出土石器 (1)      | 157       |
| 图Ⅲ-60 | H-408覆土 1 · 2 层出土石器 |           | 图Ⅲ-97  | H-454出土石器 (2)      | 158       |
|       | 分布·接合图              | 110       | 图Ⅲ-98  | H-454出土石器 (3)      | 159       |
| 图Ⅲ-61 | H-408出土石器分布·接合图     | 111       | 图Ⅲ-99  | H-454出土石器 (4)      | 160       |
| 图Ⅲ-62 | H-410实测图            | 113 · 114 | 图Ⅲ-100 | H-454出土石器 (1)      | 161       |
| 图Ⅲ-63 | H-410出土石器 (1)       | 117       | 图Ⅲ-101 | H-454出土石器 (2)      | 162       |
| 图Ⅲ-64 | H-410出土石器 (2)       | 118       | 图Ⅲ-102 | H-454床面·覆土 2 层出土石器 |           |
| 图Ⅲ-65 | H-410出土石器 (3)       | 119       |        | 分布·接合图             | 163       |
| 图Ⅲ-66 | H-410出土石器 (4)       | 120       | 图Ⅲ-103 | H-454覆土 1 层·Ⅲ层出土石器 |           |
| 图Ⅲ-67 | H-410出土石器 (5)       | 121       |        | 分布·接合图             | 164       |
| 图Ⅲ-68 | H-410出土石器 (1)       | 125       | 图Ⅲ-104 | H-454出土石器分布图       | 165       |
| 图Ⅲ-69 | H-410出土石器 (2)       | 126       | 图Ⅲ-105 | H-455实测图           | 167       |
| 图Ⅲ-70 | H-410出土石器 (3)       | 127       | 图Ⅲ-106 | H-455出土石器          | 168       |
| 图Ⅲ-71 | H-410床面出土石器分布·接合图   | 128       | 图Ⅲ-107 | H-455出土石器          | 168       |
| 图Ⅲ-72 | H-410床面出土石器分布图      | 129       | 图Ⅲ-108 | H-455出土器物分布·接合图    | 169       |
| 图Ⅲ-73 | H-410覆土出土石器         |           | 图Ⅲ-109 | H-456出土石器          | 170       |
|       | 分布·接合图 (1)          | 130       | 图Ⅲ-110 | H-456出土石器          | 170       |
| 图Ⅲ-74 | H-410覆土出土石器         |           | 图Ⅲ-111 | H-456实测图           | 171       |
|       | 分布·接合图 (2)          | 131       | 图Ⅲ-112 | H-456出土器物分布图       | 172       |
| 图Ⅲ-75 | H-410覆土出土石器分布·接合图   | 132       | 图Ⅲ-113 | H-457实测图           | 173       |
| 图Ⅲ-76 | H-419实测图            | 133       | 图Ⅲ-114 | H-457出土石器          | 174       |
| 图Ⅲ-77 | H-419出土石器           | 134       | 图Ⅲ-115 | H-457出土石器          | 175       |
| 图Ⅲ-78 | H-450实测图            | 136       | 图Ⅲ-116 | H-457出土器物分布·接合图    | 176       |
| 图Ⅲ-79 | H-450出土石器           | 137       | 图Ⅲ-117 | H-458出土石器          | 177       |
| 图Ⅲ-80 | H-450出土石器           | 138       | 图Ⅲ-118 | H-458实测图           | 178       |
| 图Ⅲ-81 | H-450出土石器分布·接合图     | 139       | 图Ⅲ-119 | H-459实测图           | 180       |
| 图Ⅲ-82 | H-450出土石器分布·接合图     | 140       | 图Ⅲ-120 | H-459出土石器          | 181       |
| 图Ⅲ-83 | H-451实测图            | 141 · 142 | 图Ⅲ-121 | H-459出土石器          | 181       |
| 图Ⅲ-84 | H-451出土石器 (1)       | 143       | 图Ⅲ-122 | H-459出土器物分布·接合图    | 182       |
| 图Ⅲ-85 | H-451出土石器 (2)       | 144       | 图Ⅲ-123 | H-460实测图           | 184       |

|            |                 |         |           |                 |         |
|------------|-----------------|---------|-----------|-----------------|---------|
| 图 III-124  | H-460出土土器 (1)   | 186     | 图 III-159 | H-466出土土器接合图    | 225     |
| 图 III-125  | H-460出土土器 (2)   | 187     | 图 III-160 | H-467实测图        | 227     |
| 图 III-126  | H-460出土土器 (3)   | 188     | 图 III-161 | H-467出土土器 (1)   | 230     |
| 图 III-127  | H-460出土土器       | 190     | 图 III-162 | H-467出土土器 (2)   | 231     |
| 图 III-128  | H-460覆土 2 层出土土器 |         | 图 III-163 | H-467出土土器       | 232     |
| 分布·接合图 (1) | 191             |         | 图 III-164 | H-467出土土器分布·接合图 | 233     |
| 图 III-129  | H-460覆土 2 层出土土器 |         | 图 III-165 | H-467出土土器分布·接合图 | 234     |
| 分布·接合图 (2) | 192             |         | 图 III-166 | H-468实测图        | 235·236 |
| 图 III-130  | H-460覆土 1 层出土土器 |         | 图 III-167 | H-468出土土器       | 238     |
| 分布·接合图     | 193             |         | 图 III-168 | H-468出土土器       | 238     |
| 图 III-131  | H-460出土土器分布·接合图 | 194     | 图 III-169 | H-468出土土器分布图    | 238     |
| 图 III-132  | H-461实测图        | 195     | 图 III-170 | H-469实测图        | 240     |
| 图 III-133  | H-461出土土器       | 196     | 图 III-171 | H-469出土土器       | 241     |
| 图 III-134  | H-461出土土器       | 196     | 图 III-172 | H-469出土土器       | 241     |
| 图 III-135  | H-461出土土器分布·接合图 | 197     | 图 III-173 | H-469出土土器分布·接合图 | 241     |
| 图 III-136  | H-461出土土器分布图    | 197     | 图 III-174 | H-470实测图        | 243     |
| 图 III-137  | H-462实测图        | 199     | 图 III-175 | H-470出土土器       | 244     |
| 图 III-138  | H-462出土土器 (1)   | 201     | 图 III-176 | H-470出土土器       | 244     |
| 图 III-139  | H-462出土土器 (2)   | 202     | 图 III-177 | H-470出土土器分布·接合图 | 245     |
| 图 III-140  | H-462出土土器       | 203     | 图 III-178 | H-471实测图        | 247·248 |
| 图 III-141  | H-462出土土器分布·接合图 | 204     | 图 III-179 | H-471出土土器       | 249     |
| 图 III-142  | H-462出土土器分布图    | 205     | 图 III-180 | H-471出土土器       | 250     |
| 图 III-143  | H-463实测图        | 207     | 图 III-181 | H-471出土土器分布·接合图 | 251     |
| 图 III-144  | H-463出土土器       | 208     | 图 III-182 | H-472实测图        | 253     |
| 图 III-145  | H-464实测图        | 209     | 图 III-183 | H-472出土土器 (1)   | 254     |
| 图 III-146  | H-464出土土器       | 210     | 图 III-184 | H-472出土土器 (2)   | 255     |
| 图 III-147  | H-464出土土器       | 210     | 图 III-185 | H-472出土土器 (1)   | 256     |
| 图 III-148  | H-464出土土器分布·接合图 | 210     | 图 III-186 | H-472出土土器 (2)   | 257     |
| 图 III-149  | H-465实测图        | 213·214 | 图 III-187 | H-472出土土器分布·接合图 | 258     |
| 图 III-150  | H-465出土土器       | 215     | 图 III-188 | H-472出土土器分布·接合图 | 259     |
| 图 III-151  | H-465出土土器       | 216     | 图 III-189 | H-473实测图        | 260     |
| 图 III-152  | H-465床面出土土物     |         | 图 III-190 | H-473出土土器 (1)   | 262     |
| 分布·接合图     | 217             |         | 图 III-191 | H-473出土土器 (2)   | 263     |
| 图 III-153  | H-465覆土出土土物     |         | 图 III-192 | H-473出土土器       | 264     |
| 分布·接合图     | 218             |         | 图 III-193 | H-473出土土器分布图    | 265     |
| 图 III-154  | H-466实测图        | 220     | 图 III-194 | H-473出土土器接合图    | 266     |
| 图 III-155  | H-466出土土器 (1)   | 221     | 图 III-195 | H-473出土土器分布图    | 267     |
| 图 III-156  | H-466出土土器 (2)   | 222     | 图 III-196 | H-474实测图        | 269     |
| 图 III-157  | H-466出土土器       | 223     | 图 III-197 | H-474出土土器       | 271     |
| 图 III-158  | H-466出土土物分布图    | 224     | 图 III-198 | H-474出土土器       | 272     |

|        |                 |     |        |                 |         |
|--------|-----------------|-----|--------|-----------------|---------|
| 图Ⅲ-199 | H-474出土遗物分布·接合图 | 273 | 图Ⅲ-239 | H-485实测图        | 305     |
| 图Ⅲ-200 | H-475实测图        | 275 | 图Ⅲ-240 | H-485出土石器       | 305     |
| 图Ⅲ-201 | H-475出土石器       | 276 | 图Ⅲ-241 | H-485出土石器       | 305     |
| 图Ⅲ-202 | H-475出土石器       | 276 | 图Ⅲ-242 | H-485出土遗物分布图    | 305     |
| 图Ⅲ-203 | H-475出土遗物分布·接合图 | 277 | 图Ⅲ-243 | H-486实测图        | 307     |
| 图Ⅲ-204 | H-476实测图        | 278 | 图Ⅲ-244 | H-486出土石器       | 308     |
| 图Ⅲ-205 | H-476出土石器       | 279 | 图Ⅲ-245 | H-486出土石器       | 308     |
| 图Ⅲ-206 | H-476出土石器       | 279 | 图Ⅲ-246 | H-486出土遗物分布图    | 308     |
| 图Ⅲ-207 | H-477实测图        | 280 | 图Ⅲ-247 | H-487实测图        | 309·310 |
| 图Ⅲ-208 | H-477出土石器       | 281 | 图Ⅲ-248 | H-487出土石器       | 311     |
| 图Ⅲ-209 | H-477出土石器       | 281 | 图Ⅲ-249 | H-487出土石器       | 311     |
| 图Ⅲ-210 | H-477出土遗物分布图    | 282 | 图Ⅲ-250 | H-487出土遗物分布·接合图 | 312     |
| 图Ⅲ-211 | H-478实测图        | 283 | 图Ⅲ-251 | H-488实测图        | 313     |
| 图Ⅲ-212 | H-478出土遗物分布·接合图 | 284 | 图Ⅲ-252 | H-488出土石器       | 314     |
| 图Ⅲ-213 | H-478出土石器       | 285 | 图Ⅲ-253 | H-488出土石器       | 314     |
| 图Ⅲ-214 | H-478出土石器       | 285 | 图Ⅲ-254 | H-488出土遗物分布·接合图 | 315     |
| 图Ⅲ-215 | H-479实测图        | 286 | 图Ⅲ-255 | H-489出土石器       | 316     |
| 图Ⅲ-216 | H-479出土石器       | 287 | 图Ⅲ-256 | H-489出土石器       | 316     |
| 图Ⅲ-217 | H-479出土石器       | 287 | 图Ⅲ-257 | H-489实测图        | 317     |
| 图Ⅲ-218 | H-479出土遗物分布图    | 287 | 图Ⅲ-258 | H-489出土遗物分布图    | 318     |
| 图Ⅲ-219 | H-480实测图        | 289 | 图Ⅲ-259 | H-490实测图        | 319     |
| 图Ⅲ-220 | H-480出土石器       | 291 | 图Ⅲ-260 | H-490出土石器       | 320     |
| 图Ⅲ-221 | H-480出土石器       | 292 | 图Ⅲ-261 | H-490出土石器       | 320     |
| 图Ⅲ-222 | H-480出土遗物分布·接合图 | 292 | 图Ⅲ-262 | H-490出土遗物分布图    | 320     |
| 图Ⅲ-223 | H-481实测图        | 293 | 图Ⅲ-263 | H-491实测图        | 321     |
| 图Ⅲ-224 | H-481出土石器       | 294 | 图Ⅲ-264 | H-491出土石器       | 322     |
| 图Ⅲ-225 | H-481出土石器       | 294 | 图Ⅲ-265 | H-491出土石器       | 323     |
| 图Ⅲ-226 | H-481出土遗物分布图    | 295 | 图Ⅲ-266 | H-491出土遗物分布·接合图 | 324     |
| 图Ⅲ-227 | H-482实测图        | 296 | 图Ⅲ-267 | H-492实测图        | 325     |
| 图Ⅲ-228 | H-482出土石器       | 297 | 图Ⅲ-268 | H-492出土石器       | 326     |
| 图Ⅲ-229 | H-482出土石器       | 297 | 图Ⅲ-269 | H-492出土石器       | 326     |
| 图Ⅲ-230 | H-482出土遗物分布·接合图 | 298 | 图Ⅲ-270 | H-492出土遗物分布图    | 327     |
| 图Ⅲ-231 | H-483实测图        | 299 | 图Ⅲ-271 | H-493实测图        | 328     |
| 图Ⅲ-232 | H-483出土石器       | 300 | 图Ⅲ-272 | H-493出土遗物分布图    | 328     |
| 图Ⅲ-233 | H-483出土石器       | 300 | 图Ⅲ-273 | H-493出土石器       | 329     |
| 图Ⅲ-234 | H-483出土遗物分布图    | 301 | 图Ⅲ-274 | H-493出土石器       | 329     |
| 图Ⅲ-235 | H-484实测图        | 302 | 图Ⅲ-275 | H-494实测图        | 330     |
| 图Ⅲ-236 | H-484出土石器       | 303 | 图Ⅲ-276 | H-494出土石器       | 331     |
| 图Ⅲ-237 | H-484出土石器       | 303 | 图Ⅲ-277 | H-494出土石器分布图    | 331     |
| 图Ⅲ-238 | H-484出土遗物分布·接合图 | 303 | 图Ⅲ-278 | H-495实测图        | 332     |

|        |                 |     |        |                 |         |
|--------|-----------------|-----|--------|-----------------|---------|
| 図Ⅲ-279 | H-495出土土器       | 332 | 図Ⅲ-296 | H-499出土遺物分布図    | 343     |
| 図Ⅲ-280 | H-496出土土器       | 332 | 図Ⅲ-297 | H-500実測図        | 344     |
| 図Ⅲ-281 | H-496実測図        | 334 | 図Ⅲ-298 | H-500出土土器       | 345     |
| 図Ⅲ-282 | H-496出土土器       | 334 | 図Ⅲ-299 | H-500出土土器       | 345     |
| 図Ⅲ-283 | H-496出土土器       | 334 | 図Ⅲ-300 | H-500出土遺物分布図    | 346     |
| 図Ⅲ-284 | H-496出土遺物分布・接合図 | 335 | 図Ⅲ-301 | H-501実測図        | 347     |
| 図Ⅲ-285 | H-497実測図        | 336 | 図Ⅲ-302 | H-501出土土器       | 348     |
| 図Ⅲ-286 | H-497出土土器       | 337 | 図Ⅲ-303 | H-501出土土器       | 348     |
| 図Ⅲ-287 | H-497出土土器       | 337 | 図Ⅲ-304 | H-501出土遺物分布図    | 349     |
| 図Ⅲ-288 | H-497出土遺物分布図    | 337 | 図Ⅲ-305 | H-502実測図        | 350     |
| 図Ⅲ-289 | H-498実測図        | 339 | 図Ⅲ-306 | H-502出土土器       | 351     |
| 図Ⅲ-290 | H-498出土土器       | 340 | 図Ⅲ-307 | H-503出土土器       | 352     |
| 図Ⅲ-291 | H-498出土土器       | 340 | 図Ⅲ-308 | H-503出土土器       | 352     |
| 図Ⅲ-292 | H-498出土遺物分布図    | 341 | 図Ⅲ-309 | H-503実測図        | 353・354 |
| 図Ⅲ-293 | H-499実測図        | 342 | 図Ⅲ-310 | H-503出土遺物分布・接合図 | 355     |
| 図Ⅲ-294 | H-499出土土器       | 343 | 図Ⅲ-311 | H-504実測図        | 356     |
| 図Ⅲ-295 | H-499出土土器       | 343 | 図Ⅲ-312 | H-504出土土器       | 356     |

## 表 目 次

|      |                   |    |      |         |    |
|------|-------------------|----|------|---------|----|
| 表Ⅰ-1 | 面館空港拡張工事に伴う年次別遺構数 | 4  | 表Ⅱ-1 | 周辺の遺跡一覧 | 25 |
| 表Ⅰ-2 | 平成7年度の出土遺物一覧      | 17 |      |         |    |

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名 函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査  
 事業委託者 北海道開発局函館開発建設部  
 事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター  
 調査期間 平成7年4月18日～平成7年3月24日  
 遺跡名 函館市中野B遺跡（道教委登録番号 B-01-39）  
 所在地 函館市中野町94-2ほか  
 調査面積 22,983㎡  
 発掘期間 平成7年5月8日～10月31日

## 2 調査体制

### 平成7年度 発掘体制

理事長 伊藤一夫  
 専務理事 佐藤哲人  
 常務理事 柴田忠昭 森田知忠 木村尚俊  
 業務部長 山内清志  
 第1調査部長 畑 宏明  
 第1調査課長 越田賢一郎（発掘担当者）  
 主 査 和泉田 毅（発掘担当者）  
 主 任 越田雅司  
 文化財保護主事 村田 大  
 “ 愛場和人  
 “ 笠原 興  
 “ 富永勝也  
 “ 柳瀬由佳

### 平成8年度 整理体制

理事長 伊藤一夫  
 専務理事 佐藤哲人  
 常務理事 柴田忠昭 木村尚俊  
 業務部長 山内清志  
 第1調査部長 畑 宏明  
 第1調査課長 越田賢一郎（発掘担当者）  
 主 査 和泉田 毅（発掘担当者）  
 主 任 田中哲郎  
 主 任 越田雅司  
 文化財保護主事 笠原 興  
 “ 富永勝也  
 “ 柳瀬由佳  
 “ 福井淳一

## 3 調査の経緯

昭和36年に完成した函館空港の拡張工事に伴い、昭和42年から数次にわたって発掘調査が実施されてきた。中野B遺跡については、函館市教育委員会によって、昭和50（1975）年度に進入灯工事地区1,920㎡の発掘調査が実施されており、貝殻文尖底土器を伴う竪穴住居跡21軒、土壇15基、Tピット22基などの遺構が見つかり、2万点を越す大量の遺物が出土している。

昭和61年からの第5次空港整備5か年計画によって、滑走路が2,500mから3,000mに延長されることになり、この拡張整備工事に伴う埋蔵文化財に関する事前協議書が、昭和61（1986）年5月に北海道開発局函館開発建設部から提出された。これを受けて北海道教育庁文化課では、平成2年度からこの工事に伴う遺跡所在確認調査（A調査）と範囲確認調査（B調査）を実施し、中野A遺跡、中野B遺跡、石倉貝塚の3遺跡、11万㎡に及ぶ埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。

このうち市道長坂1号線の切り替え工事に関連する中野A遺跡、滑走路本体に関連する中野B遺跡、



進入灯に関連する石倉貝塚の一部については、北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することになった。

中野A遺跡の発掘調査は平成3・4年度に実施して、既に報告書を刊行している(北海道埋蔵文化財センター 1992・1993、以下「道埋文」と略す)。

中野B遺跡の発掘調査は、中野A遺跡の調査がほぼ終了した平成4年度から開始し、現在に至っている(道埋文 1996a・b)。以下、各年度の調査概要を記す。

平成4年度の調査は、滑走路下に潜る銭亀宮の川の切り替え用地のうち、滑走路センターラインより南側の地区を主体に、3,550㎡について実施した(道埋文 1996a)。ここは昭和50年度調査区の南西部に隣接しており、多くの遺構の存在と大量の遺物が出土することが予想された。実際の調査では予想をはるかに越える遺構と遺物が見つかり、縄文時代早期中葉貝殻沈線文尖底土器(主体は住吉町式)から条痕文平底土器(アルトリ式、ムシリI式相当)にまたがる時期の大集落跡で、多くの住居跡が複雑に重なりあっていることが明らかになった。このほかわずかではあるが早期後葉の縄文を持つ平底土器(表館VI群相当)が出土している。ところで対岸の中野A遺跡から出土する中野第3群土器(函館市教育委員会 1977)がほとんど出土していないことが明らかになり、2つの遺跡間の時代差が問題となってきた。いわゆる物見台系統と吹切沢系統の編年に係る問題(江坂 1950、名久井 1977・1982・1988、西川 1989、傾塚 1996a・bなど)とも関連している。また、石器組成の上で、中野A・B遺跡の貝殻沈線文尖底土器期、そして条痕文平底土器期の間に若干の違いがあることがわかってきた。

平成5年度の調査は、前年度に引き続き銭亀宮の川切り替え用地を主体に、7,530㎡について実施した。センターライン南側では、平成4年度調査区の川沿い部分について調査を行い、住居群の続きを確認した(道埋文 1996a)。一方センターライン北側の調査を行い、数多くの住居跡を確認した。重複が激しいため平面形がわかる例は少ないが、長円形や隅丸長方形のものが多い傾向にある。センターラインの北側は極端に遺物量が減少し、特に最も北の部分では遺構は検出できたが、時期が不明確なものがほとんどであった。この年度の調査によって、集落の北側の輪郭をほぼ把握することができた。土器の全体量は少ないが、この地区では貝殻条痕文尖底土器(押し引きを含む 根崎式相当)の存在が目立ったため、I群D類を1(住吉町下層式相当)・2(根崎式相当)に区分した。

平成6年度は、センターライン北側7,800㎡の調査が主体となった(道埋文 1996b)。平成5年度の東側にあたり、川から離れてやや小高くなっている地区である。遺物量はこの地域も少なく、遺構も密度がやや薄くなっている。住居跡は小高い部分に集中しており、平成4・5年の密集域とは別のまとまりを持つように見受けられる。隅丸長方形、楕円形のものが多い。長径8mを越す大型のものがあるが、大半は5m以下の浅い皿状を呈す。土器は根崎式相当が主体となる。またこの地区には、いわゆるフラスコ状ピットが17基まわって検出された。前年度まで小型のものが数例あったが、6年度は直径、深さとも2mを越すものがあり、規模ははるかに大きく群集しているのが特徴である。

6年度から広域に遺構確認調査が行われた。工事用道路にかかる部分と進入灯部分20,600㎡の調査で、検出された遺構のほとんどがTピットである。Tピットはいずれも溝状のもので、長軸規模で3グループほどに分けられそうである。列状に並ぶもの、等高線に沿って並ぶものなどがみられる。数例であるが、重複しているものがある。時期を明確にできるものはないが、覆土上部にP.D.3が堆積している例がある。ムジナ川側で一部住居跡様のくぼみと土壌(?)がみつまっているが、遺物の出土がなく人工のものかどうか明らかでない。

なお、市道石倉1号線の道路造成工事地区及び航空法50条区域については、函館市教育委員会によって平成6年度から発掘調査が行われており、7年度も継続された(函館市教育委員会 1995・1996)。



図 I-1 遺跡の位置 (この地図は国土院発行の1万分の1地形図) (この地図は国土院発行の「五線図」を利用したものである)

表1-1 函館空港拡張工事に伴う年次別道標数

|           | 平成4年度      |              |           | 平成5年度        |         |         | 平成6年度   |           |           | 平成7年度            |                   |           |           |     |
|-----------|------------|--------------|-----------|--------------|---------|---------|---------|-----------|-----------|------------------|-------------------|-----------|-----------|-----|
|           | 143軒       | 205軒         |           | 99軒          |         |         | 102軒    |           |           | 102軒             |                   |           |           |     |
| 窪 穴 住 居 跡 | 南          | 28軒          | 北         | 177軒         | A地区     | 91軒     | B地区     | C地区       | 5軒        | B地区              | D地区               | 102軒      | E地区       | F地区 |
|           | H-1~5      | H-6、16、73、74 | H-138~190 | H-38、147、183 |         |         |         | H-401     |           |                  | H-402、405、406、408 |           |           |     |
|           | H-7~15     | H-149~152    | H-195     | H-351~400    |         |         |         | H-403、404 |           |                  | 410、419、450、451   |           |           |     |
|           | H-17~38    | H-154~157    | H-208~214 | H-411~418    |         |         |         | H-407     |           |                  | H-453~522、524~528 |           |           |     |
|           | H-40~72    | H-191~194    | H-217~350 | H-420~449    |         |         |         | H-409     |           |                  | 531~533           |           |           |     |
| 跡         | H-75~146   | H-198~205    |           |              |         |         |         |           |           |                  | H-535、539~543     |           |           |     |
|           | H-148      | H-215、216    |           |              |         |         |         |           |           |                  | H-545~557         |           |           |     |
|           |            | 171軒         |           |              |         |         | 273軒    |           |           |                  |                   | 102軒      |           |     |
| 土 地       | 70基        |              | 85基       |              |         |         | 95基     |           |           |                  |                   | 48基       |           |     |
|           | 南          | 10基          | 北         | 75基          | A地区     | 73基     | B地区     | C地区       | 20基       | B地区              | 2基                | 36基       | E地区       | 12基 |
|           | P-1~70     | P-71~74      | P-75      | P-77、80      |         |         |         | P-201~220 | P-196、197 |                  |                   | P-263~283 |           |     |
|           | P-76       | P-81、82      | P-92~98   |              |         |         |         |           |           |                  |                   | P-285~299 | P-221~224 |     |
|           | P-83、84、87 | P-85、86      | P-167~195 |              |         |         |         |           |           |                  |                   | P-257~262 |           |     |
| 地         |            |              | P-88、89   | P-198~200    |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              | P-99~166  | P-225~256    |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            | 80基          |           |              |         |         | 170基    |           |           |                  |                   | 48基       |           |     |
| 地 土       | 4基         | 12基          | 11基       | 北            | 11基     | A地区     |         | B地区       | C地区       |                  | B地区               |           | 1基        |     |
|           | F-1~4      | F-9          | F-5~8     |              |         |         |         |           |           |                  |                   | F-17      |           |     |
|           |            |              | F-10~16   |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           | 5基         |              |           |              |         |         | 11基     |           |           |                  |                   |           | 1基        |     |
|           | 2基         | 1基           | 1基        | 北            |         | A地区     |         | B地区       | C地区       |                  | B地区               |           |           |     |
| 集         | S-1、2      | S-3          |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
| 石         |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           |           |     |
| Tと<br>ット  | 12基        | 29基          | 1基        | 北            | 28基     | A地区     | 10基     | B地区       | C地区       | 15基              | B地区               | 54基       | 84基       |     |
|           | T-1~12     | T-28         | T-13~27   | T-29~41      | T-42~59 | T-60~67 | T-42~59 | T-71~80   | T-81~120  | T-67~70、161~166、 | T-143~160         | 22基       | E地区       | 23基 |
|           |            |              |           |              |         |         |         | T-138~142 | T-121~137 | 168~171          | T-173~196         | T-178~183 |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           | T-177、189~193    | T-184             | T-173~196 |           |     |
|           |            |              |           |              |         |         |         |           |           | T-185、187        | T-194~225         | T-188     |           |     |
| 跡         |            |              |           |              |         |         |         |           |           |                  |                   |           | 84基       |     |
|           | 13基        |              |           |              |         |         | 125基    |           |           |                  |                   |           |           |     |

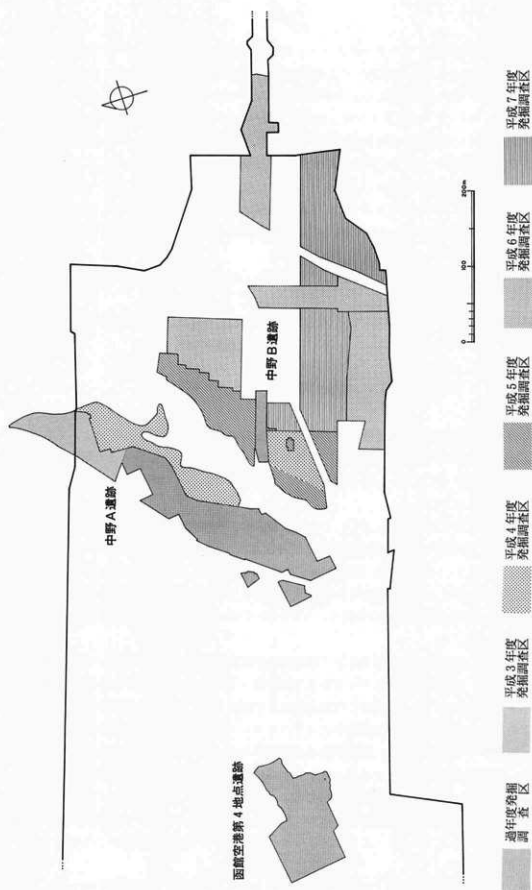


図 I - 2 函館空港用地内の遺跡の位置

#### 4 調査の方法

##### (1) 調査区の設定

中野B遺跡の発掘調査区は、トータルステーションを利用した遺構・遺物データベースシステム(以下「データベースシステム」と略す)による取り上げと遺構測量を実施することを前提に、函館空港滑走路のセンターラインを基軸とし、工事区間の全体をカバーできるように、5m×5mメッシュを設定した(図Ⅰ-4)。センターラインは、真北から東へ傾いている(N-107° 35' 55.4" E)。

滑走路センターラインを基軸とするX軸方向は、センターラインに付されている測点SP=2,700を0とし、SP=2,800が20、SP=2,900が40、SP=3,000が60、……となるように5m毎に1、2、3、……とアラビア数字を付している。センターラインに直交するY軸方向は、センターラインを40とし、5m毎に、南側ほど大きくなるように、X軸と同様にアラビア数字を付した。それぞれの5m×5mグリッドの呼称は、このメッシュの南西側の交点の数字をX軸(東西)、Y軸(南北)の順に連結して表示することにした(図Ⅰ-4)。

なお、遺構・遺物の平面実測、および竪穴住居跡床面や土壇底面などの土壌資料採取に際しては、必要に応じてさらに小さな区画を設定した。

\* 中野B遺跡の調査に関連するセンターライン上の2点の座標値を示す。道南新座標系(第Ⅸ系)

|          | X           | Y         | 調査区杭名  |
|----------|-------------|-----------|--------|
| SP=2,900 | -248209.922 | 49187.490 | 40-40  |
| SP=3,300 | -248330.859 | 49568.770 | 120-40 |

##### (2) 発掘調査の方法

中野B遺跡の発掘調査区は、北海道教育庁文化課による遺跡範囲確認調査の結果によって、通常の発掘調査を必要とする地区(竪穴住居跡などの遺構や遺物が濃密に分布していることが予想される地区)と遺構確認調査地区(Tピット以外には遺構や遺物が希薄であると判断された地区)とに、あらかじめ大別、線引きされている。

本年度の調査区を大きく3か所に区分し、それぞれD、E、F地区と呼称した(図Ⅰ-3)。

D地区(1,578㎡)は平成4年度に遺構が密集して検出された地区の東側に隣接しており、通常の発掘調査地区に含まれている。E地区(11,500㎡)は遺構密集地区とは浅い沢を挟んで南西側となり、平成6年度にTピットがまとまって検出された部分に隣接している。遺構確認調査地区に含まれる。F地区(9,905㎡)は市道石倉6号線の東側で、ムジナ川へ向かう斜面となっている。こゝも遺構確認調査地区に含まれる。

D地区については、土層観察のためグリッド杭の部分で柱状図を作成した(図Ⅱ-6)。調査はⅠ・Ⅱ層を重機で除去し、遺物が出土するP.D.3から下層のⅢ・Ⅳ層は土層を確認しながら順次掘り下げ、遺構検出・遺構調査を行い、最終的には無遺物層まで掘り下げた。主要な遺物包含層はⅢ層であり、Ⅲ層以下の出土遺物と遺構の出土遺物はデータベースシステムを利用して、層位毎に全点の出土位置、レベルを測定して取り上げた。遺構調査は土層観察用の土手を残して掘り下げ、随時写真撮影、実測を行った。遺構調査終了後、データベースシステムにより遺構の概略の輪郭線を計測した。

遺構確認調査地区は、遺構や遺物の有無を立会によって確かめつつ、Ⅲ層下部まで重機で掘り下げ、その後人手によって清掃して遺構検出作業を行い、検出された土壇・Tピットの調査を行った。土層観察のためE・F地区では、30ラインを東西メインセクション、60ラインを南北メインセクションと設定した(図Ⅱ-7～11)。

調査終了後、通常の発掘調査地区・遺構確認調査地区ともに写真撮影、地形測量を行った。

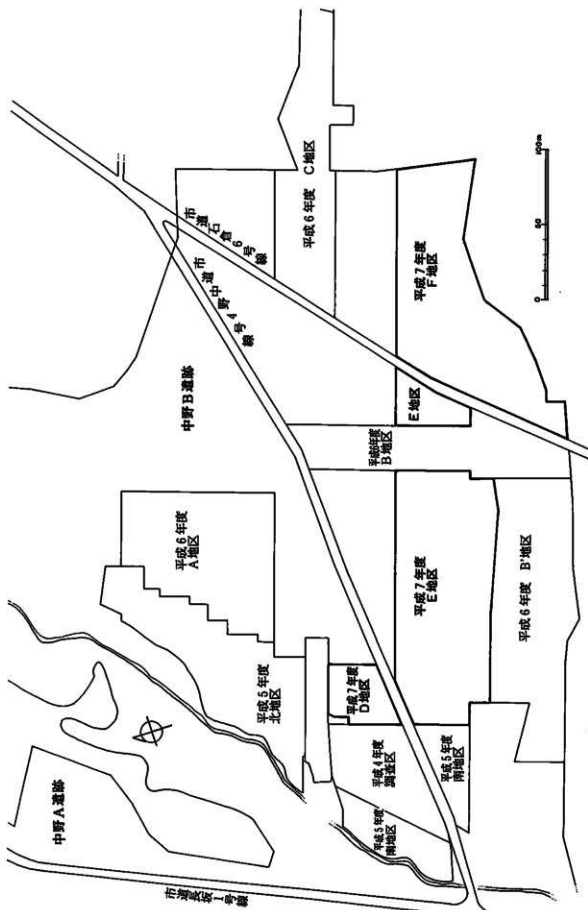


図1-3 調査区の呼称

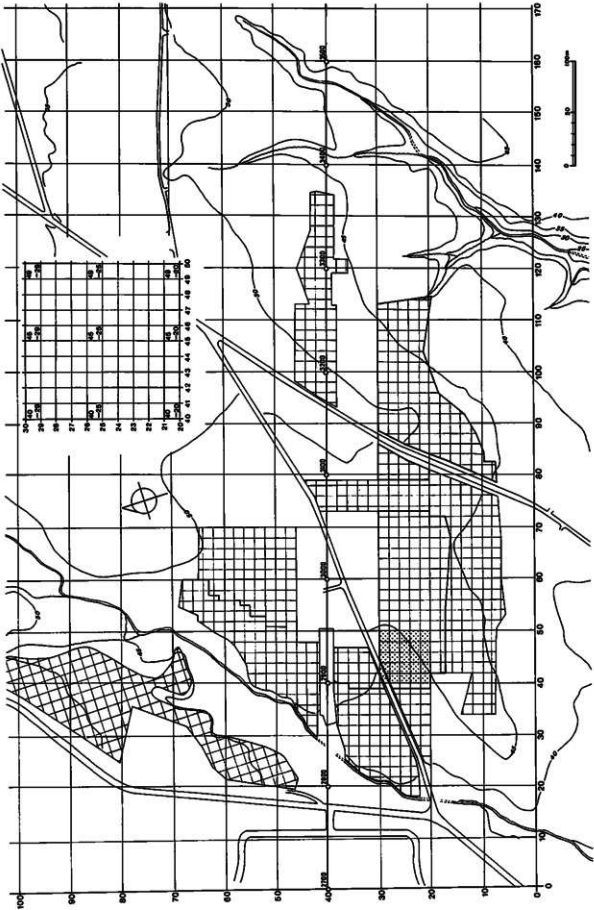


図1-4 平成7年度中野B道跡調査区設定図

なお、住居跡や土壇などの床（墳底）面付近の土壇、焼上はできるだけ採取し、フローテーション法（浮遊選別法）による炭化種子選別作業を実施し、合わせて微細な骨片や人工遺物の採取に努めた。また剥片などの微細遺物の集中地区については、小地区に区分して土壇ごと取り上げ、篩分けや水洗選別を行った。

このほか、雨などによって泥水が直接海へ流れこまないよう、調査区の外縁沿い、とくにムジナ川と銭亀宮の川寄りに、排土を詰めたフレコンバックや土嚢を積み並べた。

### (3) 整理の方法

#### i) 土器

現地では、水洗・乾燥後分類作業を行ってデータベースシステムに入力し、遺物台帳とカードを作成した。また注記は、遺跡名の中野B遺跡をナBと略記し、グリッド名、遺構名、遺物番号、出土層位の順で、それぞれ簡略に記入した。現地での整理を終えた遺物は、グリッド毎、遺構毎に仮収納し、現場終了後札幌の整理作業所へ搬送して、随時本格的な整理作業を開始した。

接合・復元作業では、遺構内、遺構間、遺構と包含層間との接合関係の把握に留意し、接合資料については、展開図とカードを作成するとともに、同一個体の破片（未接合資料も含む）の識別に努めた。これらのデータは復元個体ごとに観察表に示した。実測図の作成に当たっては、文様構成が復元可能な部分は欠損部についても細い実線で文様を表現した。断面図は最も器形の特徴を表している部分を実測するために、90度あるいは180度回転させたものもある。また断面と輪郭のみを実測し、文様は拓影によって表現しているものもある。破片資料は口縁部の文様をもとに個体識別に努め、文様構成が想定できるものを中心に拓影図と断面図を作成した。

復元土器は一個体ずつ、拓影土器は遺構毎、包含層出土のものは分類毎に写真撮影を行った。

これらの作業と並行して、データベースシステムを利用して、分類の修正、遺物分布図の作成、接合関係の作成、集計作業を行っている。

整理作業の終了した資料は報告書掲載資料、遺構、グリッド別に収納した。

#### ii) 石器等

現地では、水洗後分類を行いデータベースシステムに入力して、遺物台帳を作成した。注記内容は土器と同じである。現場終了後札幌へ搬送し、分類の訂正と細分類を行い、報告書に掲載する石器を選びだして実測作業を行った。遺構出土の石器実測は、床面・床直上付近出土のものを優先し、計測、集計は覆土を含め全点について実施した。包含層出土の石器は、基本的にⅢ層出土のものについて接合作業を試み、実測作業と合わせて計測、集計作業を行った。計測は原則として完形品に限って、最大長・最大幅・最大厚・重さについて行い、その一部をグラフ化した。石質の同定は主に花崗の肉眼判定をもとに笠原が行った。

写真撮影は、基本的には実測した個体すべてについて行い、報告書に掲載している。

整理作業終了後、報告書掲載資料、遺構、グリッド別に収納した。

### (4) 遺物とデータ類の保管

遺物類は、整理作業終了後函館市教育委員会において保管される。

土器・石器等及び遺構の輪郭と断面についてのデータは、札幌での整理段階で書き加えと修正を行い、光磁気ディスク（M.O.）に記録した。1部はセンターにて、もう1部は台帳形式に打ち出したものを添えて、遺物類と合わせて、函館市教育委員会において保管される。



## 5 平成7年度調査の概要

平成7年度は、中野B遺跡22,983㎡(通常発掘範囲1,578㎡、遺構確認範囲19,105㎡)と進入灯工事区域にかかる石倉貝塚1,965㎡(通常発掘範囲)について発掘調査を実施した(遺理文 1996c)。

中野B遺跡は、D、E、Fの3地区に分けて調査を行った。

[D地区] 1,578㎡ 通常発掘範囲

D地区は、平成4年度調査区の東側に隣接し、昭和50年度に函館市教育委員会で調査した進入灯部分の南側にある。数多くの遺構と大量の遺物の出土が見込まれ、当初1,045㎡と小範囲の調査を予定していたが、他地区の調査が順調に進んだため、533㎡について追加して調査をおこなった。

調査の結果、予想通り10万点を越える大量の遺物が出土し、住居跡102軒、土壇36基、Tピット22基、焼土1が検出された(表I-1・2)。住居跡は重複が激しく、全体の形がとらえられるものは少ない。床面中央部またはやや偏った位置に方形の掘り込みをもつ例がある。わずかに焼土が残るものがあり、炉と考えられる。H-408では、各角に対応するように小柱穴が認められ、炉の付属遺構と考えた。また、この上部で尖底土器が伏せた状態で出土した。

このほか、出入口と考えられる張り出し部の存在、柱を固定するために入れた石器などいくつかの特色のある点を指摘できた(Ⅵ章1参照)。

住居跡の床面に遺物は少なく、覆土上部から大量の遺物が出土する傾向が認められた。特に南側の斜面ではV層の混じった灰褐色土層が堆積しており、それを掘り下げると遺構が検出できる状況であった。この層中には遺物が多量に入っており、土器はI群D1類である程度のまとまりをもって出土している。標高の高い地域の遺構覆土出土土器と接合関係を持つものがある。おそらく新たに掘り上げた竪穴住居の残土や整地したときの土が運ばれ、堆積した一種の盛土遺構であり、人為的な再堆積層と考えられる。このように土壌が動かされた状況では、覆土と床面の遺物の時期が逆転する恐れがあり、注意する必要がある。

調査区内に16基のフラスコ状ピットが検出された。平成6年度のような大型のものではなく、いずれも直径深さとも1m以下の小型のものである。P-282は住居跡の覆土中から掘り込まれていること、またP-287は住居跡に切られていることが確認でき、住居跡群と小型のフラスコ状ピットに大きな時期のずれがないことが明確になった。いずれもI群D1類土器の時期に含められよう。

特徴ある土壇には次のものがある。P-267は底に拳大のたたき石が置かれていた。P-268はすり石、たたき石などが墳底にあり、覆土全体に遺物が多かった。P-275は中に石皿が、P-278は尖底土器が倒立して台石の上に置かれるかのように入っていた。

土器はI群D1類が主体を占め、I群E類、I群G類、I群D2類となる。遺構の時期はほとんどI群D1類期で、平成4年度のようにI群E類期の遺構はみられない。石器は例年と同じ組合せであり、石鏃の多いが目立っている。

[E地区] 11,500㎡ 遺構確認範囲

平成6年度に調査を行った、B・B'地区に隣接する地域である。D地区とは、市道中野4号線にほぼ並行して走る浅い沢地形によってへだてられる。調査の結果フラスコ状ピットを含む土壇12基、Tピット23基が検出された。

これまでの調査では、フラスコ状ピットは住居跡の周辺で検出されており、この地区のものだけが異なった傾向を示す。遺構内には遺物は認められず時期が確定できないが、覆土の状況はD地区のそれと大きな違いはない。

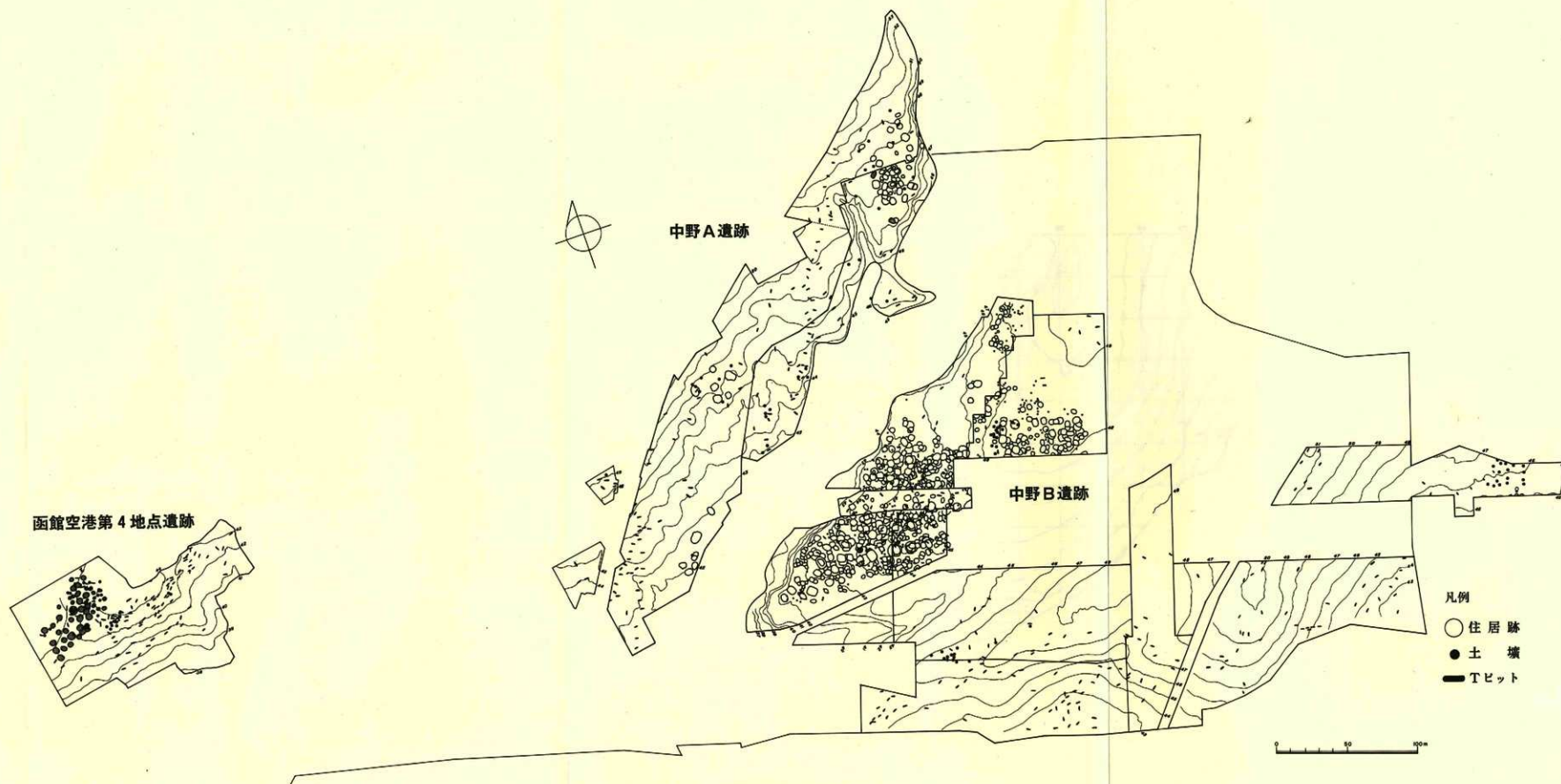


図1-5 函館空港用地内の遺構の分布

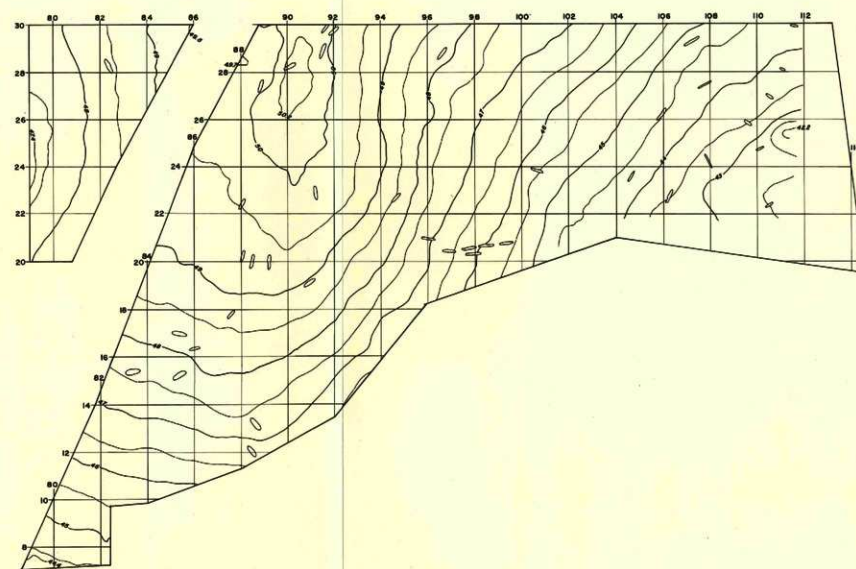
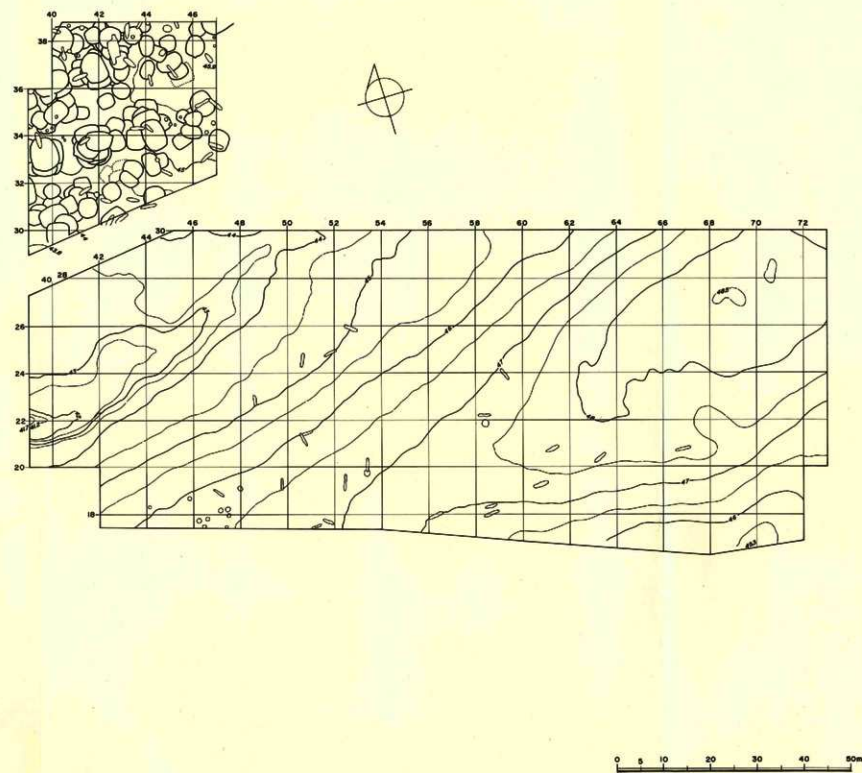
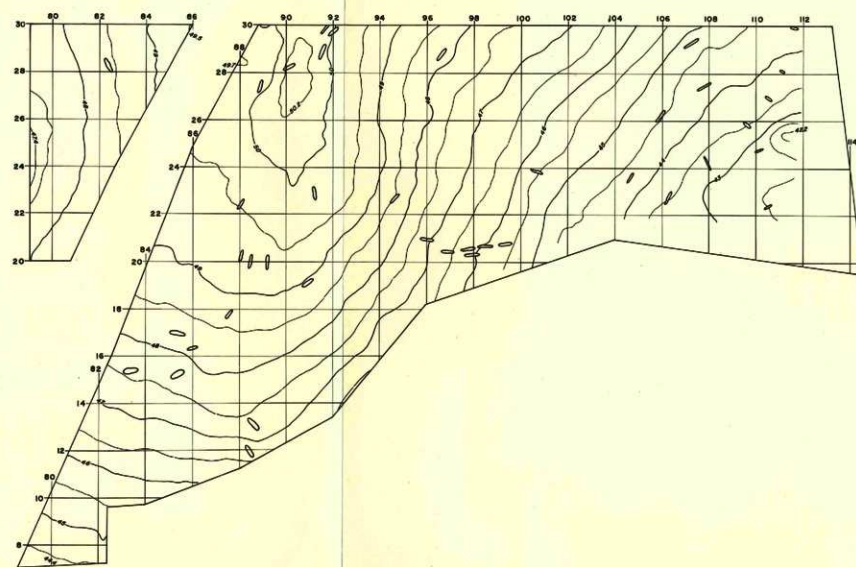
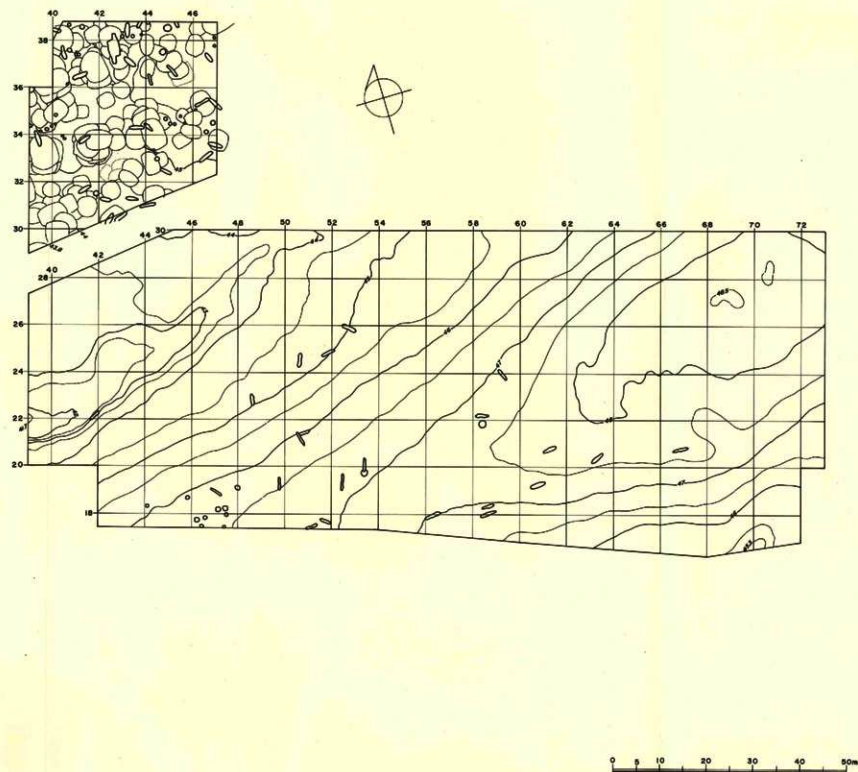


図 I - 6 平成 7 年度調査区の最終面地形図と遺構位置図 (1) 住居跡





図I-7 平成7年度調査区の最終面地形図と遺構位置図 (2) 土壇・丁ビット・焼土

## 〔F地区〕 9,905㎡ 遺構確認範囲

遺跡調査範囲内では、市道石倉6号線付近を境にムジナ川水系となり、東南に向かって緩やかな傾斜地となる。F地区は尾根筋からこの斜面に位置している。調査の結果、各種の規模のTビット39基が検出された。尾根部と斜面下部に集中しており、平成6年度C地区に続くTビット列も確認できた。

## 〔B調査〕

市道部分は、用途廃止後に範囲確認調査が実施された。その結果D地区の周辺は包含層が残存しており、遺構の分布も明らかになったため、945㎡について通常調査範囲として取り込まれた。また他の部分もTビットの存在が予想されることから、遺構確認範囲4,275㎡が追加された。これで函館空港拡張用地内の遺跡範囲がすべて確定し、残りは平成8年度に調査を行うことになった。

## 〔現地説明会等〕

遺跡に関する記事が全国紙に掲載されたため、見学者が増加した。そのため8月27日（日）に一般の方を対象にして現地説明会を実施した。参加者は299人であった。これを加えた年間の見学者は1,000人に達している。

## 〔水対策〕

周辺に土嚢を積み上げ、雨が降った際に泥水が直接川に流れ込まないように配慮した。特にムジナ川側にはフレコンバックを使用して堰を築いた。

## 〔自然科学的分析〕

<sup>14</sup>C年代測定は、これまで年代のバラツキが大きかったため、今年度からAMSによる分析を取り入れ、資料もフローテーションによって集めた炭化物ではなく、クルミ属の殻を対象とした。その結果、いずれも8,000年B.P.に近い値にまとまった。ちなみに、同じ遺構の炭化物を対象にした液体シンチレーション年代測定では、8,540±350年B.P.が出ている（V章1・2参照）。

黒曜石水和暦年代測定では、早期後葉の形態的特徴を持つ石鏃から、7,700年B.P.の値が出されている（V章3参照）。

黒曜石産地同定の結果、赤井川産の黒曜石（72%）と豊泉産（22%）が遺跡の主体を占め、白滝産（6%）がわずかに利用されていることがわかった。これまでの分析結果と比べてほぼ同じ傾向がよみとれる（V章4参照）。

炭化種子同定を依頼したところ、ヒエ属の種子が5遺構から8点検出された。顕果の下腹部が膨らんでおり、イヌビエとヒエとの中間的形態を持っている。縄文時代各時期を通して利用された、クルミ殻片、ブドウ属種子片、キハダ属種子片などと同じ遺構の同一層位から、それも炭化した状態で見つかっていることから、人為的に遺構内に運び込まれたものと推定される。これまで出土したヒエ属の種子は古いもので縄文時代前期のものであり、今回の出土種子は最も古い時期に遡るものである（V章6・付記参照）。

表1-2 平成7年度の出土遺物一覧

| 【土器】    | I   | IB | ID1    | ID2 | IE    | IG  | 不明 | 合計     |
|---------|-----|----|--------|-----|-------|-----|----|--------|
| 遺構 D地区  | 49  | 5  | 22,096 | 273 | 277   | 139 |    | 22,838 |
| 遺構 E地区  |     |    |        |     |       |     |    |        |
| 遺構 F地区  |     |    |        |     |       |     |    |        |
| 包含層 D地区 | 282 | 17 | 34,451 | 475 | 1,178 | 630 | 21 | 37,064 |
| 包含層 E地区 | 1   |    | 164    |     |       |     |    | 165    |
| 包含層 F地区 |     |    |        |     |       |     |    |        |
| 合 計     | 332 | 22 | 56,710 | 748 | 1,455 | 769 | 21 | 60,057 |

| 【石器】    | 燧石遺物   | 磨製石器 | 礫石器類   | その他 | 合 計    |
|---------|--------|------|--------|-----|--------|
| 遺構 D地区  | 7,156  | 51   | 8,781  | 34  | 16,022 |
| 遺構 E地区  |        |      |        |     |        |
| 遺構 F地区  | 1      |      |        |     | 1      |
| 包含層 D地区 | 18,419 | 89   | 11,783 | 18  | 30,289 |
| 包含層 E地区 | 14     | 1    | 99     |     | 114    |
| 包含層 F地区 |        |      |        |     |        |
| 合 計     | 25,590 | 141  | 20,643 | 52  | 46,426 |

## 6 遺構・遺物の分類

### (1) 遺構

遺構は、住居跡(略号H)、土壌(P)、Tピット(T)、焼土(F)に大きく分けた。

住居跡としたものは、すべて地面を掘りくぼめて床とした堅穴住居跡である。床面に炉(HF、火を焚いた痕跡が認められるものを含む)があるものと、ないものがある。上屋構造を支えた、柱穴と考えられる小ピット(HP)がみられる。日常生活あるいは日常作業のための空間を意図した遺構である。

土壌としたものは、平面形、断面形、また規模と構造など様々で、機能や性格など不明瞭なものが多い。断面形がフラスコ状になるいわゆるフラスコ状ピット、人骨は残存しないが覆土の堆積状態と遺物の出土状況などから墓の可能性もあるものなどもこれに含めている。

Tピットとしたものは、細長い、深い溝状の遺構で、落とし穴と言われるものである。長径が1mをわずかに越す小型のものから、4m近い大型のものまで様々な大きさのものがある。覆土は自然堆積で、墳底直上に黒色または黒褐色腐植土がみられる特色がある。

焼土は、住居に伴わず単独で発見されたもので、屋外炉の可能性もある。なお、住居跡に伴うものはHFとして区分している。

(越田賢一郎)

### (2) 遺物

#### i) 土器

土器の分類については函館市中野A遺跡(Ⅰ・Ⅱ)・中野B遺跡(Ⅰ・Ⅱ)・石倉貝塚進入灯地区の分類を踏襲した。なお、必要に応じていくつかの分類を加えている。

#### I群 縄文時代早期の土器群

A類：胎土に繊維が混入する。縄文を地文とし、平行沈線が施されるもので、小波状口縁をなす。

日計式押型文に伴うと思われるもの。中野A遺跡のH-1および包含層から出土している。中野B遺跡では平成5・6年度調査区で60-47グリッドの包含層から1点出土している。

B類：貝殻腹縁圧痕文・沈線文・刺突文等で文様帯が構成されるもので、中野第Ⅲ群(函館市教育委員会 1977)に相当するもの。中野A遺跡からまとまって出土している。平成5・6年度調査区ではH-400および包含層から出土している。東北地方北部の物見台式に比定される土器群である。

C類：貝殻腹縁圧痕文・沈線文・刺突文等で文様帯が構成されるもの。石倉貝塚進入灯地区および包含層からまとまって出土している。

D1類：貝殻腹縁圧痕文・沈線文・連続刺突文で文様が構成されるもの。中野第Ⅰ群(函館市教育委員会 1977)に相当するもの。住吉町下層A式の頃に比定できる土器群である。

D2類：貝殻腹縁の押引文・条痕文を地文とし、貝殻腹縁連続波状文・刺突文・沈線文で文様が構成されるもので、根崎式に相当するもの。平成5・6年度調査区でまとまって出土している。尖底・平底のものである。住吉町下層B式の頃に比定できる土器群である。

E類：絡条体圧痕文・隆起線文・沈線文・刺突文等で文様が構成され、平底のものである。アルトリ式に相当するもの。東北地方北部のムシリⅠ式の頃に比定されそうな土器群である。

F類：胎土に繊維が混入する。縄文を地文とし、縄線文・刺突文・燃糸文等の文様で構成され、松前町高野遺跡のⅣ群土器、青森県表館Ⅰ遺跡の表館Ⅵ群土器に類似した土器群である。

G類：胎土に繊維が混入する。羽状縄文・燃り戻し・組紐圧痕文等に節の大きい縄文で構成されるもので、東館路Ⅲ式に相当するもの。青森県表館Ⅰ遺跡の表館Ⅶ群・Ⅷ群、青森県亮場遺跡

の売場X群の頃に比定されそうな土器群である。

H類：結束羽状縄文・貼付帯等で構成されるもので、コックロ式に相当するもの。

I類：羽状縄文・貼付帯・短縄文・綾絡文等で構成されるもので、中茶路式に相当するもの

J類：自縄自巻的な原体による撚糸文で構成され、東釧路IV式に相当するものである。

平成7年度調査区からは、以下の資料は出土していない。

II群 縄文時代前期の土器群

III群 縄文時代中期の土器群

IV群 縄文時代後期の土器群

V群 縄文時代晩期の土器群

なお、器形・文様要素・施文手法の用語に関してはIV章土器の項を参照されたい。（富永 勝也）

## ii) 石器等

分類については基本的に中野A遺跡の分類を踏襲した。細分類については、過年度の基準を再検討し新たな基準を設定した。

### 【剥片石器群】

石鏃：形態により大きく7類に分け、このうち1・2類はさらに細分した。

1類 三角形 a類 平基

b類 凹基

2類 細身・長身 a類 平基

b類 凹基

3類 菱形

4類 柳葉形

5類 円基形

6類 有茎のもの

7類 その他、上記に該当しないもの。

石槍：形態により5類に分け、1・2類はさらに細分した。

1類 形態上、身と茎部の区別がつかないもの。

a類 幅広のもの、木葉形 1 最大幅中央付近

2 最大幅下部

3 最大幅上部

b類 細長いもの、柳葉形 1 最大幅中央付近

2 最大幅下部

3 最大幅上部

2類 茎の区別があるもの。かえしはなく、側縁が曲線的な方を尖頭部、直線的な方を茎部とした。

a類 幅広のもの、木葉形 1 最大幅中央付近

2 最大幅下部

b類 細長いもの、柳葉形 1 最大幅中央付近

2 最大幅下部

- 3類 明瞭なかえしのあるもの。
- 4類 石礫の大型品となるようなもの。
- 5類 その他、上記に該当しないもの。

石錐：形態・製作技術により6類に分けた。

- 1類 剥片の一部に尖頭部を作り出したもの。
- 2類 折れ面を加工して尖頭部に利用しているもの。
- 3類 柄と機能部の区別が明瞭なもの。
- 4類 柄と機能部の区別が不明瞭なもの。周辺加工が多い。
- 5類 柄と機能部の区別が不明瞭なもので、棒状のもの。
- 6類 他石器の転用品

匱状石器：形態・製作技術により6類に分けた。

- |                       |          |
|-----------------------|----------|
| 1類 三角形またはそれに近い台形状のもの。 | a類 直刃加工  |
| 2類 方形またはそれに近い台形状のもの。  | b類 曲刃加工  |
| 3類 その他、上記に該当しないもの。    | c類 素材のまま |

両面調整石器：尖頭部のない両面加工の石器。粗雑な加工のものは、他機種種の未製品の可能性がある。

- 1類 円形・楕円形
- 2類 三角形・撥形
- 3類 木葉形
- 4類 その他、上記に該当しないもの。

石匙：形態により6類に分けた。横型は出土していない。

- 1類 両面加工
- 2類 片面(半両面)加工
  - a類 稜線がほぼ中央にあるもの。
  - b類 稜線が左右どちらかに偏るもの。
- 3類 周辺加工
- 4類 加工がほとんど見られないもの。
- 5類 大型で身はほとんど見られないもの。
- 6類 その他、上記に該当しないもの。

彫器様石器：素材の一部に槌状の剥離面を有するもの。ただし旧石器との系統が不明であることや出土例が少ないことから、類似するものとして掲載した。

スクレイパー

- 1類 刃部が外湾するもの。円形搔器を含む。
- 2類 刃部が直線状になるもの。
- 3類 刃部が内湾するもの。



- 4類 挟りのある刃部をもつもの。
- 5類 刃部が鋸歯状になるもの。
- 6類 その他、上記に該当しないもの。

Rフレイク（二次加工付剥片）

Uフレイク（使用痕付剥片）

石核

剥片

#### 【磨製石器群】

石斧：石材は蛇紋岩が主で、緑色泥岩が若干見られる。なお、磨製石斧のなかで特に小型のものを「石のみ（形）」と呼称した。

- 1類 擦り切り技法により製作されるもの。
- 2類 粗削り・敲打により整形されるもの。
- 3類 その他、上記に該当しないもの。

擦り切り残片

研磨石材

環状石斧

#### 【礫石器群】

たたき石

- 1類 円形・楕円形のもの。不整円含む円礫。
- 2類 棒状のもの。
- 3類 球状のもの。
- 4類 その他、上記に該当しないもの。

すり石

- 1類 断面形が三角形の棒状礫で、その稜部にすり面を有するもの。
- 2類 円形・楕円形の礫の一部にすり面を有するもの。
- 3類 その他、上記に該当しないもの。

石鋸：石斧製作と関連するもので、偏平な礫の一端部に機能部を有するもの。

石鏃

石皿

台石

# 【石製品】

機能部の特定し難い加工、整形加工が施された遺物については石製品として扱い、下記の分類を設定した。

軽石製石製品：人為的と思われる湾曲・平坦面・挟りを有するもの。

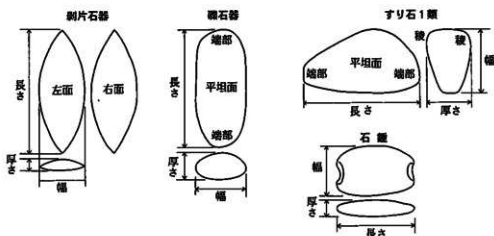
有孔装飾品類：垂飾り

両端挟入石製品：剥片製で、両端に小型の挟入部が作出されているもの。

# 【土製品】

土器片鏃等

計測については過年度の中野A・B遺跡の報告と同様に、図I-8のように行った。磨製石器については剥片石器と同様である。礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅としている。部位の名称は、本文中で便宜上使用したものにつき下図中に記した。なお、遺物実測中で、たたき痕はV-V、すり痕は↔で範囲を表した。また、剥片石器のうち縁部に使用痕・磨耗痕が見られる場合は↔で、器体に磨耗痕、光沢痕が見られる場合はスクリーン・トーンで範囲を表した。(笠原 興)



図I-8 石器の計測方法の模式図

## II 遺跡の位置と環境

### 1 位置と周辺の遺跡

中野B遺跡(B-01-39、以下遺跡名の後に付す数字は遺跡登録番号を示す)は、函館市街地の東方約8km、津軽海峡に面した標高40m～50m程の海岸段丘に立地している。津軽海峡に注ぐ小河川、銭亀宮の川の河口から700m～800m遡った左岸にあり、右岸に位置する中野A遺跡(40)と向いあっている。現在の函館空港の東端部にあたる。

中野B遺跡の主体となる縄文時代早期中葉の集落跡は、銭亀宮の川本流とそれに流れ込む小規模な沢跡に挟まれて細長く伸びる尾根上に立地している。沢跡は、最近では埋め立てられ畑となっていたが、掘り起こすとほとんど溜れることなく水が流れている。周辺に林が残る頃には、湧水があり、流水がみられたと思われる。またこの地区は、周辺を一段高い尾根に囲まれ浅いすり鉢状を呈しており、空港が建設されるまでは、強風からさえぎられていたと考えることができる。

松倉川と汐泊川に挟まれた函館空港の周辺地域では、数段の段丘地形が発達しており、これを開折して、ほぼ北東-南南西の方向に流下する大小の河川が、1km内外の間隔で並列している。それらの河川流域の段丘縁辺部では、縄文時代早期以降、数多くの遺跡が営まれている。ここでは函館空港周辺地域における縄文時代早期の遺跡について、簡単にふれておく。

早期の遺跡は、銭亀宮の川流域では中野A遺跡、中野B遺跡、東側のムジナ川流域では石倉貝塚進入灯地点(道埋文 1996c)とC地点(函館市教育委員会 1996)、西側の志海苔川流域では函館空港1・6遺跡(29・34)と志苔館跡(75)、松倉川流域に根崎遺跡(24)などがある。時期別に述べる以下の通りである。

中野A遺跡で、日計型押型文土器(IA)に伴う縄文土器が住居跡から出土している。日計型押型文土器が出土している南茅部町川汲遺跡(阿部・領塚 1996)とともに北海道では縄文時代早期の最も古い頃の遺跡である。

次の段階(ノダップI式、白浜式類似)の遺跡としては、函館空港6遺跡、志苔館跡が知られており、図II-1からは外れるが、汐泊川左岸の石崎町第9地点遺跡(未登載、小笠原 1974・1975)、同川を直線距離で11km遡った内陸部には、西段遺跡(28)がある。

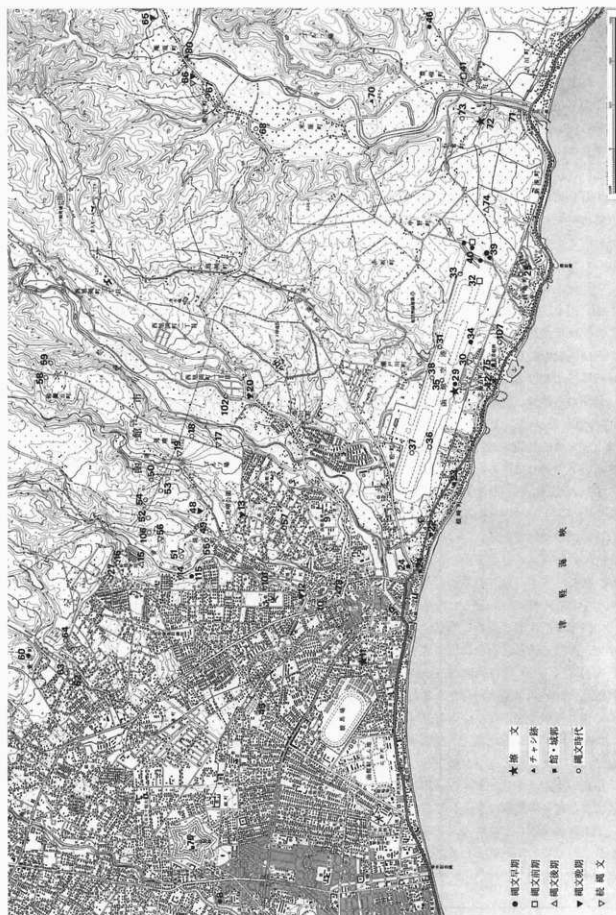
中野第Ⅲ群土器(ⅠB:物見台式相当)段階は、中野A遺跡で大規模な集落跡が見つかっただけでなく、中野B遺跡、石倉貝塚C地点でわずかに遺物が出土しているにすぎない。

鳴川式(ⅠC)と住吉町式(ⅠD1)段階は、中野B遺跡で大集落が見ついているほかは、石倉貝塚進入灯地点に集落が存在するだけである。函館市全体では、桔梗周辺諸遺跡と栗川町遺跡、函館山の麓に標識遺跡となる住吉町遺跡がある。

条痕が地文となる土器(ⅠD2)を出土するのは中野B遺跡、根崎遺跡、石倉貝塚C地点で、前二者ではフラスコ状ビットが検出された(道埋文 1996b)。

平底の土器(ⅠE:アルトリ式、ムシリI式相当)を出土するのは中野A遺跡と中野B遺跡で、後者ではかなりの規模の集落が営まれている。

栗川町式土器などに代表される縄文早期末葉から、トドホッケ・春日町式土器などを伴う縄文前期前葉にかけての集落跡としては、中野A遺跡、中野B遺跡のほか、函館空港1遺跡(29)、石倉貝塚進入灯地点や豊原1遺跡(41)、豊原2遺跡(46)などがあげられる。この時期からは遺跡の数が増加し、遺物量が増加する。



図Ⅱ-1 周辺の遺跡 (この地図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図「五輪郡」を利用したものである)

表Ⅱ-1 周刃の遺跡一覧

[illegible]

早期の遺跡は小規模な遺跡が多いことが指摘でき、河川ごとに少し異なる時期の遺跡が立地し、転々と移り変わっていく様子が伺える。その中で、中野A遺跡と中野B遺跡の規模の大きさが歴然としている。また、中野B遺跡ではI CからI Eにかけて集落が継続していることも特色としてあげられる。

(越田賢一郎)

## 2 地形・地質

図Ⅱ-2に遺跡周辺の等高線図を、図Ⅱ-4に地形分類図を示す。遺跡周辺には数段の段丘地形、段丘を開析する河川、沖積低地、谷底平野が発達している。

段丘は少なくとも3段認められる。段丘Ⅰは標高60～100mに分布し、円礫から構成される。偏平な礫が多い。地点4では砂と礫の水平互層が観察される。この面は、長谷川・鈴木(1964)の第2段丘、瀬川(1974)の中野町面に相当する。段丘Ⅰの下位に標高30～60mの平坦面が分布する。この面は、松倉川右岸地域では地点13で観察されるように円礫層から構成され、段丘とみなされる。一方、松倉川から海岸沿いに汐泊川へかけて分布するこの平坦面は、水成礫をほとんど観察し得ず火砕流堆積物から成っている。地点12では火砕流堆積物に円礫が含まれ、火砕流堆積物の水成二次堆積物と考えられる。標高30～60mに分布し、一連の平坦面のようにみえるこの面は、段丘面としての平坦面のほか、火砕流堆積物の侵蝕面といった成因の異なる平坦面が含まれていると考えられる。地形分類図には、標高30～60mの平坦面を一括して段丘Ⅱ・火砕流台地として示している。この面は、長谷川・鈴木(1964)の第3段丘、瀬川(1974)の日吉町段丘に相当する。火砕流堆積物は、長谷川・鈴木(1964)の銭亀沢火山灰層、山縣ほか(1989)の銭亀一女那川火砕流堆積物に対比される。段丘Ⅲは標高40mで、現運河沿いに認められる。

段丘面、とくに段丘Ⅰの段丘面は波状の起伏をなすことが多い。これは段丘面が浅くて広い谷に開析されているためである。また、段丘Ⅰの周縁部では段丘崖が不明瞭で、下位の平坦面との間に緩傾斜面をなすことが多い。

山地斜面は標高50m以上で谷密度が大きく、段丘堆積物や火砕流堆積物の基盤である新第三紀の汐泊川層(長谷川・鈴木 1964)の分布と一致している。

沖積低地が湯の川、松倉川、汐泊川沿いに認められる。狭長で浸蝕性の谷底平野は、志海苔川沿いや段丘Ⅱ・火砕流台地を刻む小谷に発達している。遺跡周辺の河川は、概ね北東-南西の方向性がある。海岸部には、砂礫から成る海浜と安山岩から成る波蝕棚が認められる。

中野B遺跡は段丘Ⅰの周縁部の緩傾斜面上に立地している。西端には銭亀宮の川の流水があり、この河川を隔てて西方に中野A遺跡が位置している。

遺跡で出土する石器の石材は、主に、流紋岩、硬質(珪質)頁岩、砂岩、閃緑岩、蛇紋岩である。石器石材と遺跡周辺地質との関係を見るために、現河床・現河口で礫の岩種を調べた。松倉川では、安山岩、頁岩、硬質(珪質)頁岩、緑色凝灰岩、閃緑岩等が認められる。汐泊川では、硬質(珪質)頁岩、粘板岩、閃緑岩等が認められる。河口では安山岩と流紋岩が多く、まれに硬質(珪質)頁岩が認められる。蛇紋岩を除くと、石器石材の大部分は遺跡周辺から得られそうであるが、石器として使用されている質の良い材質のものまでも周辺で入手可能かはさらに調査する必要があるだろう。

## 3 土層

本遺跡の土壌断面は、上位から下位へ、黒色土、黒褐色ないし暗褐色土、未風化層に区分される。これらは土壌層位のA層、B層ないしB/C層、C層に相当する。黒色土中には数枚の降下火山灰、遺物が認められ、黒色土が累積成土壌であることを示している。発掘調査上、土壌や火山灰を便宜的



図Ⅱ-2 発掘調査区の位置と周辺の地形

にⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、P.D.1、P.D.2、P.D.3、P.D.4、砂質火山灰、更新世砂質火山灰に区分した。P.D.1～P.D.4の名称は函館市教育委員会(1977)による名称を踏襲している。本年度の発掘範囲ではP.D.3以上の土層の保存は悪い。図Ⅱ-3に基本土層を、図Ⅱ-6～11にD地区土層柱状図およびE・F地区土層断面図を示す。

Ⅰ層:P.D.2より上位の腐植土層を一括してⅠ層とする。Ⅰ層のうち耕作により作土となっている層をⅠa層、耕作から免れた腐植土層をⅠb層とする。Ⅰa層は層厚10～30cmで発掘範囲のほとんど全域を覆っている。Ⅰb層は黒色(5YR 1.7/1)の粘土質腐植土である。

P.D.1:灰白色(10YR 8/1, 10YR 8/2)のシルト質降下火山灰。Ⅰb層中に径1cm以下で斑点状に断片的に産出する。火山ガラスに頗る富み、その形態は網目模様を呈するものが多い。函館市教育委員会(1977)は駒ヶ岳統d火山灰(Ko-d)に対比されるものと考えている。Ko-dの年代はA.D.1640である(北海道火山灰命名委員会 1982; 佐々木ほか 1970)。

砂質火山灰:にぶい黄褐色(10YR 4/3)の軽石混じり砂質降下火山灰。Ⅰb層でP.D.1とP.D.2の層準に産出する。層厚1cm以下。主に、斜長石、角閃岩、火山ガラスから成る。輝石類を少量含み、単斜輝石量が斜方輝石量を上回る。火山ガラスはバブルウォール型が多い。

P.D.2:にぶい黄褐色、黄褐色、褐色(10YR 5/4, 10YR 5/6, 10YR 4/4, 10YR 4/6)のシルト質降下火山灰。層厚1cm土。火山ガラスに頗る富み、僅量のアルカリ長石を含む。従来から駒ヶ岳統e火山灰(Ko-e)とされてきた(函館市教育委員会 1977)が、本火山灰は町田ほか(1981)・町田ほか(1984)の白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)に対比される。その年代は800～900年前である(町田・新井 1992)。

Ⅱ層:P.D.1とP.D.3との間の層準の腐植土層をⅡ層とする。本層は黒色(5YR 1.7/1, 10YR 1.7/1)を呈し粘土質である。P.D.3を欠く土層断面では本層とⅢ層との区別は難しい。層厚10～20cm。

P.D.3:赤褐色、明赤褐色(2.5YR 4/8, 5YR 5/8)の粘土質土壌で含水量が非常に多い。保存の良い地点で層厚10～20cm。層状ないしレンス状に産出する。平成3年度の調査では、本層中から縄文時代前期前葉の春日町式、トドホッケ式土器や剥片が出土している(北海道埋蔵文化財センター 1992)。プラントオパールを頗る多く含み、少量の石英、斜長石、角閃石、火山ガラス等を含む。佐々木ほか(1970)以後、本層は銭亀沢層の名称で火山灰とされてきたが、上述のように火山灰とするには不自然な点が多く、プラントオパールの含有や色調から焼土と考えるのが妥当である(近藤 1993; 北海道埋蔵文化財センター 1993)。この色調を呈する土壌は一地点の土層断面において二つの層準に産出することがある。この場合、単純に上位のものをP.D.3Ⅰ、下位のものをP.D.3Ⅱとした。

Ⅲ層:P.D.3とⅣ層との間の腐植土層をⅢ層とする。本層は遺物包含層の主体で、縄文時代前期・早期の遺物が出土する。本層をP.D.4の挟在によって上下に二分する。P.D.4より上位をⅢa層、下位をⅢb層とする。Ⅲa層は黒色(10YR 1.7/1)の粘土質腐植土で層厚10～20cmである。Ⅲb層は赤黒色(2.5YR 1.7/1)の粘土質腐植土で層厚10～15cmである。Ⅲb層はⅢa層より赤色味が強いが、P.D.4が挟在しない場合には両層の区別は難しく、この場合には一括してⅢ層として示す。

P.D.4:明黄褐色(10YR 6/8)のシルト質降下火山灰。層厚2～4cm。縄文時代早期の住居跡の覆土中に産出することが多い。火山ガラスに富み、斜長石、斜方輝石、不透明鉱物を含む。火山ガラスの形態は網目模様を呈する。その気泡径はP.D.1の気泡径よりも小さい。函館市教育委



員会(1977)は不明火山灰としたが、斜方輝石と火山ガラスの屈折率から、駒ヶ岳起源のKoーgに対比される。

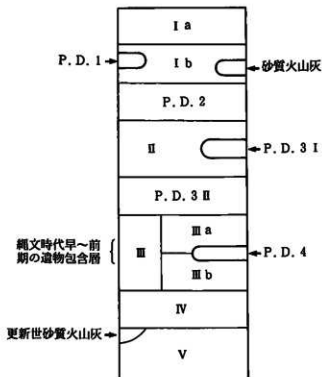
更新世砂質火山灰：灰色(5Y 6/1)の砂質降下火山灰。グリッド56-63付近で、成因未詳のピットのはば基底に産出する。主に、斜長石、角閃石、火山ガラスから成り、軽石を含んでいる。

層厚3cm。角閃石と火山ガラスの屈折率から、濁川カルデラ起源のNg-a(fall)またはNg-b(fall)に対比される。

IV層：V層を母材とする腐植土層でIII層との間のいわゆる漸移層、黒褐色、暗褐色(5YR 3/1, 7.5YR 3/2, 7.5YR 3/4)の砂質粘土～粘土質腐植土。層厚10～20cm。

V層：火砕流堆積物。明黄褐色(7.5YR 5/6)を呈し、軽石と石質岩片を多量に含む火山灰から成る。石英と角閃石を多く含む。長谷川・鈴木(1964)の銭亀沢火山灰層、山縣ほか(1989)の銭亀一女郎川テラフに対比される。層厚10m<。

(花岡正光)



図Ⅱ-3 基本土層模式図

## 引用文献

- 近藤謙三(1993):函館市中野A遺跡土壌および焼土(?)植物珪酸体分析。北海道埋蔵文化財センター「函館市中野A遺跡(Ⅱ)本文編」,424pp.,388-393。
- 佐々木竜男・片山雅弘・宮羽道三・天野洋司(1970):渡島半島の火山灰について。北海道農業試験場土性調査報告, No.20, 255-281。
- 潮川秀良(1974):「日本地形誌北海道地方」,303pp.,朝倉書店。
- 函館市教育委員会(1977):「函館空港第4地点,中野遺跡」,1289pp。
- 長谷川 潔・鈴木 守(1964):5万分の1地質図幅「五稜郭」および同説明書。北海道立地下資源調査所。
- 北海道火山灰命名委員会(1982):「北海道の火山灰」,23pp。
- 北海道埋蔵文化財センター(1992):「函館市中野A遺跡」,408pp。
- 北海道埋蔵文化財センター(1993):「函館市中野A遺跡(Ⅱ)本文編」,424pp。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981):日本海を渡ってきたテフラ。科学,Vol.51,562-569。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・道藤邦彦・杉原重夫(1984):テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ。古文化財調査委員会編「古文化財の自然科学的研究」,984pp.,同朋舎:865-928。
- 町田 洋・新井房夫(1992):「火山灰アトラス [日本列島とその周辺]」,276pp.,東京大学出版会。
- 山縣耕太郎・町田 洋・新出房夫(1989):銭亀一女郎川テラフ:津軽海峡函館沖から噴出した後期更新世のテラフ。地理学評論,Vol.62,195-207。



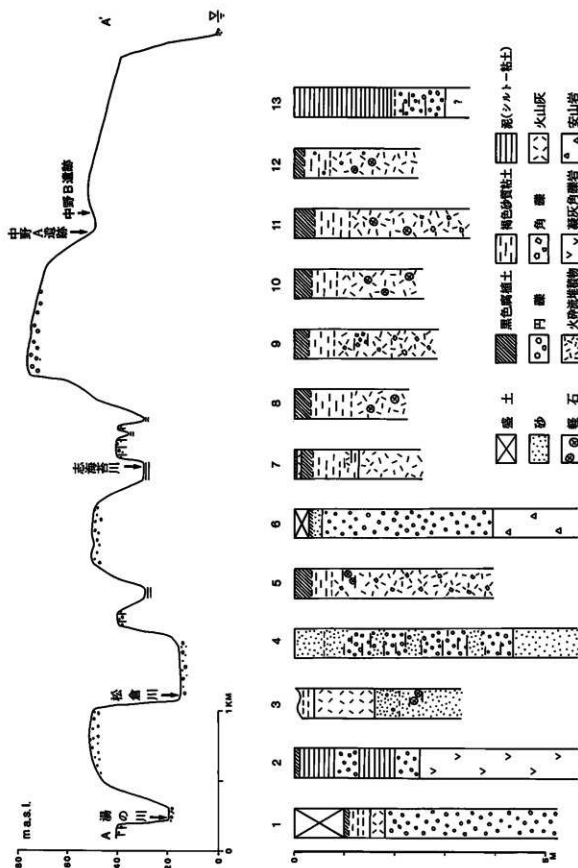
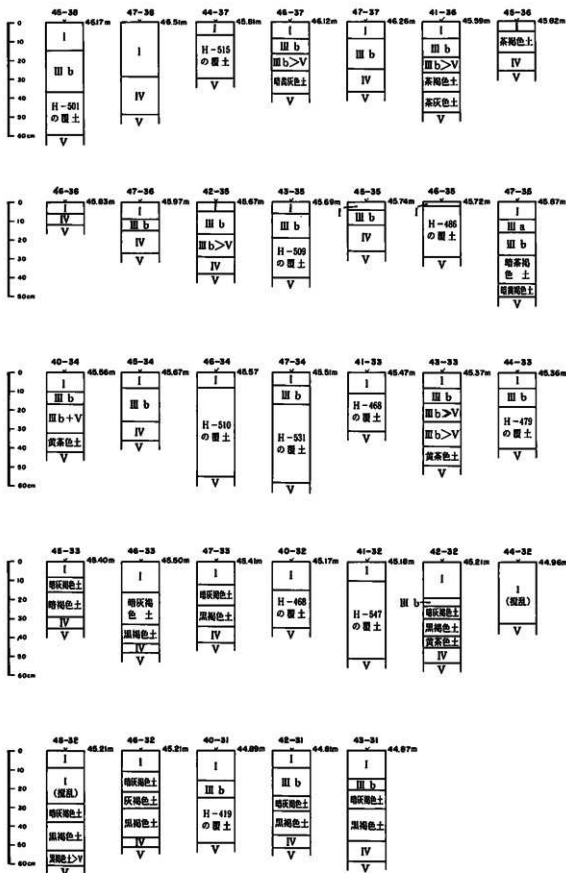
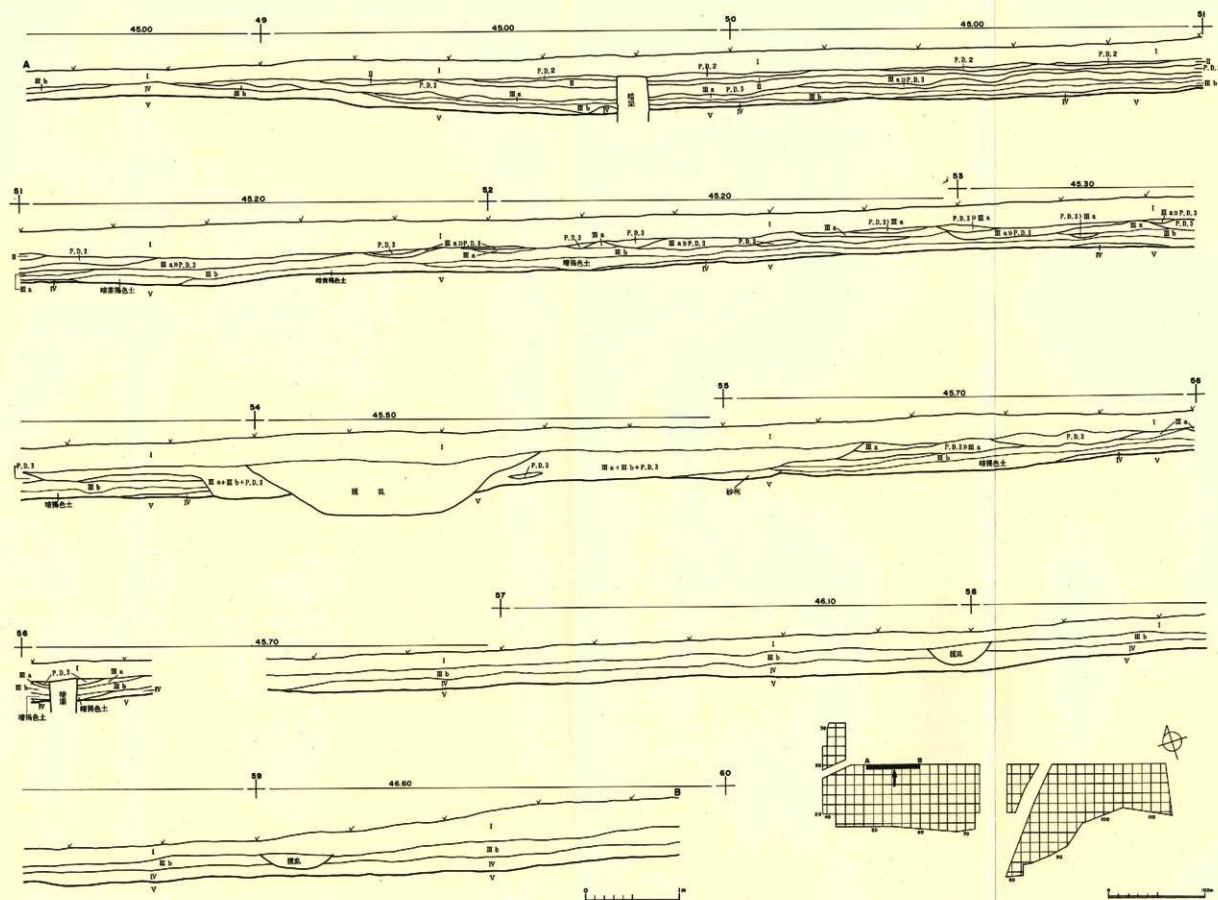


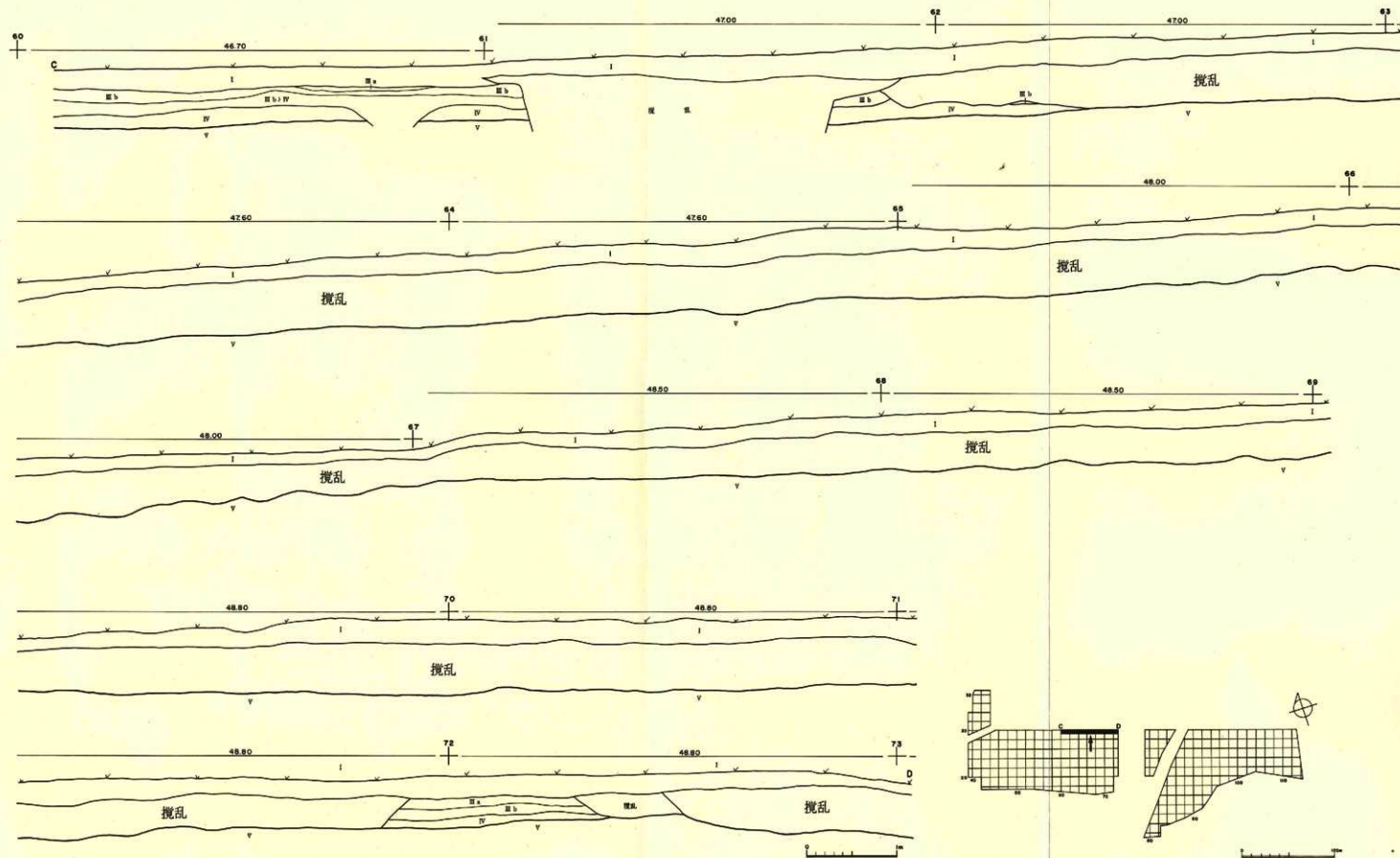
図 II-5 地形断面と地質柱状図



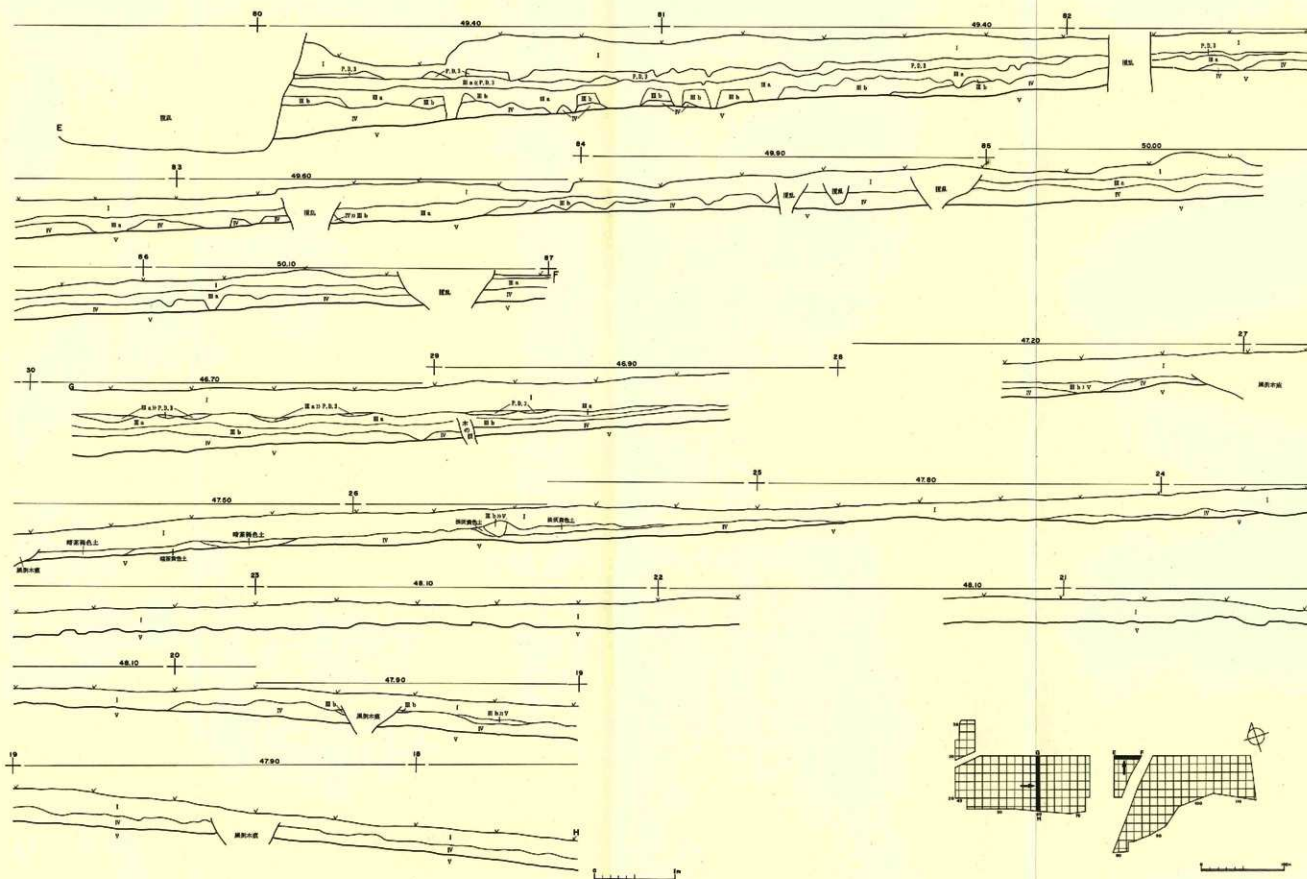
図Ⅱ-6 D地区土層柱状図



図II-7 E地区土層断面図(1)

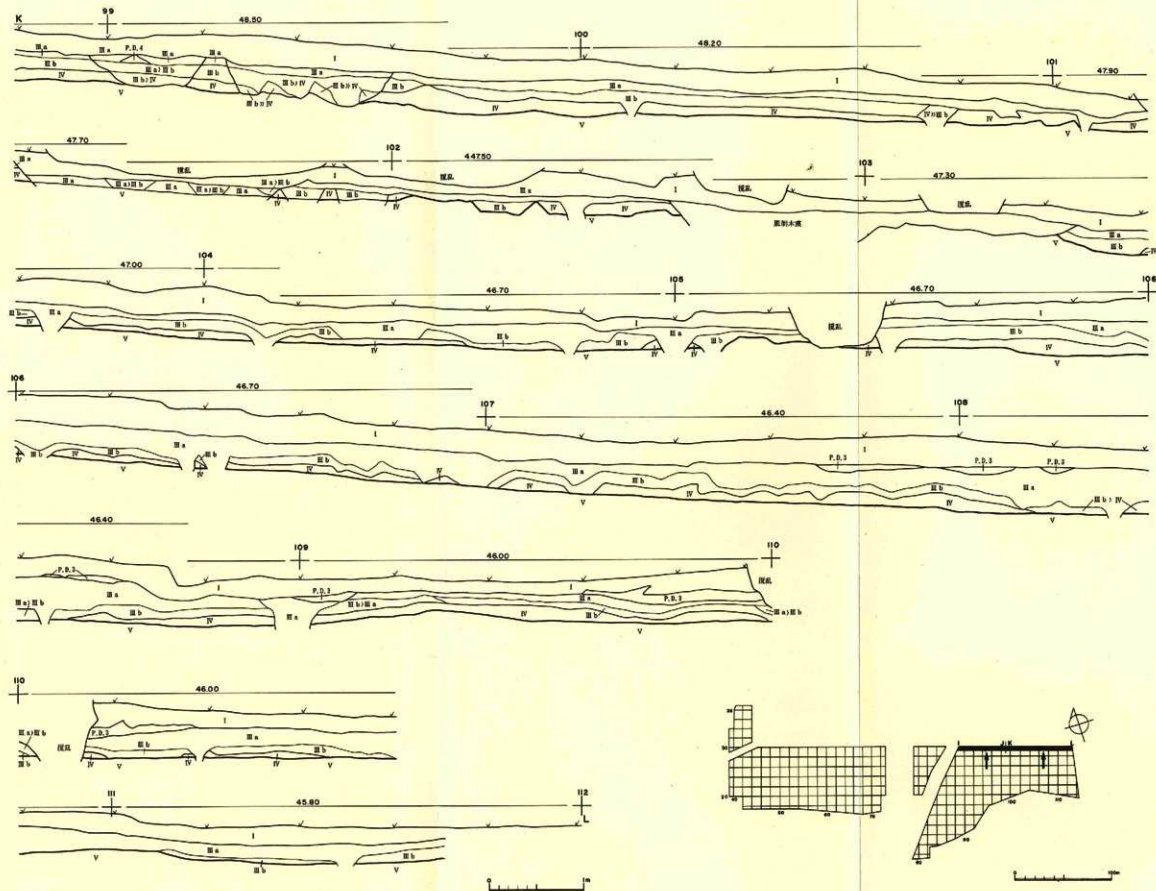


図Ⅱ-8 E地区土層断面図(2)



図II-9 E地区土層断面図(3)





図II-10 F地区土層断面図(1)



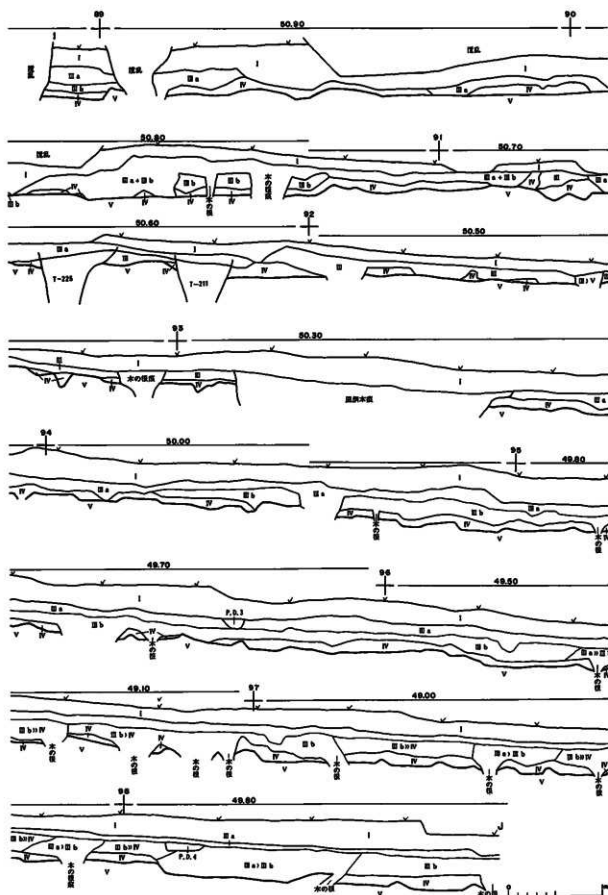
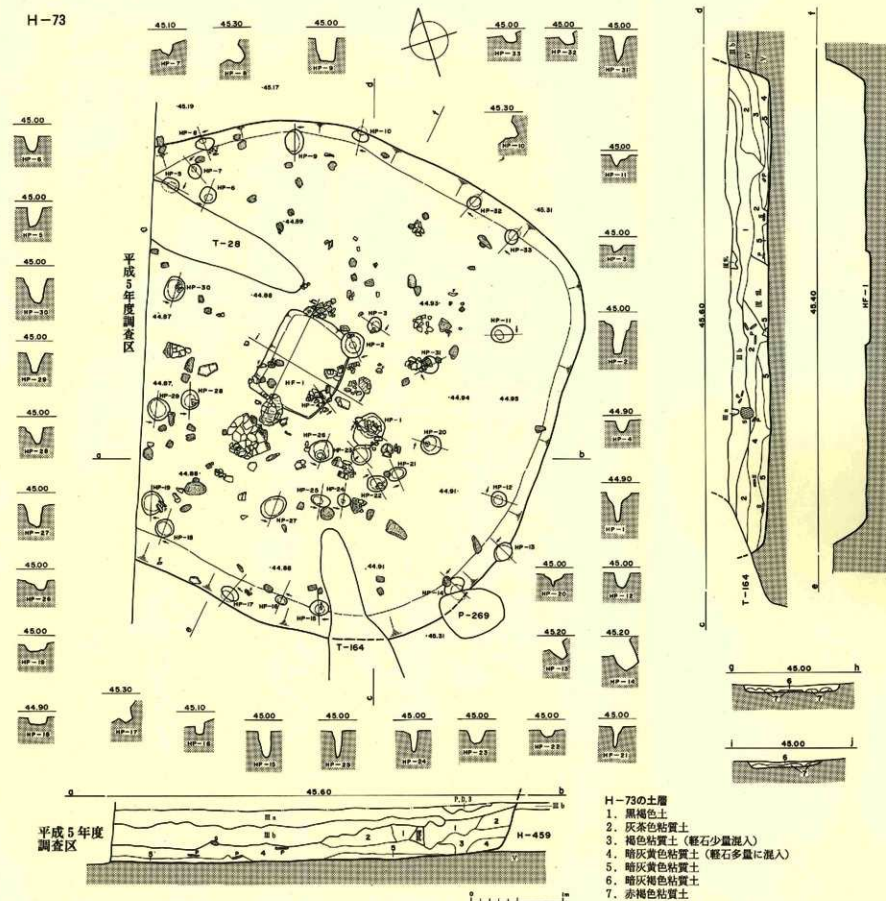


図 II-11 F 地区土層断面図 (2)

H-73



### Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

Ⅲ章では平成7年度調査区の遺構、遺構出土の遺物を掲載し、説明している。遺構は住居跡、土壇、Tピット、焼土、その他の遺構の順で記載している。なお、H-34～H-504は第1分冊、H-505～H-557、土壇、Tピット、焼土などは第2分冊で扱っている。実測図、遺構・遺物説明、出土遺物分布・接合図は基本的に遺構番号順に掲載、説明している。遺構番号は前年度欠番とした番号を優先して付し、各担当調査区ごとの発見、調査順に付している。しかしながら調査後の検討によって変更が生じた場合もあり、それについては欠番とし、次年度の調査において優先的に順次使用している。

住居跡は、位置、規模、床面積、平面形、長軸方向、確認（検出面）・調査（掘り込み面）・土層、重複関係、時期、床面、壁、炉跡、付属ピット、遺物出土状況、土器、石器の順で説明している。柱穴状小ピット、遺構に付設するピット、張り出し状のものは「付属ピット」の項で説明し、出土遺物の接合関係などについては「土器」、「石器」のそれぞれの項で説明している。また住居跡の特徴などについてのコメント的なものは「遺物出土状況」の項のあとで記述している。住居跡に伴うピットや柱穴状小ピットはHP、焼土などはHF、遺構実測図・遺物出土状況図での土器はP、石器はS、剥片はFの記号を付している。ピットや柱穴状小ピットの深さは基本的に数字の前にマイナス（-）記号を付して表示している。

土壇は、位置、規模、平面形、長軸方向、検出面、掘り込み面、重複関係、覆土、墳底、遺物出土状況、性格、時期の順で説明している。遺構実測図、出土遺物は遺構番号順にまとめて掲載し、遺物の説明も遺構番号順にまとめて説明している。

Tピットの規模については表化し、概要等については一括して簡潔に説明している。土壇同様に出土遺物、実測図はまとめて掲載し、説明している。

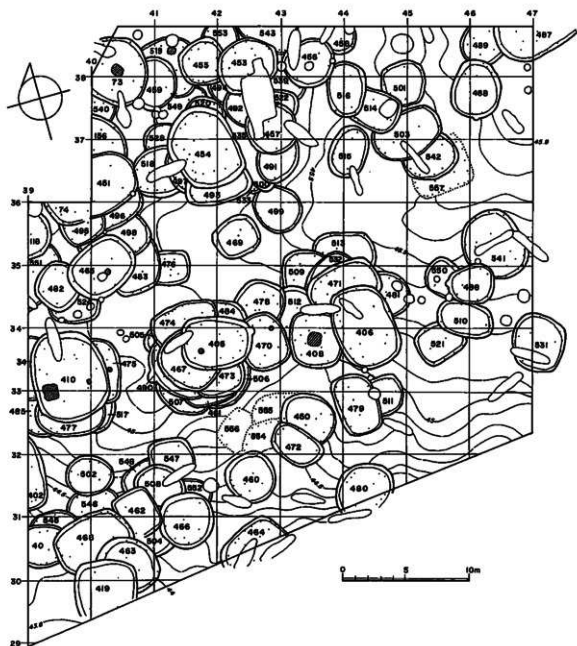
その他の遺構は、第二次大戦末期に構築された防空壕である。実測図を掲載している。

遺構出土の遺物は、土器（復元土器）実測図、拓影図、石器実測図の順で掲載している。土器は基本的に出土層位ごと、床面、HP、床面直上、壁、覆土4層、覆土3層、…の順で記載した。覆土上Ⅲ層出土の土器の一部は各遺構のところで掲載しているが、出土遺物の集計では包含層出土の土器として取り扱っている。石器は剥片石器群、磨製石器群、礫石器群の順で掲載し、土製品は土器、石製品は石器のところに掲載している。遺構の規模、遺構別と遺構出土層位別出土遺物、遺構および包含層の掲載遺物は一覧表にして第2分冊の巻末に一括して掲載している。

本報告書のⅢ章で取り扱っている遺構は、住居跡108軒、土壇48基、Tピット88基、焼土1カ所、その他の遺構1カ所である。このうち住居跡ではH-34、40、73、74、118、156、TピットではT-1、28は平成4、5年度、またT-167、186は昭和51年度にそれぞれ調査されたものの未調査部分に該当するもので、平成7年度発見遺構数から除いている。本年度調査区は47ラインまでであるが、H-487、531、T-191・193については調査を終了しているので、本報告書で報告することとした。

平成7年度調査で発見された住居跡、土壇は伴出する遺物や切り合い関係などからI群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のもので、前年度までと同様に著しく密集し、複雑に重複している。土壇には石皿、一括土器を伴うものやフラスコ状ピットも発見されているが、性格・用途不明のものが多い。Tピットは過年度調査のものと同じように住居跡を切って構築し、P.D.3が自然堆積状のっている。  
(和泉田 毅)

1 D地区



図Ⅲ-1 D地区の遺構位置図(Ⅰ) 住居跡



# (1) 住居跡

H-34 (図Ⅲ-3～6, 図版93・119・156)

位置: 39-32・33 標高45.08m～45.21mのほぼ平坦地に位置している。東側はH-410、西側は平成4年度調査区で、大半が既に削平されている。全体は不明である。なお平成4年度のH-34とは北、南壁ともに一致しない。このため、別の遺構として調査を行った。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 39-32・33の包含層調査中、Ⅲb層中でⅢb>Vの落ち込みを検出した。またH-410の西壁面で覆土状の土の落ち込みを確認した。Ⅲb層を除去し、覆土を掘り下げる。やや堅い黄色土上面で遺物が水平の状態出土したことから、この面を床面とし、北・南の壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>V、覆土2層はⅢb>Vである。覆土3層は暗茶灰色土で、層厚は約12cmである。床直上には覆土3層+Vの汚れた軟質土が薄く堆積していた。

重複関係: 本住居跡は、H-410・485と重複しており、これらより古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: 北壁はV層をやや深く、南壁はわずかに掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや堅い。

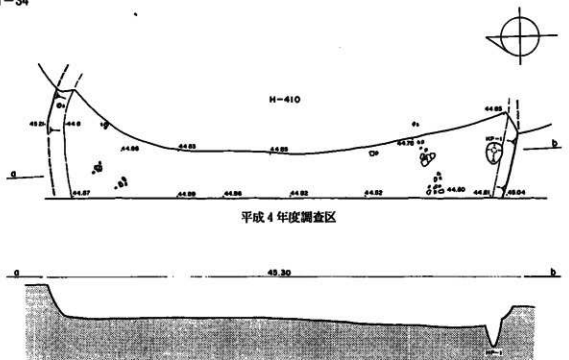
壁: 立ち上がりはやや急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、北壁が約33.0cm、南壁が約23cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

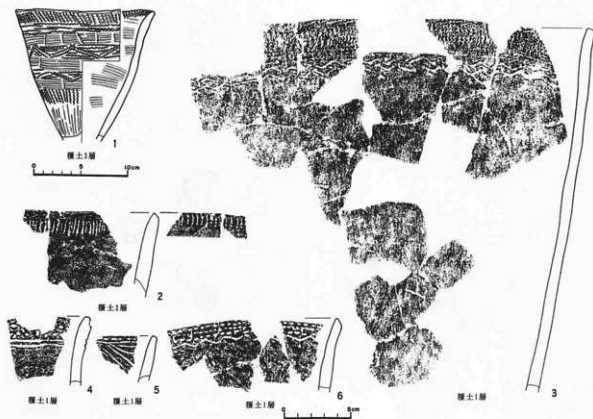
付属ピット: 南壁際で柱穴状小ピットが1個検出されている。これは直立している。

遺物出土状況: 出土遺物総数は237点である。この内訳は土器158点、石器等79点である。ほとんどが

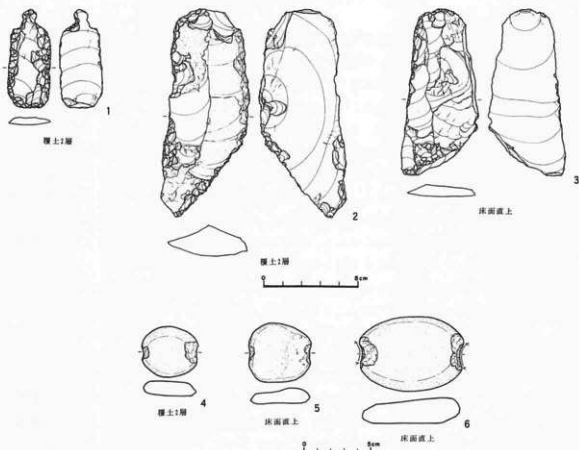
H-34



図Ⅲ-3 H-34実測図

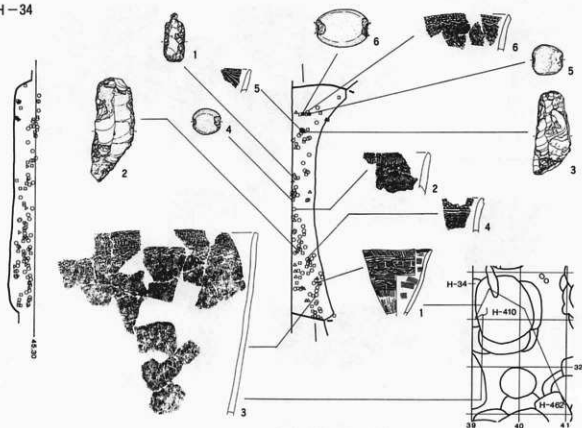


図Ⅲ-4 H-34出土土器



図Ⅲ-5 H-34出土石器

H-34



図Ⅲ-6 H-34出土遺物分布・接合図

覆土1・2層から出土しており、床面ではI群D1類の土器片が4点、床面直上で石錘2点、Uフレイク1点、礫1点が出土している。南壁際の床直上付近で器表面を上にし、水平の状態ややまとまって土器片が出土した。出土した土器はすべてI群D1類のものである。石器では石錘、石匙、スクレイパー、たたき石、砥石、石錘(20点)などが出土している。

**土器：**1は覆土3層、2は覆土2層、3～6は覆土1層からそれぞれ出土した土器で、すべてI群D1類土器である。1はH-410覆土2層、H-462覆土2層出土の土器片が接合したもので、口縁部の一部は欠失するが底部以外およそ復元できた個体である。口径14.8cm、器高約16.0cm。胴部中位がわずかにふくらみ内湾気味に外反する。口縁部は肥厚し、口唇部は丸く仕上っている。平緑。口唇部内面と口縁部外面には斜位の連続腹縁文が施文される。外面には貝殻条痕文が三段横環し、その間には連続波状文、貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部下位には縦方向に貝殻腹縁圧痕文、貝殻条痕文が施されている。内面はすり消し条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。2は平緑の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部内外面には連続腹縁文が施文され、胴部内外面は丁寧なナデ調整。焼成良好で堅い。3は平緑の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口唇部内外面には連続押引文が施文される。口縁部外面には2条の貝殻腹縁圧痕文と鋸歯状沈線文が横環する。胴部外面はナデ調整、内面は貝殻条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻。内外面の色調は暗灰黄色である。4は平緑の口縁部破片で、口唇部は肥厚し、角形に仕上っている。口縁部外面には2条の刺突文と沈線が施文される。口唇部、内外面はナデ調整。内面にはスガが付着する。5は平緑の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には棒状工具による押引文、口縁部外面には沈線文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられてい



る。6は39-33Ⅲ層出土の土器片と接合した平縁の口縁部破片である。口唇部断面形は切り出し状。口唇部には刺突文、口縁部外面には刺突文と鋸歯状沈線文が施文される。外面には貝殻条痕文が加えられている。

石罫：1は3類の石匙で、先端部に素材の折れ面を残している。2は両側縁に刃部をもつ1類の硬質頁岩製のスクレイパー、3は床面直上出土の硬質頁岩製のUフレイクである。4～6は閃緑岩製の石鏝で、5・6は床面直上出土、6の挟入部には敲打痕が認められる。（和泉田 毅）

#### H-40（図Ⅲ-7～10、図版5・119・156）

位置：39-30 標高44.28m～44.58mの緩斜面に位置している。

規模：——／——×3.28m/2.92m×(0.32)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-468の西壁面で覆土状の土の落ち込みを確認し、39-30の包含層調査中、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層を除去し、Ⅲb>Ⅴから順次覆土を掘り下げ調査を行う。Ⅴ層中でやや堅い黄色土の面が検出され、この面で柱穴状小ピットが検出されたことから床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。南側は風倒木痕によって攪乱されており、覆土の堆積状態は不安定である。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Ⅴ、覆土2層は粘質でやや堅い黒褐色土で、北東側では深く落ち込んでいる。覆土3層は床面上にある土で、軽石を混入し、やや砂質の黄灰色系のものである。黄色土やⅢb層が混ざり合った汚れた土である。

重複関係：本住居跡は、H-468・545と重複しており、H-468より古く、H-545より新しい。

時期：覆土、周辺包含層出土の遺物などから、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されており、北から南へ若干傾斜し、やや凹凸がある。

壁：南壁の一部は風倒木痕の影響で不明であるが、他の立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が21cm～30cm、南壁が11cm～23cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

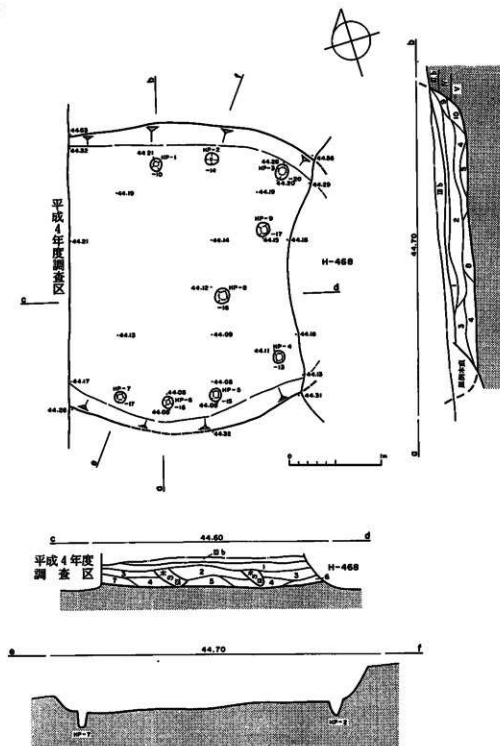
付属ピット：柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1～7は壁際にあり、直立している。

遺物出土状況：出土遺物総数は115点である。この内訳は土器55点、石器60点である。床面直上からは石槍が1点出土しただけで、他は覆土から出土したものである。覆土1層からはI群D1類土器が47点、石器が59点出土している。出土した土器はI群D1類のものほか、I群に属する土器も出土している。石器では石槍、石匙、たたき石、砥石、石鏝（18点）などが出土している。

平成4年度調査分と合わせると、本住居跡は長軸3.80m、短軸3.10m、床面積7.84㎡、長軸方向N-70°-W、やや丸味をもつ隅丸長方形のものが想定される。2本柱で、建て替えが行われている可能性も考えられる。

土器：1～3は覆土1層で出土したもので、すべてI群D1類土器である。1と2は同一個体である。1は39-31 I・Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、胴部が内湾気味に反し、口唇端部を鋭角的に仕上げている波状口縁の破片である。口唇部外面には刺突文が加えられ、口縁部外面には2条の沈線で菱形をつくり、中央と下端、菱形の下辺部には刺突を加えた沈線文が施されている。胴部内外面は粗いナデ調整。2は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外傾面には刺突文が施文されている。内外面はナデ調整。3は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には浅い沈線文、2条の刺突文、鋸歯状沈線文が施文されて

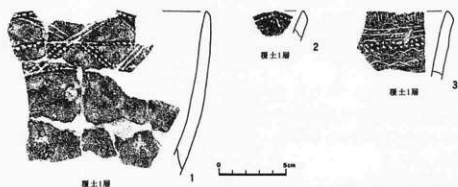
H-40



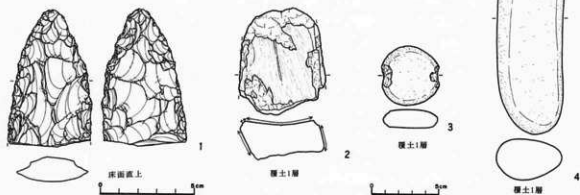
H-40の土層

1. Ⅲb>V (暗褐色土。覆土1)
2. 黒褐色土 (かたい、粘質。覆土2)
3. 暗褐色土 (2より黄色土粒多く、砂質)
4. 暗黄灰色土 (軽石混入、かたい。覆土3)
5. 黄茶色土 (砂質)
6. 黒茶色土 (砂質)
7. 茶灰色土 (軽石混入)
8. V>4
9. 暗褐色土 (Ⅲb>V)
10. 暗褐色土

図Ⅲ-7 H-40実測図

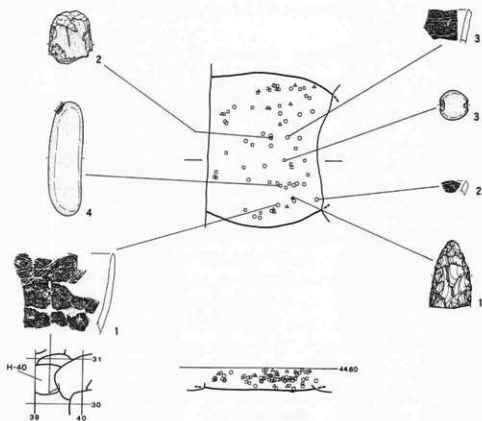


図Ⅲ-8 H-40出土土器



図Ⅲ-9 H-40出土石器

H-40



図Ⅲ-10 H-40出土遺物分布・接合図

いる。内外面ともにナデ調整が加えられ、器表面はザラザラしているが、堅い。

石器：1は床面直上出土の石槍片である。2は凝灰岩製の砥石で、三面の砥ぎ面をもつ。3は棒状のたたき石で、端部に使用痕がみられる。4は閃緑岩製の石錘である。(和泉田 毅)

H-73 (図-Ⅲ-11~21, 図版6・93・94・120・157・158)

位置：40-37・38は東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模：——/——×(5.10)m/(4.60)m×(0.53)m 床面積：不明 平面形：隅丸方形状

長軸方向：N-40°-W

確認・調査・土層：I層除去後にT-28・T-164を検出調査したところ、壁面の観察から遺構が存在することが予想された。Tピット確認面では、P.D.3の不整形な散在があり、東西南北に土層観察用のベルトを残し、Ⅲ層を掘り下げたところ、IV層上面でほぼ円形の黒色土の落ち込みを確認した。その落ち込みの南西部の片隅に、それを切る直径40cmほどの土壌を確認しP-269とした。順次掘り下げて調査を行った。覆土は床面の土壌を別として五層に分層した。P.D.4は認められなかった。Ⅲ層を掘り下げるに従い、中央部に不整形な落ち込みがあり土層観察から、風倒木痕の攪乱と判断した。黒色土は床面近くに達し、I群G類の土器が出土している。4層の暗灰黄色粘質土層を除去するとほぼ平坦となり、炭化物の散在や、焼土粒が検出された。この面を床面近くと推定し、遺物出土等の確認につとめた。床面では一面にI群D1類の土器等が多く出土した。床面確認後、壁の立上りを検出した結果、平面形は隅丸方形状となった。床面中央部には長軸約1mの長方形の浅い掘り込みがあり、その上面で炭化物が検出された。炉跡からの炭化物を浮遊選別処理し、炭化植物遺体の同定をおこなった。状態が良好なクルミの炭化物を、放射性炭素による年代測定を行った結果、7920±80B.P.の値が得られた。

床面：覆土5層の上面あるいは下面が床面と考えられる。床面はV層に掘りこまれている。概ね平坦だが踏み固めは目立たない。

壁：斜めに立上るが、かなり崩壊している。東方向では、H-540・519に削平をうけ、床と壁裾の境界が不明瞭だった。

炉跡：HP-1は中心部に存在し、深さ5cmほどの浅い隅丸方形の落ち込みであり、炭化物が検出された。

付属ピット：柱穴状の小ピットは34カ所を確認された。壁際にあるHP-8・10・15・16・17・18・33・34は、いずれも径10cm余りで、個別に変化に富み、柱穴を認定することは難しい。床面中央部落ちこみ周辺ではHP-28・30・31・32は明瞭な掘り方を持つ。倒木痕など自然の攪乱かと思われるものは削除した。堅穴外の柱穴は確認できていない。柱穴全体の配列はあまり規則的ではないが、ある程度は東西南北に対となっている。壁斜面に、堅穴中央に向かって内傾する柱穴が観察された。

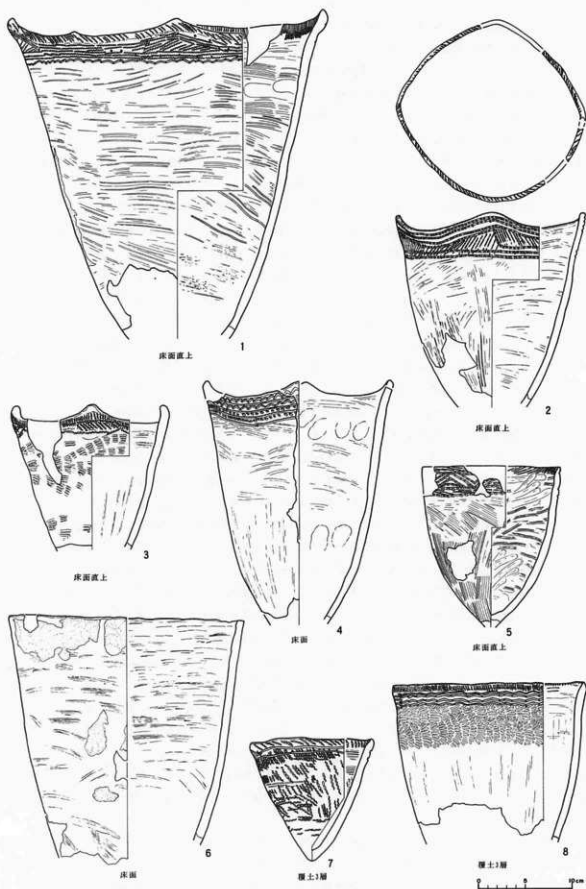
遺物出土状況：遺物総数は2,467点。1,590点出土した土器の多くがI群D1類で1,478点、B類1点、D2類17点、E類7点、G類83点である。I群D1類のまとまった破片が床面から覆土にかけて散在していた。堅穴中央に土器片が集中し、これらと遺構内外の破片が接合する状況が見られる。石器等は877点出土、うち剥片石器は477点を占める。礫石器群は397点を占める。磨製石器群は3点を占める。重複関係：H-459・540・519より新しく、T-28・164、P-269より古い。

時期：堅穴の形状および、遺物出土状況からI群D1類期、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

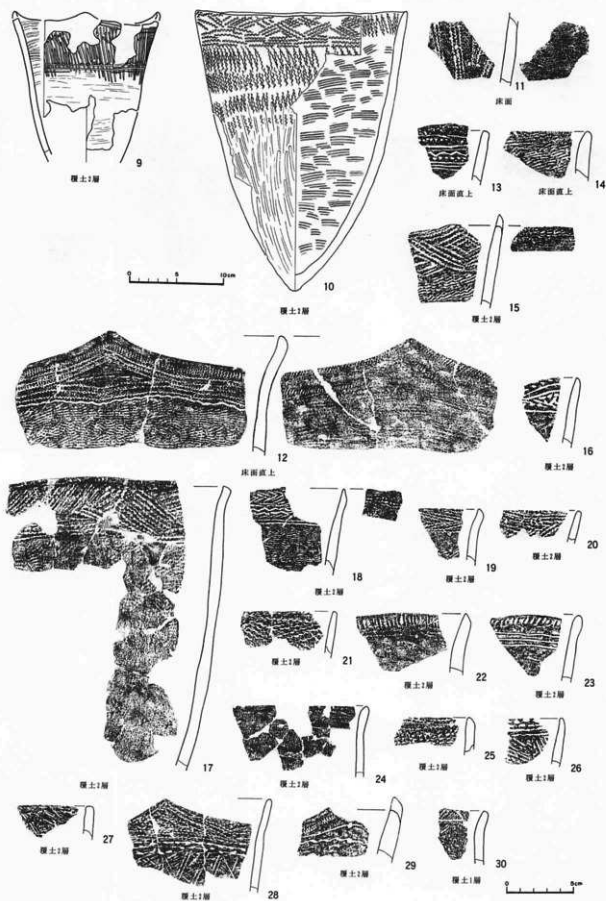
土器：1~10はI群D1類土器である。1は4山の波状口縁で、波頂部の間に副突起を持つ。明瞭な頸部の屈曲点はないが、口縁部は外反し、口唇部は外傾する。文様は、口唇部に貝殻腹線文のキザミが

斜位に施され、内面には腹縁の連続移動文が施される。口唇下は横位の鋸歯状沈線で区画され、貝殻腹縁によって充填される。刺突が貝殻の交点などに意識的に施される部分がある。器面調整は、内外面とも貝殻によるすり消し条痕が施されている。内面は一部ケズリも加わる。床面直上出土。2は波状を呈し、口唇部は丸形。口唇上面に歯状の貝殻腹縁が施される。文様は沈線文によって区画され、沈線には刺突が施される。区画の内面は歯状の貝殻腹縁によって充填される。器面調整は、内外面ともナデ調整。床面直上出土。3は4山の波状を呈し、波頂部が内湾する、口唇部は角形で上部に面を持つ。文様は口縁部に貝殻腹縁刺突が施され、胴部には貝殻殻表の背圧痕文が散発的に施される。器面調整は、内面ナデ調整。床面直上出土。4は4山の波状を呈し、口縁部は外反する。口唇部は丸形。文様は沈線文と刺突文で構成される。器面調整は、内面ナデ調整。床面出土。5は平縁で、口唇部は角形。底部は乳房状尖底。突起部は欠損する。文様は2と同様に沈線上に刺突が施され、口縁部内面には歯状の貝殻腹縁が斜位に施される。器面調整は、内面ナデ調整、外面に底部から縦位に条痕が施される。床面直上出土。6は平縁を呈する無文土器である。口唇部は丸形。器面調整は、内面ナデ調整。外面はすり消し条痕。床面出土。7は平縁を呈する小型土器である。乳房状尖底。胴部全面に貝殻腹縁文が施される。口縁部内面には押引が施され、押引下位には施文時の爪形も残る。器面調整は、内外面ともナデ調整。覆土3層出土。8は平縁を呈し僅かに外反する、口唇部は外傾する。口唇両側には貝殻腹縁の連続移動文が施される。口縁部は鋸歯状沈線が横環し、胴部は貝殻殻表をもちいた背圧痕文が施される。器面調整は、内外面ともナデ調整。覆土3層出土。9は波状口縁を呈し、口唇部は丸形。口縁部は沈線で文様が施され、沈線の交点に先端角形の刺突文が施されるなど2・5と同様の手法によって描かれている。外面はナデ調整。内面はすり消し条痕で調整される。覆土2層出土。10は平縁を呈し、口唇部は丸形。底部は乳房状尖底。口縁部内面には貝殻殻表先端部の押引文が施される。口縁部は貝殻腹縁文で菱形の文様構成を描き、胴部に殻表の押引波状文が施される。胴部下半は縦位のミガキ調整、内面にはナデ調整後、所々に貝殻腹縁で調整し横位に条痕が残る。覆土2層出土。11はI群B類の体部破片で3条一単位の区画がある。12~37はI群D類の口縁部片である。13は沈線文と刺突文の組み合わせ、14はI群D2類で地文に引摺り背圧痕が施される。15は波状を呈し口縁部内面に押引、外面には背圧痕が施される。12は波状を呈し、口唇部両側に貝殻腹縁の連続移動文、内面には爪痕がのこる。器外面に背圧痕。16は波状を呈し、13と同様の要素の組み合わせである。17は胴部に背圧痕文が散発的に施される。18・19も胴部に背圧痕文が施される。18は波状の副突起部分で口縁部内面に押引文が施される。19は口縁部が外反気味に開く。20・21は腹縁文のみ。22は歯状の貝殻腹縁文。23・24は口唇端部が肥厚し外反気味に開く。23は肥厚部分に爪で縦位に刺突。25・26・27はI群D2類。25は外傾する面に腹縁が施文され、胴部に押引が施される。26は沈線と刺突で構成されるもの。27は外面に引摺り背圧痕。28は胴部に沈線による斜格子目文が描かれ地文に背圧痕文が施される。29は波状を呈し口唇部両側に貝殻腹縁の連続移動文、沈線中に刺突文が施される。30・31・32は体部に背圧痕文が施される。32は波状を呈し口縁部内面に押引。33は口唇端部に押引が施される。34は口縁部が外反し胴部に背圧痕文が施される。35は波状を呈する。口縁部内面と胴部に押引文が施される。36は口縁部押引で胴部に背圧痕文が施される。37は地文に引摺り背圧痕文が施される。38~41はI群D類の乳房状尖底である突起は小さい。40は鋭い円錐形を呈す尖底でI群D1類に属するものではない。

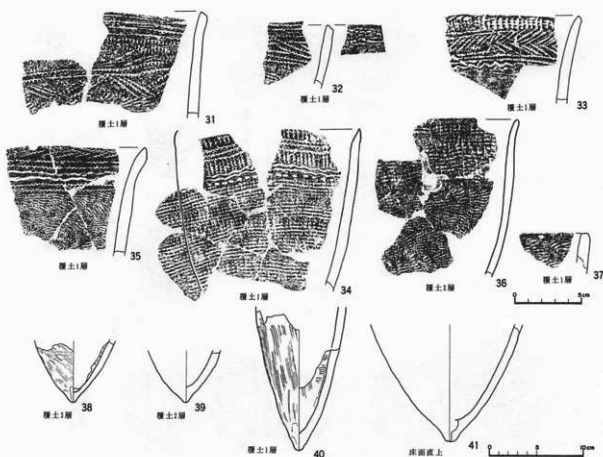
石器等：1~8は石鏝で全て頁岩製である。9~12は石槍。9は素材の腹面と背面を残し、12は先端部が欠損している。13・14は石鏝で共に剥片の一部に尖頭部をつくりだしている。15は簡状石器で周辺加工により整形する。16・20は石匙。16は周辺加工の整形によるもの、20は先端部のみ両面加工さ



図Ⅲ-12 H-73出土土器 (I)



図Ⅲ-13 H-73出土土器 (2)

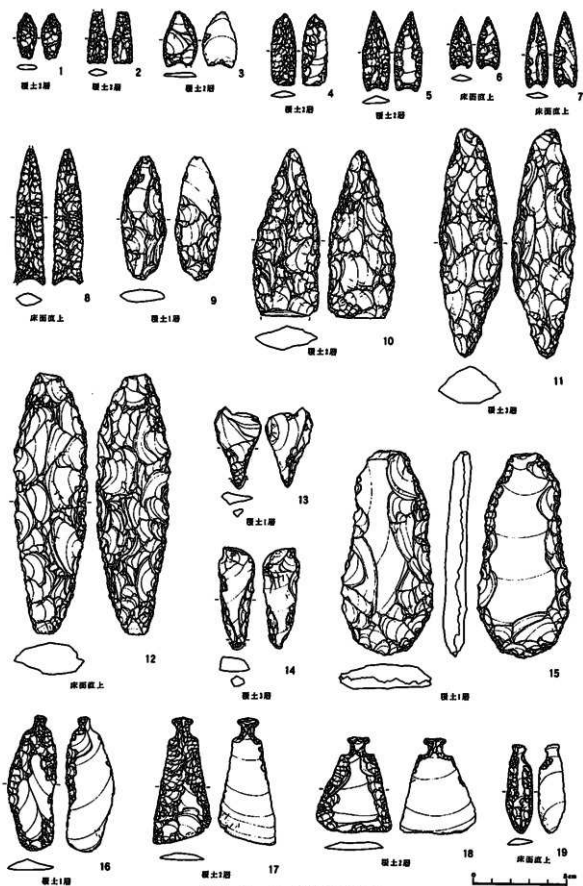


図Ⅲ-14 H-73出土土器(3)

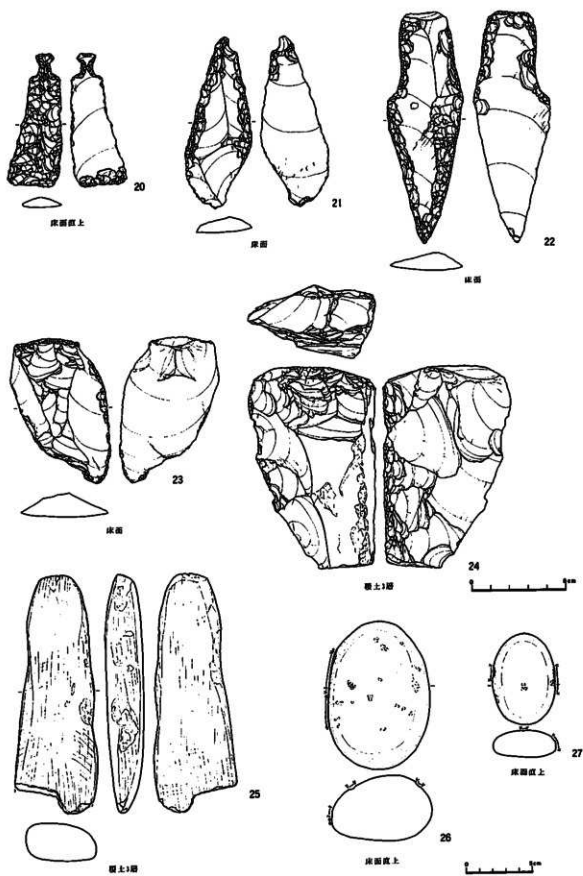
れている。21・22・23はスクレイパー。21は石匙の未製品、22は両側縁の刃部が端部で収束している。24は硬質頁岩製の石核。25は磨製石斧で蛇紋岩を擦り切るもの、刃部は欠損している。26・27はたたき石で閃緑岩製。27は両側縁部と平坦部共に使用する。28・29すり石で閃緑岩製。29は側縁部を使用する。31は砥石でH-457出土のものと接合した。32～38は石錘。32・33は短軸に挟りが加わる。34・38は擦り痕が残る。39は石皿で閃緑岩製。40は台石で閃緑岩製。

(富永 勝也)

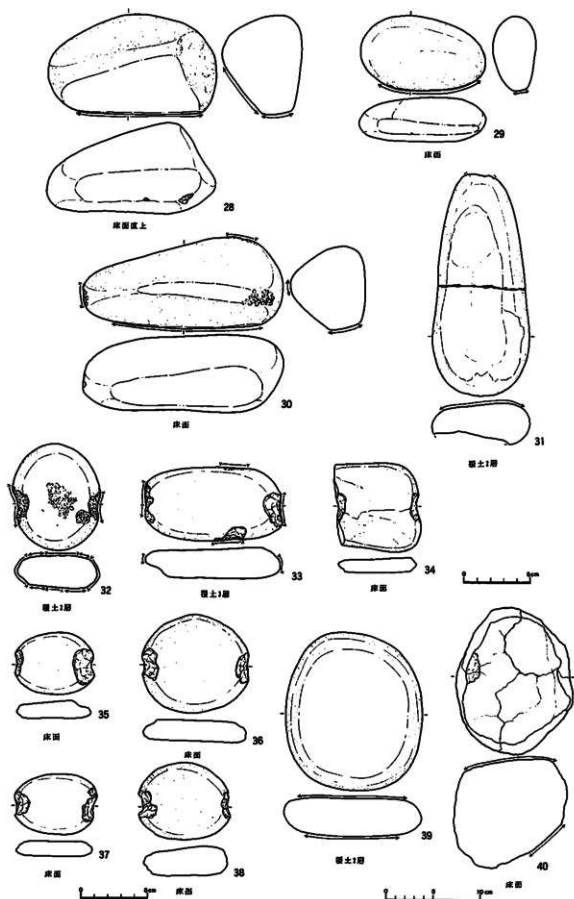




図Ⅲ-15 H-73出土石器 (1)

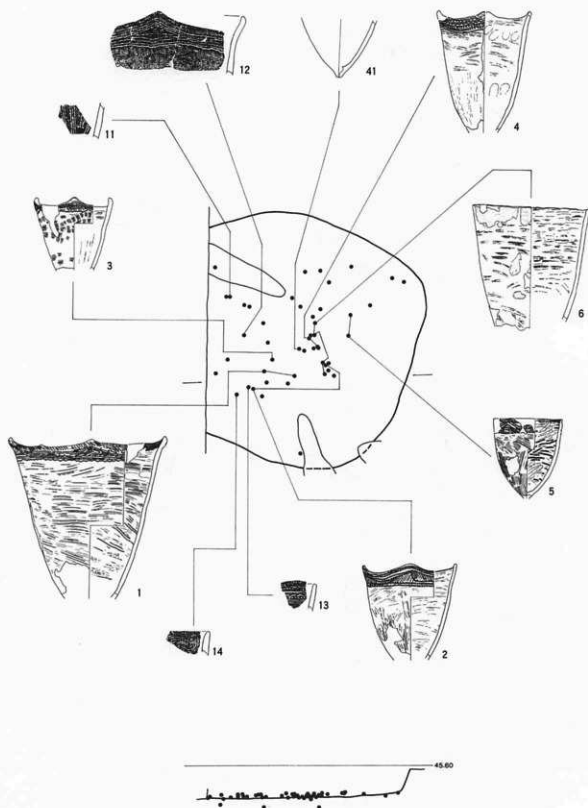


図重-16 H-73出土石器 (2)



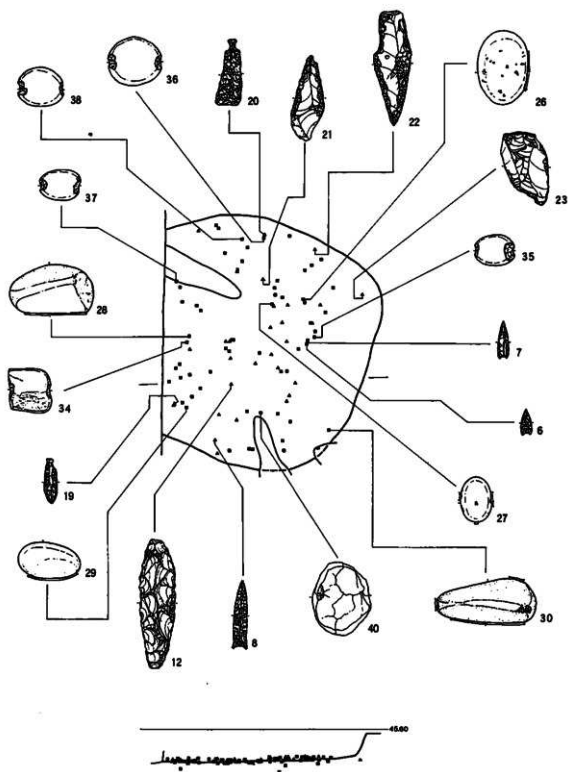
図Ⅲ-17 H-73出土土器 (3)

H-73

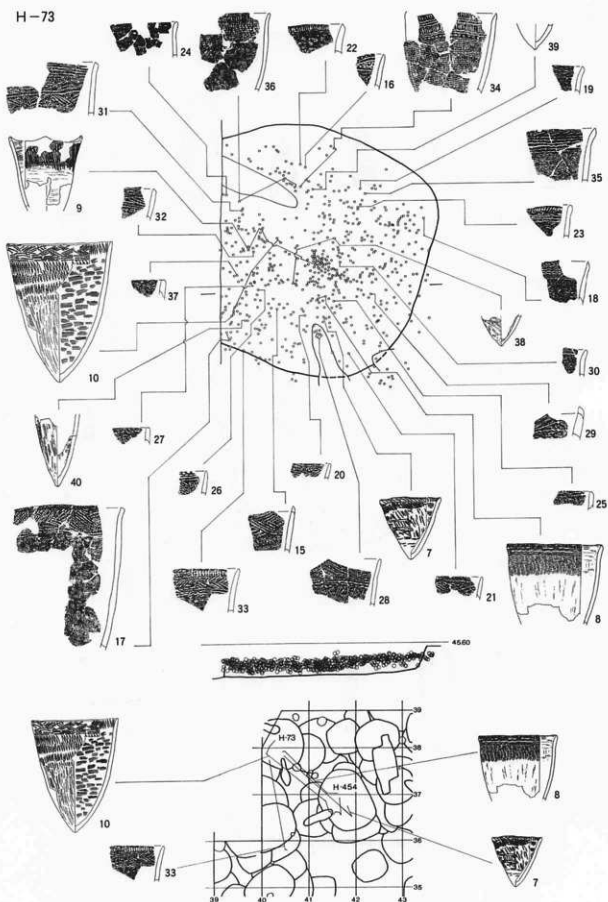


図Ⅲ-18 H-73床面出土土器分布・接合図

H-73

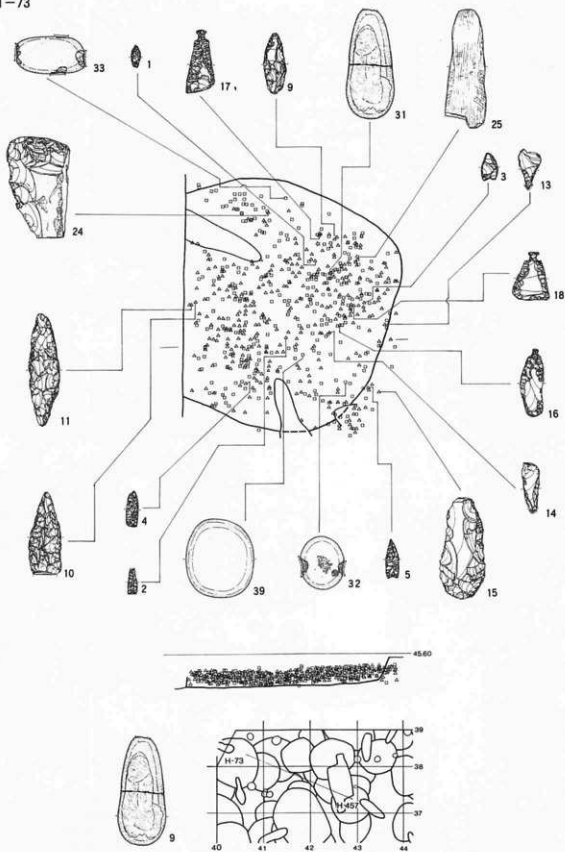


図Ⅲ-19 H-73床面出土石器分布図



図Ⅲ-20 H-73覆土出土土器分布・接合図

H-73



図Ⅲ-21 H-73覆土出土石器分布・接合図

## H-74 (图Ⅲ-22~26, 图版5·121·159)

位置：39-35、40-36　ほぼ東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

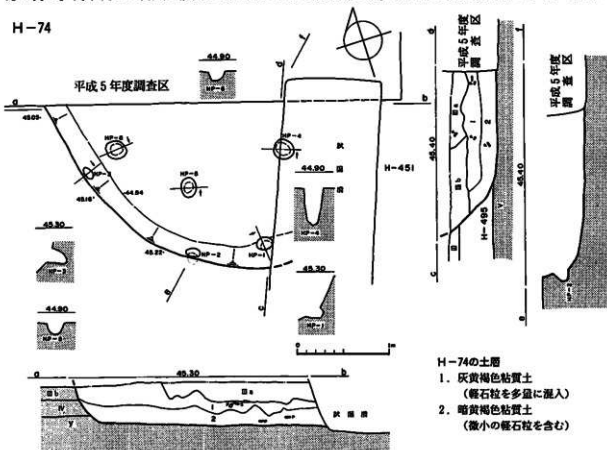
規模：—／—×—／—×(0.45)m 平面形：隅丸長方形 床面積・長軸方向：不明  
確認・調査・土層：39-35, 40-36付近では、東から西へ傾斜する形でⅢ層が堆積していた。包含層調査中に遺物が多く散在し、平成4・5年度調査区の断面から竪穴西壁の立上りを確認した。このことから周辺に遺構が存在することが予想された。東西、南北に土層観察用ベルトを残し、順次掘り下げて調査を行った。P.D.3は認められなかった。Ⅲ層を除去後、Ⅳ層上面に平成4・5年度調査区に切られる形で、半円形の黒色土の落ちこみを確認した。H-451との重複関係は、重複部分がB調査により掘削され確認できなかった。B調査の清底部分にH-74の壁の立上りを確認し南壁を想定した。覆土は二層に分層され、ブランとクロスチェックしながら順次掘り下げた。覆土1層の灰黄褐色粘質土層の上面で炭化物の散在が認められ、遺物が多く出土したが、土層観察から流れ込みと判断した。更に2層の暗黄褐色粘質土層を除去するとほぼ平坦になり柱穴が確認されたため、同層の下面を床面と判断した。

床面：覆土2層の下面が床面と考えられる。床面はV層に掘りこまれている。概ね平坦だが踏み固めは目立たない。

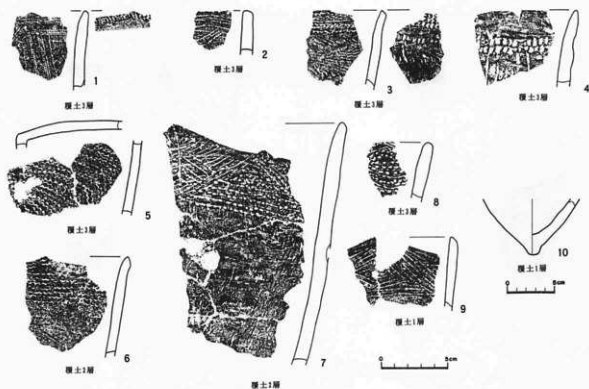
壁：斜めに立上り、かなり崩壊している。

炉跡：確認されなかった。

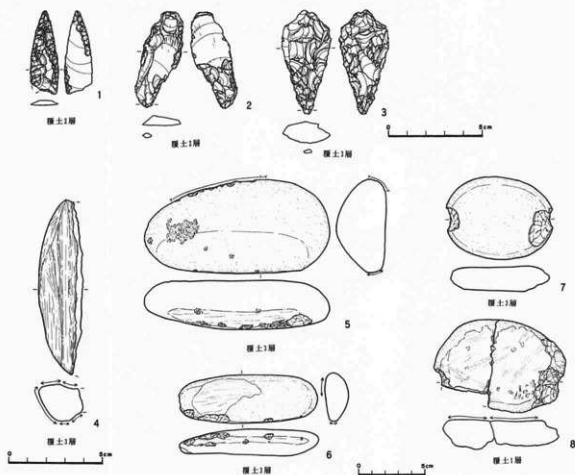
付属ビット：柱穴状の小ビットは6カ所で確認された。壁際にあるHP-1・6はいずれも径10cm余りで、個別に変化に富み、柱穴を認定することは難しい。床面の中央部周辺ではHP-4は明瞭な掘り方を持つ。倒木痕など自然の擾乱かと思われるものは削除した。竪穴外の柱穴は確認できていない。





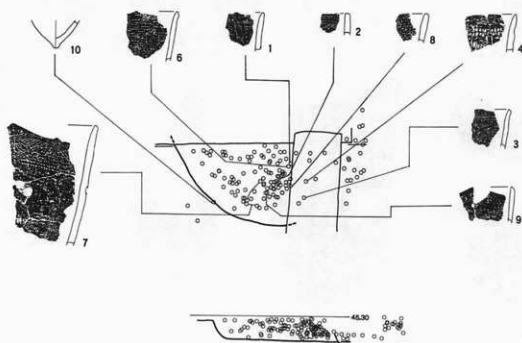


図Ⅲ-23 H-74出土土器



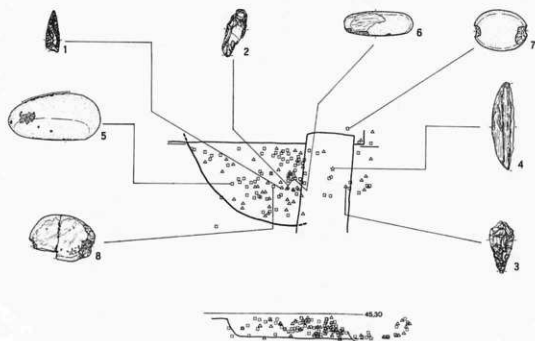
図Ⅲ-24 H-74出土石器

H-74



図Ⅲ-25 H-74出土土器分布図

H-74



図Ⅲ-26 H-74出土石器分布図

遺物出土状況：遺物総数は386点。244点出土した土器の多くがⅠ群D1類で239点を占め、B類1点、D2類3点、G類1点である。石器等は142点出土。うち剥片石器群は56点、礫石器群は85点、磨製石器群は1点である。

重複関係：H-156・495・496より新しく、H-451はB調査範囲の為に切り合い関係は不明である。

時期：遺物出土状況からⅠ群D1前期、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

土器：1はⅠ群B類の口縁片で口唇部は角形を呈す。内面端部に貝殻腹縁の一部で連続移動文を施す。文様は細い沈線で一度下書きをしている。3条一単位の貝殻腹縁が刻まれた区画線で描かれる。区画の交点、沈線中に円形刺突が施される。区画内には背圧痕文が施される。2～8はⅠ群D1類の口縁部片である。2の口唇端部は角形であるが角が丸まる。貝殻腹縁文で文様が施文され、内外面はナデ調整。3は波状口縁の波頂立上り部分の破片で口唇部が一部欠損している。口唇部は外傾する。胴部地文に背圧痕文が施され、口縁部内面には斜角気味に貝殻腹縁の連続移動文が施される。貝殻腹縁で区画された文様帯内部には押し文が施される。4は口縁部が僅かに外反する波状口縁と考えられる。2条の横位沈線が巡り、先端が角頭方形の棒状工具によって沈線中に刺突文が施される。胴部には同じ施文具で縦位に沈線文が施される。内面はナデ調整。5は角筒方形を呈する土器の胴部破片で、斜位に貝殻腹縁文が施される。内面はナデ調整。6は波状を呈する口縁の副突起周辺の破片である。口唇部は外傾し、上部に横位の腹縁文が、文様帯にも横位の腹縁刺突が施される。口縁部内面は連続移動文の代わりに横位の条痕文が施される。胴部はすり消し条痕。煤の付着が著しい。7は波状を呈する波頂部破片である。口唇部は外傾する。文様は波頂部から垂下した沈線と副突起を結び三角形を作り出す。沈線中に刺突文が施される、波頂部両端に副突起を持つ。胴部外面は不整方向のナデ調整、内面はすり消し条痕。8は波状を呈すると推測される。口唇部は丸形である。沈線と刺突の組み合わせで文様が描かれ、刺突は楕円である。内面はナデ調整。9は波状を呈する波頂部破片である。口唇部は角形で上面に斜位に腹縁刺突、櫛歯状に加工した貝殻腹縁を施文具に菱形の文様構成を描く。内外面はナデ調整で内面にはスガが付着する。10はⅠ群D類の乳房状尖底である。

石器類：1は石鎌で硬質頁岩製の無茎鎌。2・3は石錐。4は擦り切り残片で蛇紋岩製。5・6はすり石で閃緑岩製、たたき痕も残る。7・8は石錐。7は閃緑岩製、8は安山岩製、平坦面にすり痕が残る。  
(富永 勝也)

H-118 (図Ⅲ-27～30, 図版7・94・121・159)

位置：39-34・35 はば東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模：——/——×——/——×(0.26)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

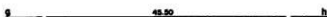
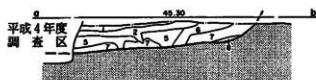
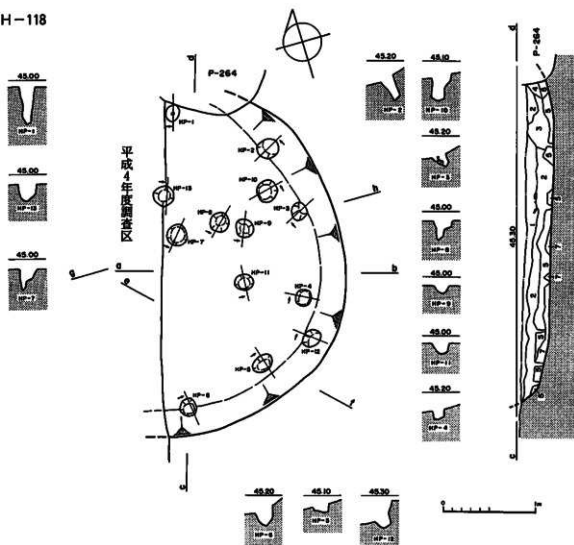
確認・調査・土層：包含層調査中にP.D.3は認められなかったが、平成4・5年度調査区断面の観察から、周辺に遺構が存在することが予想されたため、東西、南北に土層観察用ベルトを残し調査を行った。前回調査区に切られる形で、半円形の黒色土の落ちこみを確認した。調査区断面で竪穴南北の壁の立上りを確認し、プランとクロスチェックしながら、順次掘り下げた。覆土は五層に分層された。覆土1層を除去すると、Ⅰ群D1類の遺物が多く出土した。覆土2・3層を除去するとほぼ平坦になった。断面より覆土4層の下面を床面と想定して掘り下げた。炭化物・焼土は検出されなかったが、ここが最終的な生活面であったと考えられる。

床面：床面はV層にまでは掘りこまれていない。概ね平坦だが踏み固めは目立たない。

壁：斜めに立上り、かなり崩壊している。

炉跡：確認されなかった。

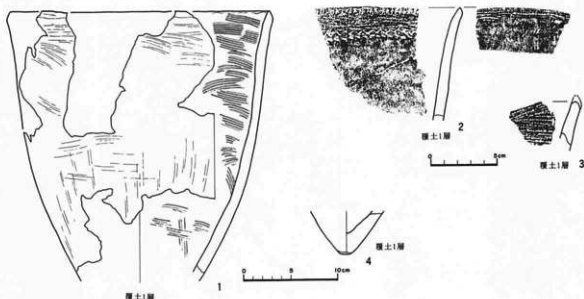
H-118



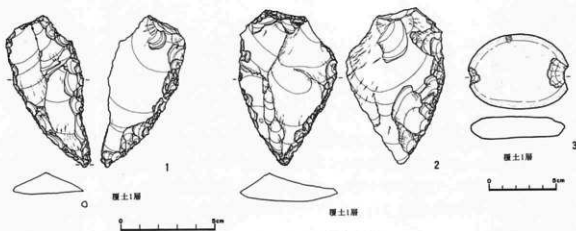
H-118の土層

1. 灰褐色土（粒子粗い）
2. 暗褐色土（硬質）
3. 暗灰黄色土
4. 灰黄色粘質土
5. 暗黄褐色粘質土（硬質）
6. 暗黄褐色粘質土
7. 暗黄色土（粒子粗い、硬質）
8. 黄灰色粘質土（硬質、粘性弱）

図Ⅲ-27 H-118実測図



図III-28 H-118出土土器



図III-29 H-118出土石器

**付属ビット：**柱穴状の小ビットは13カ所で確認された。壁際にあるHP-2・3・6・12はいずれも径10cm余りで、中心に向い内傾する。中央部周辺ではHP-13が明瞭な握り方を持つ。風倒木痕など自然の攪乱かと思われるものは削除した。堅穴外の柱穴は確認できていない。

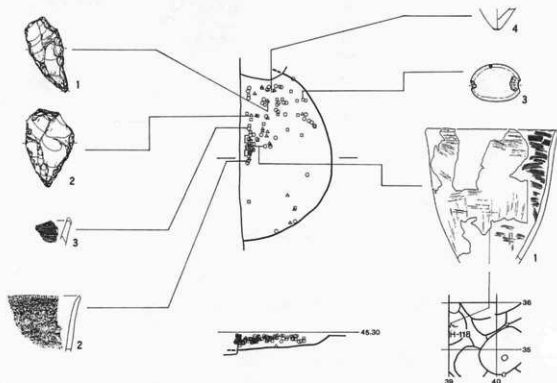
**遺物出土状況：**遺物総数は146点。88点出土した土器の多くがI群D1類で77点を占め、E類11点が検出された。石器等は58点出土、うち剥片石器群は24点を占める。礫石器群は34点を占める。

**重複関係：**H-551より新しく、P-264より古い。

**時期：**堅穴の形状および、遺物出土状況からI群D1類期、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

**土器：**1はI群D1類の無文土器である。口唇部は外傾し、外傾する面を持つ、外面は丁寧にナデ調整される。口縁部周辺のみ横位の条痕が施される。内面は上半部が横位の貝殻条痕で調整され下半部はナデ調整されている。焼成が良好で硬質である。2・3はI群D1類の口縁部片である。2は平縁で口縁部は僅かに外反する。外傾する口唇部に押引文が施される。口縁部文様帯は下部を刺突と鋸歯状沈線と区画し、内部を横位の貝殻腹縁刺突で充填する。口縁部内面には貝殻押引文が施される。押引文の下部に施文時の爪痕が押引の単位ごとに残る。爪痕は磨滅しているものもあり文様を意識して施文されたものではなく、施文時に偶然に人体の一部の痕跡が残ったと考えられる。内外面はナデ調

H-118



図Ⅲ-30 H-118出土遺物分布・接合図

整。3は波状口縁部の波頂部破片で、口唇部は外傾し貝殻腹縁文が並行に施される。櫛歯状に加工された貝殻腹縁に施文されている。波頂部からは刺突文が垂下している。内面はナデ調整。4は尖底部である。突起部は破損してはいるが小型化して目立たなくなり砲弾形の尖底に近い。

石器類：1は石錐で硬質頁岩製。2はスクレイパーで硬質頁岩製。3は石錘で閃緑岩製。いずれも覆土1層出土である。

(富永 勝也)

H-156 (図Ⅲ-31~34, 図版7・95・121・160)

位置：40-36・37 ほぼ東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模：——/——×——/——×(0.42)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：40-36・37付近ではⅢ層が東から西へ傾斜する形で比較厚く堆積する。P.D.3は認められなかった。包含層調査中に遺物が多く散在し、H-451の壁面から周辺に遺構が存在することが予想されたため、東西、南北に土層観察用ベルトを残し遺構検出に勤めⅢ層を除去後、ほぼⅣ層上面で、平成4・5年度調査区とH-451に切り取られた半円形の黒色土の落ちこみを確認した。前回調査区に切り取られた断面で、壁穴の北壁の立上りを、H-451の北壁から東壁の立上りを確認した。覆土は四層に分層され、プランとクロスチェックしながら、順次掘り下げて調査を行った。覆土3層を除去すると、I群D1類が出土した。4層を除去するとほぼ平坦となった。遺物の出土状況からこの面を床面と想定した。ここが最終的な生活面であったと考えられる。

床面：床面はⅤ層まで掘りこまれている。概ね平坦だが踏み固めは目立たない。

壁：斜めに立上り、かなり崩壊している。

炉跡：確認されなかった。

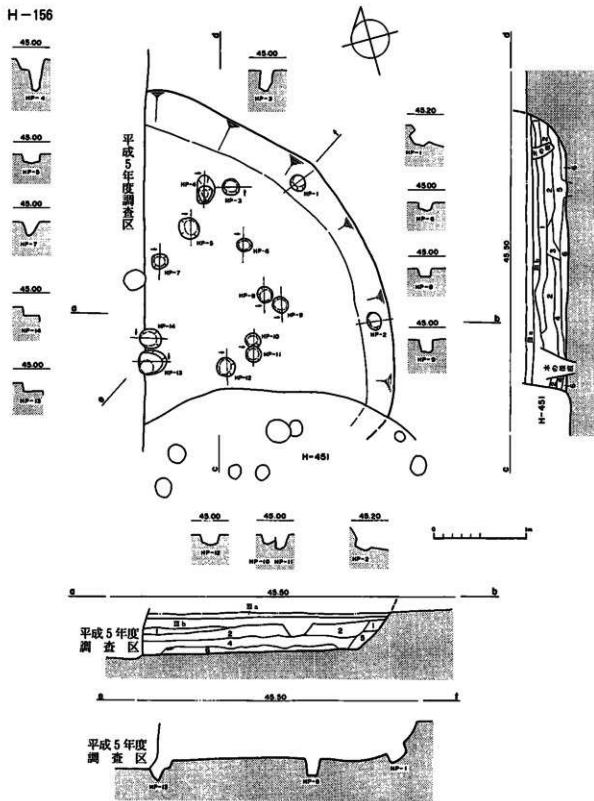
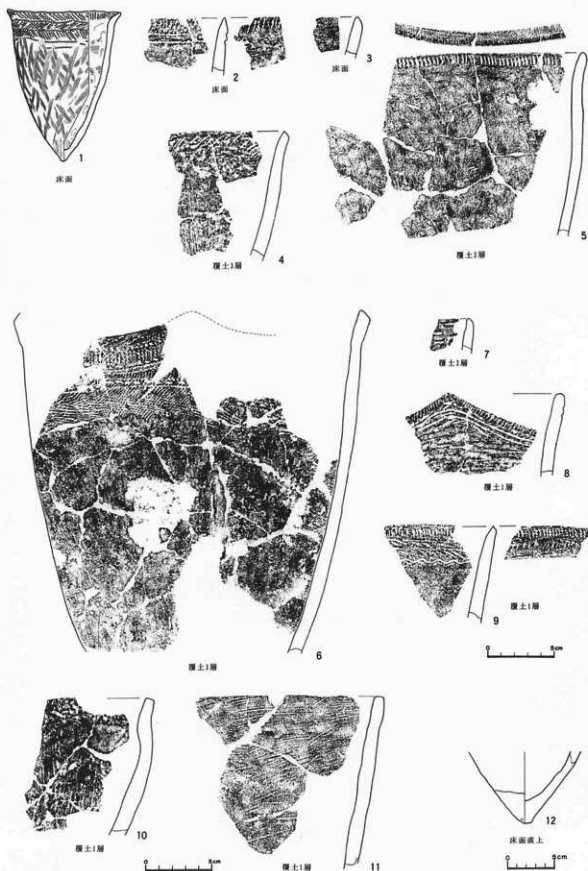
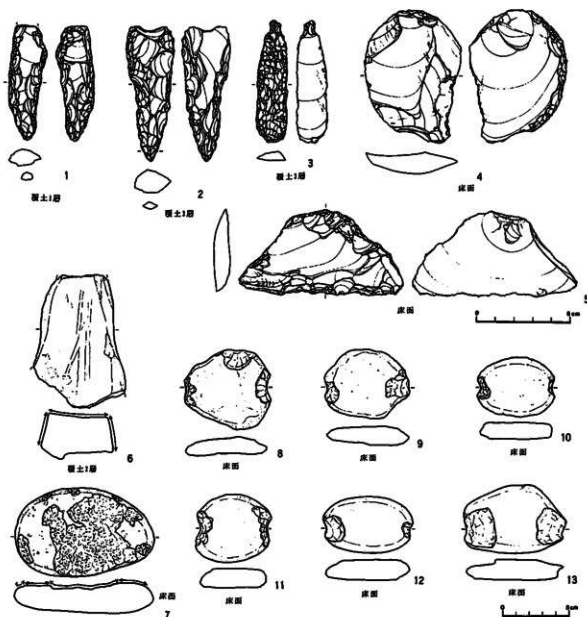


图 III-31 H-156 实测图



図Ⅲ-32 H-156出土土器





図Ⅲ-33 H-156出土石器

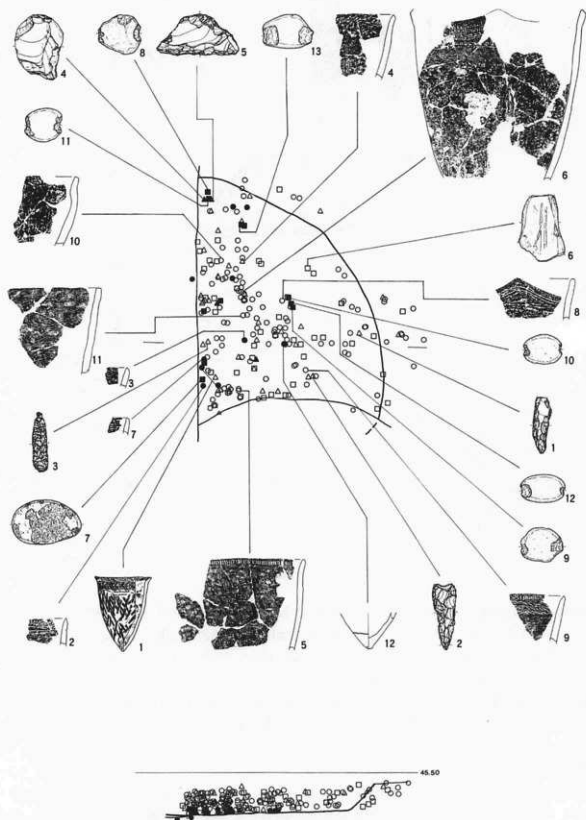
付属ビット：柱穴状の小ビットは14カ所で確認された。壁際にあるHP-1・2はいずれも径10cm余りで、中心に向い内傾している。床面中央部周辺ではHP-14が掘り方を持つと考えられるが、平成5年度調査区に切り取られた崩落状態であった。風倒木痕など自然の攪乱かと思われるものは削除した。壁穴外の柱穴は確認できていない。

遺物出土状況：遺物総数は514点。381点出土した土器の多くがI群D1類でD類は377点を占める。D2類は1点、E類が3点、I群D類の土器片断が18点検出された。石器等は115点出土。うち剥片石器群は52点を占める。礫石器群は63点を占める。

重複関係：H-74、H-451より古く、H-540より新しい。

時期：壁穴の形状および、遺物出土状況からI群D1前期、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。  
土器：1はI群D1類で床面出土。乳房状尖底だが突起は目立たない。口縁部は上外方に外反し、口縁部の内面に貝殻腹縁文が施される。文様は横環する横位の貝殻腹縁を中心軸に、腹縁文を羽状の構

H-156



図Ⅲ-34 H-156出土遺物分布図

成に配する。胴部には貝殻腹縁の一部を利用した条痕による斜格子目状の文様が底部まで施される。内面はナデ調整後一部に貝殻条痕。2～11はⅠ群D1類。2は口縁部内面に貝殻腹縁刺突の連続移動文が斜位に施される。外面には縦位に連続移動文。口縁部に遡る2条の沈線中にも腹縁刺突が施される。3は無文で口唇部が外傾する。4は口縁部がやや外反する。5は口唇部外面のみ貝殻腹縁刺突の連続移動文が施される。6は波状を呈し、口唇部の外傾する面には貝殻腹縁が施文される。7はⅠ群D2類の口縁部破片である。8は波状を呈し、口唇部外面に連続移動文が施される。9は口唇部両側に貝殻腹縁刺突の連続移動文が施される。10は粗製の無文土器である。11は条痕文が施される。12は尖底部である。

石器類：1・2は石錐で周辺加工により整形される硬質頁岩製。3は石匙で片面加工による硬質頁岩製。4・5はスクレイパーで硬質頁岩製。6は砥石で3面を砥面を使用する凝灰岩製。7はたたき石で閃緑岩製。敲打により平坦面となる。8～13は石錐。8・10・11・12は閃緑岩製、9は安山岩製。  
(富永 勝也)

#### H-402 (図Ⅲ-35～39, 図版8・9・122・160)

位置：39-31・32 北から南へ若干傾斜する標高44.65m～44.95mの緩斜面に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：大半が平成4年度調査区内にあり、不明。深さ：(0.42)m

確認・調査・土層：39-31・32の包含層調査中、Ⅲb層中でⅢb>Ⅴが半円状に確認された。このためほぼ中央部に東西の土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げる。その結果Ⅳ層直上付近で三角形の暗茶褐色土の落ち込みを検出した。またこの検出面で大きな土器片が水平の状態で出土した。遺物を取り上げつつ暗茶褐色土を掘り下げ、Ⅴ層中で黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立上りなども検出した。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は軽石の混入する茶褐色系の混合土で、ほぼ一層である。ただ上層はやや黒っぽい。

重複関係：平成4年度調査区分の遺構との新旧関係は不明であるが、本年度分については他遺構と重複していない。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：Ⅴ層を深く掘り込んで構築されており、ほぼ平坦で、堅い。

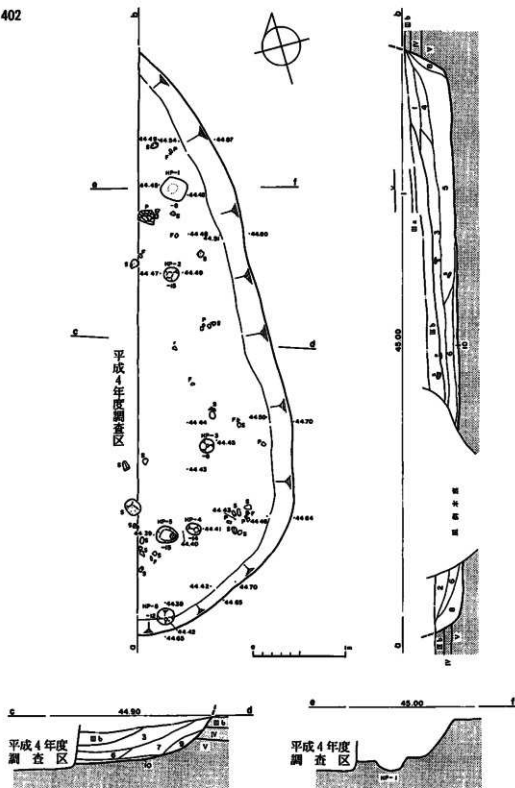
壁：立上りは全体に急傾斜であるが、南壁はゆるやかである。検出面からの壁高は、北～東壁は20cm～40cm、南壁は17cm～25cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは6個検出されている。HP-6は壁際にあるが、他は壁から30cm～80cmほど内側にあり、直立している。HP-6は杭状である。HP-1は一辺約20cmの方形で、中心部に径約13cmの円形状の落ち込みが検出された。半截したところ深さ約8cmで直立していることから考え、柱跡と思われる。柱跡の覆土は暗黄褐色土、掘り方の覆土は暗褐色砂質土である。

遺物出土状況：出土遺物総数は522点である。この内訳は土器303点、石器等219点である。床面からは剥片、礫が各1点ずつ、床面直上からはⅠ群D1類土器9点、両面調整石器、石錐などが25点出土している。遺物は覆土上層で多く出土しており、土器の大型破片が水平の状態でまとまって出土した。土器はⅠ群D1類土器297点のほか、覆土上層でⅠ群に属する土器片が5点出土している。石器では石錐、両面調整石器、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、台石、石錐(34点)などが出土している。

H-402



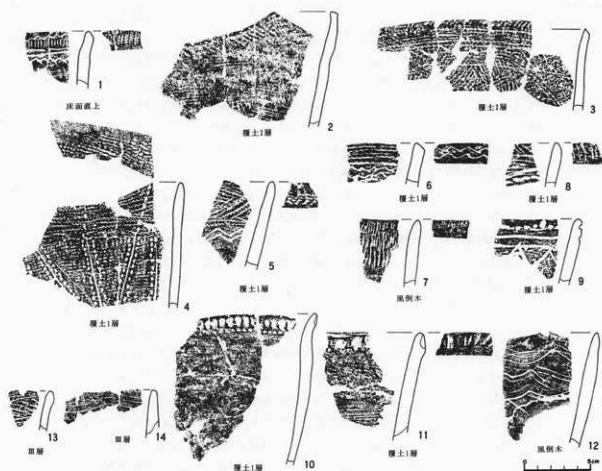
H-402の土層

1. 重b>黄色土（やや軟質） 2. 暗褐色土 3. 暗茶褐色土（軽石少量混入。覆土1）
4. 暗黄褐色土（かたい、微小の軽石少量混入）
5. 暗茶褐色土（かたい、4より黄色土、軽石が多い） 6. 茶褐色土（軽石少量混入。覆土2）
7. 黄茶色土（軟質） 8. 5<V（かたい、砂質） 9. 暗黄色土 10. V+6（覆土3）

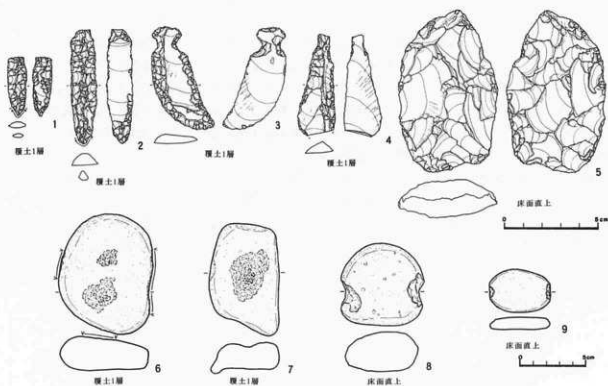
図Ⅲ-35 H-402実測図

土器：1は床面、2・3は覆土2層、4～6・8～11は覆土1層、7・12は風倒木痕、13・14は覆土上Ⅲ層出土の土器である。1～13はI群D1類土器、14はI群E類土器である。1は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には鋸歯状沈線文、口唇部外面には連続腹縁文、内面には連続押引文が施文される。口縁部外面には2条の貝殻腹縁圧痕文と鋸歯状沈線文が施文される。胴部外面には貝殻条痕文が加えられる。2は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には連続腹縁文が施文される。内面はナデ調整、外面にはすり消し条痕文が見られる。3は平縁の口縁部破片で、口縁部はやや外反し、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には5条の貝殻腹縁圧痕文が施文される。外面には連続押引文、内面にはすり消し条痕文が見られる。4は波状の口縁部破片で、口唇部はやや鋭角的に仕上っている。口縁部内面には連続押引文、外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂から刺突が垂下する。外面には連続押引文上に縦方向の沈線とその両脇に刺突文が加えられている。この土器片は平成4年度H-34出土の土器片（北埋調報97 図IV-58-6）と同一個体である。5は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文、内面には引摺り背圧痕が施文されている。焼成良好で堅い。6は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、下端と内面には鋸歯状沈線文が施文されている。7は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部内外面、口縁部外面には無筋肋の貝殻による連続腹縁文が施文される。口唇部にはミガキ痕が見られる。胎土には砂粒が含み、器表面はザラザラしている。8は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には連続押引文、口縁部外面には櫛歯状腹縁文、刺突文が施文されている。焼成良好で堅い。胎土には微細な角閃石、長石などが含有する。9は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には刺突文、2条の沈線、鋸歯状沈線文が施文され、内面は丁寧なナデ調整が加えられている。10は小波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。胴部は内湾気味で、口縁部は屈曲し、外反する。口縁部外面にはへう状工具による粘土のつまみ上げがなされ、その下に刺突文、貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面には貝殻条痕文が加えられている。器厚は薄く、つくりは粗雑である。11は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続腹縁文が施文され、外面にはへう状工具による粘土のつまみあげがなされている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。器厚は厚く、器表面がザラザラしている。12は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には鋸歯状沈線文が描かれ、内面には貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。胎土には砂粒を含み、脆弱である。13は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には沈線が見られる。14は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には沈線文が施文されている。

石器：1は6類の石錐。石鏃（1b類）の転用品と思われる。2は4類の石錐。石匙の転用品。3・4は2b類の石匙。5は床面直上出土の両面調整石器で、1類に属するものである。6・7はたたき石。6は閃緑岩製で、両側縁部と平坦面に使用痕が見られる。7は凝灰岩製で、斑状の使用痕が1カ所に集中したため、くぼみになっている。8・9は床面直上出土の石錐で、8は凝灰岩製、9は閃緑岩製のものである。（和泉田 毅）

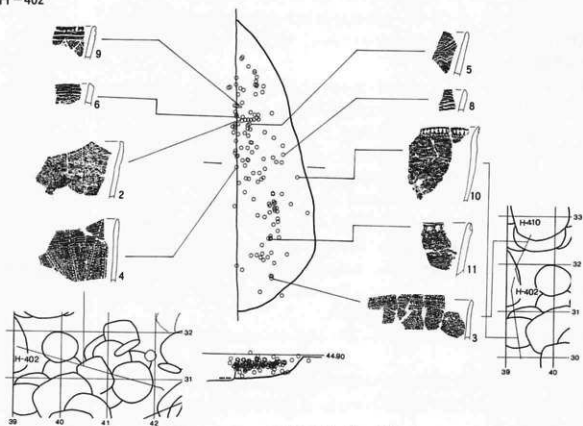


図Ⅲ-36 H-402出土土器



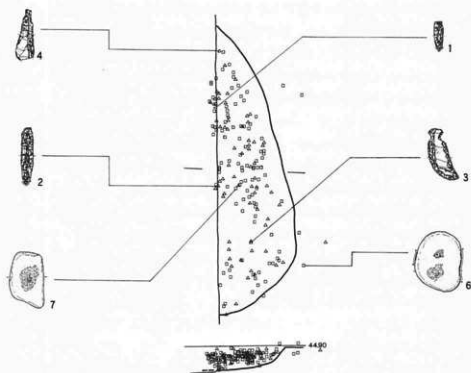
図Ⅲ-37 H-402出土石器

H-402



図Ⅲ-38 H-402出土土器分布・接合図

H-402



図Ⅲ-39 H-402出土石器分布図

H-405（図Ⅲ-40～48，図版9・10・65・95・96・123・124・161）

位置：41-33・34，42-33・34 標高45.40m付近の平坦地に位置している。

規模：5.40m/4.85m×4.16m/3.64m×0.46m 床面積：15.85㎡ 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-15°-W

確認・調査・土層：41-33・34，42-33・34のⅠ層を除去し、P.D.3とⅢa層の広がりを確認する。遺構が予想されたため東西、南北に土層観察用の土手を設定し、P.D.3、Ⅲa層、Ⅲb層を順次掘り下げ、調査を行う。Ⅲb層中で暗茶褐色土の落ち込みを検出し、遺物も多く出土した。遺物を取り上げつつ覆土を掘り下げ、やや堅い黄色土の直上付近で焼土が検出されたためこの面を床面とし、壁の立ち上がりや柱穴状小ピットの検出作業を行った。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は軽石が混入する全体に汚れた混合土であるが、遺物の出土状況などから二層に分けることができる。覆土Ⅰ層は微小の軽石を含む混合土の暗茶褐色土である。覆土Ⅱ層はⅠ層同様軽石を混入し、Ⅰ層より黄色土が多くまじる暗茶灰色土である。覆土Ⅱ層の下、床直上には汚れた暗黄褐色土が薄く見られた。覆土Ⅱ層上面付近で、内面を上にし、ほぼ水平の状態で土器が一括出土しており、覆土Ⅱ層上面は一時期生活面として利用されていたものと思われる。また覆土Ⅱ層下で焼土が検出されていることから、この面が本住居跡の最終生活面と考えられる。

重複関係：本住居跡は、T-163、H-467・470・473・474・484・506と重複しており、T-163より古い他より新しい。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：V層を深く掘り込んで構築されている。中央部南側がやや高くなり、全体に凹凸があり、やや堅い。

壁：立ち上がりは急傾斜である。四周の壁はすべて他遺構の覆土である。検出面からの壁高は、北壁が34cm～45cm、西壁が16cm～29cm、南壁が19cm～37cm、東壁が35cm～43cmである。

炉跡：床面の南西側で0.25m×0.20mの広がりをもつ焼土が検出された。地床炉である。西側はHP-16に切られているため全体は不明であり、掘り込みも見られない。ただこの周辺、とくに西側が若干くぼんでおり、本来浅い掘り込みをもつ炉跡であったことも考えられる。またHP-16の墳底で焼土が出土していることから、このHPは炉使用時から余り時間がたたない時に掘られたものと思われる。付属ピット：柱穴状小ピットは26個検出されたが、本住居跡に伴うものは15個ある。HP-1～13は壁際をめぐるもので、直立している。HP-12～15は西側に寄っているが、主柱穴と思われる。4本柱が想定される。またH-470床面で1.0m×0.5m、深さ0.10mほどの落ち込みが検出された。本住居跡の北東コーナーに位置することや、覆土が本住居跡のⅠ層、Ⅱ層と同じものであることなどから考えると、本住居跡の段状の張り出し部分ではないかと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は1,905点である。この内訳は土器1,283点、石器等622点である。床面、床面直上、HPからⅠ群D1類土器が18点、石錐、両面調整石器、石匙、スクレイパー、すり石、砥石、石錐などが45点出土している。遺物は覆土Ⅰ・Ⅱ層とくに覆土Ⅰ層で多く出土している。覆土Ⅱ層上面付近では内面を上にし、水平の状態で一括土器が4か所で出土している。Ⅰ群D1類土器が約92%を占め、他に覆土中からⅠ群B・D2・E類土器も出土している。石器では石鏃、石槍、石錐、両面調整石器、石匙、筒状石器、スクレイパー（19点）、たたき石（11点）、すり石（11点）、石皿、台石（26点）、石鏟（99点）などが出土している。

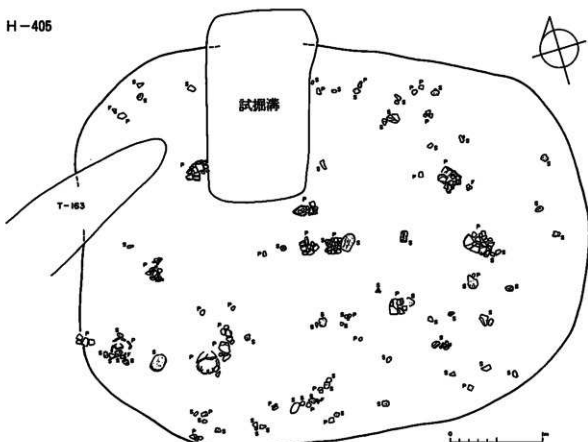
土器：11は床面、12は壁、1～3・13～20は覆土Ⅱ層、5～10・21～36・49・50は覆土Ⅰ層、37～48は覆土Ⅲ層からそれぞれ出土したものである。このうち20・34・42はⅠ群D2類土器、9・10・43





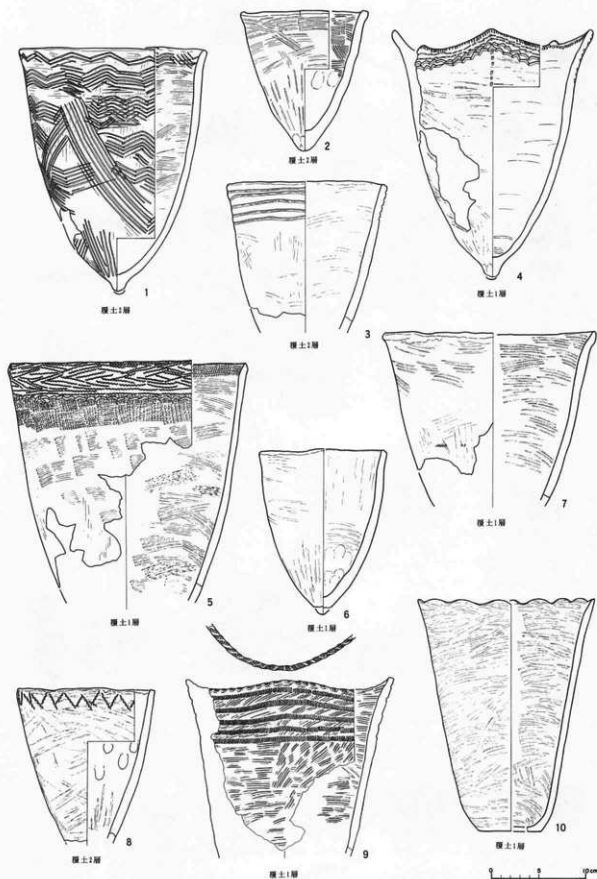
～47はⅠ群E類土器で、他はすべてⅠ群DⅠ類土器である。1は覆土1・2層、H-470覆土2層、T-163覆土出土の土器片と接合した一括出土土器で、一部欠失するが、ほぼ全体が復元できた個体である。口径20.0cm、器高約26.8cm。胴部下位にわずかにふくらみをもち、口縁部がやや外反する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。乳房状尖底土器である。ほぼ器表面全体に文様が施されている。外面には櫛目状工具により鋸歯状沈線文が施文され、口縁部内面にも同じ施文工具により鋸歯状沈線文が施文されている。胴部内面には横方向に貝殻条痕文を加えている。胎土は微細な長石、石英粒が多く含有する。2は口径12.6cm、器高14.8cmの小型の土器である。平縁で、口唇部は角形に仕上げており、底部は明瞭な乳房状ではないが、それに近い尖底土器である。器厚は9mm前後の厚手土器であるが、全体につくりは粗雑である。無文土器で内外面には粗い貝殻条痕文が加えられている。内面には指頭圧痕が残されている。3は覆土2層で一括出土した土器である。口径16.9cm。胴部は直線的に外傾し、口唇部断面形が切り出し状の平縁である。口縁部付近の外面には沈線文が施文され、他の内外面にはナデ調整が加えられている。胎土には小石、砂粒などが多量に含有し、脆弱である。4は覆土1層で一括出土した土器である。口径26.1cm、器高26.2cm。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁である。胴部中位がわずかにふくらみ、口縁部は外反する。口唇部断面形は切り出し状である。乳房状尖底土器。口唇部には櫛歯状連続腹縁文、口唇内面には口縁に沿って浅い刺突文、口縁部外面には2条の押引文と鋸歯状沈線文が施文され、波頂から刺突が垂下する。内外面には貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。5は壁・覆土1・2層、H-467覆土1・2層、T-163覆土上層、41-33Ⅲ層からそれぞれ出土した土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径25.2cm。胴部中位がややふくらみ、口唇端部を鋭角的に仕上げている。口唇部内面には連続押引文、口縁部外面に

H-405

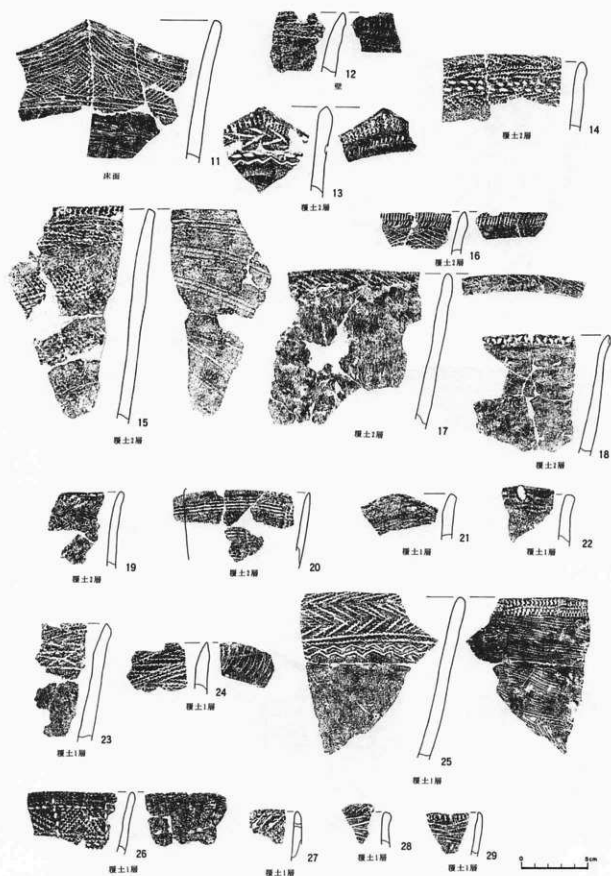


図Ⅲ-41 H-405覆土2層上面遺物出土状況実測図

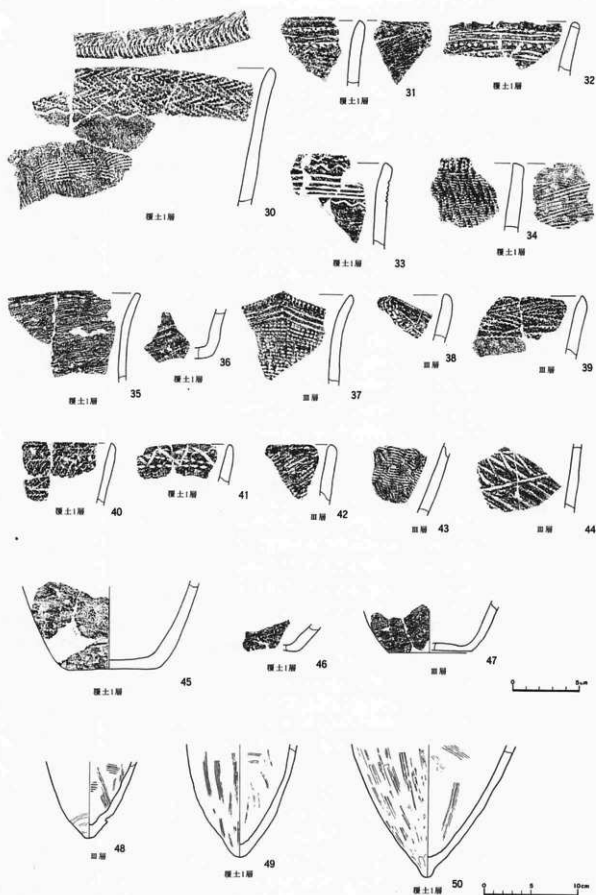
は菱形状の貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文、連続押引文が施文される。胴部内外面には丁寧な貝殻条痕文が加えられてる。焼成良好で堅緻。6は覆土1層で一括出土した土器で、一部欠失しているがほぼ全体が復元できた個体である。口径13.5cm、器高約17cm。平縁で、乳房状尖底土器である。胴部中位がわずかにふくらみ、口頸部外面は強いナデ調整でやや屈曲している。口唇部断面形は切り出し状で、無文土器である。胴部外面にはケズリ痕も見られるが、全体にナデ調整が加えられ、底部内面には指頭圧痕が残るなど、凹凸がはげしく、つくりは粗雑である。7は覆土1層で一括出土した土器である。口径22.8cm。底部は欠失する。口縁部は肥厚し、口唇部は丸く仕上げている。平縁の無文土器である。全体にナデ調整が加えられている。8は覆土1層で一括出土した土器で、ほぼ全体が復元できた個体であるが、底部は欠失している。口径14.6cm。胴部は内湾気味に外反し、口唇部は角形に仕上げている。平縁。外面には粗い貝殻条痕文が不規則に加えられ、口縁部外面には鋸歯状に貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内面には指頭圧痕が残っているが全体的に丁寧なナデ調整が加えられている。9は覆土1層、H-453・454・457・486の覆土上Ⅲ層、40-34Ⅲ層、40-38Ⅲ層、42-37Ⅲ層からそれぞれ出土した土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径22.0cm。胴部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。口唇部は丸く仕上げている。4つの波頂をもつ小波状口縁で、上面観は丸味をもつ方形状である。内外面には貝殻条痕文が加えられ、口唇部、口縁部から胴部にかけては銘条体圧痕文が施文されている。焼成良好で堅緻。内外面色調は明黄褐色である。10は覆土1層、H-467・T-163の覆土上層、41-33Ⅲ層からそれぞれ出土した土器片が接合したもので、口径18.6cm、器高24.7cmの平底土器である。口縁部は若干外反する。口唇部は鋭角的に仕上げている。小波状口縁の無文土器である。内外面ともに貝殻条痕文が加えられ、焼成良好で堅緻である。11は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられる。口唇部は丁寧なナデ調整。外面にはミガキ痕が見られる。12は口唇部断面形が切り出し状の口縁部破片。外面には横位の貝殻腹縁圧痕文が、内面には連続腹縁文が施文される。13は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には縦位の連続腹縁文、口縁部外面には羽状の貝殻腹縁圧痕文、刺突文、鋸歯状沈線文が施文される。焼成良好で堅い。14はH-473覆土1層出土の土器片と接合したものである。平縁。口唇部が肥厚し、丸く仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には2条の刺突文の上下に貝殻腹縁圧痕文が施文されている。胎上には砂粒を含み、脆弱である。15は平縁の口縁・胴部破片である。胴部は直線的に外傾し、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、外面には粗雑な連続押引文が施文され、内面にはすり消し条痕文が見られる。16は平縁の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇内外面には連続腹縁文、口縁部外面には櫛歯状腹縁文が施文されている。胎上には砂粒を含み、やや脆弱である。17は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面には無筋肋の貝殻による連続腹縁文が施され、胴部外面には縦方向のミガキ痕が見られる。18は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面にはヘラ状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面ともヨコナデ調整が加えられている。19は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。器厚は薄く、脆弱。20は薄手の小型土器の口縁部破片で、平縁である。口唇部は鋭角的に仕上げている。内外面ともに貝殻条痕文が加えられている。21は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は角形に仕上げている。内外面はナデ調整。口唇端部にはミガキ痕が見られる。22は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には貝殻条痕文が見られる。11唇端部には巾6mmほどの丸い紐状の圧痕が残されている。23は口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇端部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文



図Ⅲ-42 H-405出土土器 (1)

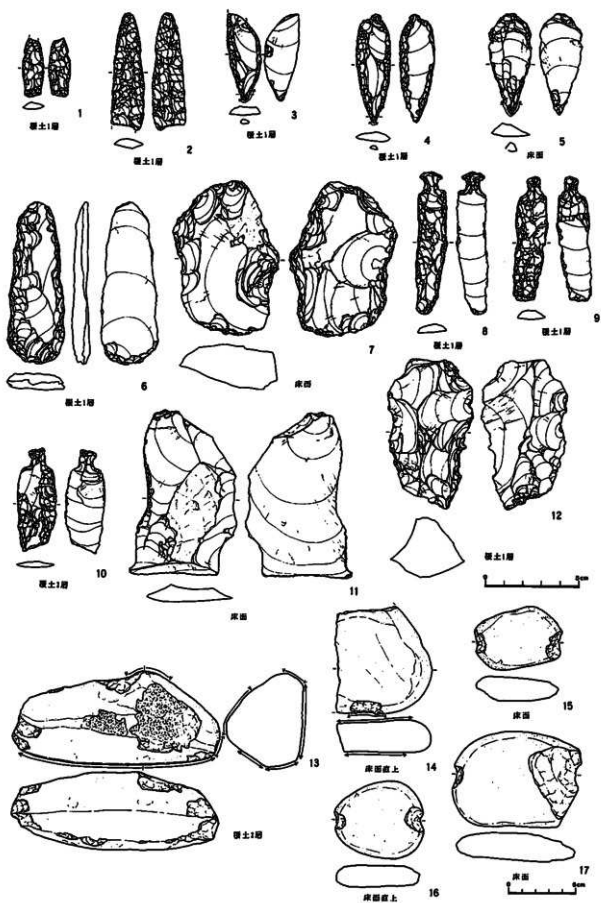


図Ⅲ-43 H-405出土土器(2)



図Ⅲ-44 H-405出土土器 (3)

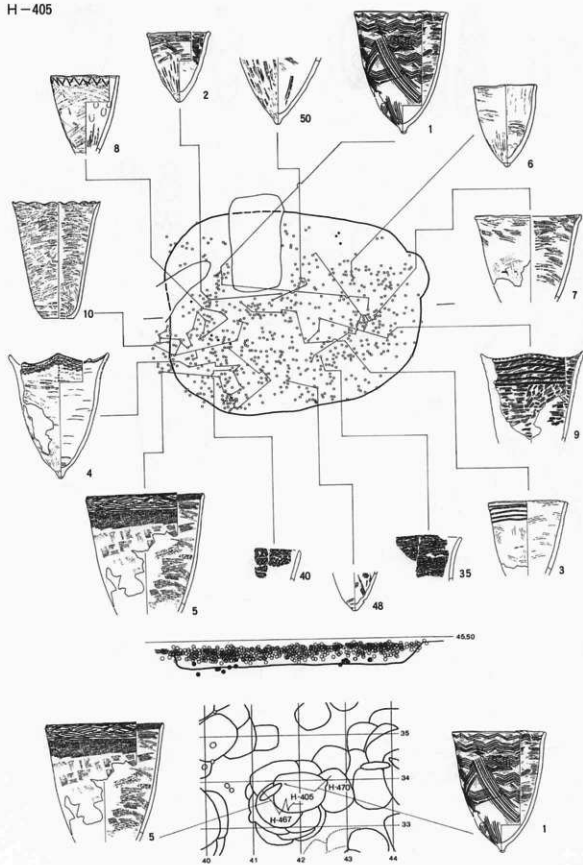
が施文され、内外面にはナデ調整が加えられている。胎土には小石、微細な角閃石、長石、石英粒を多量に含有する。24は口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続波状文が施文されている。25はH-467覆土2層出土の土器片と接合した平縁の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面、口縁部外面は貝殻腹縁圧痕文を羽状、横位に施文し、下端には2条の鋸歯状沈線文を配している。口縁部内面には連続押引文を施文している。胴部内面には貝殻条痕文、外面にはナデ調整が加えられている。26は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が横位、鋸歯状に施文され、その上から縦・横位に刺突文を加えている。口縁部内面には背圧痕、胴部内面にはすり消し条痕が見られる。胎土には長石、石英などが混入し、脆弱である。27は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には斜位の櫛歯状腹縁文が施文され、径1.5~2.0mmの円孔が1cm間隔で3個見られる。28は口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、外面には沈線文が施文されている。内面は丁寧なナデ調整。焼成良好で堅い。29は器厚の薄い波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には櫛歯状腹縁文が施文される。胎土は緻密である。30は口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には羽状の貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、羽状の先端部には刺突文が加えられている。口唇部内面には連続腹縁文が施文され、胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。31は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には櫛歯状腹縁文、口縁部外面には、1条の沈線の上に刺突を加えた沈線文が施されている。内外面には貝殻条痕文が加えられ、外面にはミガキ痕が見られる。32は小波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口縁部外面には刺突を加えた沈線文、沈線、刺突文が施文されている。33は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には粗い鋸歯状沈線文、口縁部外面には5条の沈線とその上下に鋸歯状沈線文が施文されている。内外面は擦痕状のナデ調整。34は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には連続押引文が施文され、浅く、小さな円形刺突文が1条横走る。内面には貝殻条痕文が加えられる。器厚は厚く、軟質である。35は平縁の口縁部破片で、口唇部は外反する。口唇部は角形に仕上げている。内外面ともにすり消し条痕文が見られる。焼成良好で堅い。外面色調は暗褐色、内面色調は暗褐色である。36は平底の底部破片。胎土には微細な雲母粒が多く含有する。焼成良好で堅緻。外面色調は暗褐色、内面色調は暗褐色である。37は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、連続押引文が施文され、波頂から刺突が垂下する。内面には貝殻条痕文が加えられている。38は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には細く粗雑な鋸歯状沈線文が施文され、波頂から刺突が垂下する。39は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が羽状に施文される。内外面はナデ調整。器表面はザラザラし、もろい。40は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が粗雑に施文されている。胎土には砂粒が多く、脆弱である。41は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には横位の刺突文上に鋸歯状沈線文が施文されている。内面にはすり消し条痕文が見られる。42は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面はすり消し条痕文、内面はナデ調整が加えられている。43は胴部破片で、外面には引摺り背圧痕、内面にはヘラケズリも見られるが、貝殻条痕文が加えられている。胎土には雲母粒が含まれ、焼成良好で堅い。内外面の色調は暗褐色。44は胴部破片。外面には沈線、内面には貝殻条痕文が見られる。器表面はザラザラしている。45は覆土1層、T-163覆土上層出土の土器片が接合した平底の底部破片。内面は貝殻条痕文、外面にはケズリ痕が見られ、堅く、内外面色調は暗褐色で



図Ⅲ-45 H-405出土石器

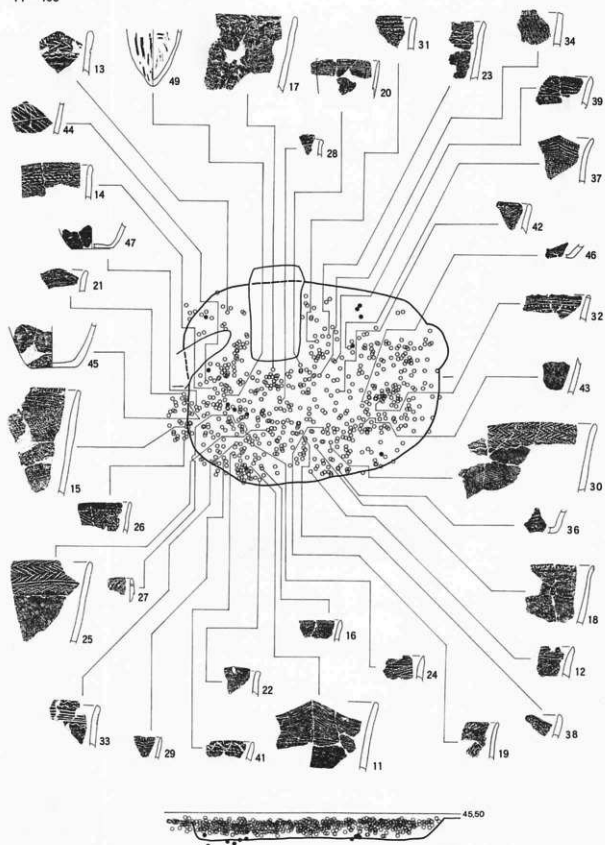


H-405



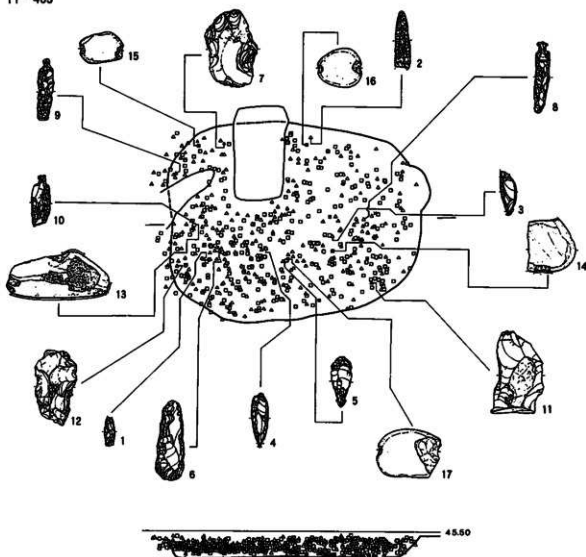
図Ⅲ-46 H-405出土土器分布・接合図

H-405



図Ⅲ-47 H-405出土土器分布図

H-405



図Ⅲ-48 H-405出土石器分布図

ある。46・47は平底の底部破片。内外面色調は暗橙色である。48・49・50は乳房状の尖底部で、50の外面にはケズリ痕が見られる。

石器：1は石鏃。先端部が欠損している。2は1b2類の石槍。3～5は石錐。3は4類、4は周辺加工の6類、5は床面出土で、1類のものである。6は1b類の筒状石器で、腹面は先端部のみ加工している。7は床面出土の両面調整石器である。腹面バルブ部に厚みを取り調整している。1類に属するもの。8～10は石匙。8・9は2a類。10は3類に属するもの。11は床面出土のUフレイク。左側縁にはわずかに使用痕が残っている。12は船形に近い残核を残す硬質岩製の石核である。13は閃緑岩製のすり石で、断面三角形である。14は2面のとき面をもつ凝灰岩製の砥石。15～17は石鏝。15・16は安山岩製、17は閃緑岩製である。

（和泉田 毅）

H-406 (図Ⅲ-49~52, 図版8・9・97・122・162)

位置: 43-33・34, 44-33・34 標高45.47m~45.72mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 6.60m/6.16m×4.55m/4.04m×0.35m 床面積: 22.72㎡ 平面形: 隅丸長方形

長軸方向: N-S

確認・調査・土層: 43-33・34、44-33・34のⅠ層を除去し、P.D.3、Ⅲa層の広がり確認された。遺構が想定されたため、土層観測用の土手を設定、全体に掘り下げる。Ⅲb層中でⅢb>Ⅴの隅丸長方形の落ち込みを検出した。Ⅲb層を除去し、覆土を掘り下げ調査を行う。Ⅴ層中でやや堅い黄色土の面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出する。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は三層に分けられる。覆土1層は軟質のⅢb>Ⅴ、覆土2層は軟質の暗黄褐色土で、軽石が少量混入している。覆土3層は床面直上の土でやや砂質で軽石の混じる暗灰黄色土である。壁際周辺、とくに南側には粘質の暗茶黄色土が堆積していた。木根痕が多く、覆土の堆積状態は不安定である。

重複関係: 本住居跡はT-161・166、H-408・471・481、P-292と重複しており、T-161・166より古く、H-471・481より新しい。ただH-408、P-292との新旧関係は不明である。

時期: Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。北から南へ若干傾斜しているが、ほぼ平坦である。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が31cm~37cm、西壁が20cm~28cm、南壁が21cm~30cm、東壁が25cm~34cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

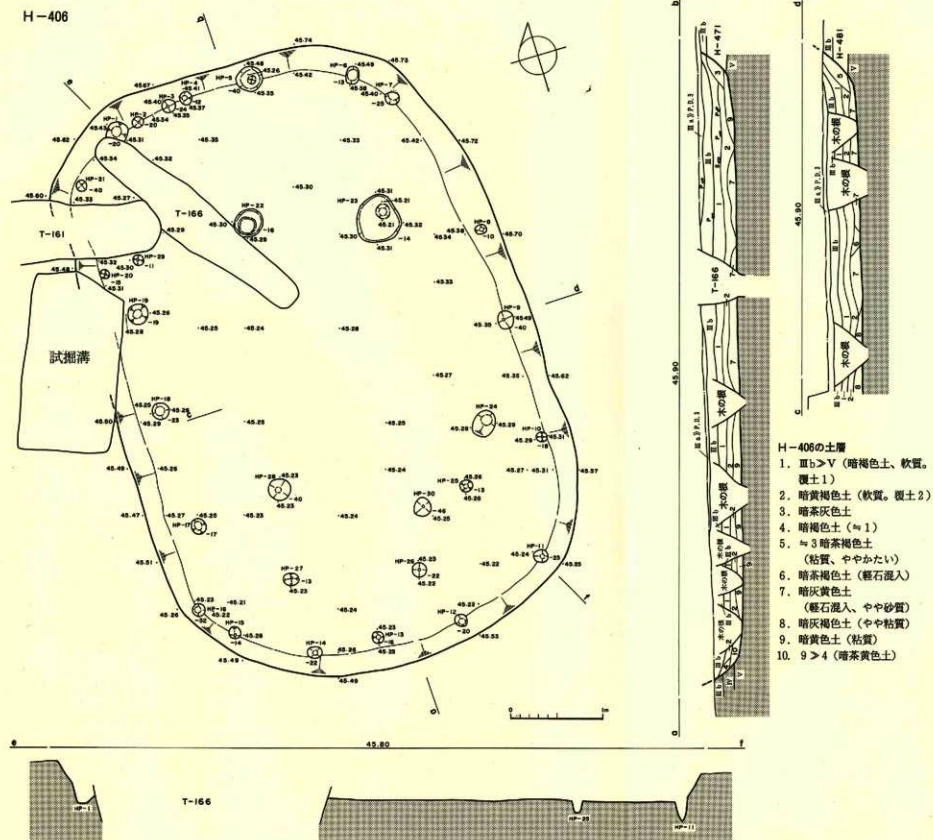
付属ピット: 柱穴状小ピットは30個検出されている。HP-1~21は壁際をめぐるもので、直立している。HP-22~29は直立し、主柱穴と思われる。位置関係などから考えると、HP-22・26(2本柱)、HP-23・24・28(4本柱)、HP-25・27・29(4本柱)というように何度か建て替え、拡張が行われた可能性が考えられる。

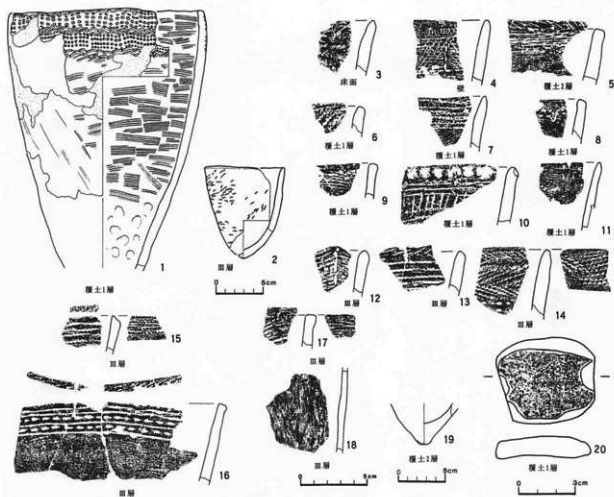
遺物出土状況: 出土遺物総数は468点である。この内訳は土器237点、石器230点である。床面などからはⅠ群D1類土器6点、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。遺物は覆土1層から多く出土しており、まとまった出土状態ではない。土器はⅠ群D1類土器が228点(約96%)と圧倒的に多く、他に覆土1層でⅠ群D2類土器、覆土2層でⅠ群E類土器が出土している。石器では石錐、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘(41点)などが出土している。

土器: 3は床面、4は壁、5・19は覆土2層、1・6~11は覆土1層、2・12~18は覆土上Ⅲ層で出土したものである。20は覆土1層出土の土器片である。17はⅠ群D2類土器、18はⅠ群E類土器で、他(1~16・19~20)はⅠ群D1類土器である。1は覆土1層、覆土上Ⅲ層、44-33Ⅰ・Ⅲ層からそれぞれ出土した土器片が接合したものである。底部は欠失する。口径21.0cm。平縁。胴部は若干内湾気味に外反し、口唇部は角形に仕上げている。口縁部外面には鋸歯状沈線文と4条一単位の横走する刺突文が交互に施文されている。内面には貝殻条痕文が加えられ、外面にはすり消し条痕文が見られる。胎土は緻密であるが、やや軟質である。2は覆土上Ⅲ層と44-33Ⅰ層出土の土器片が接合したミニチュア形の土器である。口径8.6cm、器高8.5cm。平縁で、底部はわずかに乳房状を呈する。口唇部は丸く仕上げている。外面には爪の痕が残っているが、無文で、つくりは粗雑である。胎土には微細な角閃石、長石、石英粒が多く含有する。3は口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。無文で、内面はナデ調整、外面にはミガキ痕が見られる。内面にはスガが付着する。4は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には連続波線文、口縁部外面には貝殻条痕文上に、

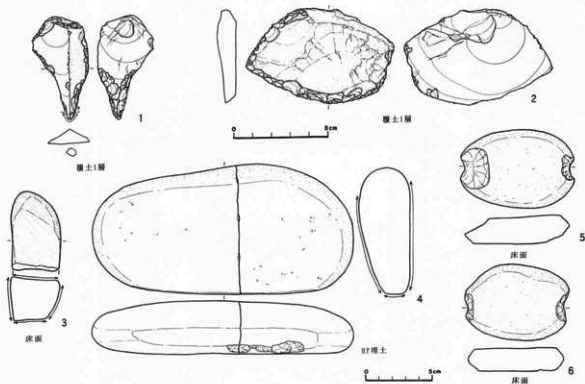
浅く細い鋸歯状沈線文を施文し、垂下する刺突文と横走する刺突文を加えている。器表面はザラザラし、脆弱である。内面にはススが付着している。5は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部には斜位に、口縁部外面には横位にそれぞれ櫛歯状腹縁文が施文されている。内面には貝殻条痕文が加えられている。やや軟質。6は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続押し文が施文される。7は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部内外面には連続押し文が施文される。胴部外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられる。胎土には砂粒を多く含み、脆弱である。8は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には刺突文、内面には貝殻条痕文が見られる。9は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられ、外面には刺突文が見られる。10は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面にはへう状工具による粘土のつまみ上げがなされ、口縁部外面には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。器表面はザラザラしている。11は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。12は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には口縁に沿って貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂から刺突が垂下する。13は小波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面は丁寧なナデ調整。14は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部、口縁部内外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、刺突文も見られる。焼成良好で堅緻。15は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部は連続腹縁文、口縁部内外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胎土は脆弱である。16は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には沈線と刺突文が施文される。内外面にはすり消し条痕文が見られる。17は口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。やや軟質。18は胴部破片で、内面はナデ調整、外面にはミガキ痕が見られる。薄手であるが、焼成良好で堅緻である。19は乳房状の尖底部。20は2カ所に打ち欠き痕のある土器片鏝。

石器：1は1類の石錐。剥片の一部に尖頭部をつくっている。2は1類に属する硬質頁岩製のスクレイパー。3は床面出土の凝灰岩製の砥石で、4面にとぎ面をもつ1類のもの。4はHP-30覆土、覆土1層出土の破片が接合したすり石である。5・6は床面出土の石錐である。(和泉田 毅)



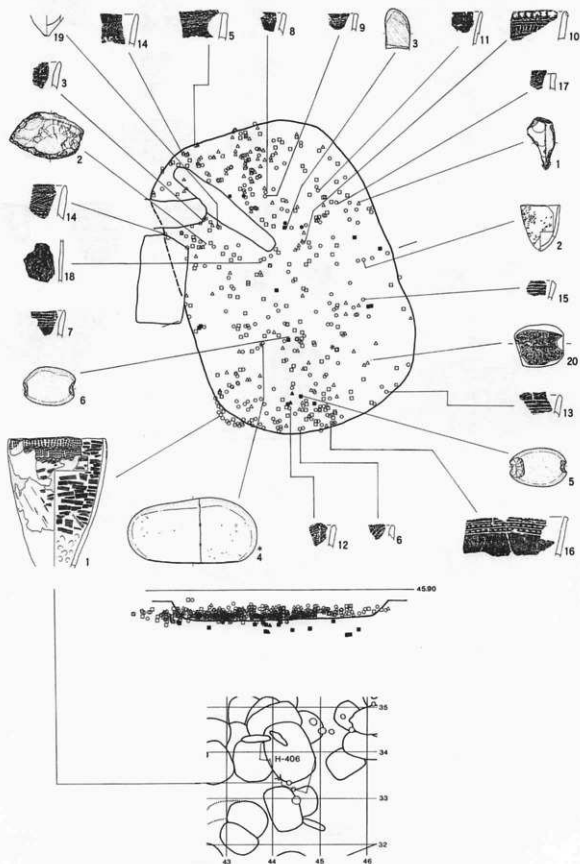


図Ⅲ-50 H-406出土土器



図Ⅲ-51 H-406出土石器

H-406



図Ⅲ-52 H-406出土遺物分布・接合図



H-408 (図Ⅲ-53~61, 図版11・97~99・125・162・163)

位置: 43-33・34, 44-33・34 標高45.17m~45.39mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.50m/4.14m×4.30m/3.86m×0.42m 床面積: 13.85㎡ 平面形: 隅丸方形

長軸方向: N-65°-W

確認・調査・土層: 43-33・34、44-33・34のⅠ層を除去し、P.D.3、黒味のある暗褐色土の広がりを確認した。遺構が予想されたため、東西、南北に土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げる。その結果、Ⅲb層中で暗茶灰色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中でコの字状に非常に堅い暗黄色土が検出され、全体に広げたところ炉跡であることが判明した。この面を床面とし、壁の立ち上がり、柱穴状小ピットの検出作業を行う。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は大きく三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vである。覆土2層は暗茶褐色土の混合土である。覆土3層は暗茶灰色土で、非常に汚れている。この上面は遺物が多く、しかも面的な広がりをもって出土しており、一時期生活の場として利用されていた可能性がある。覆土3層の下=床面直上には、覆土3層と同質であるが、黄色土が多く混入している暗茶黄色土が薄く堆積し、炭化物が多く混入していた。重複関係: 本住居跡はT-161、H-406・471・512と重複しており、T-161より古く、H-471・512より新しい。H-406との新旧関係は明瞭でないが、覆土の堆積状態(H-406の覆土中で本住居跡の覆土と思われる土の落ち込みが見られた)などから考えると、H-406より新しい住居跡の可能性はある。H-470とは相接しているが、これも調査中の状況などから考えるとH-406が新しいものと思われる。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: V層を深く掘り込んで構築されており、平坦で、堅い。

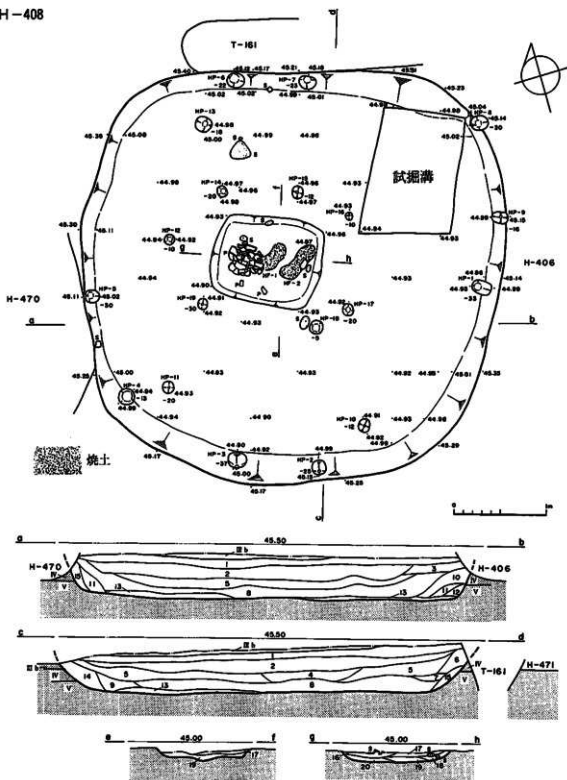
壁: 南壁がややゆるやかであるが、他の立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が33cm~38cm、西壁が19cm~27cm、南壁が25cm前後、東壁が32cm前後である。

炉跡: 床面のほぼ中央部に1.08m×0.90m、深さ約0.12mの長方形の落ち込みが検出されている。この陥底付近で焼土の広がりが見られた。浅い掘り込みのある炉跡である。炉跡の北・東・南側は幅約0.30mほどがコの字状にやや盛り上がり、非常に堅い部分が見られた。炉の周辺に貼ったものかと思われたが、半截して調査した結果、その痕跡は認められなかった。踏みかためられた結果か、あるいは火熱を受けたために堅くなったものと思われる。また炉跡の四隅近くに杭状の細い小ピットが4個検出されている。炉を利用した何らかの施設が作られていたものと考えられる。

付属ピット: 柱穴状小ピットは19個検出されている。このうちHP-1~9は壁際をめぐるもので、直立している。HP-10・11・13は直立しており、柱穴状で、4本柱が考えられる。またHP-14・16・18・19は炉のコーナー付近にあり、炉に伴う施設物が作られていたのだろう。

遺物出土状況: 出土遺物総数は1,652点である。この内訳は土器1,085点、石器等567点である。床面からはすり石、石皿、石鏃、礫が各1点ずつ出土し、炉跡覆土(覆土4層)からはI群D1類土器が76点、剥片、礫が出土している。遺物は覆土中、とくに覆土2層上面、覆土3層上面で多く出土している。覆土3層上面ではほぼ水平の状態、面的な広がりをもって出土している。また礫石器が多く、西~北壁際の床面直上付近では石器などの礫石器がたまって出土している。さらに炉跡の覆土中で、底部を上にし、押つぶされた状態でI群D1類土器が出土し、この中にはすり石が混入していた。出土した土器は、覆土1・3層でI群D2類土器が5点、覆土2層中でI群G類土器が1点出土しているが、他はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、石錐、両面調整石器、石匙、スクレイパー、たたき石(16点)、すり石(16点)、台石、砥石、石鋸、石鏃(154点)などが出土している。

H-408



## H-408の土層

1. 重b>V (覆土1) 2. 暗茶褐色土 (覆土2) 3. 茶褐色土 (黄色土混入) 4. 暗褐色土>V (かたく、やや黒っぽい) 5. 暗茶灰色土 (炭化物混入。覆土3) 6. 明茶褐色土 (砂質) 7. 6に黄色土がブロック状に混入 8. 暗茶黄色土 (軽石混入。覆土3下層) 9. 暗茶灰色土 (軽石混入) 10. 暗茶褐色土 11. 淡黒褐色土 (Vが混入) 12. 暗灰黄色土 (砂質) 13. 8+V 14. 暗黄褐色土 15. 暗黄灰色土 16. 暗茶褐色土 (かたい) 17. 茶褐色土 (16より黄色土多く混入) 18. 17+黄色土 (焼土混入) 19. 茶褐色土 (軟質。17より軟質、焼土混入) 20. 黒茶色土 (軟質、炭化物、焼土混入)

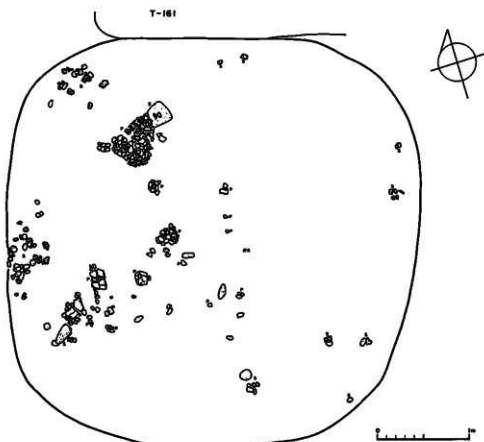
図Ⅲ-53 H-408実測図

土器：1は覆土4層（炉跡内覆土）、2～5・9～19・33・34は覆土3層、6・7・20～26は覆土2層、7・27～32は覆土1層出土で、19・20・32はI群D2類土器、他はI群D1類土器である。1は口径15.8cm、器高16.3cmのほぼ全体を復元できた小型の土器である。胴部中位が丸味をもち、口縁部は直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。小さな乳房状の尖底土器。内外面には貝殻条痕文が加えられている。2は覆土3層で一括出土した土器で、覆土1・2層、43～33 I・Ⅲ層出土の土器片が接合したものである。底部は欠失している。口径24.0cm。口縁部は屈曲し、外反する。4つの波頂部をもち、口唇部断面形は切り出し状である。口唇内外面には貝殻腹縁による連続波状文が施文され、口縁部外面には沈線、刺突を加えた沈線が横環し、波頂から刺突文が垂下する。胴部内外面には丁寧なナデ調整が加えられている。胎土には小石が混入し、胴部外面にはススの付着が認められる。3は覆土3層で一括出土した土器である。口径32.0cm、底部は欠失している。胴部、口縁部はほぼ直線的に外傾する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。口唇内外面には連続腹縁文、口縁部外面には羽状に歯状腹縁文が施文される。胴部外面には一部に貝殻条痕文が見えるが、全体的にナデ調整、内面には不規則で粗い貝殻条痕文が加えられている。4は覆土1・2・3層、43～33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径20.3cm。胴部中位でややふくらみをもち、口唇部はかすかに外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状気味である。内外面とも丁寧なナデ調整が加えられている。口唇端部には幅6mmほどのヒモ状の圧痕が5カ所見られる。焼成良好で堅く、つくりは丁寧で、美しい。5は口径9.9cm、器高約13.0cmの小型の土器である。胴部下位がややふくらみ、口縁部は直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇部には刺突文が施され、口縁部外面には沈線、鋸歯状沈線文、刺突文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられ、口縁部付近は細く、浅い沈線文が施文されている。胎土には小石が混入し、つくりは粗雑である。6は覆土1層で一括出土した土器で、覆土2層出土の土器片と接合している。底部は欠失しているが、口径22.6cm、器高約29.5cmの細長い器形のものと思われる。口縁部は外反する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には横環する沈線と刺突文が施文されている。胴部内外面は、貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。補修孔が見られる。7は覆土1・2層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径14.7cm。胴部下位がわずかにふくらみ、直線的に外傾する。ゆるやかな小波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には縦位の連続腹縁文が施文されている。内外面には粗い貝殻条痕文が加えられている。口唇端部には丸いヒモ状の圧痕が見られる。胎土には微細な長石、石英、角閃石粒が多量に含有し、器表面はザラザラしているが、つくりは丁寧で、器形は美しい。8は覆土1層、44～32 I層出土の土器片が接合したもので、口径16.3cm、器高16.0cmの全体が復元できた個体である。口縁部は外反する。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇部外面、口縁部内面には連続腹縁文、口縁部外面には2条一単位の横位の貝殻腹縁文が3段施文され、波頂下には2条一単位の貝殻腹縁文が縦位に加えられている。胴部外面には背圧痕、内面には丁寧なナデ調整が加えられている。9は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、内外面では歯状腹縁を引きずっている。焼成良好で堅緻。10は口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内外面にはロッキング状に貝殻腹縁文が施文される。口縁部外面には沈線、貝殻腹縁文、鋸歯状沈線文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。11は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面には歯状腹縁文が縦位、斜位、羽状に施文されている。12は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面には無筋の貝殻により腹縁文が施文されている。内面ナデ調整、外面にはミガキ痕が見

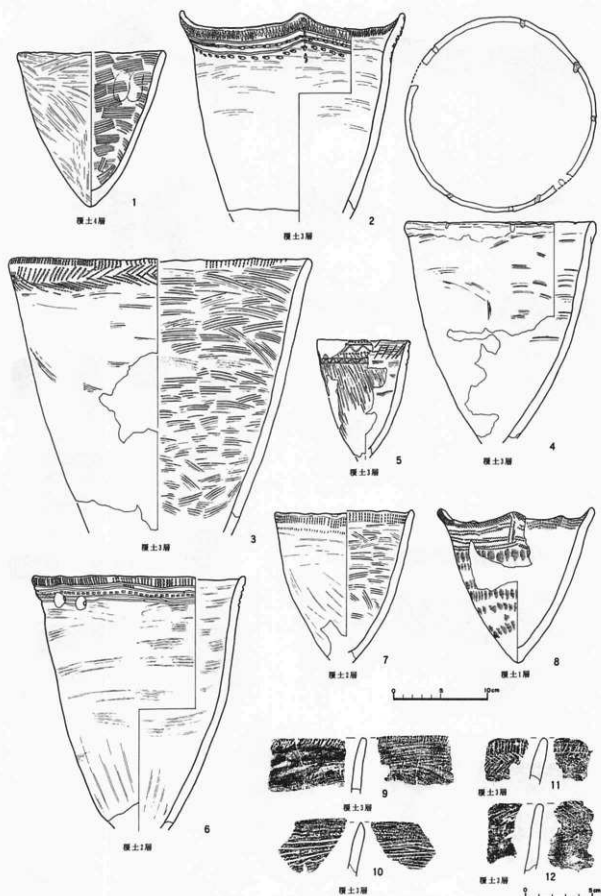
られる。やや軟質。13はH-454覆土1層出土の土器片と接合した。波状口縁で、口縁部断面形は切り出し状である。口縁部外面には口縁に沿って歯状腹縁文が施文され、波頂下には三角形に無文部をつくる。内面にはすり消し条痕文が見られ、外面にはナデ調整が加えられている。円孔が一個見られる。14は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には刺突文、沈線、鋸歯状沈線文が見られる。内面には貝殻条痕文が加えられている。15は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には刺突文、浅い沈線、鋸歯状沈線文が見られる。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。16は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部外面にはヘラ状工具による粘土のつまみ上げがなされる。内外面はナデ調整。胎土には砂粒を含み、脆弱である。17は小突起をもつ口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面にはヘラ状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面はナデ調整。18は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には連続押引文が施文され、内面はナデ調整。19はH-454覆土2層、45-31Ⅲ層、45-33Ⅰ層からそれぞれ出土した土器片と接合した胴部破片である。外面には連続波状文が粗く施文されている。内面には貝殻条痕文が加えられている。堅いが、つくりは粗雑である。20は口縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部内外面には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には鋸歯状沈線文が施文される。胴部内外面はナデ調整。器表面はザラザラしている。21は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻条痕文も見られるが、内外面ともナデ調整が加えられている。つくりは粗雑である。22は波状の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には無筋筋の貝殻による腹縁圧痕文が横走し、胴部外面には縦位の連続腹縁文上に斜位の粗い沈線文が施文されている。内面には貝殻条

H-408

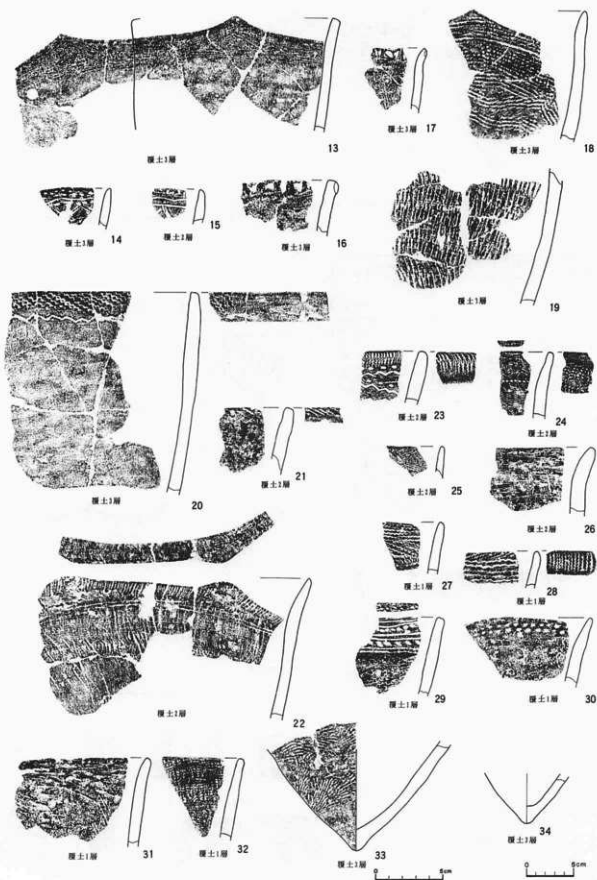
T-161



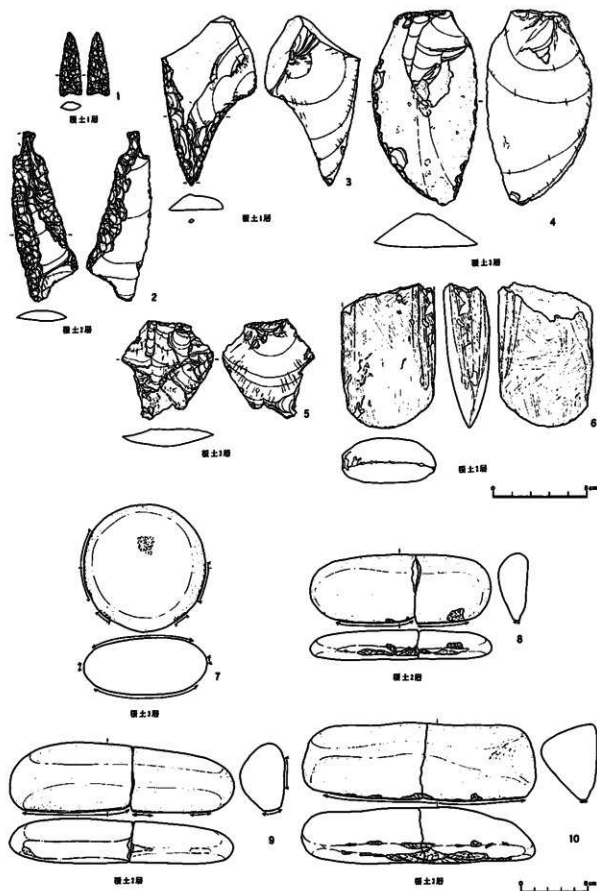
図Ⅲ-54 H-408覆土3層上面遺物出土状況実測図



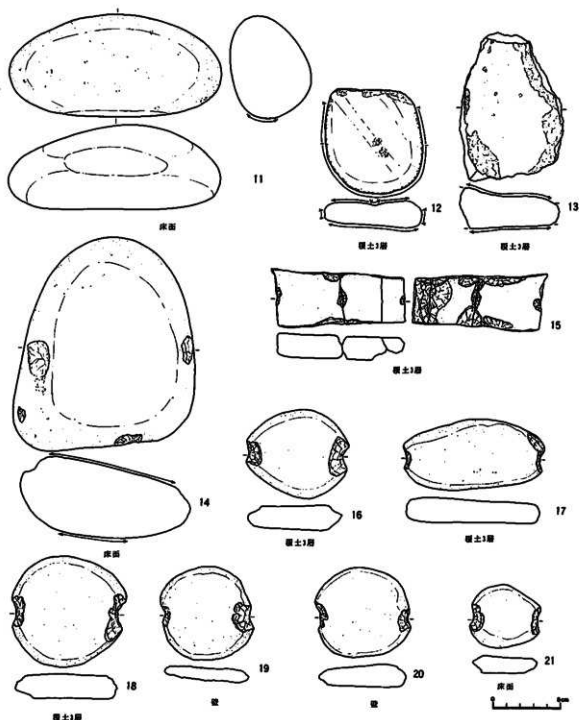
図III-55 H-408出土土器 (1)



図Ⅲ-56 H-408出土土器(2)



図Ⅲ-57 H-408出土石器 (I)

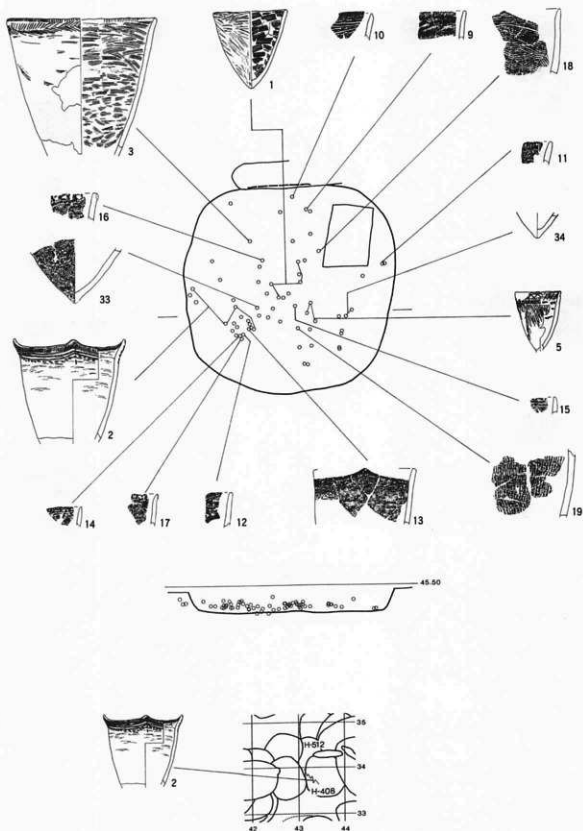


図Ⅲ-58 H-408出土石器(2)

痕文が加えられている。23は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部内外面には連続波状文、口縁部外面には、刺突文と鋸歯状沈線文が交互に施文され、横位の貝殻腹縁圧痕文が加えられている。厚手の土器片で、堅い。24は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、その下に2条の鋸歯状沈線文、刺突文が施文される。胴部外面には背圧痕が加えられる。口唇部内面には連続腹縁文、口縁部内面には貝殻腹縁押引文が施文される。25は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられる。26は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内面はナデ調整、外面には貝殻条痕文

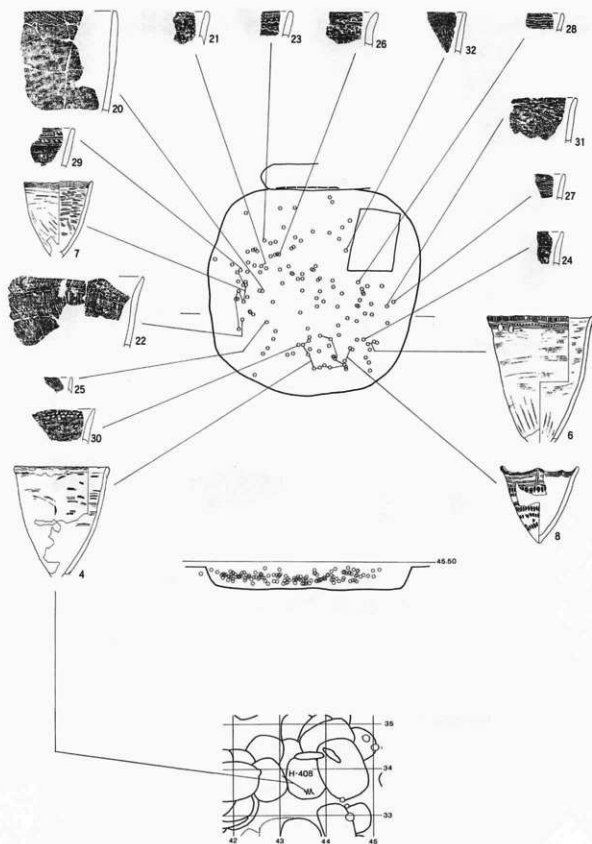


H-408



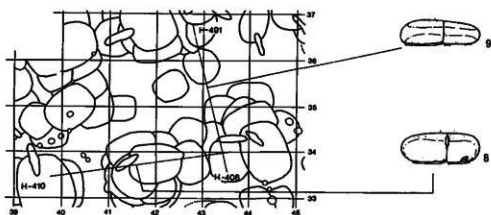
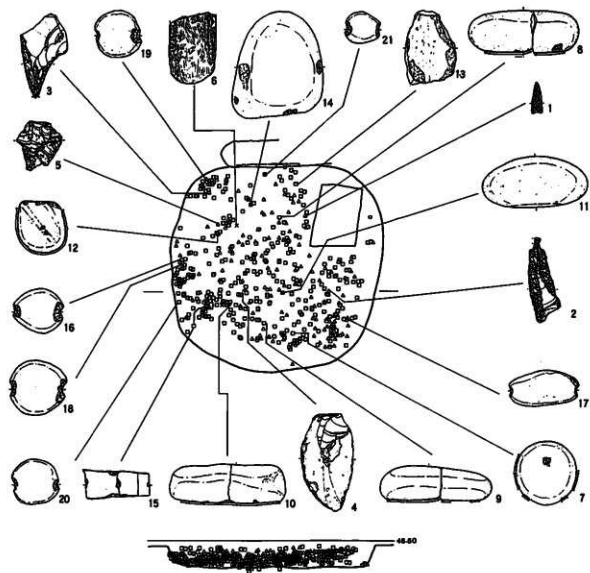
図Ⅲ-59 H-408覆土3・4層出土土器分布・接合図

H-408



図Ⅲ-60 H-408覆土1・2層出土土器分布・接合図

H-408



図Ⅲ-61 H-408出土石器分布・接合図

が加えられる。焼成良好で堅緻。27は波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられる。28は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内面には縦位の連続腹縁文、外面には連続腹縁文、鋸歯状沈線文、貝殻腹縁圧痕文が施文される。29は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部には刺突文が加えられている。口縁部外面には2条の沈線と刺突文が施文され、下端には2条の鋸歯状腹縁文が施文される。内面はナデ調整。外面にはミガキ痕が見られる。焼成良好で堅緻。30は小波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には2条の刺突文が横走する。内面には貝殻条痕文が加えられている。31は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には粗い貝殻条痕文が加えられている。つくりは粗雑で、胎土からI群D1類のものとした。32は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には鋸歯状腹縁文が、外面には連続押引文が施文される。33・34は乳房状の尖底部。外面は33が背圧痕、34はナデ調整が見られる。

石器：1は石鏝。硬質頁岩製の無茎鏝。2は2a類の石匙。3は1類の石錐。4は背面に原石礫面を残すスクレイパーである。5は黒曜石製のRフレイク。6は石斧の欠損品。蛇紋岩製で擦り切りによるものである。7は閃緑岩製のたたき石。両側縁にたたき痕があり、両平坦面にはすり痕が見られる。8～11は閃緑岩製のすり石。8はH-410覆土2層出土の破片と接合する。割れた後もすり石として使用している。断面は三角形。9はH-491覆土3層出土の破片と接合する。割れた後も使用されており、断面形は三角形。10は覆土上Ⅲ層出土の破片と接合する。断面は三角形。11は床面出土のもの。12・13は凝灰岩製の砥石である。12は円礫素材で、両平坦面を使用している。溝状のすり痕がある。13は両平坦面を使用している。14は床面出土の石皿。15～21は石鏝。21は床面出土。15は凝灰岩製で、他は閃緑岩製である。15は板状の礫片。他は円礫である。

(和泉田 毅)

H-410 (図Ⅲ-62～75, 図版12・13・99～101・126～128・164～166)

位置：39-32・33, 40-32・33 標高45.08m～45.35mのほぼ平坦地に位置している。

規模：6.83m/6.27m×5.92m/5.42m×0.42m 床面積：29.73㎡ 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-S

確認・調査・土層：耕作によりIV層直上付近まで攪乱されており、I層を除去した時点で長方形形状にⅢa層、Ⅲb層の広がりを確認し、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出した。東西、南北に土層観察用の土手を設定し、Ⅲa、Ⅲb、覆土I層と順次に掘り下げる。Ⅲb層、覆土中には多量の遺物が含まれており、遺物出土状況の実測、写真撮影、取り上げを繰り返し、調査を行う。Ⅴ層中の堅い面で焼土を検出し、一括土器も出土したことからこの面を床面とし、全体に広げ、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面は、Ⅲa、Ⅲb層の堆積状態からみて、Ⅲb層中と思われる。覆土は大きく三層に分けられる。覆土I層はⅢb>Ⅴ、覆土2層は暗茶灰色土で、汚れた混合土である。覆土3層は覆土2層に黄色土が多く混入した暗茶黄色土である。覆土2層は固く、またこの上面も堅くなっており、遺物の出土状況などから見て、この面が一時生活面として利用されていたものと思われる。また覆土3層上面付近で焼土が検出されており、この面が最終生活面と思われる。

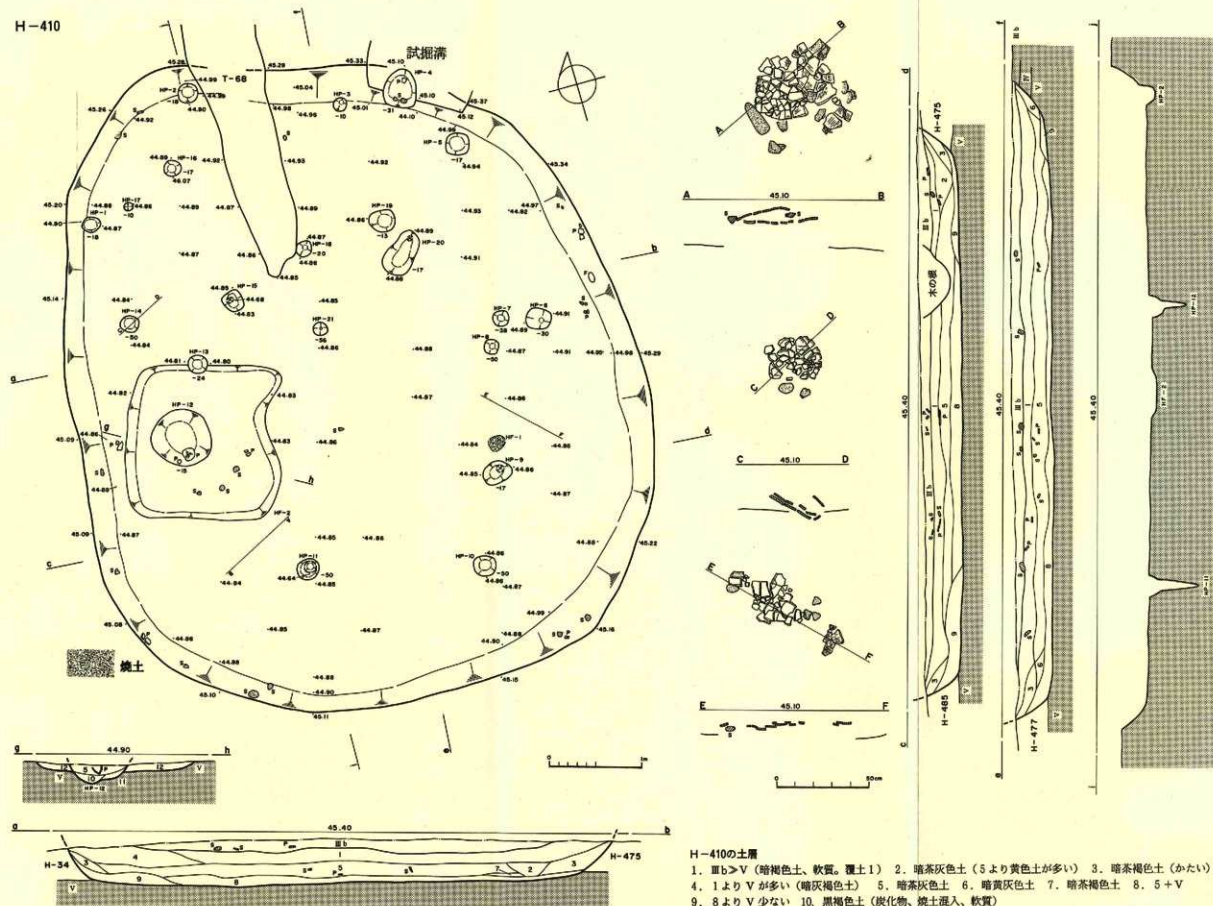
重複関係：本住居跡はT-68、H-34・475・477・485・517と重複しており、T-68より古く、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：Ⅴ層を深く掘り込んで構築されており、平坦で、堅い。

壁：立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が31cm～38cm、西壁が20cm～27cm、南壁

H-410



図III-62 H-410実測図

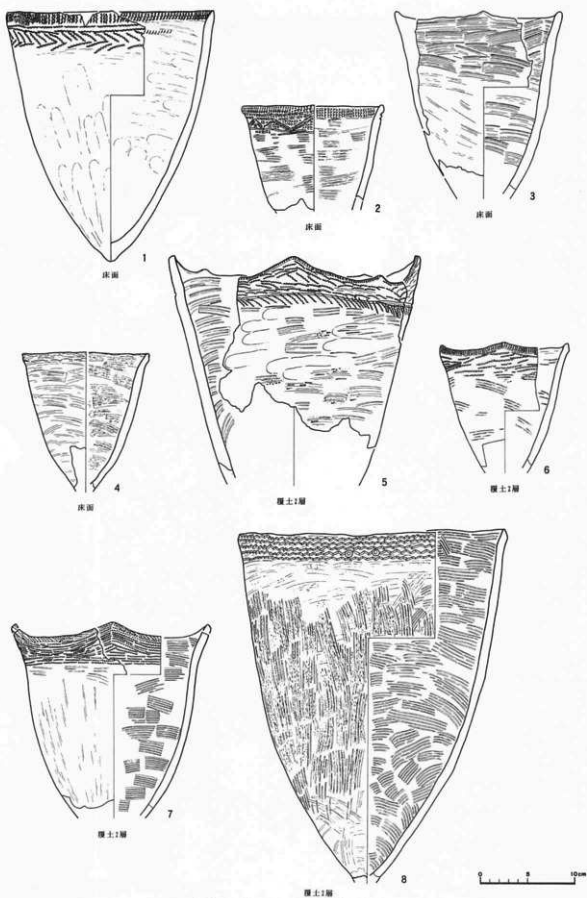
が23cm前後、東壁が31cm～37cmである。

炉跡：覆土2層中（覆土3層上面付近）で、15cm×15cm、壁厚4cmほどの砂質で暗茶黄色土＜暗赤褐色土の広がり（HF-1）が検出されている。また床面南西側で1.60m×1.60mのほぼ方形のやや堅い茶褐色土の落ち込みが検出されている。約10cmほどの深さで、覆土は炭化物が多く混入する土で城底から火を受けて赤色化した痕跡が見つかっている。浅い掘り込みをもつ炉跡（HF-2）である。

付属ピット：柱穴状小ピットは21個検出されている。このうちHP-1～3・5は壁際をめぐるもので直立している。HP-4は40cm×30cm、検出面からの深さは31cmで、覆上下層付近で遺物が多く出土している。形状、規模、覆土（茶褐色土）が柱穴状小ピットとは異っており、この周辺で小型のフラスコ状ピットが6個検出されていることから考えると、同タイプのフラスコ状ピットの可能性が高い。HP-12はが跡が埋った後に掘られたものである。HP-13も炉跡の壁を壊しており、炉跡が埋った後に作られたものである。HP-9・10・11・13・15・20は直立しており、主柱穴と思われる。HP-9・11・13・20はHF-1に伴い、HP-10・11・15・20が炉跡に伴う主柱穴と思われ、ともに4本柱が想定される。

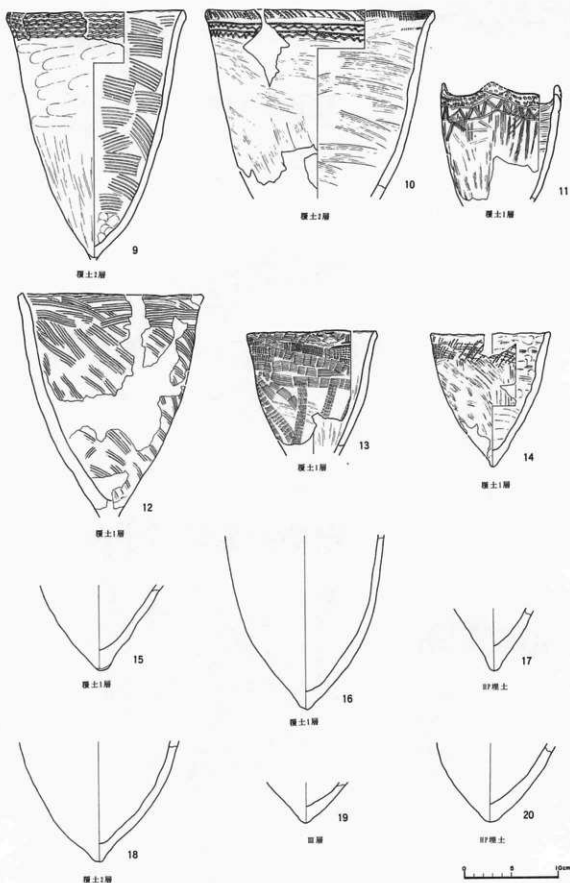
遺物出土状況：出土遺物総数は4,880点である。この内訳は上器2,708点、石器2,172点である。床面付近からはI群D1類土器が391点、石鏃（3点）、石槍（1点）、スクレイパー（6点）、たたき石（2点）、すり石（4点）、砥石（2点）、石錐（46点）などが出土している。遺物はⅢb層から床面直上まで非常に多く出土している。とくに覆土2層上面付近、HF-1検出面付近で一括土器が点々と残されていた。またスクレイパーが57点、たたき石17点、すり石27点、石鏃261点とスクレイパー、礫石器が多い。これらは余りまとまりは見られず、覆土全体に混入している。土器はI群D1類土器が2,678点と約99%を占めている。覆土1・2層でI群D2類土器、覆土1層でI群E類土器、覆土2層でI群G類土器が数点出土しているのみである。石器では石鏃、石槍、石錐、両面調整石器、石匙、スクレイパー、擦り切り残片、石斧、たたき石、すり石、石皿、台石、砥石、石鏟などが出土している。土器：17・20はHP覆土、1～4・21～28は床面、5～10・18・29～40は覆土2層、11～13・15・16・41～57は覆土1層、19・58～67は覆土上Ⅲ層出土の土器である。これらの土器のうち13・39・57・66・はI群D2類土器、40・67はI群E類土器で、他はすべてI群D1類土器である。1は床面から一括出土した土器で、全体が復元できたものである。口径22.0cm、器高26.4cmの乳房状尖底土器である。胴部は内湾気味に外傾し、口縁部は直線的に立ち上がる。平縁で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口唇部内外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には横走、羽状の貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面にはナデ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。つくりは丁寧で、器形は美しい。2は床面から一括出土した土器で、底部は欠失している。口径15.4cm。胴部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。口唇部は肥厚し、端部は鋭角的に仕上げている。平縁である。口唇部内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文され、口縁部外面は連続押引文上に横走、鋸歯状に刺突を加えた沈線文を配し、下端には沈線がめぐっている。内外面には貝殻条痕文が加えられる。3は4つの波頂部をもつ小波状口縁で、底部は欠失している。口径17.0cm。胴部は内湾気味に外傾し、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部から胴上位外面と内面には貝殻条痕文が加えられる。4は口径13.4cm、平縁の土器で、底部は欠失している。胴部下位がわずかにふくらみ、直線的に外傾する。口縁部は強いナデ調整により屈曲する。口唇部は鋭角的に仕上げている。外面はナデ調整、内面は貝殻条痕文が加えられている。焼成は良好で、堅緻。5は覆土1・2層、39～33Ⅰ・Ⅲ層、39～35Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径26.7cm。胴、口縁部は直線的に外傾する。4つの波頂と副突起をもつ波状口縁で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され

る。内外面には貝殻条痕文が加えられる。口唇部内面は端部に沿って丁寧なナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。6は覆土1・2層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径13.6cm。胴部は内湾気味に外傾する。小波状口縁で、口唇部は丸く仕上っている。上面観は方形状である。口唇部外面には連続腹縁圧痕文、口縁部から胴部にかけての外面には沈線状に貝殻腹縁文が施文される。内外面には貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。器表面はガラガラしている。7は覆土2層で一括出土した土器で、底部は欠失している。口径21.2cm。胴部中位でふくらみをもち、口縁部は外反する。4つの波頂をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が口縁に沿って横走し、下端には沈線状に腹縁圧痕文が施文されている。胴部外面には貝殻条痕文が一部見られるが、全体的にナデ調整が、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。器形はふくよかで、優美である。8は覆土2層で一括出土し、わずかに尖底部が欠失しているが、全体を復元できた個体である。口径28.4cm、器高約38cm。やや細長い土器である。胴部中位がわずかにふくらみ、口縁部は直線的に外傾する。ゆるやかな小波状口縁で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口縁部外面には小波状の沈線文が横環する。外面は縦方向、内面は横方向に貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。つくりは丁寧で、器形は美しい。補修孔が見られる。9は覆土2層で一括出土した土器で、全体を復元できた個体である。口径約19.0cm、器高約26.0cmの胴長の乳房状尖底土器である。底部でふくらみをもち、胴部は直線的に外傾し、口縁部はゆるやかに外反する。平縁で、口唇部が肥厚し、端部は鋭角的に仕上っている。口唇・口縁部外面には小波状の沈線文が横環する。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。10は覆土1・2層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径25.2cm。胴部は内湾気味に外傾し、口縁部で屈曲し、外反する。平縁で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には貝刻沈線文、小さな鋸歯状沈線文が交互に施文される。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。11は覆土1層、H-450覆土1層、43-32I層・揚げ土から出土した土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径12.8cm。胴部は内湾気味に外傾し、口縁部はやや内湾する。4つの波頂をもつ波状口縁で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には、口縁に沿った2条の刺突文、鋸歯状沈線文の上下に2条の沈線を施文する。胴部内外面には貝殻条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻であるが、つくりは粗雑である。12は覆土1層で一括出土した土器で、39-32Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、底部は欠失している。口径19.8cm、器高約24cm。胴部中位がふくらみ、口縁部はゆるやかに外反する。平縁で、口唇部は角形に仕上っている。外面には貝殻条痕文が、内面にはナデ調整が加えられている。胎土には小石が多く混入している。13は覆土1層で一括出土した土器で底部は欠失している。口径13.9cm。胴部上位にふくらみをもち、口縁部は直線的に外傾する。口唇部は折り返し状に肥厚し、丸く仕上っている。平縁。口縁部外面には粗雑な鋸歯状沈線文が施文され、胴部外面には横・縦方向に貝殻腹縁押引文が加えられる。内外面ナデ調整。14は覆土1層と覆土上Ⅲ層出土の土器片が接合し、ほぼ全体が復元できた個体である。口径12.8cm、器高14.0cmの乳房状尖底土器である。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には横走、斜位に鋸歯状腹縁文を粗く施文している。外面にはすり消し条痕文が見られ、内面はナデ調整。つくりは非常に粗く、凹凸が残っている。15～20は乳房状の尖底部で、17はHP-4の覆土から出土したものである。20はHP-12の覆土中で、尖底部を上にし、倒立した状態で出土したものである。21は波状口縁の波頂部破片で、口唇部はやや鋭角的に仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内外面はナデ調整。内面にはススが付着している。22は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には沈線文、

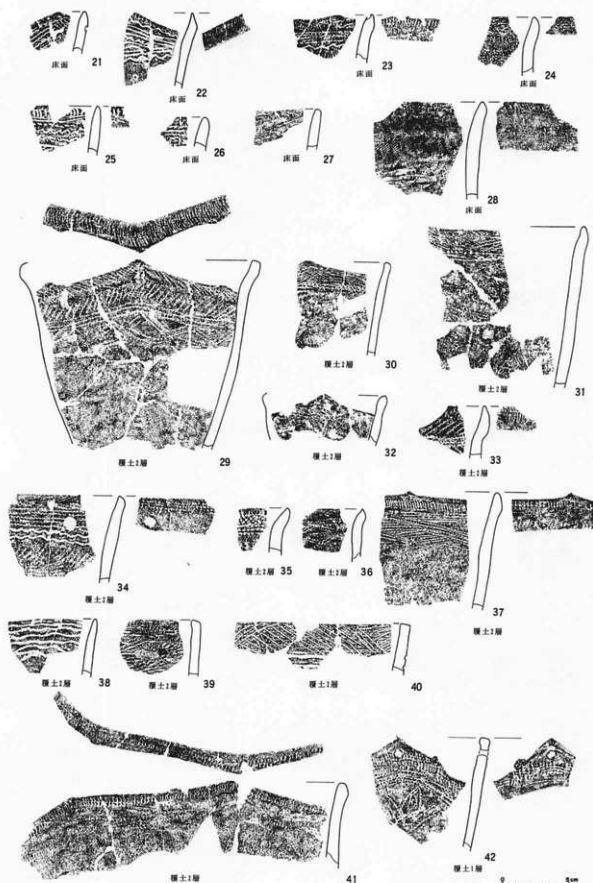


図Ⅲ-63 H-410出土土器 (1)

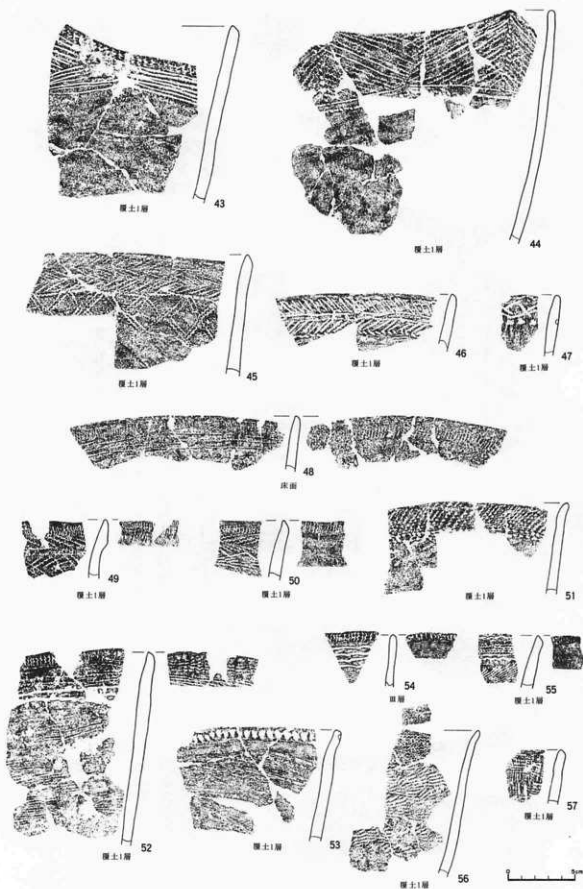




図Ⅲ-64 H-410出土土器(2)



図Ⅲ-65 H-410出土土器 (3)



図Ⅲ-66 H-410出土土器 (4)



図Ⅲ-67 H-410出土土器 (5)

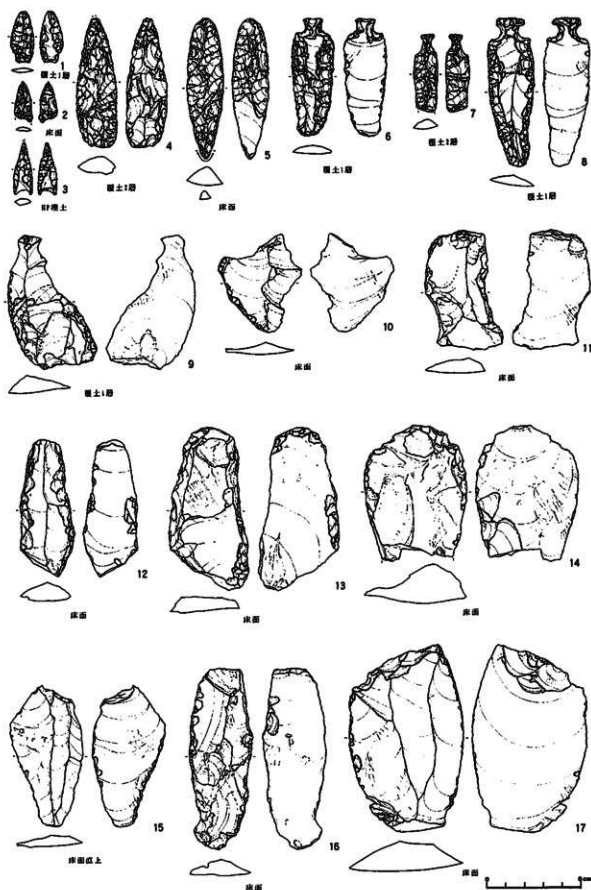
鋸歯状沈線文が施文される。23は小波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。脆弱である。24は波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部外面には櫛歯状腹縁文、内面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、外面には連続押引文が加えられている。25は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面にはへう状工具によるキザミ痕が見られる。口縁部外面には沈線、刺突文、鋸歯状沈線文が配されている。胎土は脆弱である。26は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面には貝殻腹縁押引文が施文されている。胎土には砂粒が多く、脆弱である。27は口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には貝殻条痕文が加えられている。28は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には連続腹縁文が施文され、口縁・胴部外面には指頭圧痕が残る、凹凸が激しい。外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。29は副突起をもつ波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続波状文、外面には連続腹縁文が施文されている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が斜位、横位、鋸歯状に施文される。胴部外面には背圧痕文が加えられ、内面はナデ調整。焼成良好な薄手の土器片である。30は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には櫛歯状腹縁文が口縁に沿って施文され、下端に横走する貝殻腹縁圧痕文が施文されている。胴部内面はナデ調整、外面には貝殻条痕文が加えられている。薄手の土器で、堅い。31は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には波状の貝殻腹縁圧痕文、刺突文、横走する貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。脆弱でつくりは粗雑である。32は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面ともナデ調整が加えられているが、口縁部外面の一部には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文が見られる。33は口縁部破片である。口唇部は肥厚し、内湾する。口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には縦位の連続押引文が施文される。34は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、内面には貝殻腹縁押引文が施文される。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面はナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。35は口縁部破片で、口縁部は屈曲し、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文、口縁部外面には刺突文、刺突を加えた沈線文が施文されている。36は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、連続波状文が施文されている。内外面ナデ調整。37は副突起をもつ波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部外面には連続腹縁文、内面には押引文が施文される。口縁部外面には櫛歯状腹縁文が施文され、円形の小さな刺突文が加えられている。胴部内外面はナデ調整。焼成良好で非常に堅い。38は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には鋸歯状沈線が施文され、内外面はナデ調整。39は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には引摺り背圧痕、内面にはナデ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。40は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には沈線文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。41は小波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には口縁に沿って連続腹縁文が施文され、他の内外面はナデ調整。42は副突起をもつ波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には、横走、鋸歯状に貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻腹縁押引文が施文される。波頂部に貫通孔が見られる。平成5年度H-78出土の土器片(図IV-118-1)と同一個体である。43は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続押引文、口縁部外面には沈線が施文されている。胴部内外面はナデ調整。44は波状の口

縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口縁部外面には2条の鋸歯状沈線文の上下に貝殻腹縁文を施し、下端には沈線、刺突文が見られる。波頂から刺突が垂下する。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。45は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、外面には羽状、菱形状に貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面はナデ調整。46は40-30㎜層出土の土器片と接合したものである。平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には2条の沈線文の上下に矢羽根状に沈線を配し、下端には刺突文が施文されている。内面には貝殻条痕文、外面にはナデ調整が施文されている。焼成良好で堅緻。47は口縁部破片で、口唇端部は丸く仕上げている。口縁部外面には鋸歯状沈線文、刺突文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられる。48は小波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面にはロッキング状に貝殻腹縁圧痕文が施文され、その下に鋸歯状腹縁文が施文される。内面には連続腹縁文が施文されている。49は小波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、内面には貝殻腹縁のよる連続押引文が施文される。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。50は波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、背圧痕も見られる。内面はナデ調整。焼成良好で堅緻。51は小波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁文が施文され、下端には刺突を加えた沈線文が施文されている。内面には貝殻条痕文が加えられる。52は口縁・胴部の破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には連続腹縁文、貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、内面には連続押引文が加えられる。胴部内外面には貝殻条痕文が加えられており、つくりは粗雑である。53は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、その下を強くナデている。外面にはケズリ痕も見られるが、内外面にはともにナデ調整が加えられている。54は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には沈線文が施文される。内外面には背圧痕が加えられている。55は平縁の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部には沈線文、内面には連続腹縁文が施文される。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、波状沈線文が施文され、内外面には背圧痕が加えられている。56は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内面にはロッキング状に連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面には背圧痕が加えられ、内面にはミガキ痕が見られる。薄手の土器であるが焼成良好で堅緻。57は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には連続押引文が施文されている。58は波状の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。波頂部は欠失している。口唇部外面には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には沈線と刺突文が交互に施文されている。内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕が残っている。つくりは粗雑である。59は小波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内面には連続波状文が施文され、口縁部外面には羽状、横位に貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面ともナデ調整。60は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文が施文される。61は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には沈線、鋸歯状沈線文が施文される。外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。全体に軟質である。62は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文、背圧痕が見られる。63は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内面、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。堅いが、つくりは粗雑である。64は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面にはへら状工具による

粘土のつまみ上げがなされ、口縁部外面には櫛歯状腹縁文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。65は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面にはへう状工具による粘土のつまみ上げがなされ、口縁部外面には櫛歯状腹縁文が施文されている。66は口縁・胴部の破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には粗く貝殻腹縁により押引文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。67は胴部破片で、外面には粗い沈線文が施文され、内外面はナデ調整。

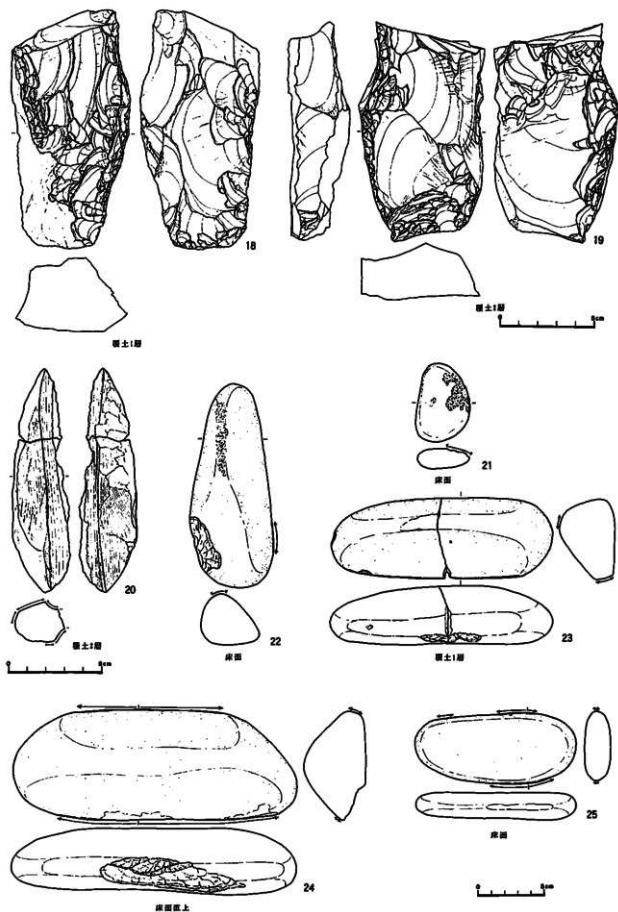
石器：1～3は石鏃。1は硬質頁岩製で、1b類のもの。2は黒曜石製。3は無茎鏃である。4は木葉形の石槍。5は床面出土の石錐。6～8は石匙。6・8は3類で、周辺加工する。7は2a類のもので先端部は欠損している。9・10・12～14・16・17はスクレイパーで、1類に属するものである。9は腹面にバルブを残す未製品。13は両側縁にわずかに使用痕があり、背面に稜が残る。14は背面に礫面を残している。10～14・16・17は床面出土のものである。11は床面出土のRフレイク、15は床面直上出土のUフレイクである。18・19は硬質頁岩製の石核。20は40～31Ⅲ層出土の破片と接合した蛇紋岩製の擦り切り残片。21・22は床面出土のたたき石。21は小礫を利用したもので、平坦面にたたき痕が残る。22は4類に属するものである。23～26は閃緑岩製のすり石である。23は39～35Ⅲ層出土の破片が接合したもので、断面が三角形である。24は床面直上、26は床面出土のもので、ともに断面は三角形である。25は床面出土で2類に属するもので、両側縁にわずかに使用痕が残る。27・28は凝灰岩製の砥石で、27は2面、28は1面の研ぎ面をもつ。29～45は石錘である。29は平坦面にすり痕、31は両平坦面にたたき痕がある。39は砥石転用品で、溝状すり面を有する。30・43は短軸に挟りがある。46は怪石製の有溝砥石である。

(和泉田 毅)



図Ⅱ-68 H-410出土石器 (I)





図Ⅲ-69 H-410出土石器(2)

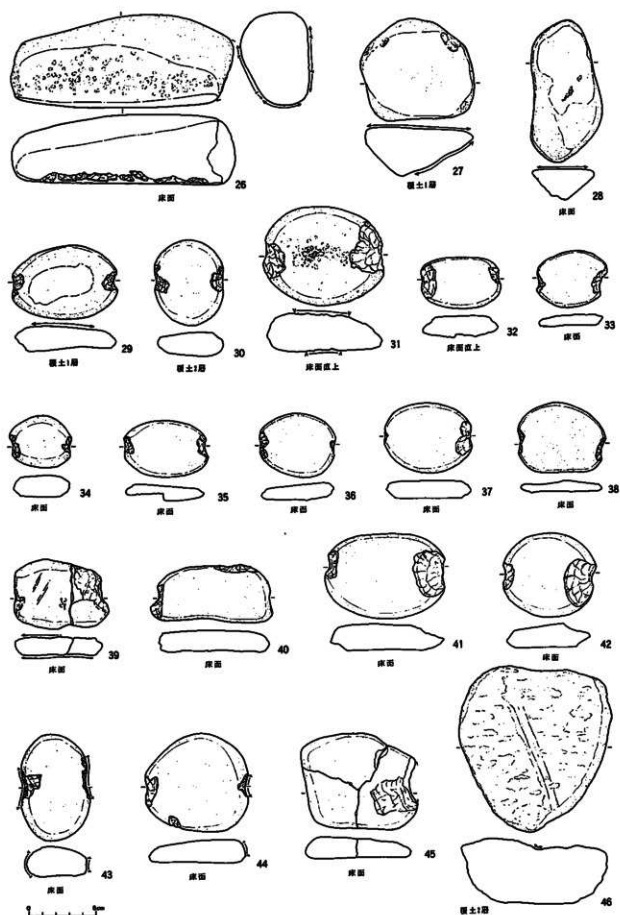
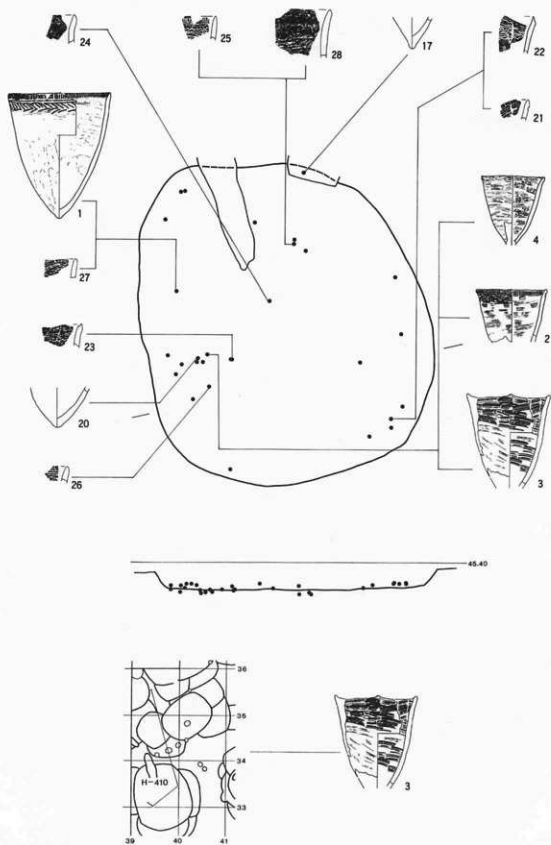


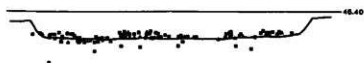
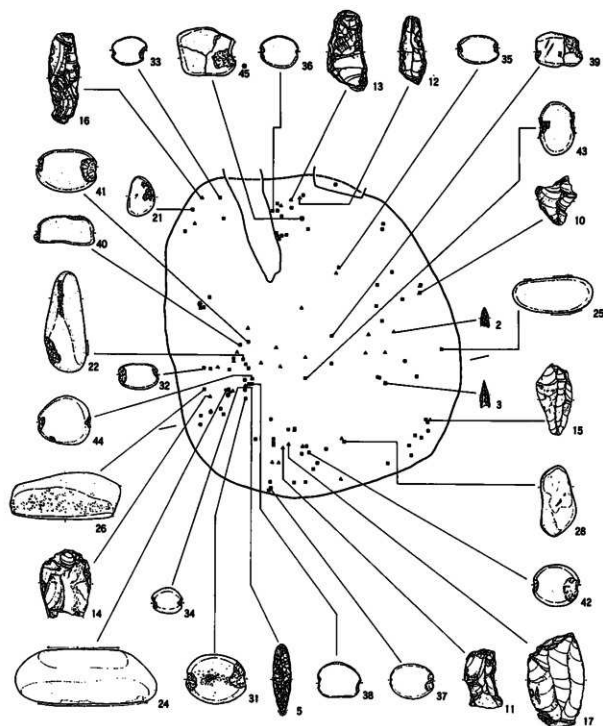
図70 H-410出土石器 (3)

H-410



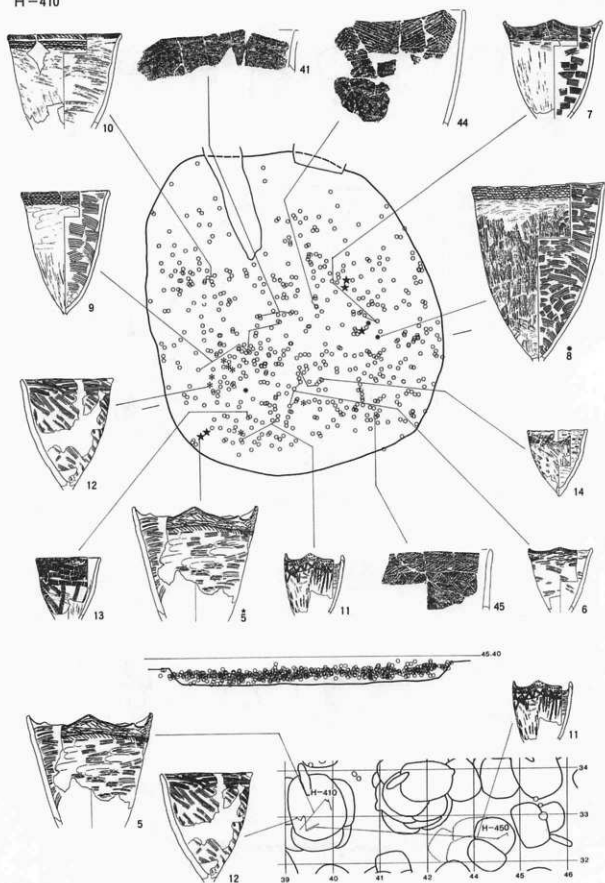
図Ⅲ-71 H-410床面出土土器分布・接合図

H-410



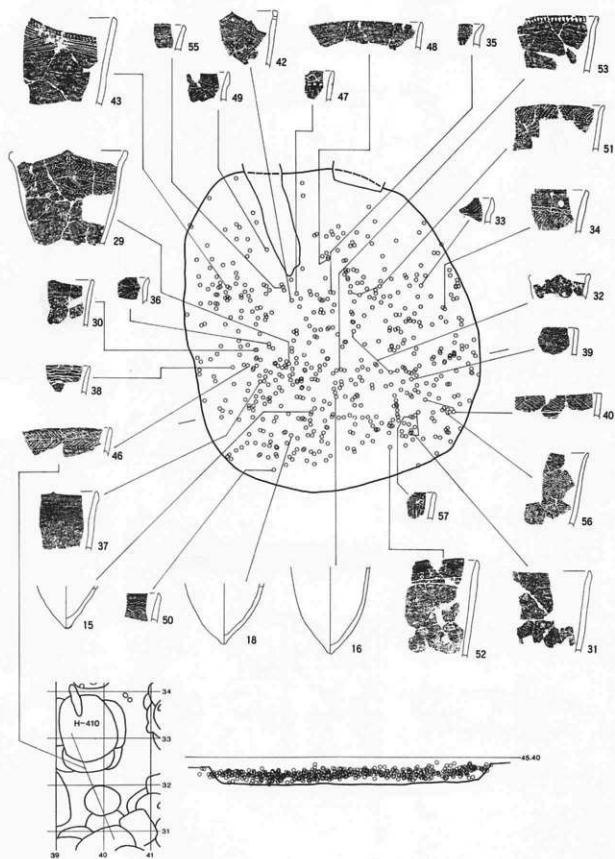
図Ⅲ-72 H-410床面出土石器分布図

H-410



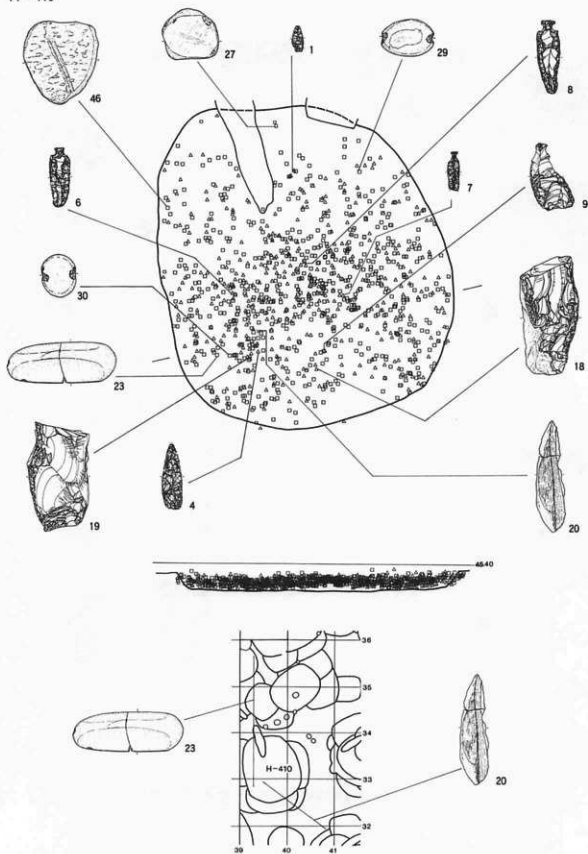
図Ⅲ-73 H-410覆土出土土器分布・接合図(1)

H-410



図Ⅲ-74 H-410覆土出土土器分布・接合図 (2)

H-410



図Ⅲ-75 H-410覆土出土石器分布・接合図





# H-419の土層

1. 暗茶褐色土(覆土1) 2. 褐色土(Ⅲbに黄色土、軽石混入) 3. 2+9(9より黄色土、軽石が多い、黄褐色土)  
4. 暗褐色土(Ⅲb>黄色土) 5. 褐色土 6. 暗茶灰色土(やや粘質。覆土2) 7. 黒茶褐色土(Ⅲb>2) 8. 7に軽石混入 9. 暗黄茶色土(6より黄色土が多く、軽石を混入、やや砂質。覆土3) 10. 暗茶灰色土(軽石混入、やや砂質)

H-419(図Ⅲ-76・77, 図版14・129)

位置: 39-29・30, 40-29・30 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.16m~44.42mの緩斜面に位置している。南側は市道中野4号線の側溝によって削平されている。

規模: 〃〃×5.00m/4.30m×0.41m 床面積: 不明 長軸方向: N-23°-E

平面形: 柱穴状小ピットの位置関係から見て隅丸方形形状のものが想定される。

確認・調査・土層: 39-29・30, 40-29・30のⅠ層を除去し、P.D.3<Ⅲaの広がり方が確認された。土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げる。Ⅳ層直上付近でⅢb層の落ち込みが見られ、暗茶褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲb層、覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中のやや堅い面で柱穴状小ピットが検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。Ⅲb層が深く落ち込んでおり、覆土はほぼ二層に分けられる。覆土1層はⅢb+Ⅴ層+軽石の混合土で、暗茶褐色土である。覆土2層は床面まで堆積しており、中央部はやや粘質の暗茶灰色土、壁際周辺部はやや砂質で汚れた暗黄茶色土である。

重複関係: 本住居跡はH-463・468と重複しており、これらより新しい。

時期: 周辺包含層出土遺物などからⅠ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されており、中央部がややくぼむが、ほぼ平坦である。

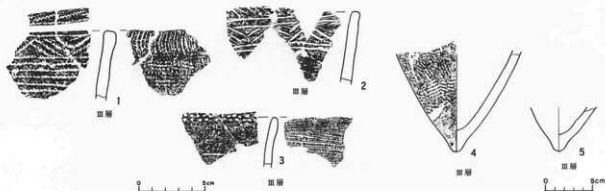
壁: 北壁の立ち上がりは急傾斜であるが、他はゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が43cm前後、西壁が27cm~32cm、東壁が28cm~43cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは6個検出されている。HP-4・5・6は主柱穴で、4本柱が想定される。壁際をめぐる明確な小ピットは検出されなかった。

遺物出土状況: 覆土上Ⅲ層で遺物は出土しているが、覆土、床面付近から出土していない。

土器: 1~5は覆土上Ⅲ層で出土したもので、すべてⅠ群D1類土器である。1は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部内面には縦位の連続腹縁文、口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻腹縁圧痕文と連続押引文が2段構成で施文されている。焼成良好で堅緻。2は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文が施文される。口縁部外面には鋸歯状沈線文の上下に2条の沈線が横走する。内面には貝殻



図Ⅲ-77 H-419出土土器

条痕文も見られるが、丁寧なナデ調整が加えられている。3は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には円形の刺突文が施される。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。4・5は乳房状の尖底部。4の外面には背圧痕が加えられている。

(和泉田 毅)

H-450 (図Ⅲ-78~82, 図版14・15・101・102・129・166)

位置: 43-32 標高45.00mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.30m/3.80m×(4.16)m/(3.90)m×(0.48)m 床面積: (11.98)m<sup>2</sup> 平面形: 隅丸形状  
 確認・調査・土層: 43-32の包含層調査中、遺物が多量に混入する灰褐色系の土の広がりが見られた。道構が想定されたため、土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げる。灰褐色土下で黒褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ調査を行ったが、床、壁の立ち上がりは不明瞭なため、土手に沿って小トレンチを設定し、粘質で堅い灰黄色土とこの面からの壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中で、灰褐色上下面と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層は粘質の黒褐色土で、遺物を多量に混入する。覆土2層は覆土1層+黄色土の汚れた土である。覆土3層は床面直上の土で、粘質の暗黄色土である。

重複関係: 本住居跡はH-472と重複しており、これより古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。全体に凹凸があり、西から東へ高くなり、ほぼ皿状である。堅い。

壁: 立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が26cm~38cm、西壁が26cm~38cm、東壁が16cm~25cmである。

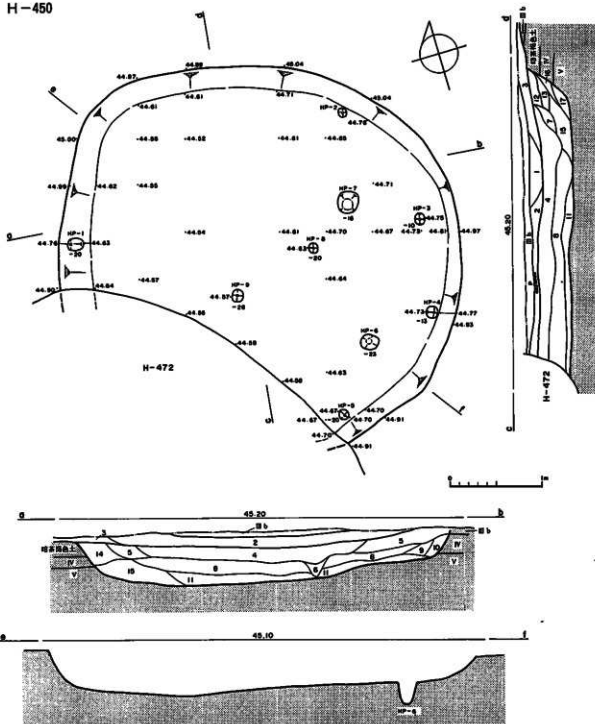
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1~5は壁際をめぐるもので、直立している。杭状のものである。HP-6・7は直立しており、主柱穴と思われる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は592点である。この内訳は土器265点、石器327点である。HP-6覆土からI群D1類土器が1点、同D2類土器が2点、石錘、剥片が出土しているが、他は覆土上層で出土したものである。調査中は灰褐色土を覆土1層、黒褐色土を覆土2層として遺物を取り上げたが、灰褐色土は他地域から移動した土、あるいは掘り揚げ土と考えられるため、ここでは黒褐色土を覆土1層とした。図版、遺物集計表などで覆土1層としているのは灰褐色土、覆土2層としているのは覆土1層である。遺物は覆土上の灰褐色土中で多量に出土した。また覆土1層からも多く出土している。灰褐色土中でI群D2類土器、同E類土器が数点出土しているほかは、すべてI群D1類土器である。石器では石槍、石錐、スクレイパー、たたき石、砥石、石錘などが出土している。

土器: 1・4・5は覆土2層(黒褐色土)、2・3・6~12は覆土1層(灰褐色土)、13~15は覆土上Ⅲ層出土のもので、12はI群D2類土器で、他はすべてI群D1類土器である。1は43-32 I・Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、尖底部は欠失しているが、ほぼ全体が復元できた個体である。口径21.0cm、器高約28cm。胴部はやや内湾気味に外傾し、口縁部はわずかに外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には羽状、横位の貝殻腹縁圧痕文が施文される。口唇部内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。内外面にはナデ調整が加えられる。2は覆土1層(灰褐色土)で一括出土したもので、H-472覆土1層、H-410覆土1層出土の土器片が接合した個体である。口径21.6cm。口縁部はゆるやかに外反する。8つの波頂部をもつ波状

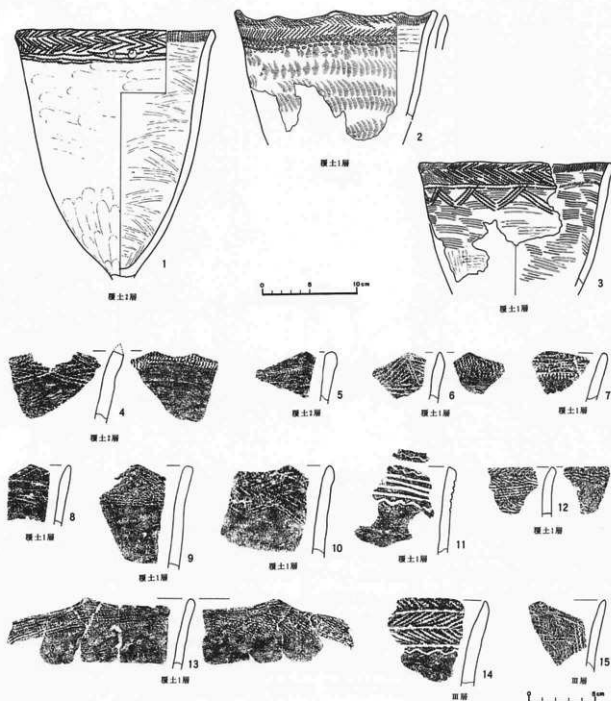
H-450



H-450の土層

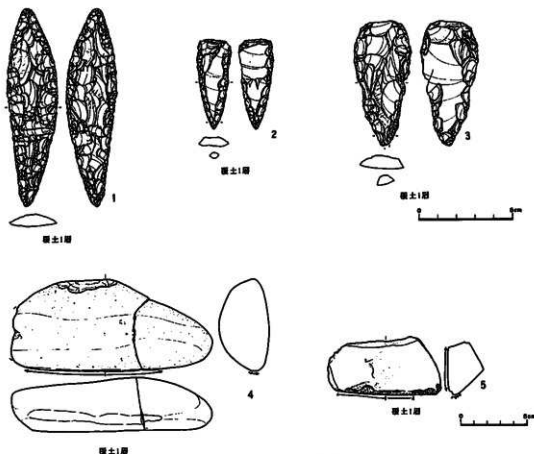
1. 暗灰褐色土 (Ⅲbに黄色土粒多量に混入、かたい)
2. 暗茶褐色土 (1、3より軟質)
3. 灰褐色土 (1より明るい色調、かたい)
4. 黒褐色土 (粘質、上層に遺物多い。覆土1)
5. 暗褐色土 (4に茶色土粒が多く混入、ややかたい、粘質)
6. 暗黄褐色土 7. 5+12 8. 暗茶黄色土 (V+4の汚れた土、かたい、粘質) 9. 8+V 10. ≈9 (軽石混入) 11. 灰黄色土 (粘質、かたい)
12. 明灰褐色土 13. 12+15 14. 褐色土 15. 暗灰黄色土 16. 暗黄褐色土 17. 灰黄色土

図Ⅲ-78 H-450実測図



図Ⅲ-79 H-450出土土器

口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部から口縁部にかけての外面上には貝殻腹縁圧痕文、小波状の沈線文、刺突文が施文される。口唇部内面には連続腹縁文が施文される。胴部外面には丁寧な背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。3は胴部上半部の個体で、口径は20.6cmである。胴部は内湾気味に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には羽状、横位の貝殻腹縁圧痕文が施文され、その下に貝殻腹縁による連続波状文が施文される。口唇部内面には連続腹縁文が施文される。胴部外面には一部貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。内面には貝殻条痕文が加えられ、口縁部内面には爪跡が残っている。4は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面にはロッキング状に貝殻腹縁圧痕文が施文され、外面には

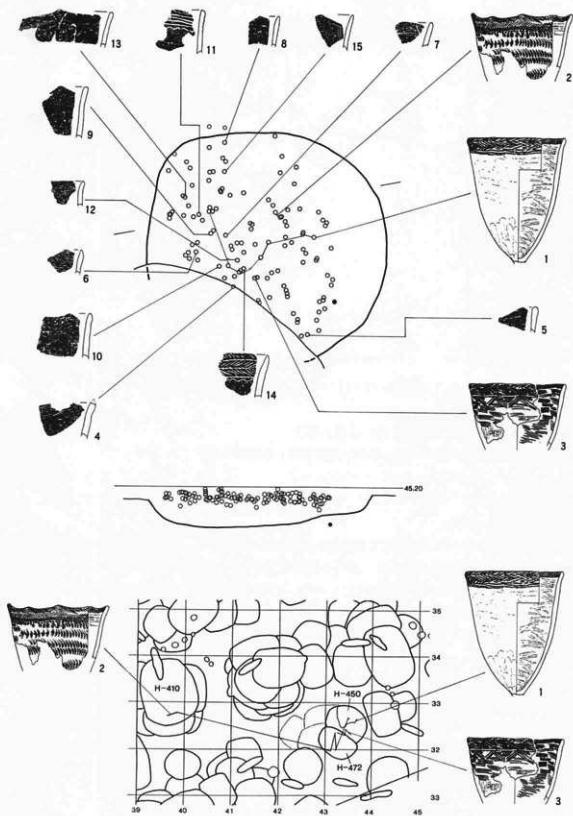


図Ⅲ-80 H-450出土石器

貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面には背圧痕が見られ、内面はナデ調整。5は波状口縁の波頂部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面ナデ調整。6は波状口縁の波頂部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内面にはロッキング状に、外面には口縁に沿って貝殻腹縁圧痕文が施文される。7は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面ナデ調整。胎土は脆弱で、粗雑である。8は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には櫛歯状腹縁文が施文され、内面はナデ調整。焼成良好で堅緻。9は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には粗い櫛歯状腹縁文が施文され、内面には貝殻条痕文も見られるが、丁寧なヨコナデ調整が加えられている。11は口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には鋸歯状沈線文、口縁部外面には沈線、鋸歯状沈線文が施文されている。胎土は粗く、つくりは粗雑である。12は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、内外面には貝殻腹縁による押引文が加えられる。全体に脆弱である。13は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部内面には背圧痕が見られ、外面には連続押引文が施文されている。器表面はザラザラし、脆弱である。14は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。外面には斜位、横位の貝殻腹縁圧痕文、下端には鋸歯状沈線文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。15は小波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には、連続押引文が見られ、その上に浅い沈線文が粗く施されている。内面には貝殻条痕文が見られる。胎土は緻密で、軟質である。

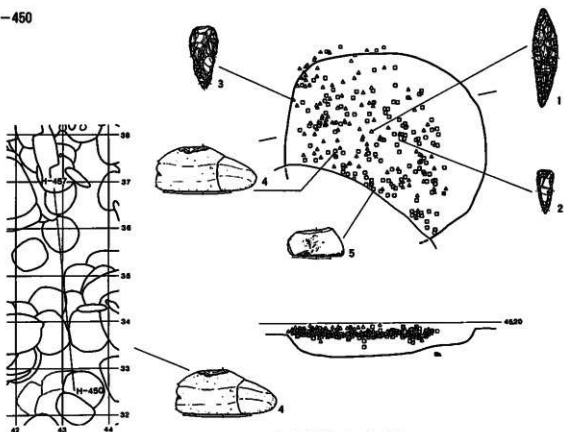
石器：1は柳葉形の石槍。2は硬質頁岩製の1類に属する石錐。3は4類に属する石錐。機能部分が欠損している。4は砂岩製のすり石。5は凝灰岩製の石磨である。(和泉田 毅)

H-450



図Ⅲ-81 H-450出土土器分布・接合図

H-450



図Ⅲ-82 H-450出土石器分布・接合図

H-451 (図Ⅲ-83~90, 図版15・102・130・167)

位置: 40-35・36のほぼ東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模: ———×(4.30)m/(4.00)m×(0.58)m

平面形: 隅丸長方形状

床面積・長軸方向: 不明

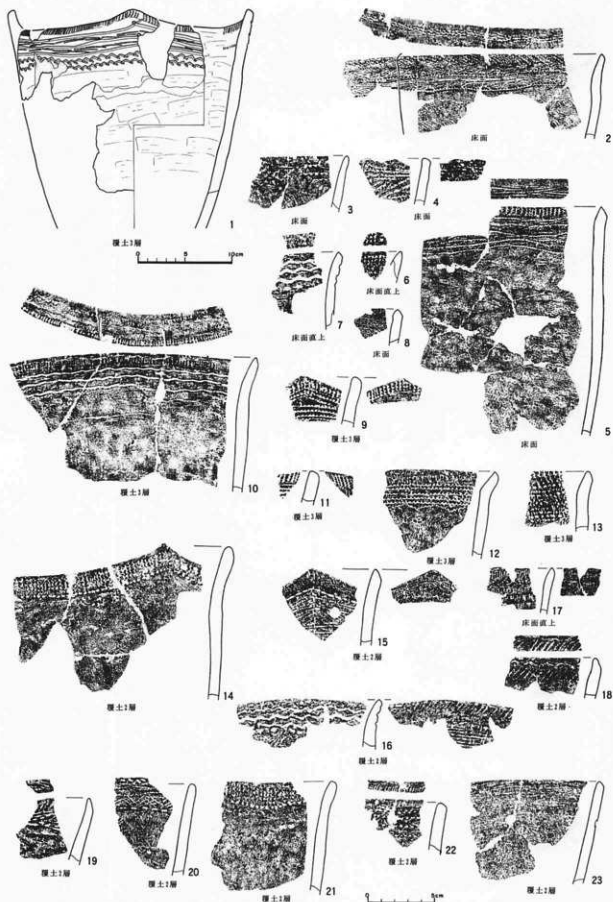
確認・調査・土層: 40-35・36付近ではⅢ層が比較的厚く堆積する。包含層調査中に遺物が多く散在し、P.D.3の不整形な散在を確認した。周辺に遺構が存在することが予想されたため、東西、南北に土層観察用のベルトを残した。遺構検出につとめ、ほぼⅣ層上面で、平成4・5年度調査区に切られた隅丸方形の黒色土の落ち込みを確認した。H-74との重複関係は、重複部分がB調査により掘削されたため確認できなかった。前回調査区に切り取られた断面から、堅穴の壁の立上りを確認し、プランとセクションをクロスチェックしながら順次掘り下げて調査を行った。覆土は十層に分層された。黒色土を掘り下げると遺物が多く出土した。覆土5層上面の中央部東より付近で炭化物が散在し、焼土が検出され、Ⅰ群D1類土器が多く出土した。土層観察から混入と判断し、再び床面確認のために順次掘り下げた。覆土5層の暗褐色粘質土層を除去するとほぼ平坦となり、覆土6層の暗黄色粘質土層を除去し精査したところ、柱穴が確認されたため床面と判断した。なお覆土5層より認められた炭化物を浮遊選別処理し、炭化植物遺体の同定を行った。また、放射性炭素による年代測定結果は7950±80B.P.の年代値がえられた。

床面: 床面はⅤ層に掘りこまれている。概ね平坦だが踏み固めは目立たない。

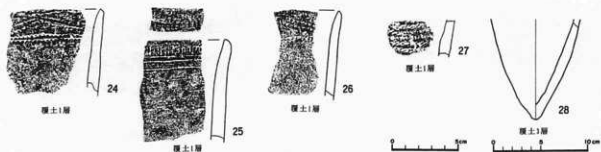
壁: 斜めに立ち上がりかなり崩壊している。南東方向では堅穴の重複の為、床と壁掘の境界が不明瞭



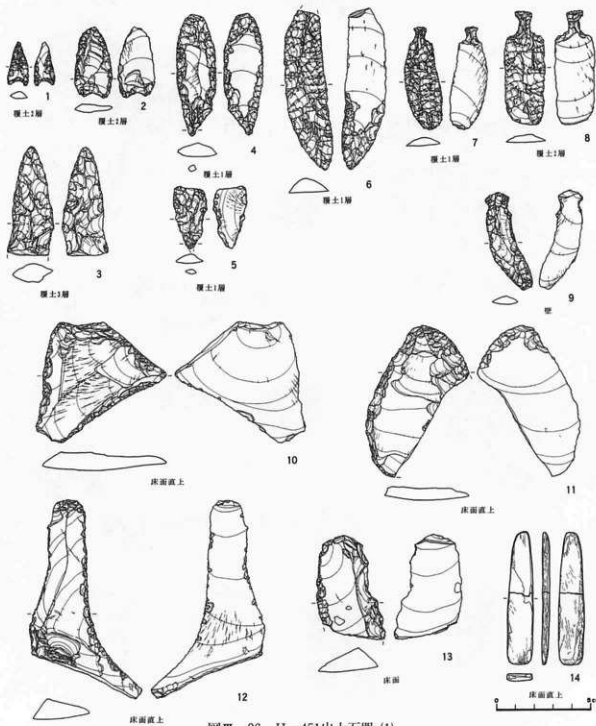




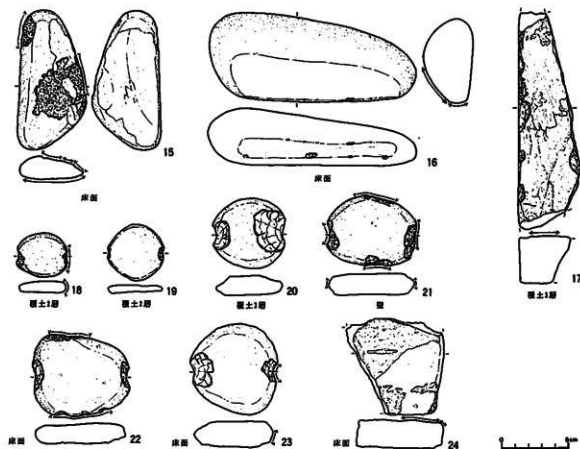
図Ⅲ-84 H-451出土土器 (1)



図Ⅲ-85 H-451出土土器 (2)



図Ⅲ-86 H-451出土石器 (1)



図Ⅲ-87 H-451出土石器 (2)

である。

炉跡：覆土の中層で焼土が確認された。堅穴の落ち込みを利用した生活面があったか、流れ込みと考えられるもので、遺構に伴うものではない。

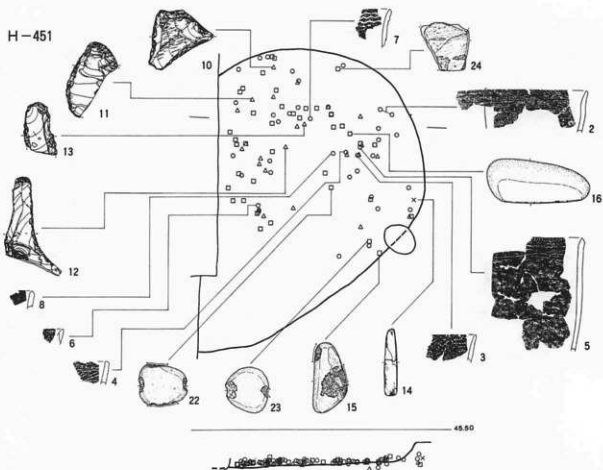
付属ビット：柱穴状の小ビットは15カ所で確認された。床面の中央部周辺ではHP-5・6が明瞭な掘り方を持つ。倒木痕など自然の擾乱かと思われるものは削除した。堅穴外の柱穴は確認できていない。この遺構でも、壁から中央部に向かって内傾する柱穴が確認された。

遺物出土状況：遺物総数は1,363点。903点出土した土器の多くがI群D1類で897点を占める。D2類は3点、G類は2点検出されている。一箇体の破片が床面から覆土にかけて散在していた。堅穴中央に土器片が集中し、これらと遺構内外の破片が接合する状況が見られる。石器等は460点出土、うち剥片石器群は207点、礫石器群は250点、磨製石器群は3点である。

重複関係：H-156・495・496・518より新しい。H-74との新旧は不明。P-285より古い。

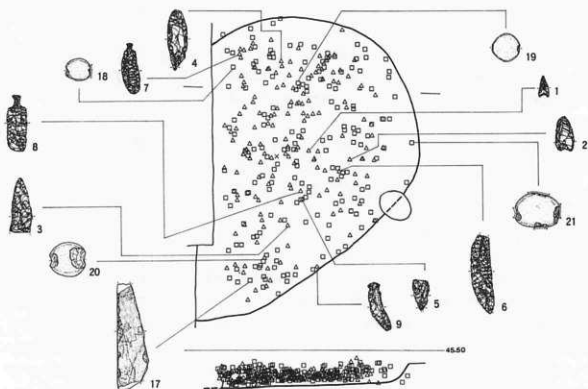
時期：堅穴の形状および、遺物出土状況からI群D1類期、縄文時代早期中葉と考えられる。

土器：1はI群D1類土器で覆土、包含層出土破片と接合する。4山の波状口縁を呈し、口縁部は僅かに外反するが明瞭な屈曲はない。外傾する口唇部に櫛歯状貝殻腹縁の連続移動文が施される。口唇部内面には貝殻腹縁の一部を使った連続移動文が施されるが、その下位に連続移動文の施文時に付いた爪形が残る。沈線と刺突、貝殻腹縁で文様が構成され、文様帯は鋸歯状沈線によって区画される。横環する沈線に沿って横位に腹縁刺突が施される。波頂部にある沈線文の交点に刺突を施す。胴部の内外面は粗いヨコナデ調整が施される。2～24はI群D1類の口縁部片である。2は平縁でやや外反し口唇部は外傾する。口縁部内面に押引文が施され、胴部には貝殻腹縁の背正真文が施される。3は



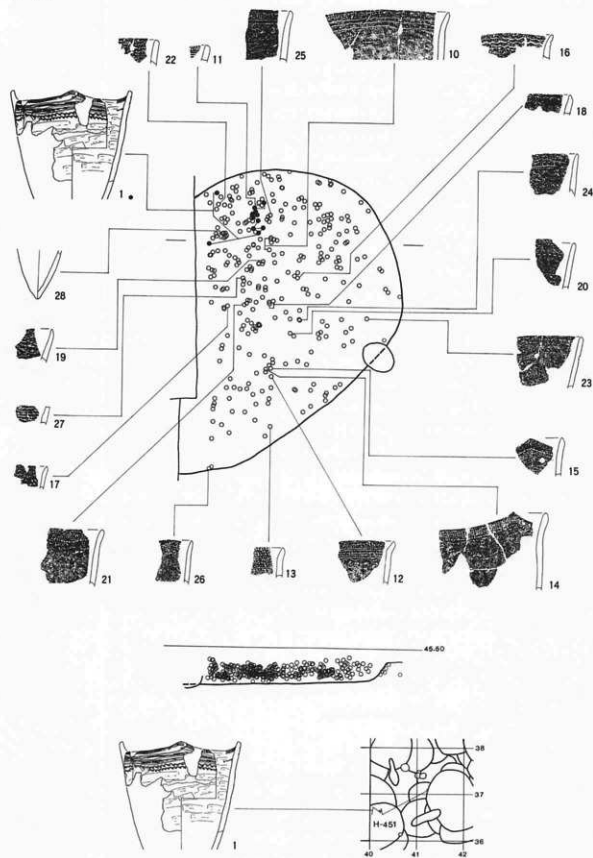
図Ⅲ-88 H-451床面出土遺物分布図

H-451



図Ⅲ-89 H-451覆土出土石器分布図

H-451



図Ⅲ-90 H-451覆土出土土器分布・接合図

平縁で口唇部は先細りの丸形、貝殻腹縁文が横位・斜位に施される。4は波状口縁の波頂部で副突起を持つ。文様は沈線中に貝殻腹縁文が刻まれる。5は波状口縁の波頂立上り部分で口唇部は外傾する。外傾面には縦位に貝殻腹縁文が施される。口縁部内面には貝殻腹縁の条痕文が施される。内外面はナデ調整。6は口縁部の内外面に縦位の腹縁文が施される。7は平縁で僅かに外反する。口縁部内面に斜位の貝殻腹縁文。内面調整はすり消し条痕。8は平縁で口唇部は外傾し細い沈線によって施文される。9は波状を呈し、口唇部内外両面に貝殻腹縁文が縦位に施される。10は口縁部が外反する。口唇部は外傾し口唇部両側に貝殻腹縁の連続移動文が施され、内面にはそれに伴う施文時の爪痕が残る。外面はナデ調整で内面にはへう状工具の調整痕が残る。11は波状口縁で、口唇部両側に貝殻腹縁の連続移動文が施され、内面には施文時の爪痕が残る。口唇部は外傾するが無文の面を持ちC類に近い要素を備える。12は平縁で口縁部が屈曲外反する。内外面はナデ調整。13は口縁部が僅かに外反する。口唇部は外傾し貝殻腹縁文が施され、口縁部は押引文が施される。14・15は波状を呈す。15は波頂部分で口唇部はやや外傾する。口唇部両側に貝殻押引文が施文される。文様は沈線中に貝殻腹縁文が刻まれ波頂部から刺突が垂下する。内外面はナデ調整。14は21と同一個体で頂部の突起が強調されている。文様帯は幅狭に刺突で区画し縦位に貝殻腹縁文を充填する。内面はナデ調整。16は口縁部が僅かに外反する。胴部に格子目状に条痕が施される。内面は条痕調整。17は口縁部内外面に貝殻腹縁の連続移動文が施され、両面に施文時の爪痕が残る。18は口縁部が僅かに内湾し、内外面に斜位に貝殻腹縁の連続移動文。19は波状口縁で口唇部は外傾する。外傾面と口縁部内面に貝殻腹縁文が施される。20は平縁で口唇端部に刺突文が施される。21は14と同一個体。22は平縁で、口唇部は外傾する。口唇部内外面には貝殻腹縁の連続移動文が施される。23は平縁で、口縁部外面は条痕。24は平縁で、口唇部は僅かに外傾し、内面はすり消し条痕。25は平縁で、口唇部は外傾する。櫛歯状に加工された貝殻腹縁文で口唇部両面を連続移動する。26は24と同一個体。27は1群G類で縞線状模様の側面圧痕が施される。覆土1層から検出された。28はI群D類の乳房状の尖底部である。底部は立上りが鋭く突起は小さくなる。

石器等：1・2は石鍬で頁岩製の無茎鍬。1は再利用の為に整形により小型化したものと考えられる。3は石槍で硬質頁岩製。4・5は石錐で、5は黒曜石製。6～9は石匙。6は背面と腹面先端部のみ加工される。9は未製品。全て頁岩製。10～13はスクレイパーで頁岩製。14は磨製石斧の模造品で片岩製。15はたたき石で側縁にすり痕を残す閃緑岩製。16は断面三角形のすり石で閃緑岩製。17は砥石で1面利用の凝灰岩製。18～22石錐。18は安山岩製、20は片岩製、他は閃緑岩製。21は短軸に挟りを加える。24は台石で、僅かにすり痕を残す。凝灰岩製。(富永 勝也)

H-453 (図Ⅲ-91～94, 図版16・129・168)

位置：42-37・38

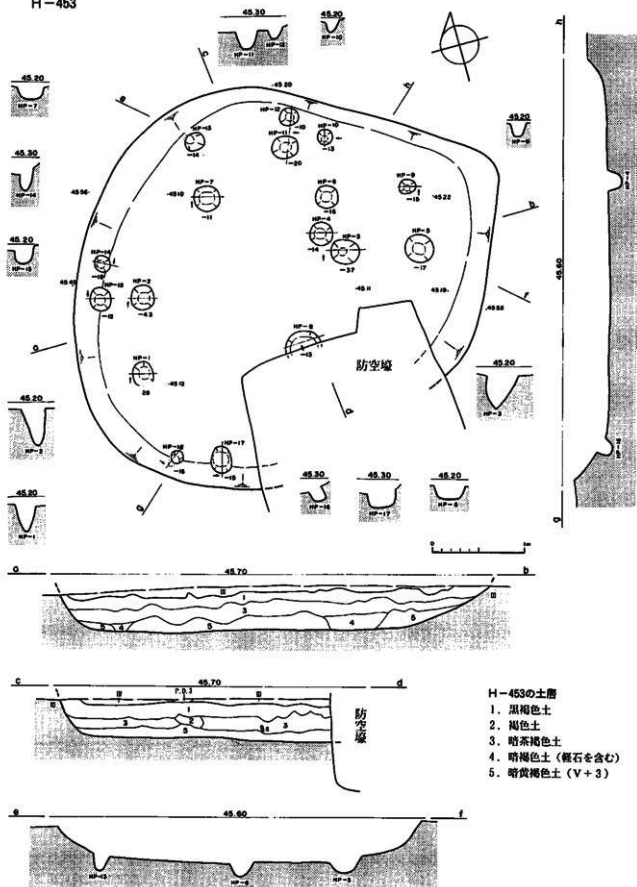
規模：4.35m/4.00m×4.20m/3.50m×0.40m

床面積：11.61㎡

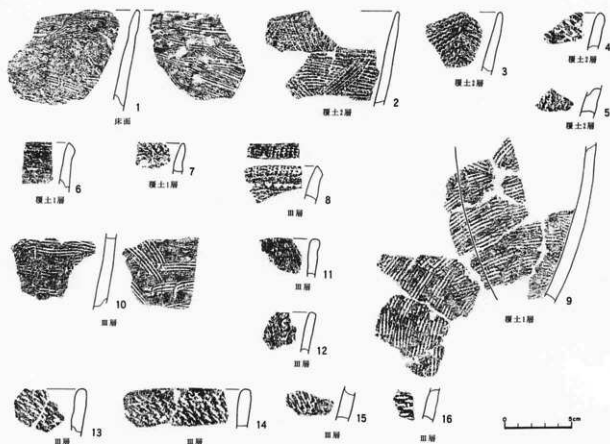
平面形：不整形円形 長軸方向：N-35°-E

確認・調査・土層：I層除去後、Ⅲ層調査中に斑状のP.D.3を含むほぼ円形の黒色土の落ち込みを確認した。住居跡の存在を想定し、直交する土層観察用のベルトを残して順次掘り下げを行った。南東側は、防空壕で切られている。覆土1層は遺物を含む黒褐色土で層厚は約15cmである。覆土2層は部分的に認められたものである。覆土3層は暗茶褐色土で性質は1層に類似し、遺物を多く含む。覆土4層も部分的に認められる落ち込みで、黄色土の粒を少量含む。覆土5層は暗茶褐色土で、3層と類

H-453



図Ⅲ-91 H-453実測図



図Ⅲ-92 H-453出土土器

似するが、こちらの方が固くしまる。この下位にしまりの強い黄褐色土を確認した。これを掘り込むとブライマリーなV層になることからこの面を床面とした。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

重複関係：防空壕により切られる。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層中に構築されている。ほぼ平坦で固くしまる。

壁：立上りは急傾斜であるが、東壁はややゆるやかな傾斜である。

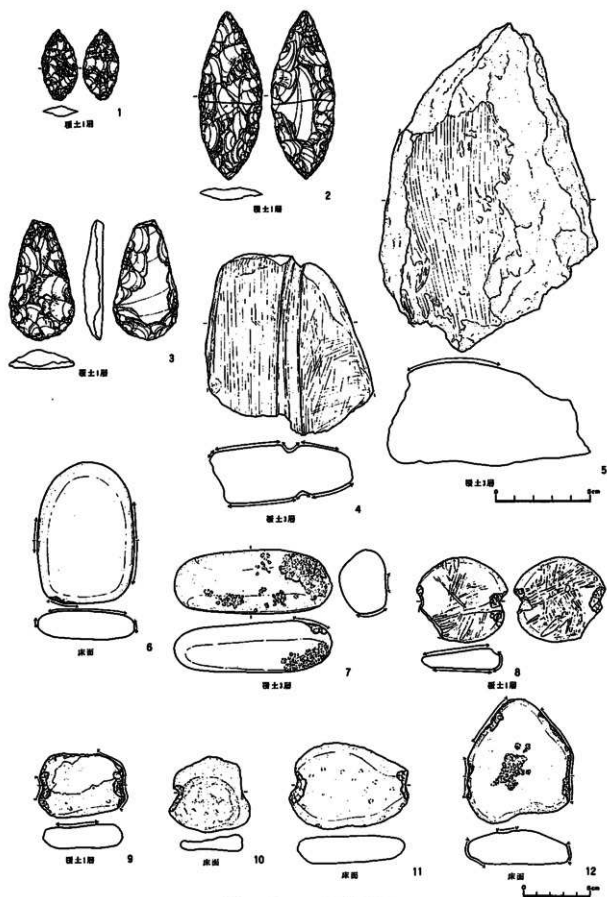
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビッド：柱穴状小ビッドは17個検出されている。HP-13・14は堅壁をめぐるものと思われ、杭状のものである。HP-1・2・3以外は概して浅く、不明瞭なものが多い。

遺物出土状況：出土遺物総数は241点で、土器111点、石器等130点である。礫と剥片を除くと、剥片石器9点、磨製石器2点、礫石器41点である。主に覆土上層からの出土で、床面からはI群D1類土器の破片と石錘、すり石のみである。

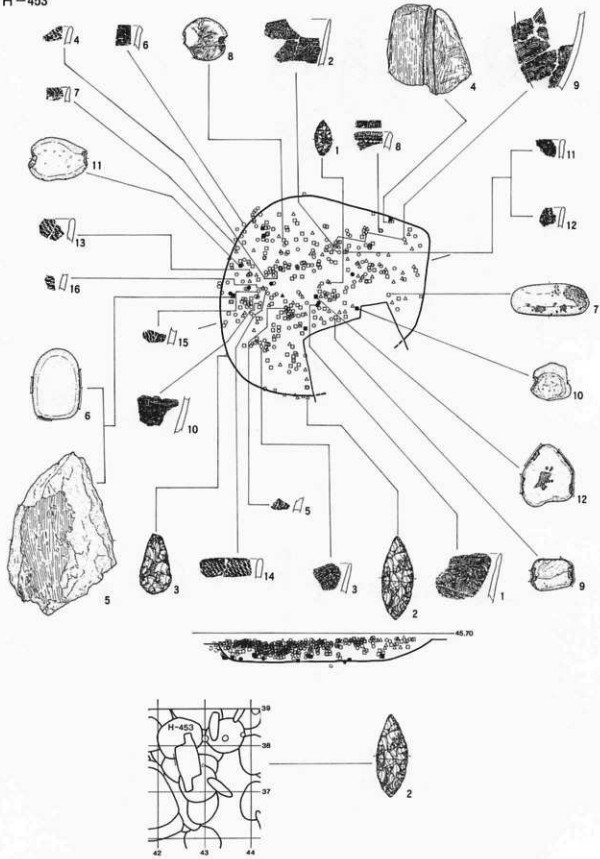
土器：1～3・6・8はI群D1類の破片である。1～3は波状口縁の破片、1は背圧痕文が施される。2は楕円状貝殻腹縁文と内面にはすり消し条痕が施される。3は連続波状文と波頂部から垂下する刺突文で構成される。6・8は平縁の破片と思われる。6は楕円状貝殻腹縁文が施され、口唇は肥厚する。8は口唇部内外面に押引文が施され、楕円形刺突と組み合わせて構成される。9はH-454の覆土出土の破片と接合したI群D2類で、底部の先端と口縁部周辺が欠損する。口縁部形態は波状口縁と思われ、器面には押引文が斜位、横位に施される。10はI群E類の胴部破片で外面には引摺り背圧痕が、内面には条痕が施される。4・5・7・11～16はI群G類の破片で、東銘路Ⅲ式に相当する。





図重-93 H-453出土石器

H-453



図Ⅲ-94 H-453出土遺物分布・接合図

主にⅢ層1層上面と包含層中より出土した。多くの繊維を含むものと含まないものがあり、また焼成が悪く脆いものとそうでないものもある。綾杉状縄文を特色とし、口縁部に文様帯を持つものと持たないもの、胴部に貼付帯を持つものがある。ここで出土したものは繊維を含まず、比較的焼成も良い。4・5・13・14は口縁部文様帯を持つもので、5はR Lの原体で、他はすべてL Rの原体を用いて施文される。7は縄紋圧痕が施され、11・12は口唇部が肥厚している。15・16は同一個体と思われる胴部の破片であり、同じ原体による綾杉状に縄文が施されている。

石器等：1は4類の石鏃で錯交剥離によりねじれている。2は石槍で、42-37Ⅲ層出土破片と接合した。3は1b類の篋状石器。4は擦り切り残片で、厚い素材を表裏からそれぞれ約5mm程擦り込んでいる。5は蛇紋岩製の研磨石材で、研磨は部分的にしか加えられていない。6は床面出土のすり石。7は1類のすり石で平坦部にすり痕が残る。8-12は石鏢である。8は表裏に数条の細いすり痕がある。9は平坦面にU字状のすり痕があり、12は平坦面にたたき痕がある。(笠原 興)

H-454 (図Ⅲ-95~104, 図版16・17・102~104・131・132・169)

位置：41-36・37, 42-36・37

規模：6.95m/6.30m×5.35m/4.80m×0.40m

床面積：24.75㎡

平面形：隅丸方形 長軸方向：N-2°-W

確認・調査・土層：Ⅰ層除去後、41-37を中心としたⅢ層調査中に、P.D.3の混じる黒色土の広がり確認できた。(結果的に北壁と南壁にあたる。)西側中央部は先に調査したT-162で切られる。覆土上面は非常に多くの遺物を含むローム粒の混じる暗褐色土(覆土1層)で、その下位にはやや固くしめる生活面と考えられる様な炭化物を若干含む褐色土がある。これに伴う付属ビッドは確認できなかったが、この面に張り付くようにはば一個体分のⅠ群D1類土器や破片の他、剥片石器、石鏢を中心とした礫石器等が出土している。これを調査後、さらに落ち込みに沿って掘り下げたところ、壁際をめぐるように石鏢を主体とする礫石器が数カ所で見られたため調査を継続し、Ⅴ層中を浅く掘り込んで構築された遺物を多く伴う床面を検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。

重複関係：T-162、H-493・497・520・549・548・518・535と重複し、T-162より古く、他より新しい。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層中に構築されている。構築面直上には汚れた暗黄褐色土が薄く堆積しており、固くしめる。壁：全周とも緩やかに立ち上がる。

炉跡：中央やや東側に長軸約60cmの、微量の炭化物を含んだ浅い凹みが見られたが、明瞭なものは検出されなかった。

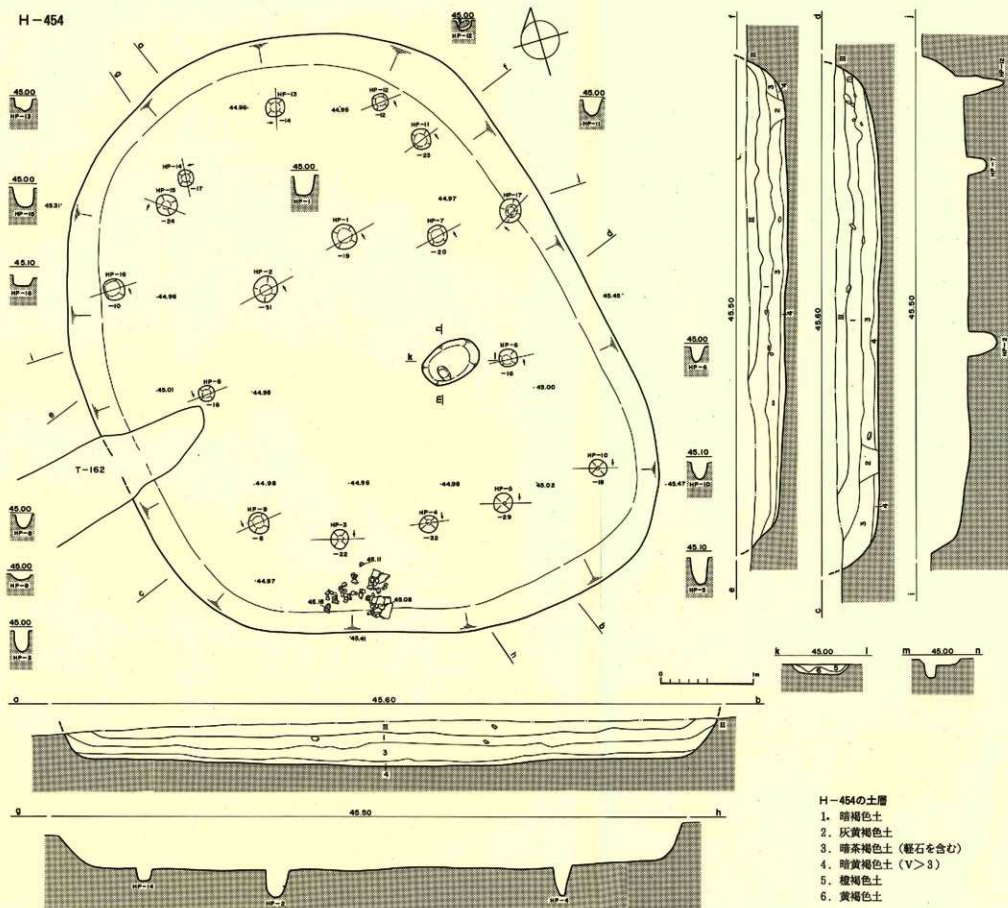
付属ビッド：柱穴状小ビッドが17個検出された。HP-17は深さ約50cmを計り、壁際のもので杭状のものである。HP-12からはたたき石が点出土している。

遺物出土状況：出土遺物総数は2,024点で、土器1,197点、石器等827点である。剥片、礫を除くと、剥片石器60点、磨製石器1点、礫石器214点である。土器は覆土、床面からⅠ群D1類が出土している他、同D2類、覆土上面より同E類が出土している。Ⅰ唇部から胴部までのおおよその器形が復元できたものが14個体にのぼる。

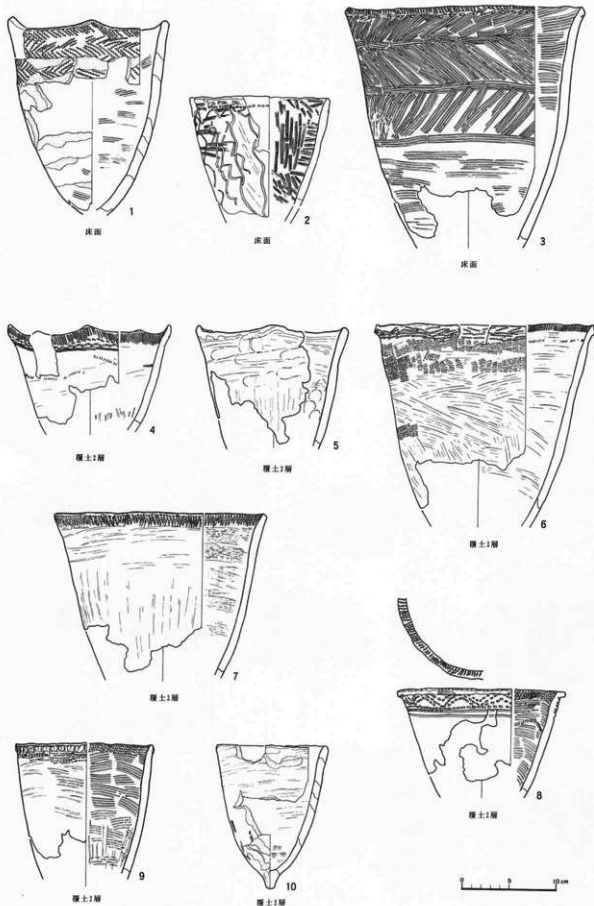
土器：1はH-73床面直上出土破片と接合した。4山の波状口縁で、口縁部がわずかに開く器形である。口縁に沿って羽状に文様が施される。底部はわずかに欠損する。2はH-497覆土2層出土破片

と接合した。平縁で口唇の形は角形である。口縁に沿って刺突が横環し、不規則な波状沈線が幾本も垂下する。内面には全面条痕が施される。3はI群D2類の平縁土器である。口唇断面形は切り出し状で口縁部は外反し、胴部の中位に膨らみを持つ。文様は密な条痕文を施すもので、横位の条痕間に条痕を斜行させ矢羽根状の文様構成となる。4は波頂部の間に副突起を伴う波状口縁で、口唇端部には連続腹縁文が施され、刺突文、鋸歯状沈線、貝刻沈線文が組み合わせられ横環する。5は無文地で四つの波頂部を持つ波状口縁で、口唇部の断面形は角形である。器面は表裏ともにナデ調整が施されている。6は口唇部が肥厚し、口唇内面には貝殻腹縁による連続移動文と爪痕が施され、外面は鋸歯状に施された腹縁文と背圧痕(殻表圧痕)で構成される。7は口唇内外面に貝殻腹縁の連続移動文が施されるもの。8は平縁で口唇部がほぼ水平に外反するもので底部は欠損している。口縁部文様帯は鋸歯状の刺突文と沈線が横環する。9は摘まりあげ手法による爪形文が施されるものである。底部は欠損。10は平縁で口唇部の形は丸形。乳房状尖底である。11は口唇内面に貝殻腹縁による押引文が施されたもの。12は口唇部が外に開き、胴部上位に膨らみを持つ。13・14はI群E類である。13はH-493(覆土1層)・H-531(覆土1層)、T-163(Ⅲ層)・周辺包含層出土破片と接合した。四つの緩やかな波頂部をもつ波状口縁で、ナゾリ手法の微隆起線が施される。補修孔が穿たれており、底部は欠損する。14はH-498覆土1層出土破片と接合した。13と同様の波状口縁で内外面に条痕文が施される。15は覆土1層より出土した尖底部のみの破片で残存する部位は無文である。16・17・21は波状口縁の破片で、16は内面に押引が施される。19は肥厚する口唇をもち、菱形に文様が描かれる。20は3条の沈線文と刺突が横走し、口唇端部にも刺突が施されている。内面はすり消し条痕による調整がなされる。18・22・50・64は櫛歯状貝殻腹縁文で構成されるもの。内面はすり消し条痕による調整がなされる。23・24は鋸歯状沈線を主体に組み合わせられるもの。25・49・65・66はへら状工具の摘みだしによる爪形文のもの。26は無文で口縁部は外反する。27・28はI群D2類で押引によるもの。29・35・39・44・45は波状口縁の破片である。30・32は内面に連続波状文が施される。36・38は内面に斜位の腹縁刺突文が加えられるもの。40~43は平縁の破片で器面は表裏ともにナデ調整が施されている。46は内面にすり消し条痕が、47は内外面に条痕が施される。52~57・62・63も波状口縁の破片である。52は口縁部から開く器形である。波頂部から垂下する刺突と羽状の腹縁文、横走する刺突文で構成される。56は肥厚した口唇の外面に羽状に腹縁文が施され、沈線と刺突で区画され、その下位には背圧痕が施される。60は口縁部内外面に押引文が、59・62はともに内面に押引文が施される。67~70はI群E類である。包含層中より出土した。67・70には条痕文が、68は沈線で格子目が描かれる。71はI群D1類の尖底部で背圧痕が施される。72~76はI群G類で綾杉状網文が施される。比較的焼成は良く、胎土に繊維は含まない。

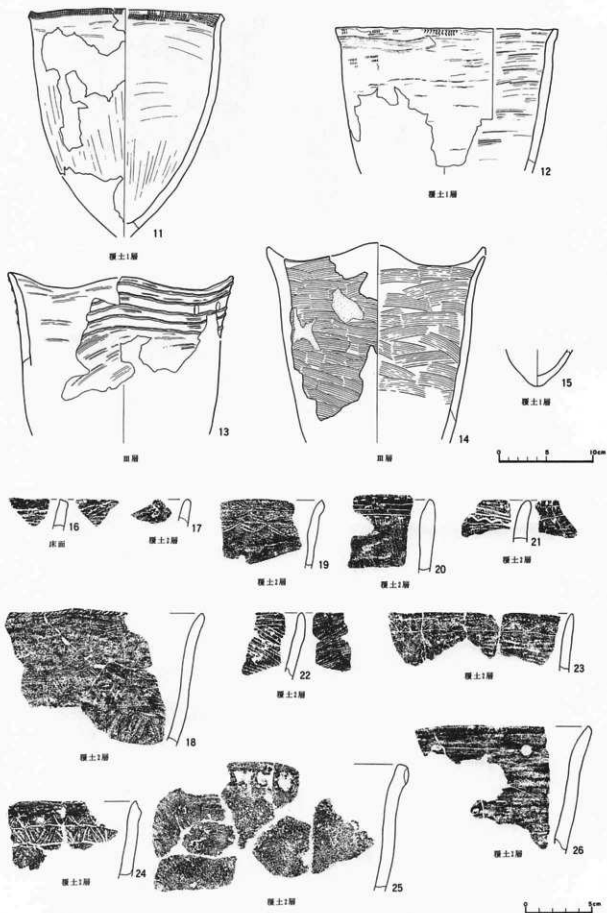
石器等：1~3は石鏃、2は黒曜石製である。4・5は石錐。6~9は石匙。10~13はスクレイパー。14は石核、16は床面出土のRフレイク、15は石斧で擦り切り痕を残す。17・18はたたき石で、18はすり石にも使用されている。19~22はすり石。23・24は砥石で、24はわずかに溝状の研磨痕がある。25~28は石鏝で、25・28は3カ所に抉りを持つ。25は両平面に研磨痕を残す。(笠原 興)



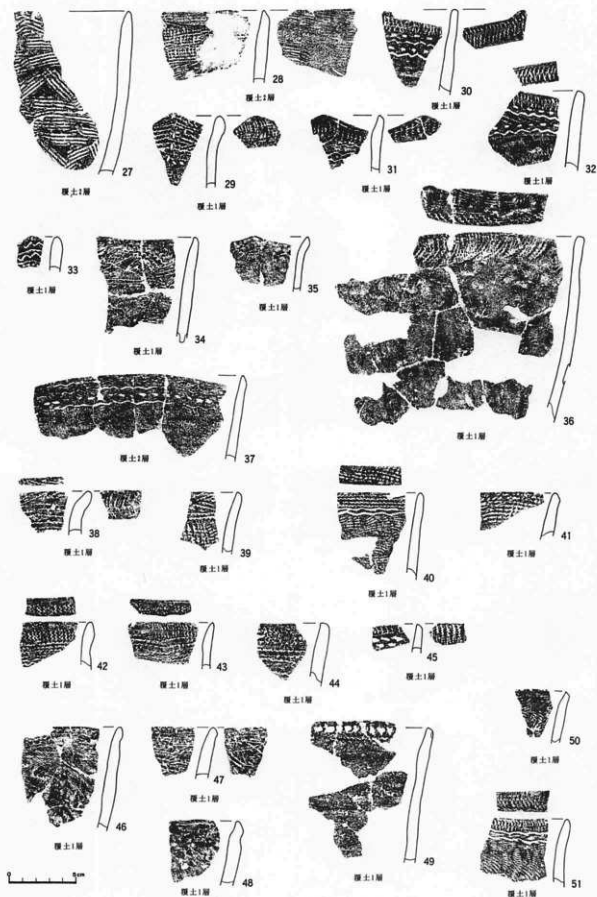
図III-95 H-454実測図



図Ⅲ-96 H-454出土土器 (1)

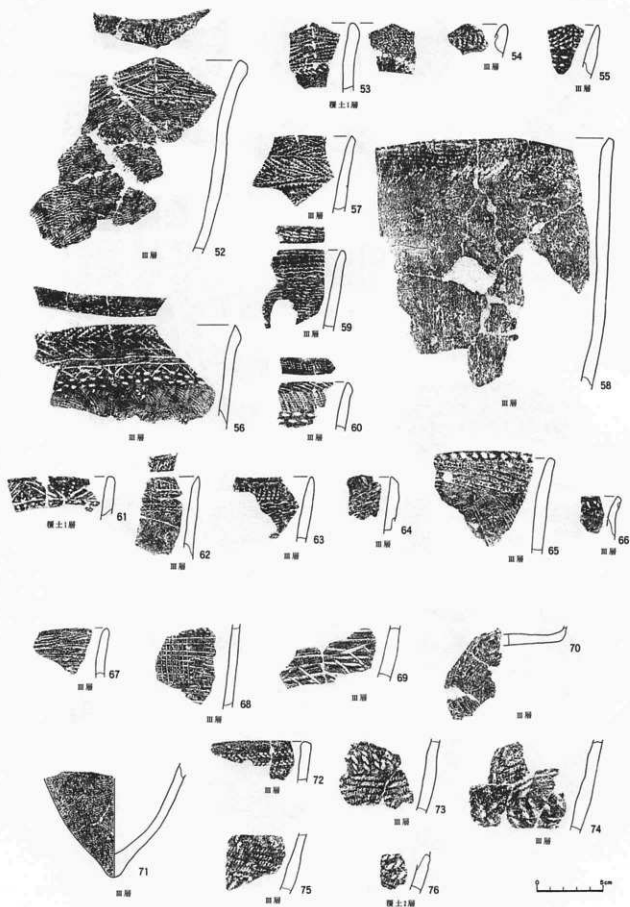


図Ⅲ-97 H-454出土土器(2)

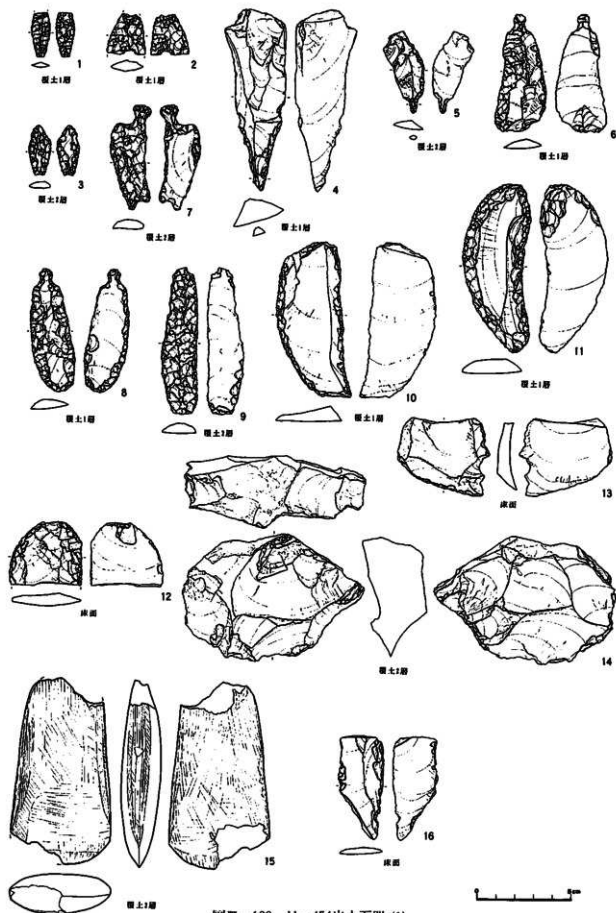


図III-98 H-454出土土器 (3)

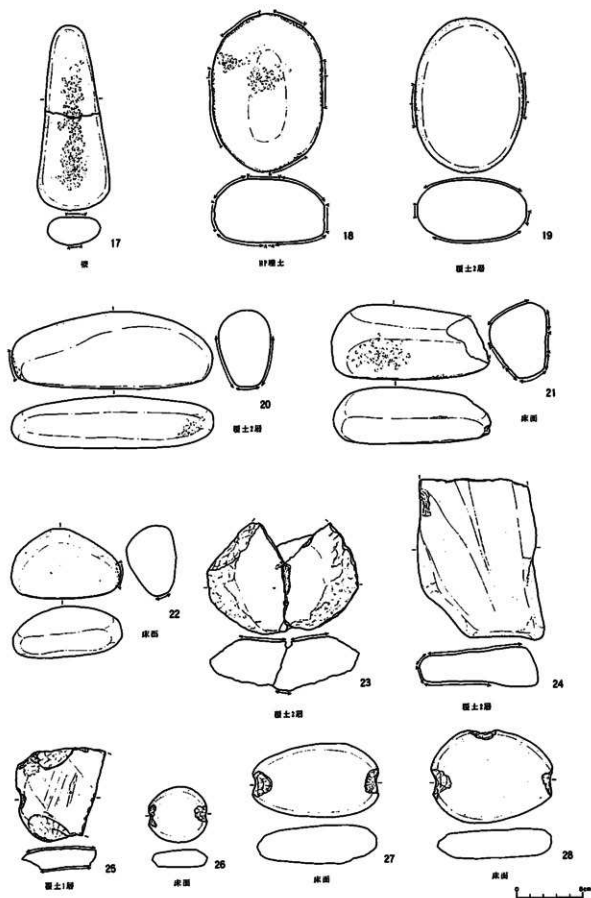




図Ⅲ-99 H-454出土土器(4)



図Ⅲ-100 H-454出土石器 (I)

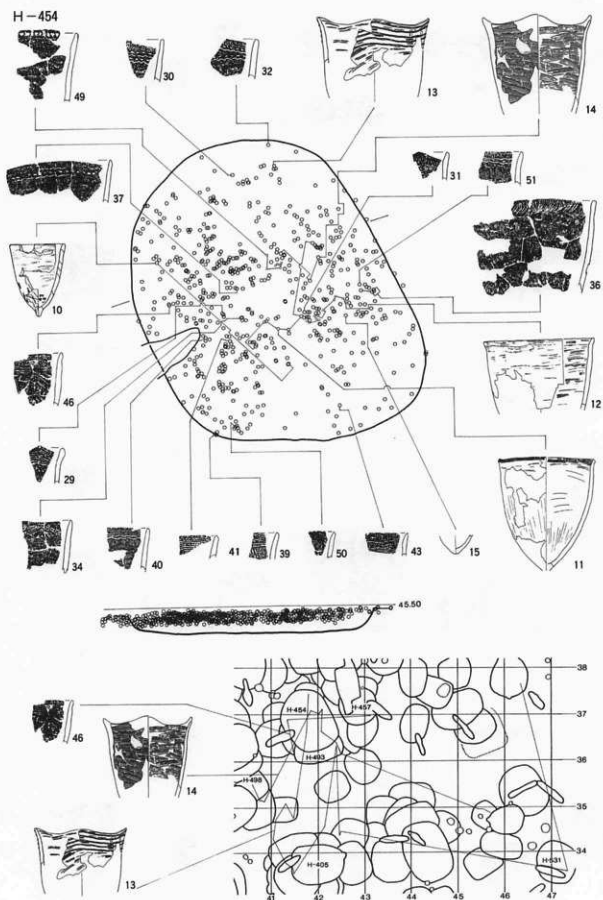


図Ⅲ-101 H-454出土石器(2)

H-454

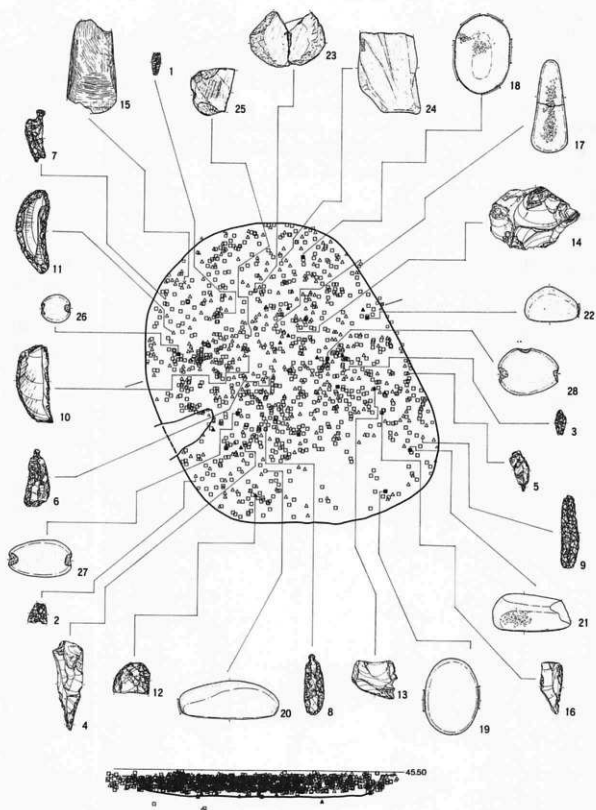


図Ⅲ-102 H-454床面・覆土2層出土土器分布・接合図



図Ⅲ-103 H-454覆土1層・Ⅲ層出土土器分布・接合図

H-454



図Ⅲ-104 H-454出土石器分布図

H-455 (図Ⅲ-105~108、図版18・104・133・170)

位置: 41-37・38、42-37・38

規模: 3.90m/3.40m×(3.90)m/ (3.40)m×0.25m

床面積: (9.30)m<sup>2</sup>

平面形: 円形状 長軸方向: N-17°-W

確認・調査・土層: H-453調査中に、西側ではほぼ円形の暗褐色土の輪郭を確認した。住居跡の存在を想定し、直交する土層観察用のベルトを残して順次掘り下げを行った。東側は、現代の攪乱とH-453で切られる。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

重複関係: H-453・494・519・553に重複し、H-453より古く、他より新しい住居跡である。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層中に構築されている。ほぼ平坦で固くしまる。

壁: ゆるやかな傾斜である。

付属ピット: 柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-3は壁際のもので内傾している。これに対応するピットは確認できなかった。HP-8は木の根跡の可能性はある。

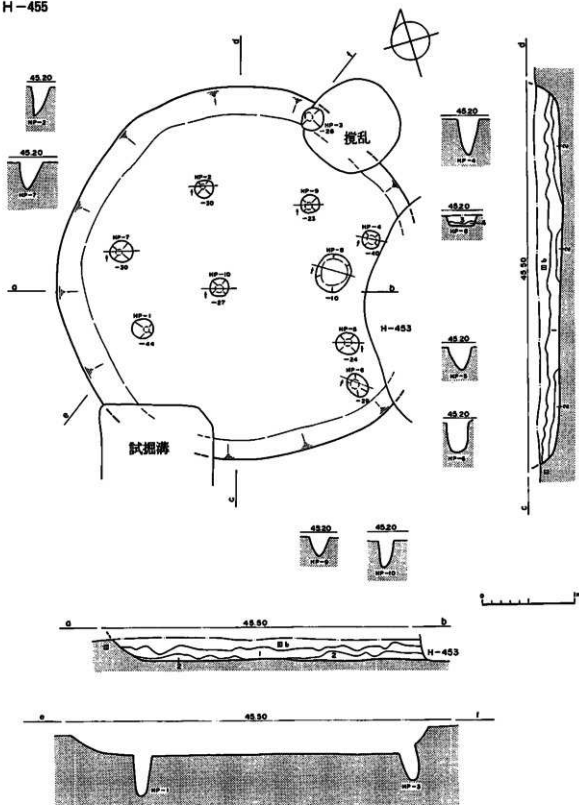
遺物出土状況: 出土遺物総数は364点で、土器235点、石器等129点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器11点、磨製石器2点、礫石器52点である。土器はすべてI群D1類で、床面から土器片の他、石錘、たたき石、砥石が出土している。

土器: 1は覆土1層と41-38Ⅲ層、41-32Ⅲ層出土破片と接合した。口縁部の形態は平縁で、口縁に沿って4列の楕円形の刺突文が横環する。胴部から底部にかけては無文で、底部は乳房状尖底である。内面には条痕が施される。2は小波状口縁の破片で、口縁部にへら状工具による摘まり出しが施される。内面にはすり消し条痕による調整がされている。3は外傾する口唇部をもち、腹縁文、沈線、刺突文で構成される。4は口唇部、口縁部内外面に連続腹縁文が施される。5・7は沈線上に刺突文が加えられたもの。6は波状口縁で楕円形の刺突列と条痕で構成される。8はI群E類で内外面にナデ調整が施される。9は乳房状尖底で、残存する部位は無文である。

石器等: 1は黒曜石製の石鎌。2は蛇紋岩製の石ノミと思われるもの。3・5はたたき石。4は砥石であるが、側縁部にたたき痕を残す。6~9は石錘である。

(笠原 興)

H-455

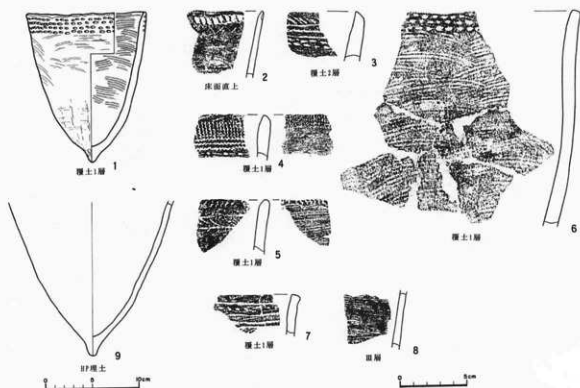


H-455の土層

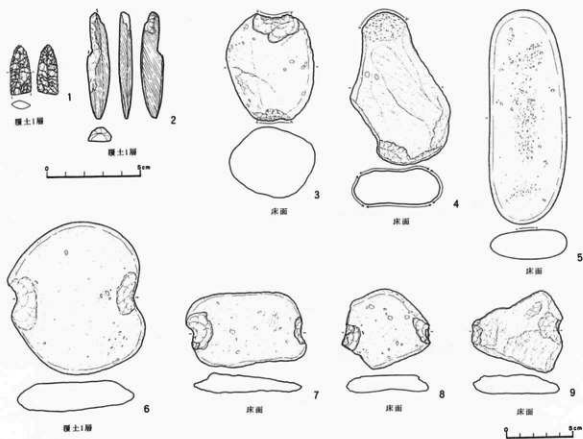
1. 暗茶褐色土
2. 暗黄褐色土 (V>1、軽石を少量含む)
3. 暗灰褐色土
4. 黄褐色土

図Ⅲ-105 H-455実測図



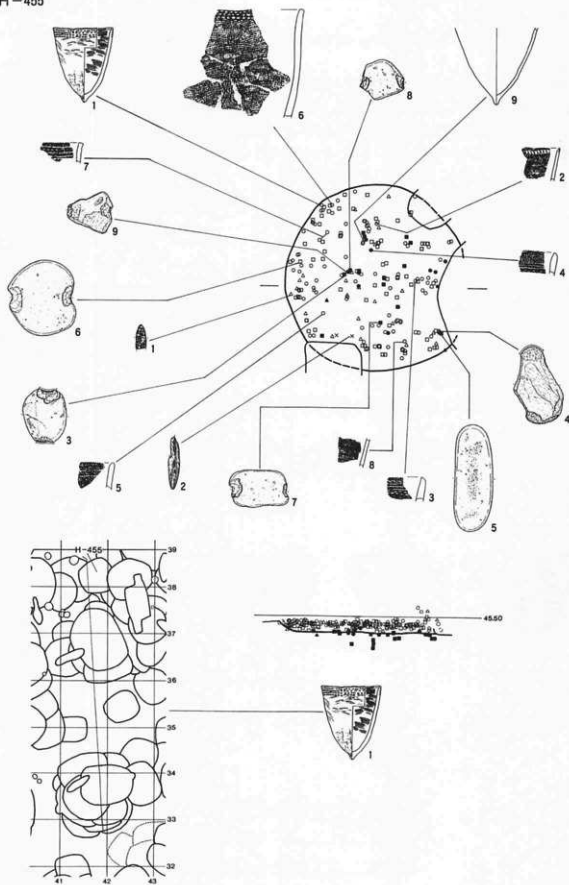


図Ⅲ-106 H-455出土土器



図Ⅲ-107 H-455出土石器

H-455



図Ⅲ-108 H-455出土遺物分布・接合図

H-456 (図Ⅲ-109~112, 図版19・133・170)

位置: 43-37, 43-38

規模: 4.10m/3.70m×3.85m/3.40m×0.20m

床面積: 10.54㎡

平面形: 円形状 長軸方向: N-52°-W

確認・調査・土層: T-169・167調査後に、ローム層の混じる黒褐色土の落ち込みを確認した。直交する土層観察用のベルトを残して掘り下げを行った。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

重複関係: T-169・167、H-458・539、P-265・273・280と重複しており、T-169・167、P-265・273・280より古く、他より新しい住居跡である。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層中に構築されている。ほぼ平坦で固くしまる。

壁: ゆるやかな傾斜である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

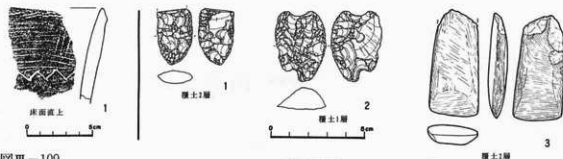
付属ピット: 柱穴状小ピットは8個検出されている。HP-6は壁際のもので内傾している。これに対応するピットは確認できなかった。HP-8は木の根跡の可能性がある。

遺物出土状況: 出土遺物総数は34点で、土器15点、石器等19点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器3点、磨製石器2点、礫石器6点である。土器は大半がI群D1類で、床面からは土器片がほとんどで、他は礫が出土している。

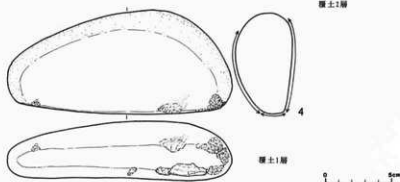
土器: 1は床面直上より出土した波状口縁の破片で、口唇部は外傾し、貝殻腹縁文と鋸歯状沈線で構成される。

石器等: 1は黒曜石製で石匙片と思われるもの。2は覆土1層より出土した両端に挟入のある石器で、黒曜石製である。3は磨製石斧。4はすり石である。

(笠原 興)

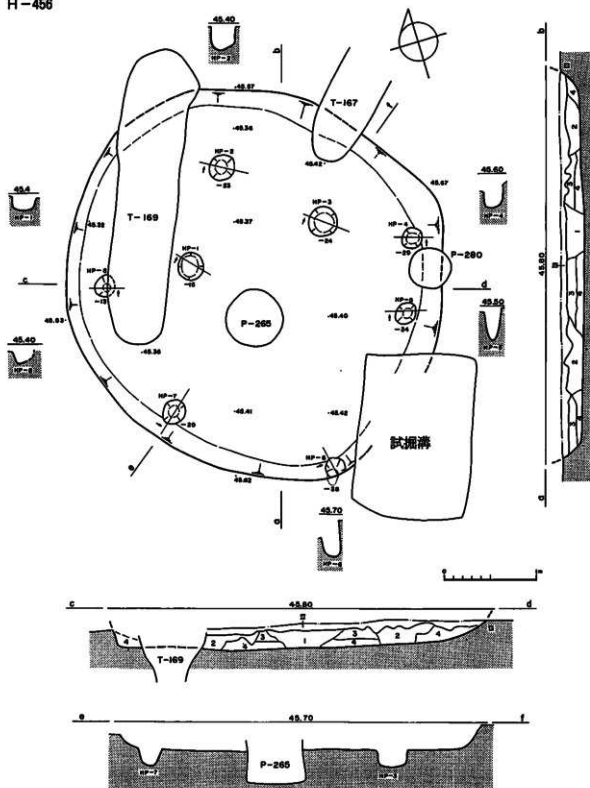


図Ⅲ-109  
H-456出土土器



図Ⅲ-110 H-456出土石器

H-456

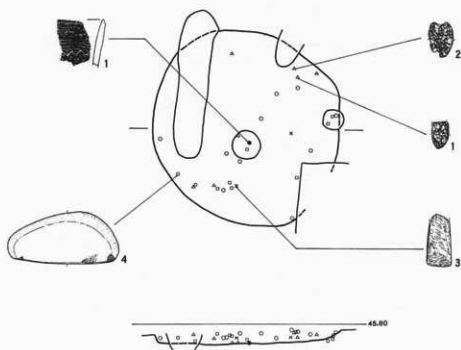


H-456の土層

1. 灰黒褐色土 2. 暗茶褐色土 3. 暗褐色土 (軽石混入)  
4. 暗黄褐色土 (V>3、軽石混入)

図Ⅲ-111 H-456実測図

H-456



図Ⅲ-112 H-456出土遺物分布図

H-457 (図Ⅲ-113~116, 図版20・105・133・171)

位置: 42-36・37, 43-36・37

規模: 4.20m/3.70m×4.20m/3.70m×0.45m 床面積: 11.15㎡

平面形: 円形状 長軸方向: N-10°-W

**確認・調査・土層:** 防空壕、T-170調査後、Ⅲb層中に黒褐色土≫P.D.3の混じるやや円形の広がりを確認した。直交する土層観察用のベルトを残して小トレンチ調査により床面、壁の立ち上がりの検出作業を行った。V層を掘り込んだ床面と考えられる遺物を伴う堅い面を検出し、北東側の壁の立ち上がりを確認した。このため全体的に覆土を掘り下げ、調査を行った。覆土はしまりが強く、ローム粒を多く含む茶褐色土である。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

**重複関係:** T-170、H-491・492・522・535と重複しており、T-170より古く、他より新しい住居跡である。

**時期:** I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

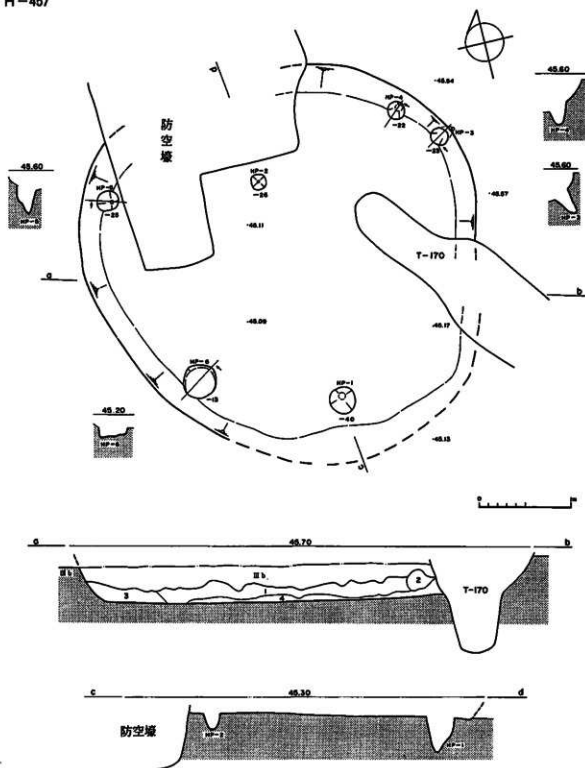
**床面:** V層中に構築されている。ほぼ平坦で固くしまる。

**壁:** 南側はH-491と重複しており、全体は不明であるが、残存する壁の立ち上がりは急傾斜である。

**炉跡:** 北東壁の重複する防空壕との境に、約10cm×10cmの広がりを持つ焼土が検出されたが、これは覆土中にあり、本住居跡に伴うものではない。

**付属ビット:** 柱穴状小ビットは6個検出されている。HP-3は壁際のもので内傾している。HP-4は3に類似するが、浅く、明瞭でない。HP-1・5はやや掘り過ぎの感があるが、ほぼ直立し、おおむね先端部が細くなる。HP-6は木の根跡の可能性がある。

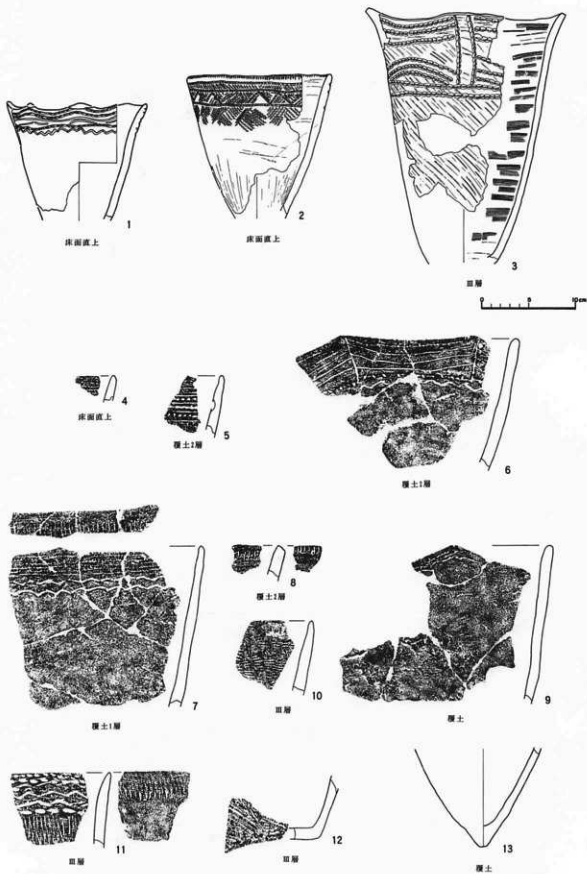
H-457



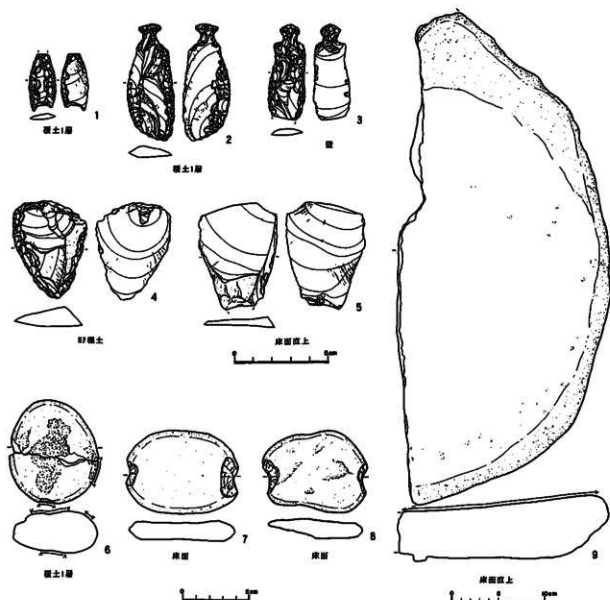
H-457の土層

1. 茶褐色土 2. 黄褐色土 (V 層がブロック状) 3. 暗褐色土 4. 暗黄褐色土

図Ⅲ-113 H-457実測図



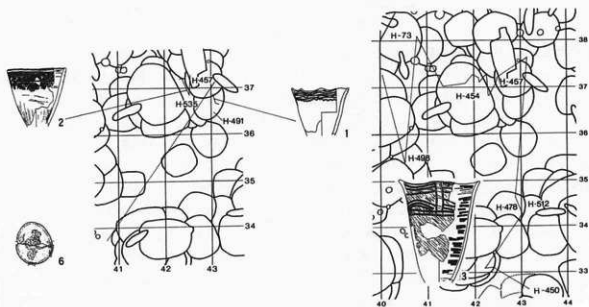
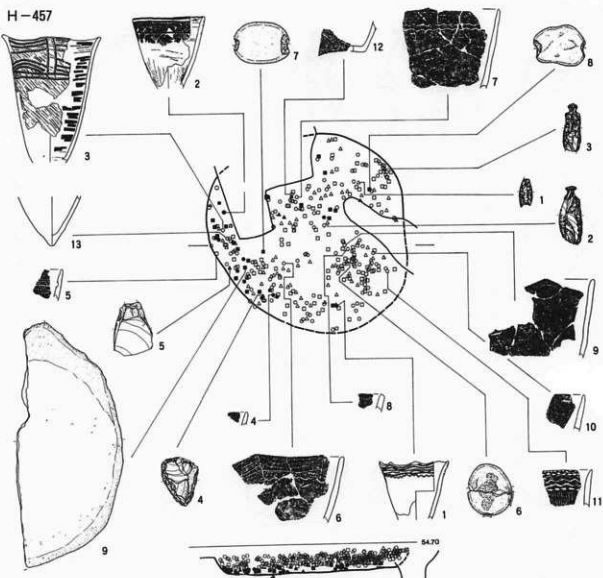
図Ⅲ-114 H-457出土土器



図Ⅲ-115 H-457出土石器

遺物出土状況：出土遺物総数は659点で、土器368点、石器等290点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器37点、礫石器151点である。ほとんどが覆土中からの出土である。床面直上よりI群D1類の底部を除くおおよその器形が復元できる2個体が出土した。また覆土上層より同E類が出土している。土器：3・11・12以外はすべてI群D1類である。1は床面直上とH-491の覆土2・3出土の破片と接合した。42-36・43-36Ⅲ層中よりこれと同一個体と思われる乳房状の尖底部が出土しているが、接点がないためはっきりしない。器形は胴部に膨らみをもち、頸部からやや外に開く。波状口縁で、波頂部の一部が欠損する。口唇部断面形は丸形で、文様は波状口縁に沿って刺突が加えられた波状沈線文と、これとほぼ水平にめぐる2本の沈線が施され、文様帯の終わりに鋸歯状沈線文が横理する。2は床面直上、H-535覆土、42-36Ⅲ層出土破片と接合した。底部を欠損する。器形は砲弾形で口唇断面は丸形である。口唇部内外に貝殻縞線圧痕文が施される。文様は鋸歯状沈線が1条めぐる。3・12はI群E類である。3は緩やかな4つの波頂部をもつ波状口縁で、口縁部は外反し、口唇部は外傾する。文様帯はへら状工具による連続する爪形文で構成され、ほぼ水平にめぐる爪形文で区画される。





図Ⅲ-116 H-457出土遺物分布・接合図

波頂部から2条の爪形文が垂下し、その間を3条一単位の爪形文が横位に2組配されている。内面は横方向に貝によると思われる条痕が施されている。12は平底の底部破片で内外面に貝殻条痕文が施されている。4～9は波状口縁で、4・7・8は口唇内面に貝殻腹縁文を持つもの。5は沈線文と貝殻腹縁痕文、さらに刺突文が組み合わされたもの。6は口唇に沿う数条の沈線文と、刺突の加えられる沈線文に、波頂部から垂下する沈線文で構成される。10は背圧痕文が施される。11は貝殻腹縁圧痕文と鋸歯状沈線文で、内面に押引波状文がある。13は乳房状尖底部の破片で、無文である。

**石器等**：床面出土の石器は、6の石皿、8・9の石錘である。1は尖頭部が欠損する石鏃、2・3は石匙、4はスクレイパー、5は二次加工痕付剥片、7は風化が著しく両平坦面に使用痕のあるたき石である。

(笠原 興)

H-458 (図Ⅲ-117・118, 図版21・133)

位置：43-38, 44-38

規模：——/——×——/——×(0.30)m

床面積・平面形・長軸方向：不明

**確認・調査・土層**：T-167、H-456調査後、H-456の北東側で円形の暗褐色土の広がりを確認した。直交する土層観察用のベルトを設定して、その脇に試掘溝を設け掘り下げを行った。T-167を境に西側は現代の攪乱により明瞭ではないが、東側は暗褐色土が落ち込んでおり、V層を掘り込んでいる遺構の輪郭を確認した。覆土はしまりのやや強い暗褐色土と、ローム粒を多く含む灰黄褐色土で、共に乾燥するとクラックが激しい。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

**重複関係**：T-167、H-456、P-271と重複しており、これらより古い。

**時期**：覆土、周辺包含層から出土した土器はⅠ群D1類土器であることから、本遺構は縄文時代早期中葉のものと思われる。

**床面**：V層を掘り込んで構築されている。残存する面はほぼ平坦で、固くしまる。

**壁**：全体は不明であるが、残存する壁の立ち上がりは緩やかな傾斜である。

**炉跡**：焼土は検出されていない。

**付属ビット**：柱穴状小ビットは16個検出されている。壁際をめぐると思われるものはHP-10～15で、HP-12・13は内傾し、13は先端部が細くなる。他はおおむね直立する。HP-3・4・11は木の根跡の可能性がある。HP-5・6とHP-8・9はそれぞれが切りあうが、いずれも明瞭な柱穴ではない。

**遺物出土状況**：出土遺物総数は14点で、土器片3点、石器等11点である。石器は剥片と礫を除くと、礫石器4点である。床面付近からは石鏃が出土している。

**土器**：1はⅠ群D1類の口縁部で、内外面にすり消し条痕文が施される。

(笠原 興)



図Ⅲ-117 H-458  
出土土器



H-459 (図Ⅲ-119~122, 図版21・105・134・172)

位置: 40-37・38, 41-37・38

規模: 4.20m/3.80m×(3.50)m/(3.10)m×0.35m 床面積: (9.79)m<sup>2</sup>

平面形: 長円形状 長軸方向: N-17°-W

確認・調査・土層: H-73調査後、41-38を中心とする包含層調査中、P.D.3を含むⅢ層を約5cm掘り下げたところで暗茶褐色土の堅穴状の落ち込みを確認した。直交する土層観察用のベルトを設定してその脇に試掘溝を設け、全体に少しずつ掘り下げた。覆土は二層に分けられ、覆土1層は暗茶褐色土でしめりは弱く、3mm~5mm程のバミスを含む。覆土2層は床面と考えられるものの上に堆積する暗茶褐色土である。赤褐色のバミスが多く混じる。掘り込み面はⅢb層中と思われる。

重複関係: H-73・519・549、P-269・279と重複しており、H-519・549より新しく他より古い。

時期: 覆土出土の土器はI群D1類であることから、本遺構は縄文時代早期中葉のものと思われる。

床面: V層をわずかに掘り込んでいる。中央部より北側がやや軟質で低くなっている。

壁: 全体は不明であるが、残存する壁の立ち上がりは緩やかな傾斜である。

炉跡: 焼土は検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-1~4は壁際から約20cm内側をめぐると思われるもので、このうちHP-4はやや内傾する。HP-6~9・10は概して浅く、明瞭でない。HP-5は約40cmを計り、杭状の直立するピットである。

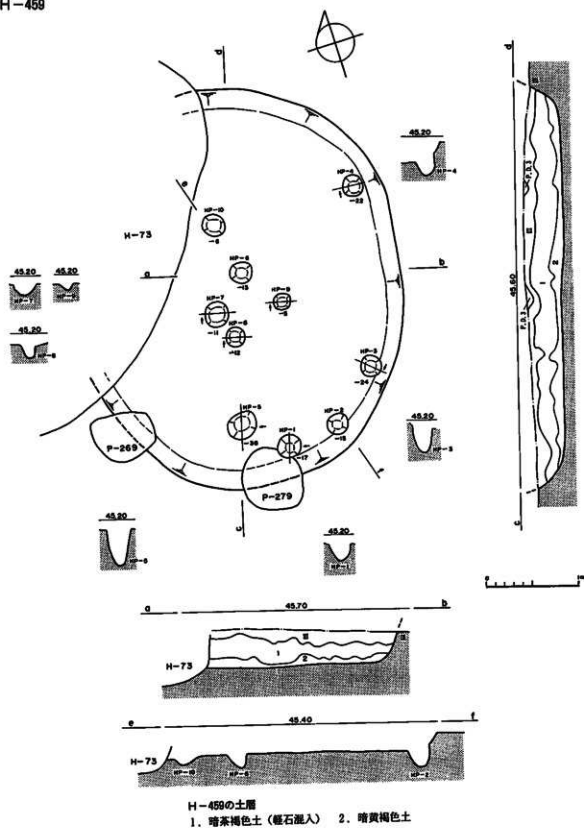
遺物出土状況: 出土遺物総数は166点で、土器114点、石器等52点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器3点、磨製石器1点、礫石器12点である。土器はI群D1類、同D2類、同E類、同G類のものが出土している。E類、G類の土器片は暗茶褐色土の覆土1層上面からの出土がほとんどである。石器は床面から磨製石斧、使用痕の認められない軽石が数点見つかった。覆土からは竈状石器1点、石錘が数点出土している。

土器: 1~3、7・8はI群D1類である。1は覆土1層、41-38Ⅲ層出土破片と接合した。底部は欠損している。胴部はやや張り、口縁部はほぼ直立する。8つの波頂部をもつと思われる波状口縁で、口唇断面は丸形である。文様は貝殻腹縁文が羽状に組み合わせられ、内面にはへら状工具によるナデ調整が施されている。2は波状口縁部の破片で口唇部に腹縁文が施され、波状口縁に沿って沈線がめぐり、波頂部から刺突が垂下する。3は丸形の口唇部を持つ破片で、貝殻腹縁文が斜位、横位に施され、その下位を鋸歯状沈線で区切り、さらに背圧痕文が施されている。内面は指圧痕とへら状工具によるナデ調整が施されている。7・8は口唇部が外傾する破片で、7は羽状に腹縁文が施され、8は口唇端部に刺突の加えられる沈線をもつものである。4はI群E類の破片で、幅約2mmの条痕で斜格子目の文様が描かれ、薄手である。5・6・9はI群G類。6・9は底部の破片で底部端が外へ張り出し、縄端圧痕が施される。

石器等: 1は楔形をした竈状石器。2は床面出土の磨製石斧、3は短軸にも1ヶ所抉りをもつ石錘である。

(笠原 興)

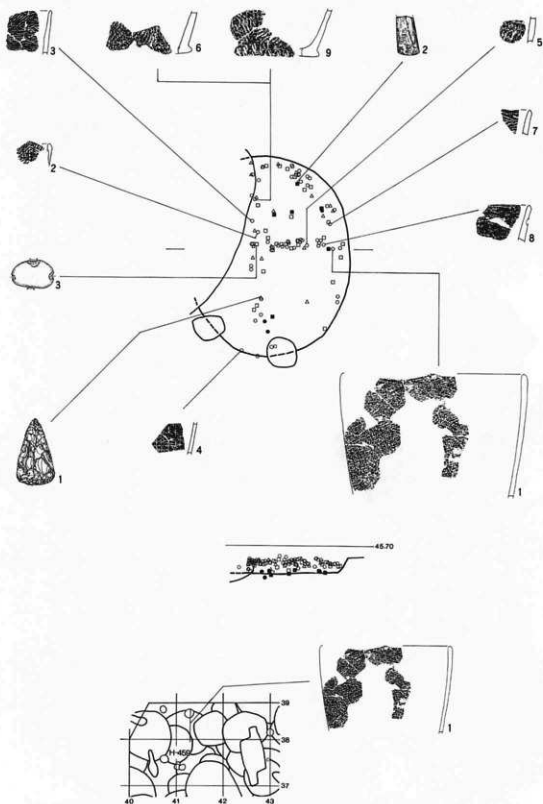
H-459



図Ⅲ-119 H-459実測図



H-459



図Ⅲ-122 H-459出土遺物分布・接合図

H-460 (図Ⅲ-123~131, 図版22・105~108・135・172)

位置: 42-31・32 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.62m~44.98mの斜面上に位置している。

規模: 4.10m/3.80m×3.89m/3.40m×0.48m 床面積: 10.02㎡ 平面形: ほぼ隅丸形状

長軸方向: N-S

確認・確認・土層: 42-31・32の包含層調査中、Ⅲb層中で遺物が多量に出土したことから、遺構が想定され、このため土層観察用の土手を設定し、全体を少しずつ掘り下げる。Ⅲb層中で黒褐色土の落ち込みを検出し、覆土を順次掘り下げる。V層中で暗黄色の堅い面を検出し、壁の立ち上がりも検出した。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は四層に分けられる。覆土1層は堅く、遺物を多量に混入する灰褐色土である。覆土2層は粘質の黒褐色土で、遺物を多量に混入する。覆土3層は軽石を多く混入する暗黄褐色土で、やや砂質である。覆土4層は軽石が少しまじり、やや軟質の暗黄色土である。覆土1層は層厚10cmほどで、他から移動した土と思われる。

重複関係: 本住居跡はT-165と重複し、これより古い。なお、H-554・556とも重複していた可能性もあるが、これらよりは新しい住居跡である。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: V層を深く掘り込んで構築されている。やや凹凸があり、皿状になっている。

壁: 立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が40cm前後、西壁が24cm~33cm、南壁が17cm~29cm、東壁が33cm~42cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

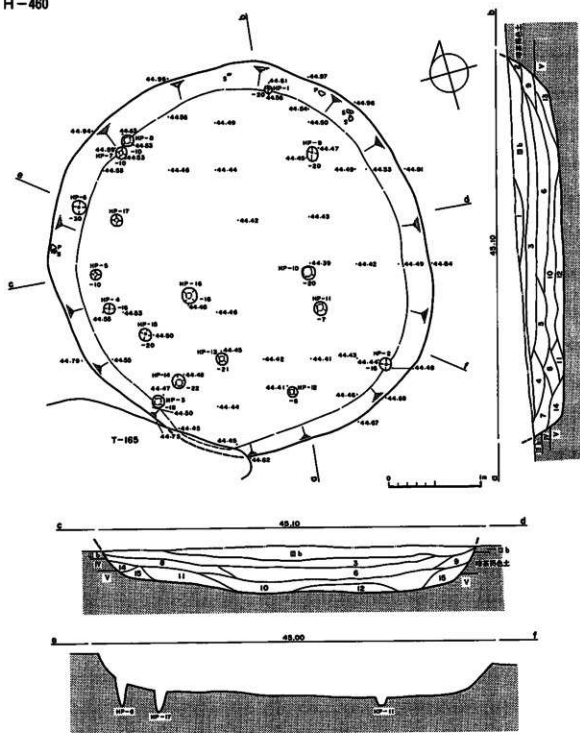
付属ピット: 柱穴状小ピットは17個検出されている。HP-1~8は壁際をめぐるもので、直立し、ほぼ杭状のものである。HP-9・10・11・14・15・16・17は直立しており、位置関係から見て、主柱穴と思われる。小ピットの配列を見るとHP-9・11・15、HP-11・14・17がそれぞれ4本柱に対応するもので建て替えが行なわれたものだろうが、この新旧は明瞭でない。

遺物出土状況: 出土遺物総数は2,629点である。この内訳は土器1,850点、石器等779点である。遺物は覆土1・2層で出土したもので、床面付近からは出土していない。とくに覆土1層上面付近、覆土2層上面付近では一括土器が多く、内面を上にし、水平の状態で出土している。土器はI群D1類土器が出土点数の大半(約99%)を占めている。この他にI群に属する土器(1点)、I群D2類土器が23点出土している。石器では石鏃、石槍、石錐、両面調整石器、石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘(192点)などが出土している。

土器: 1~10・13・17~24は覆土2層、11・12・14・15・25~38は覆土1層、16は壁、39~42は覆土上Ⅲ層出土の土器で、10・42はI群D2類土器で、他はすべてI群D1土器である。1は覆土2層で一括出土したもので、覆土1層、42-31Ⅲ層出土の土器片と接合した個体である。胴部下半は欠失している。口径29.9cm。胴部中位がわずかにふくらみをもつ。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には山形に貝殻腹縁圧痕文を配し、斜位の貝殻腹縁圧痕文を充填する。下端には鋸歯状沈線文が横環する。波頂部から刺突文が垂下する。胴部外面には背圧痕、引摺り背圧痕、ケズリ痕も見られるが、全体にナデ調整が加えられる。内面には丁寧な貝殻条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻。2は覆土2層で一括出土した土器で、42-31掘り出し土出土の土器片と接合した個体である。底部は欠失する。口径27.9cm。胴部中位にわずかにふくらみをもつ。口縁部は肥厚し、口唇部断面形は切り出し状気味である。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁である。口唇部外面には鋸歯状沈線文が施文される。内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状の沈線文、刺突文が施文



H-460

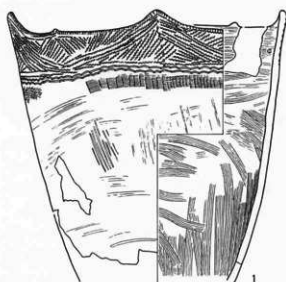


## H-460の土層

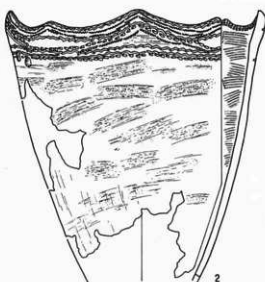
1. 暗褐色土 (Ⅲb) > V 2. 暗褐色土 (Ⅲbが少量混入、かたい) 3. Ⅲb > 5 (全体にかたい、褐色土) 4. 暗褐色土 (ⅠとⅢ類似するがや/かたい、粒子的細い) Ⅴ土 1 5. 6に3まじる(暗褐色土、暗少血混入。覆土1) 6. 黒褐色土(粘質。覆土1) 7. 暗褐色土(Ⅲ)を微量混入、軟質) 8. 6と同質でVを多少多く混入する(覆土1) 9. 暗褐色土(ⅢとⅤ類似する、ⅢがVが少ない) 10. 黄褐色> 暗褐色土、軟石混入。覆土2) 11. V + Ⅲ(暗黄褐色土、やや粘質) 12. 暗黄褐色土(粘質。覆土3) 13. 暗黄褐色土(粘質、Ⅲ層を混入) 14. 7>14 (暗褐色土) 15. 暗茶褐色土(軟石混入)

图 11-123 H-460 实测图

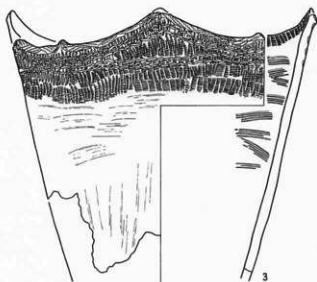
される。内面には貝殻条痕文が加えられる。補修孔が見られる。3はP-286覆土1層、42-31揚げ土、41-31Ⅲ層出土の土器片が接合した土器で、胴部下半は欠失している。口径33.2cm。胴部から直線的に外傾する。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文、内面には連続押引文が施文される。口縁部外面には連続波状文の上に鋸歯状の沈線文を加える。胴部上位には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。外面にはすり消し条痕文、内面には貝殻条痕文、ナデ調整が加えられている。焼成良好で堅い。つくりは丁寧である。4は41-30揚げ土出土の土器片と接合した土器で胴部下半は欠失する。口径27.4cm。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。胴部は直線的に外傾し、口唇部がわずかに肥厚する。上面観は八角形状である。口唇部内面には貝殻腹縁により連続押引文が施文される。口縁部から胴部にかけての外面には横線する貝殻腹縁圧痕文を配し、上、間を斜位の貝殻条痕文を充填する。下端には鋸歯状沈線文を施文し、波頂から刺突文が垂下する。胴部外面には背圧痕が加えられ、内面はナデ調整が加えられている。貝殻腹縁文は繊細で、丁寧に施文されている。5はH-450覆土2層(黒褐色土)、42-31Ⅰ・Ⅲ層、42-32揚げ土出土の土器片と接合した土器である。口径12.4cm。尖底部は欠失する。口縁部はわずかに外反する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には横位の貝殻腹縁圧痕文が粗く施文される。内外面にはナデ調整が加えられ、底部外面には縦方向にケズリ痕が認められる。6は40-31Ⅰ層、41-31Ⅰ・Ⅲ層、41-32Ⅲ層出土の土器片と接合した土器で、底部は欠失する。口径17.8cm。胴部はほぼ直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面はナデ調整、内面は貝殻条痕文が加えられている。器表面はザラザラしている。7は覆土2層で一括出土した土器で、ほぼ全体が復元できた個体である。口径17.7cm、器高23.6cm。平縁の乳房状尖底土器である。胴部下位にわずかにふくらみをもつ。口唇部は角形に仕上っている。口唇部内面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。器形は胴長で美しいが、文様は粗雑である。8は壁、H-450覆土1層、H-472覆土1層、42-32揚げ土、43-32Ⅰ層出土の土器片と接合し、ほぼ全体が復元できた個体である。口径17.7cm、器高24cm。平縁の乳房状尖底土器である。口縁部内面は肥厚し、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。口唇端部には3ヵ所、丸いヒモ状の圧痕が見られる。厚手の土器で、胎土には小石が多く混入している。9は壁、43-31Ⅲ層、45-31Ⅲ層出土の土器片が接合し、ほぼ全体が復元できた個体である。口径13.2cm、器高約17.8cm。平縁の乳房状尖底土器である。胴部はほぼ直線的に外傾し、口唇部は丸く仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。器形は鋭角的で、全体的にシンプルな美しさがある。10は覆土2層で一括出土した土器で、T-67覆土上層出土の土器片と接合した個体である。胴部下半は欠失している。口径13.4cm。口縁部はゆるやかに外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。内外面には貝殻条痕文が加えられている。11は覆土1・2層、T-165覆土上層、42-31Ⅲ層出土の土器片が接合した土器である。胴部下半は欠失している。口径20.4cm。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。胴部外面には引摺り状の背圧痕が加えられ、内面にはナデ調整が加えられている。12は覆土1層で一括出土した土器で、壁・覆土1・2層、H-410覆土1層、46-33Ⅰ層出土の土器片が接合し、全体が復元できた個体である。口径15.5cm、器高21.5cm。平縁で、乳房状尖底土器である。口唇部は丸く仕上っている。口縁部から胴部上位にかけて粗雑な貝殻腹縁圧痕文の上に、ロッキング状の貝殻腹縁文が施文されている。胴部下半と内面には貝殻条痕文が加えられている。器形は鋭角的で、美しい。13は壁・覆土1・2層、42-



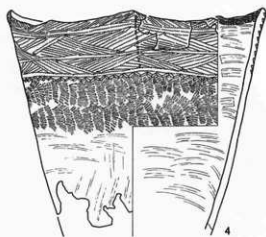
腹土1層



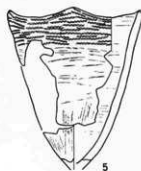
腹土1層



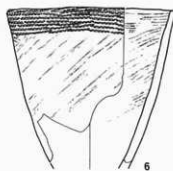
腹土1層



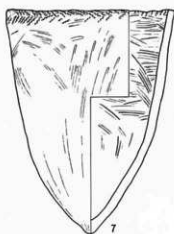
腹土1層



腹土1層



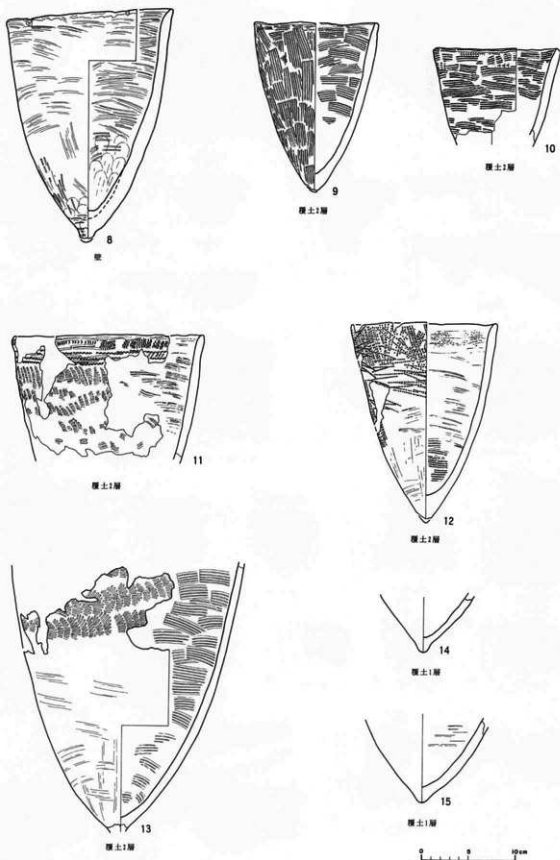
腹土1層



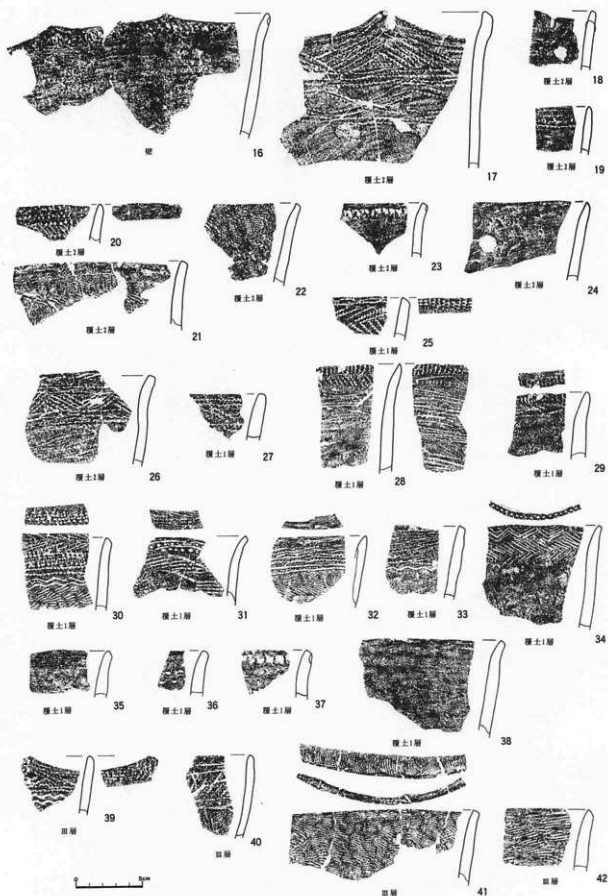
腹土1層



図Ⅲ-124 H-460出土土器(1)

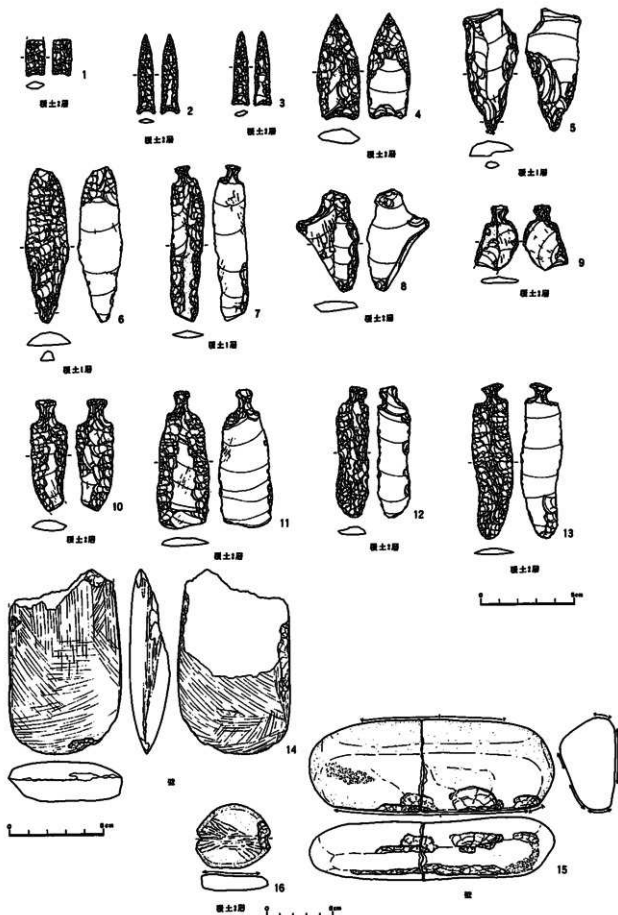


図Ⅲ-125 H-460出土土器 (2)



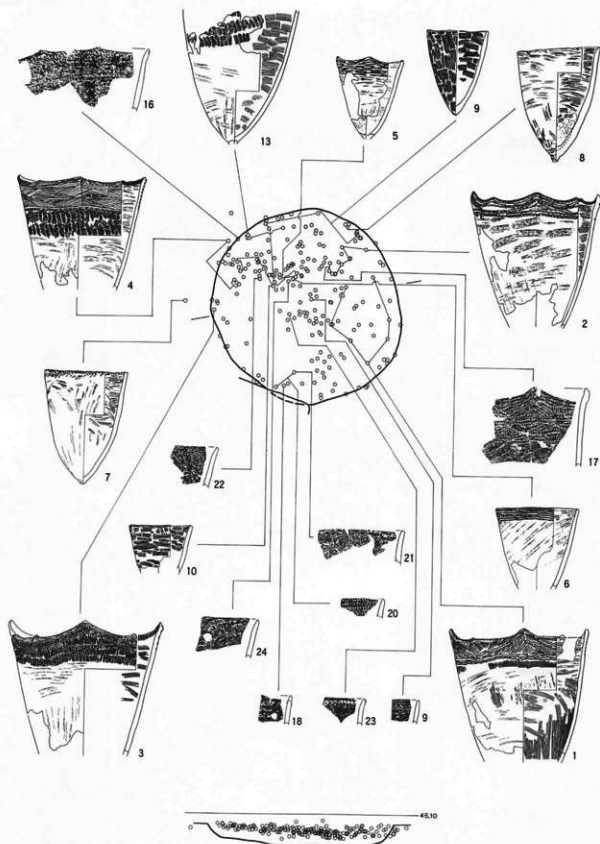
図Ⅲ-126 H-460出土土器(3)

32Ⅲ層、43-31揚土出土の土器片と接合した土器で、口縁部・尖底部は欠失している。胴部下位がわずかにふくらむ。胴部上位には背圧痕、他は粗いナデ調整。内面には貝殻条痕文が加えられている。つくりは粗雑である。14・15は乳房状の尖底部である。16は44-32Ⅲ層出土の土器片と接合した小波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面にはすり消し条痕文が見られる。17は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文により連続波状、菱形、横走の文様を描いている。内面は貝殻条痕文が加えられている。やや軟質である。18は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面とも粗いナデ調整で、内面にはススが付着している。口唇端部には丸いヒモ状の圧痕が見られる。19は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内外面ともナデ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。20は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には刺突文が施文され、斜位の沈線文も見られる。口唇部内面には粗雑に無肋筋の貝殻により腹縁圧痕文が施されている。21は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には全体的に背圧痕が加えられる。内面はナデ調整。22は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。外面には背圧痕が加えられ、内面には貝殻条痕文が加えられている。23は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされる。内面は丁寧なナデ調整。24は平縁の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。内面には貝殻条痕文が加えられ、補修孔が見られる。焼成良好で堅緻。25は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には貝殻腹縁による連続押引文、外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。26は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部外面には斜位の貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には櫛歯状腹縁による連続波状文の上に横走する腹縁圧痕文を施文する。口縁部内面には貝殻条痕文が加えられている。つくりは粗雑である。27は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面はナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が含み、脆弱である。28は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。口唇部内外面、口縁部外面には連続腹縁文が施文される。内外面には貝殻条痕文が加えられている。胎土には砂粒が多く、脆弱で、器表面がザラザラしている。29は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面ナデ調整。30は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続押引文、口唇部・外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。口縁部外面には連続押引文、貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文されている。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。31は45-32Ⅰ層出土の土器片と接合した平縁の口縁部破片である。口唇部は角形に仕上っている。口縁部は外反する。口縁部外面には沈線、刺突文、内面には押引文、胴部外面には貝殻腹縁による押引文が施される。内面には貝殻条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻。32は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、沈線文が施文され、胴部外面には背圧痕が加えられている。内面の一部に背圧痕が見られる。焼成良好で堅緻。33は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には櫛歯状腹縁文、下端には鋸歯状沈線文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。34は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には鋸歯状、羽状に沈線文が施文され、口唇部には刺突文が施されている。内外面はナデ調整。35は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には櫛歯状腹縁文が見られるが、内外面にはナデ調整が加えられている。胎土は粗く、つくりも粗雑である。36は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には刺突文が見られ、内外面はナデ調整。37は平縁の口縁部破片で、口



図Ⅲ-127 H-460出土石器

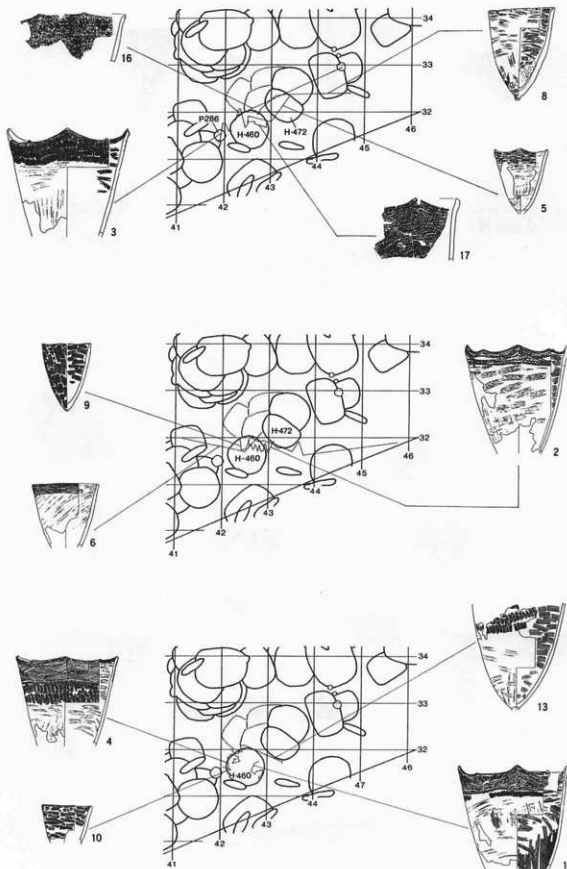
H-460



図Ⅲ-128 H-460覆土2層出土土器分布・接合図(1)

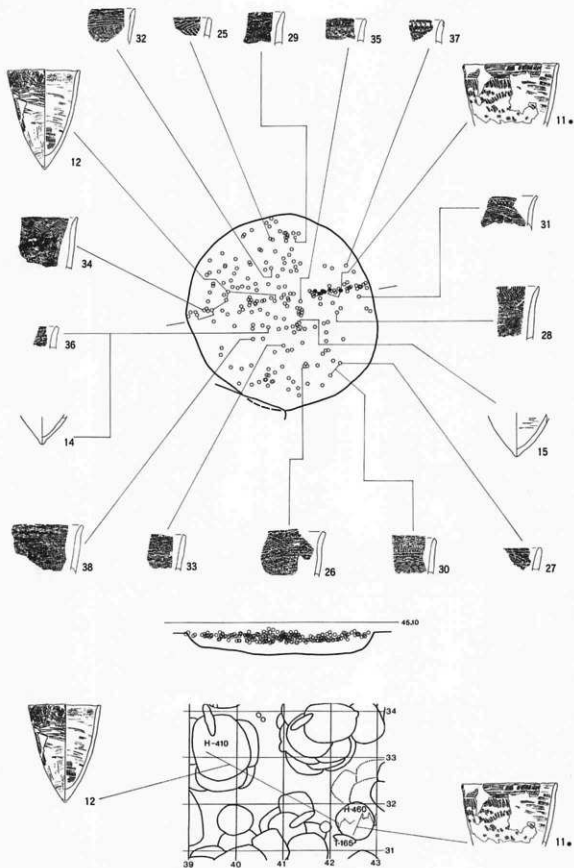


H-460



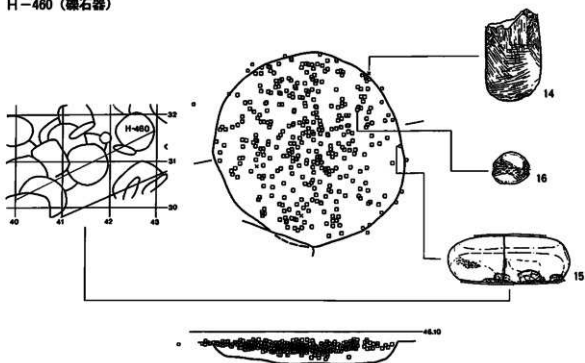
図Ⅲ-129 H-460覆土2層出土土器分布・接合図(2)

H-460

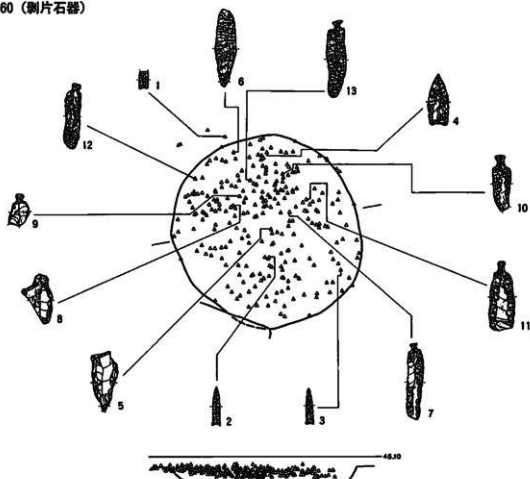


図Ⅲ-130 H-460覆土1層出土土器分布・接合図

H-460 (礫石器)



H-460 (剥片石器)



図Ⅲ-131 H-460出土石器分布・接合図

唇部断面形は切り出し状である。口縁部はゆるやかに外反する。口唇部外面にはへう状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面はナデ調整。38は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。39は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続押引文、外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が見られ、波頂部から刺突が垂下している。40は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には背圧痕が粗雑に施文されている。胎土には小石、砂粒が多く、脆弱である。41は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面、口唇部内面の一部には背圧痕が加えられている。また口唇端部には丸いヒモ状の圧痕が残されている。42は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。内面はナデ調整、外面には引摺り背圧痕が加えられている。焼成良好で堅緻。

石器：1～4は石鏃。1は黒曜石製で、先端部が欠損している。2・3は2b類に属するもので、細身長身で、狭長な器体が付着されている。4は1b類に属する大型のものである。5・6は石錐。5は1類に属するもので、腹面左側には厚みを減じる調整が加わっている。6は4類のもの。7～13は石匙。9は黒曜石製。14は蛇紋岩製の石斧。15は断面三角形のすり石で、閃緑岩製である。16は凝灰岩製の石錐で、平面に溝状のすり痕が残っている。

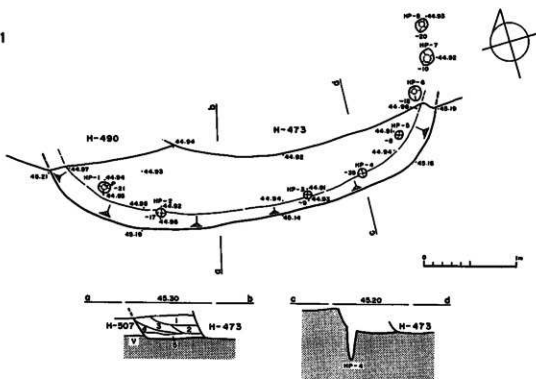
(和泉田 毅)

H-461 (図Ⅲ-132～136, 図版23・108・136・172)

位置：41-32, 42-32 標高45.18m付近の平坦地に位置している。

規模：床面積・平面形・長軸方向：不明

H-461



H-461の土層

1. 茶褐色土 2. 茶褐色土 (3よりやや黒色あり) 3. 茶褐色土 (1より黄色土粒多い) 4. 暗茶褐色土 5. 3>V

図Ⅲ-132 H-461実測図

**確認・調査・土層：**H-473・490の南壁で覆土状の土の落ち込みが確認され、弧状に茶褐色土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げる。H-473・490の床面とはほぼ同一面でV層の堅い面が検出された。壁の立ち上がりはV層中で若干見られたが、他遺構の覆土との区別が明瞭でなく、やや堅い面が見られたので、これを本住居跡の壁とした。掘り込み面ははっきりしないが、Ⅲb層中であつたものと思われる。覆土はほぼ一層で茶褐色系の土である。ただ床面直上および壁際には暗茶褐色土が見られた。Ⅲb層と黄色土の混合土である。

**重複関係：**本住居跡はH-473・490・506・507と重複しており、H-473・490より古く、他より新しい。

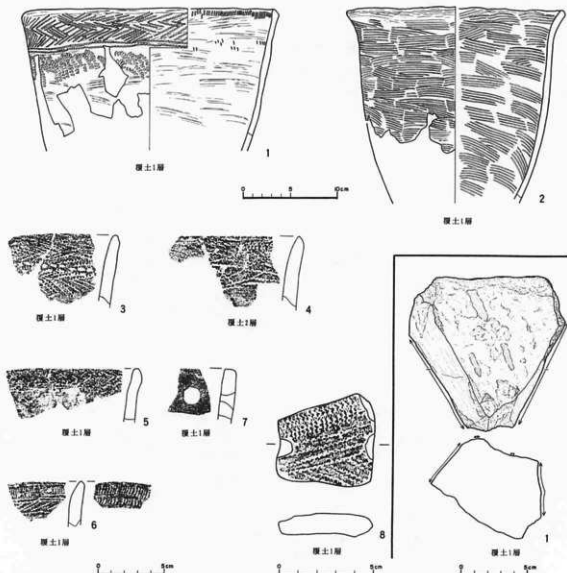
**時期：**I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

**床面：**周辺の遺構の床面とはほぼ同一面で、V層をやや深く掘り込んで構築されているものと思われる。残存部分は平坦で、堅い。

**壁：**立ち上がりはほぼ急傾斜である。検出面からの壁高は、21cm～25cmである。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。

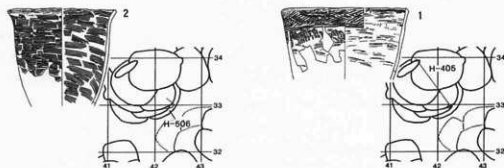
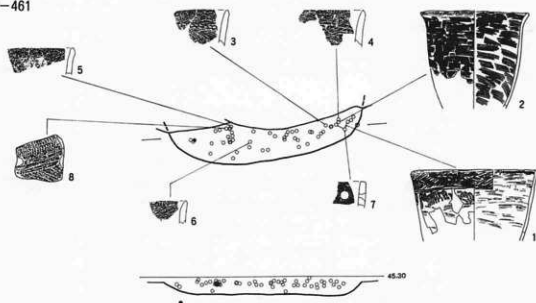
**付属ピット：**柱穴状小ピットは8個検出されており、すべて壁際をめぐるもので、ほぼ直立し、杭状



図Ⅲ-133 H-461出土土器

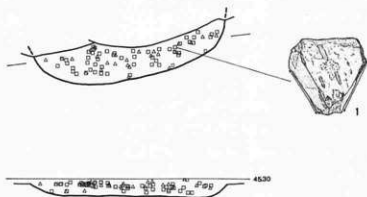
図Ⅲ-134 H-461出土石器

H-461



図Ⅲ-135 H-461出土土器分布・接合図

H-461



図Ⅲ-136 H-461出土石器分布図

である。HP-6～8はH-473の床面で検出されたものである。

遺物出土状況：出土遺物総数は352点である。この内訳は土器243点、石器等109点である。遺物はHP-1覆土中でI群D1類土器が1点出土した以外は、すべて覆土中で出土したもので、とくに覆土上層から多く出土した。出土土器はすべてI群D1類のもので、石器では石錐、たたき石、すり石、砥石、石錐(30点)などが出土している。

土器：1～8は覆土1層から出土したもので、8は土器片錐。すべてI群D1類土器である。1は覆土1層で一括出土した土器で、H-473壁・覆土2層、H-405覆土2層出土の土器片と接合した土器である。口径27.3cm。胴部はほぼ直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続腹縁文が施文され、口唇部外面には羽状の貝殻腹縁圧痕文が、下端には横位の貝殻腹縁文が施文されている。外面には背圧痕、貝殻腹縁による押引文が加えられる。内面にはナデ調整。焼成良好で堅緻。2は覆土1層で一括出土したもので、H-506覆土1層、42-33Ⅰ・Ⅲ層、42-32Ⅲ層出土の土器片と接合した個体である。底部は欠失している。口径23.3cm。胴部中位にふくらみを持ち、口縁部は外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。内外面には貝殻条痕文が加えられている。器形は丸みを持ち、優美である。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部にはミガキ痕が見られる。口縁部外面には横位の刺突文の上下に羽状の貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面はナデ調整。胎土は硬いが、粗い。4は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が粗く施文されている。内外面はナデ調整。5はH-473の壁出土の土器片と接合したもので、平縁の口縁部破片である。口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には櫛歯状腹縁文が施文され、下端には沈線が施されている。内外面は粗いナデ調整。内面にはススが付着している。胎土には砂粒が含み、脆弱である。6は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇・口縁部内面には押引文、ロッキング状に連続腹縁文が施文される。外面には連続腹縁文、貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面ナデ調整。7は口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。内外面はナデ調整で、円孔が見られる。焼成良好で堅緻。8は口縁部を利用した土器片錐。口唇部内外面には連続腹縁文、外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。

石器：1は凝灰岩製の砥石である。側縁部に使用痕がある。

(和泉田 毅)

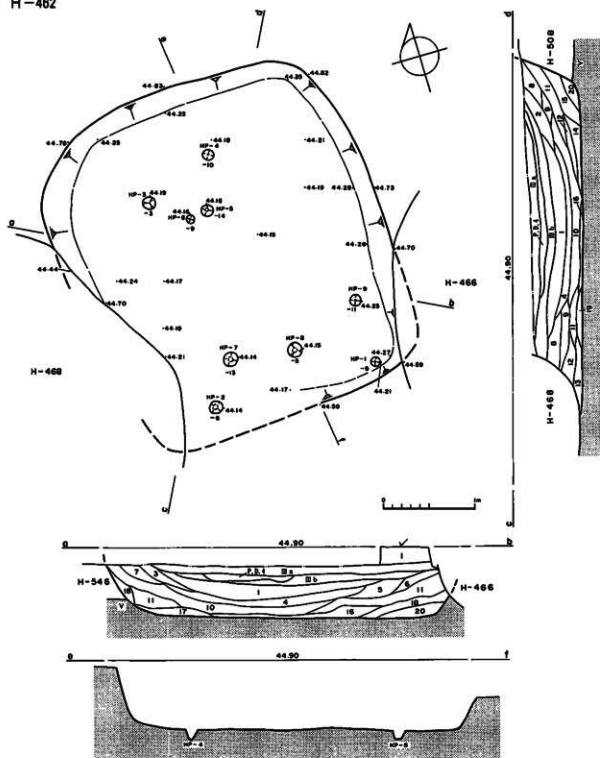
H-462(図Ⅲ-137～142、図版23・108・109・136・173)

位置：40-30・31、41-30・31 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.50m～44.84mの緩斜面上に位置している。 規模：(3.70)m/(3.20)m×(3.40)m/(2.92)m×0.52m 床面積：(9.04)m<sup>2</sup>

平面形：ほぼ隅丸方形 長軸方向：N-S

確認・調査・土層：40-30・31、41-30・31の包含層調査中、Ⅰ層を除去し、Ⅲb層中でP.D.3、黒味のあるⅢb層の広がりを確認した。土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げ、Ⅳ層直上付近でⅢb、黒褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲb層、黒褐色土で一括土器が出土し、これらの写真撮影、遺物取り上げを順次行ない、覆土を掘り下げる。Ⅴ層中で黄色土の堅い面が検出され、その直上にⅤ+黄茶色土の炭化物が混入する汚れた土が検出され、この上面を生活面として、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はおおよそ四層に分けられる。覆土1層は覆土2層とⅢb層がまじり合っている土である。覆土2層は粘質の黒褐色土で、遺物が多く混入する。覆土3層はやや堅い茶褐色の混合土である。壁際には覆土2層と同質でやや黒味の強い暗茶褐色土が厚く堆積していた。覆土4層は床面直上に見られる土で、汚れた軟質の黄茶色土である。覆土2層上面、覆土3層上面で一括出土した遺物はそれぞれ覆土2層、覆土3層で取り上げている。

H-462



## H-462の土層

1. 黒褐色土（粘質、覆土1） 2. 暗褐色土（ $>V$ 、ややかたい） 3. 4+2 4. 茶褐色土（覆土2） 5. 4より重bが多い 6. 暗褐色土（ $>V$ 、軟質） 7. 重b $>V$  8. 重b $>V$  9. 茶褐色土（4+8） 10. 黄褐色土（覆土3） 11. 暗茶褐色土 12. 暗黄色土（砂質、11が若干混入） 13. 褐色土（Vが少量混入） 14. 暗褐色土（粘質、Vが少量混入） 15. 暗茶褐色土（やや砂質、軽石混入） 16.  $V>10$ （暗黄色土） 17. 灰褐色土（砂質） 18. 暗黄褐色土（砂質） 19. 灰褐色土（粘質、かたい） 20. 暗灰黄色土

図Ⅲ-137 H-462実測図



重複関係：本住居跡はH-466・468・504・508・546・548と重複しており、H-468よりは古い、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

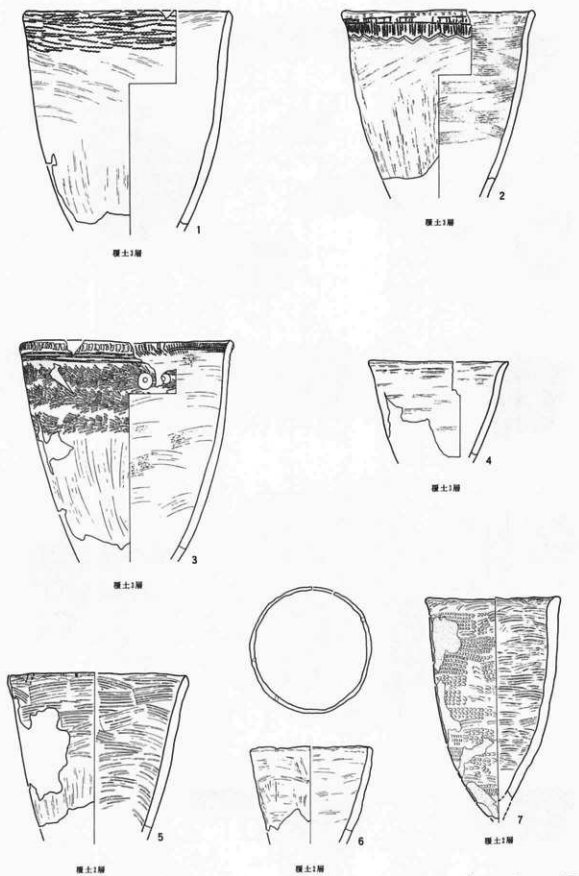
床面：V層を深く掘り込んで構築されており、平坦で、堅い。

壁：立ち上がりはほぼ垂直的である。検出面からの壁高は北壁が50cm～60cm、東壁が42cm～49cmである。炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1・2は壁際にあり、直立している。HP-3・7・9は主柱穴と思われる。4本柱。またHP-4・8も主柱穴と思われ、2本柱が想定される。柱穴状小ピットの検出状況などから見て、2本から4本柱に建て替えが行われた可能性がある。

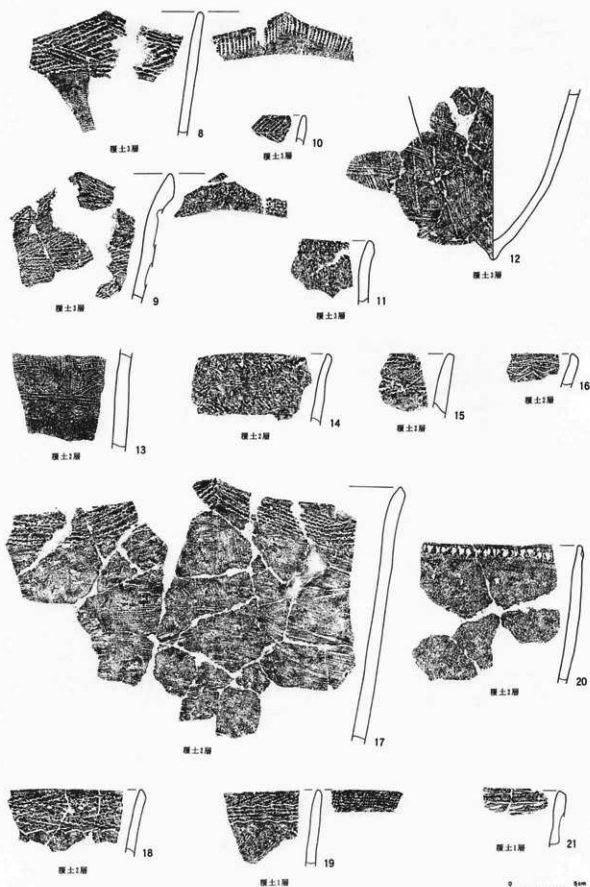
遺物出土状況：出土遺物総数は1,478点である。この内訳は土器921点、石器等557点である。遺物は床面直上で礫1点が出土しただけで、他はすべて覆土1・2・3層で出土したものである。とくに覆土2層上面、覆土3層上面付近では北から流れ込んだ状態で一括土器が出土している。出土土器はI群B類(1点)、同D2類土器(50点)、同E類土器(2点)、I群土器(5点)が出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー、石斧、擦り切り残片、たき石、すり石、砥石(10点)、石錘(83点)などが出土している。

土器：1・2・4・8～12は覆土3層、3・5～7・13～16は覆土2層、17～21は覆土1層から出土したもので、13はI群B類土器、7・21はI群D2類土器で、他はすべてI群D1土器である。1はT-67覆土上層、41-31Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径22.2cm。胴部中位にふくらみをもち、口縁部はゆるやかに外反する。平縁で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。口縁部外面には横位の貝殻腹縁圧痕文が粗く施文される。内外面は丁寧なナデ調整が加えられている。成形、調整は丁寧であるが、文様は粗雑である。2はT-67覆土上層、41-31Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失する。口径20.6cm。平縁で、口唇部は角形に仕上っている。口縁部外面には連続腹縁文、横位の貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文される。口唇端部はナデ調整、胴部内外面には貝殻腹縁文が加えられている。3は覆土2層で一括出土したもので、底部は欠失している。口径22.8cm。胴部はわずかに内湾し、口縁部は若干外反する。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口唇外面はへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内面にはロッキング状に連続腹縁文が施文されている。口縁部外面には貝殻腹縁文が沈線上に刻まれている。胴部外面には背圧痕が加えられ、内面は丁寧なヨコナデ調整が加えられている。補修孔がある。4は覆土3層で一括出土した土器で、46-33Ⅰ層出土の土器片と接合したものである。胴部下半は欠失している。口径14.8cm。口縁部は外反する。平縁で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。内面にすり消し条痕文が見られるが、内外面全体にナデ調整が加えられている。5は40-30Ⅲ層、40-31Ⅲ層、41-32Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径19.1cm。胴部・口縁部は直線的に外傾する。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部内外面に貝殻腹縁文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。6は覆土2層で一括出土したもので、胴部下半は欠失する。口径13.0cm。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。内外面にはナデ調整が加えられ、つくりは粗雑である。また口唇部には丸い棒状の圧痕が見られる。7は覆土2層で一括出土した土器である。尖底部は欠失するが、ほぼ全体が復元できた個体である。口径14.5cm、器高約24.0cm。胴部下位がふくらみ、直線的に外傾する。平縁で、口唇部が肥厚し、丸く仕上げられる。外面には貝殻腹縁により押引文が施文され、内面には貝殻腹縁文が加えられている。器形は細長く、堅いが、器厚は厚く、つくりは粗雑である。8は41-30Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、波状の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口縁部内面には連続腹縁

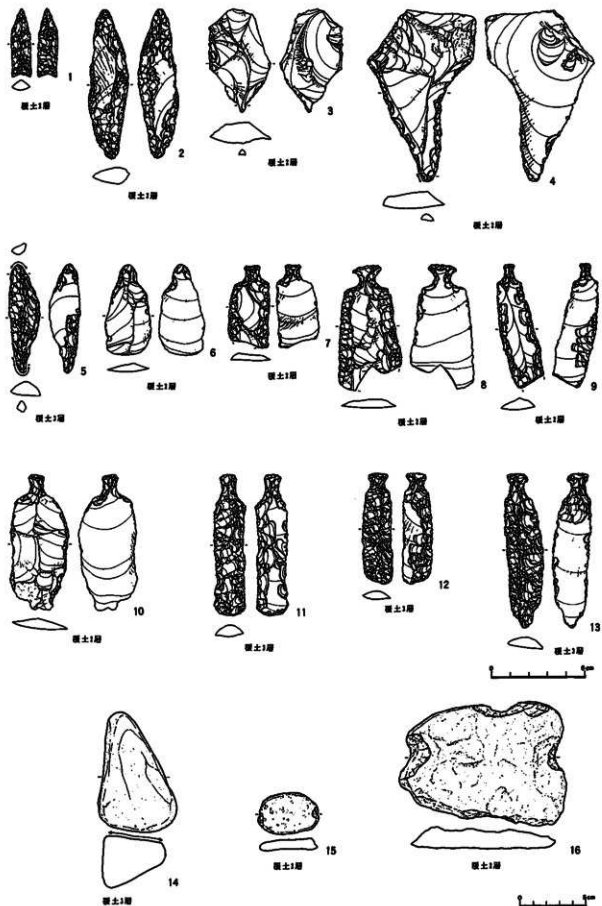


図Ⅲ-138 H-462出土土器(1)

0 5 10cm

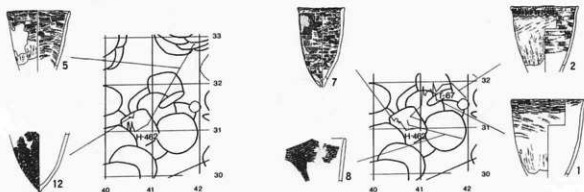
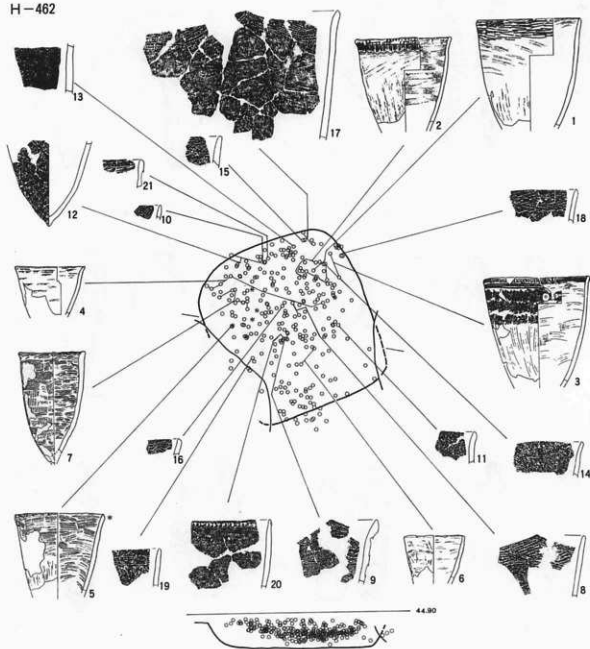


図Ⅲ-139 H-462出土土器(2)



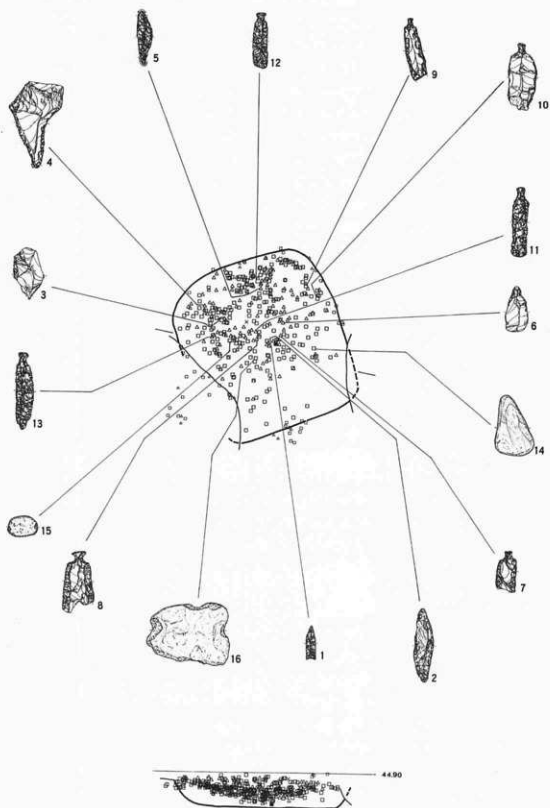
図Ⅲ-140 H-462出土石器

H-462



図Ⅲ-141 H-462出土土器分布・接合図

H-462



図Ⅲ-142 H-462出土石器分布図

文、口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文される。胴部外面には背圧痕が見られる。9は波状の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口縁部内面には貝殻腹縁による連続押印文、口縁部・胴部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、背圧痕も見られる。口唇端部には貝殻腹縁圧痕文と刺突文が施文されている。波頂部から刺突が垂下する。内面はナデ調整。焼成良好で堅緻。10は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には歯状腹縁により、羽状、沈線状に圧痕文が施文される。焼成良好で堅緻。11は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文が見られるが、内外面にナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が多く、脆弱である。12は40-31Ⅲ層出土の土器片が接合した胴部下半部で、乳房状尖底である。内外面には粗雑な貝殻条痕文が加えられている。13は胴部破片。細かな貝殻腹縁圧痕文が横位、縦位に丁寧に施文され、刺突文が加えられている。内面は丁寧なナデ調整。厚手の土器で、焼成良好で堅緻。14は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には背圧痕、内面にはすり消し条痕文が見られる。15は口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、刺突文が見られる。内面には貝殻条痕文が加えられる。16は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文の上に鋸歯状沈線文が施文されている。内面はナデ調整。17は波頂寄りに副突起をもつ波状口縁の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には口縁に沿って貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部内外面には貝殻条痕文が加えられている。18は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文される。焼成良好で堅緻。19は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内面には貝殻腹縁による連続押印文、外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、背圧痕も見られる。20は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面にはへう状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面はナデ調整が加えられる。21は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には粗い沈線文が施文されている。内外面ナデ調整。焼成良好で堅緻。

石器：1は石鏃。両面が全面に加工されている。2は1b1類の石槍。3～5は石錐。3・4は1類、5は4類に属するものである。6～13は石匙。6は4類でほとんど加工痕が見られない。8～10は3類に属するもので、周辺に加工が施されている。11～13は2a類に属するもので、稜線がほぼ中央部に見られる。14は凝灰岩製の砥石。15・16は石鏃。15は安山岩製の小型のもの。16は流紋岩製のもので4カ所に決り部がある。

(和泉田 毅)

H-463 (図Ⅲ-143・144, 図版24・137)

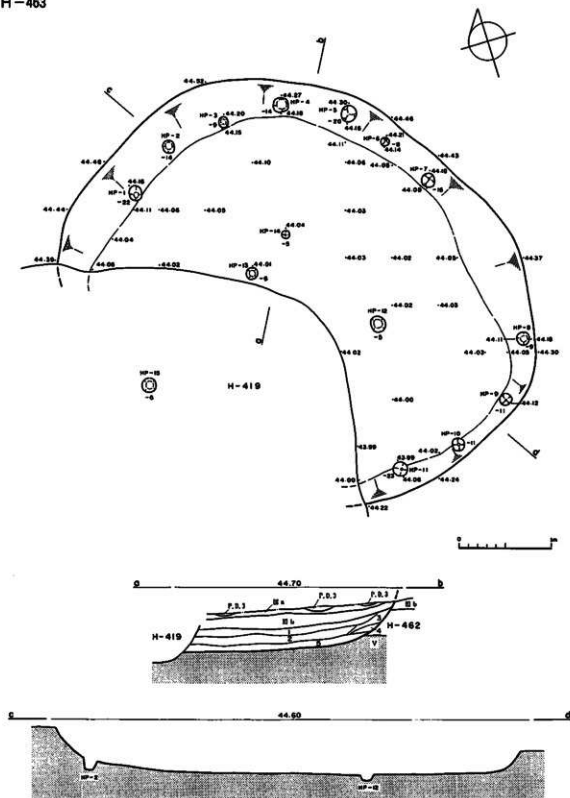
位置：40-29・30, 41-29・30 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.22m～44.52mの緩斜面上に位置している。 規模：4.96m/4.30m×(4.0)m/(3.34)m×0.42m 床面積：(11.88)㎡

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-33°-W

確認・調査・土層：40-29・30, 41-29・30の包含層調査中、Ⅲb層中でP.D.3、Ⅲa層の広がりを確認する。土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げ、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出する。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中でやや堅い黄色土の面を検出する。柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出する。掘り込み面はⅢb層中である。覆土は二層に分けられる。覆土1層はⅢb>Ⅴ、覆土2層は暗茶黄色土で、軽石を混入し、汚れている。覆土3層は床面直上の土で、粘質の暗黄色土である。

重複関係：本居住跡はH-419・468・504と重複しており、H-419より古く、他より新しい。

H-463



H-463の土層

1. Ⅲb>V (覆土1) 2. 暗茶黄色土 (軟質。覆土2) 3. 暗褐色土 (微量のVが混入) 4. 暗灰黄色土 (2よりⅢbが少ない) 5. 暗黄色土 (粘質。覆土3) ※覆土には、大きな軽石が混入。全体に粘質土。

図Ⅲ-143 H-463実測図



時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を深く掘り込んで構築されている。北から南へやや傾斜しているが、ほぼ平坦で、やや堅い。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が33cm～38cm、北東壁が28cm～38cm、南東壁が22cm～26cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは15個検出されている。HP-1～11・15は壁際、壁面にあり、やや内傾している。HP-15はH-419の床面で検出されたものである。HP-12・13・14は浅い。位置的に見て、HP-12・14が主柱穴とも考えられるが、浅いため判然としない。

遺物出土状況：遺物は土器が13点、石器等が13点出土している。HP-13覆土からⅠ群D2類土器が1点出土している以外は、覆土中で出土している。土器はⅠ群D1類（12点）、同D2類（1点）のものが出土し、石器では石鏃、剥片などが出土している。

土器：1は40-30Ⅲ層出土の土器片と接合した平縁の口縁部破片である。口唇部は丸く仕上げている。内外面とも粗いナデ調整が加えられている。壁からの出土で、Ⅰ群D1類土器である。2は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁による押引文が施文される。内面はナデ調整。HP-13覆土からの出土で、Ⅰ群D2類土器である。

（和泉田 毅）



図Ⅲ-144 H-463出土土器

H-464（図Ⅲ-145～148、図版24・137・173）

位置：42-30、43-30 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.33m～44.63mの緩斜面上に位置している。南側は市道中野4号線および側溝で削平されており、全体は不明である。

規模：5.36m/4.96m×——/——×(0.40)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：42-30、43-30の包含層調査中、Ⅲb層中でⅢa層の広がり確認された。また側溝、Tピットの壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げ、Ⅲb層中でⅢb>ⅢVの落ち込みを検出した。Ⅲb層を除去し、覆土を順次掘り下げる。V層中でやや堅い黄色土の面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上り方を検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。全体にⅢa、Ⅲb層が深く落ち込んでおり、Ⅲb層の下にはⅢb>ⅢV、Ⅲb>ⅢVの土が薄く堆積していた。覆土1層である。覆土2層は粘質の黒褐色土である。覆土3層は床面上にある土で、暗灰黄色土。中央付近は粘質土で軽石を多く混入する。壁際周辺は砂質で軽石を混入している。

重複関係：本居住跡はT-69・70と重複しており、これらより古い。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

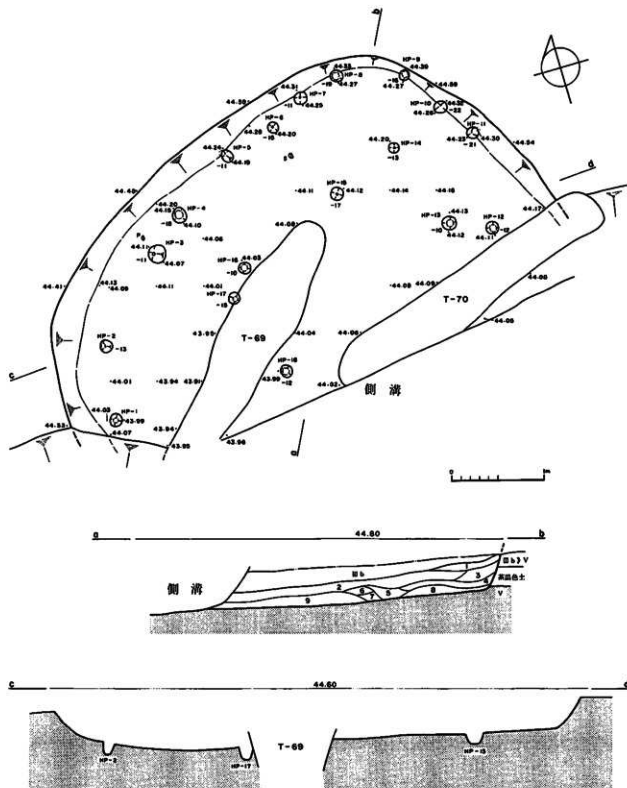
床面：V層を深く掘り込んで構築されている。やや凹凸があり、北東から南西へやや傾斜し、中央付近が皿状にくぼんでいる。

壁：立ち上がりは、北東壁は急傾斜であるが、他はゆるやかである。検出面からの壁高は、南西壁が25cm前後、北西壁が30cm前後、北東壁が32cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは18個検出されている。HP-1～11は壁際をめぐるもので、ほぼ直立し、杭状のものが多く、HP-13～15・17・18は直立しており、主柱穴と思われる。

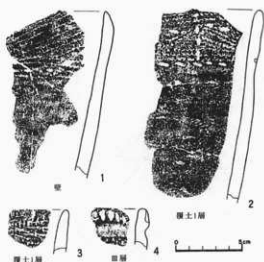
H-464



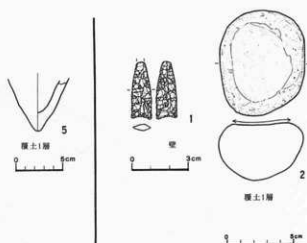
## H-464の土層

1. Ⅲb>V (暗褐色土) 2. 黒褐色土>V (粘質。覆土1) 3. 黒褐色土 (粘質。覆土1) 4. 暗茶褐色土 (砂質。2+8) 5. 暗黄茶色土 (砂質。軽石混入) 6. 暗茶灰色土 (粘質) 7. 6+5 8. 暗灰黄色土 (砂質。軽石混入。覆土2) 9. 暗黄灰色土 (粘質。軽石混入。覆土2)

図Ⅲ-145 H-464実測図



図Ⅲ-146 H-464出土土器

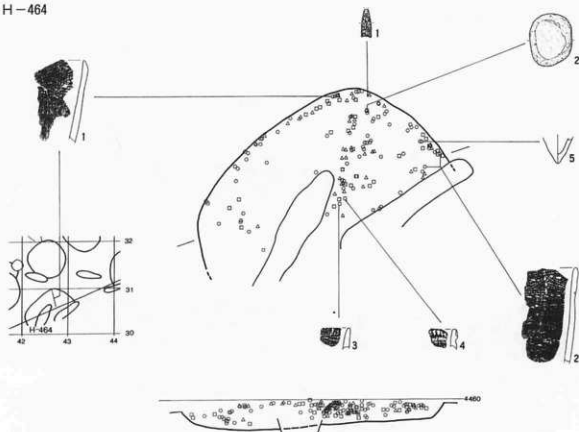


図Ⅲ-147 H-464出土石器

遺物出土状況：出土遺物総数は145点である。この内訳は土器77点、石器等68点である。遺物は覆土上のⅢも層、覆土上層で出土しており、床面付近からは出土していない。出土した土器はⅠ群D1類のもので、石器では石鏃、石匙、スクレイパー、すり石、砥石、石錘などが出土している。

土器：1は壁、2・3・5は覆土1層、4は覆土上のⅢ層出土である。すべてⅠ群D1類土器である。1は40-30Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、波状口縁の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、刺突文が1条横走する。内

H-464



図Ⅲ-148 H-464出土遺物分布・接合図

外面はナデ調整が加えられる。2は波状の口縁・胴部破片である。口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、2条の刺突文を施している。波頂部からは刺突が垂下する。胴部外面には背圧痕が見られるが、全体に内外面ともナデ調整が加えられている。堅いが器表面はザラザラしている。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には歯状腹縁文が施文されている。4は平縁の口縁部破片で、口唇部はやや角形に仕上げている。口唇部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされている。胎土は粗い。5は乳房状の尖底部である。焼成良好で堅緻。

石器：1は両面加工の石鏃で、先端部は欠損している。1b類。2は流紋岩製の砥石である。円礫を素材とし、砥面は1面である。（和泉田 毅）

H-465（図Ⅲ-149～153、図版25・137・174）

位置：39-34・35、40-34・35 標高45.21m～45.43mのほぼ平坦地に位置している。

規模：5.30m/4.78m×4.28m/3.77m×0.42m 床面積：14.82㎡ 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-66°-E

確認・調査・土層：39-34・35、40-34・35の包含層調査中、Ⅲb層中で黒味のあるⅢb層の広がりを確認したため、土層観察用の土手を設定し、全体を精査し、茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を掘り下げ、V層中で、やや堅く汚れた面を検出する。中央部で焼土や柱穴状小ピットを検出したことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出する。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ2層である。覆土1層は茶褐色土、覆土2層は暗茶灰色土で、ともに汚れた混合土である。

重複関係：本住居跡はP-263・299、H-482・483・498・524と重複しており、P-263・299より古く、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：V層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。床面には最終生活面と構築面が認められた。

壁：立ち上がりは全体にやや急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が30cm前後、西壁が15cm～35cm、南壁が13cm～37cm、東壁が22cm～33cmである。

炉跡：火を受けた痕跡を示す赤い粘質の土の広がりが見出されている。HF-1はHP-21の竈底上で検出されている。HF-2は床面中央部にあり、0.15m×0.15mの広がりが見られる。HF-3は床面上で検出されたもので、P-263とHP-21に切られている。0.40m×0.40mの広がりが見られる。HF-1は浅い掘り込みがあり、最終生活面に伴うもので、HF-3は構築面に伴うものと考えられる。

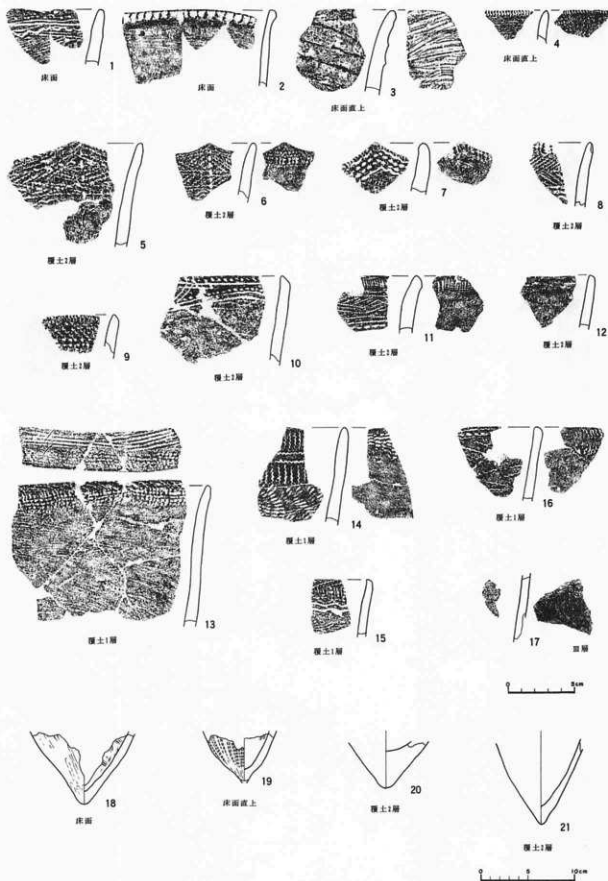
付属ピット：柱穴状小ピットは21個検出されている。HP-1～15は壁際をめぐるもので、直立し、杭状のものが多い。HP-2・3・7・9・10・11・12は深さが27cm～50cmと非常に深い。HP-16・17は主柱穴と思われる。HP-16は構築面、HP-17はHP-21の竈底面で検出されていることから、古い時期のもので、2本柱であろう。HP-18・20は最終生活面で検出された。2本柱であろう。HP-18を半截したところ、掘り方の径が約23cm、柱の太さが約10cm、柱が約30cmほど埋められているのが判明した。また掘り方の中程には柱との間に礫が2個あり、恐らく柱を固定するために使われていたものと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は794点である。この内訳は土器369点、石器等425点である。床面・床面直上・HPからはI群D1類土器が72点、D2類土器が3点、I群土器が16点、石皿（1点）、砥石（1点）、石鏃（9点）などが出土している。遺物は覆土2層から多く出土している。HP-21覆土中か

らは内面を上にし、水平の状態ではI群D1類土器が出土している。出土した土器はI群D2類のもの10点、同E類土器1点、I群土器が16点出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、鑿状石器、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石(13点)、石皿、砥石(12点)、石鏝(68点)などが出土している。

土器：1・2・18は床面、3・4は床面直上、5～12・19～21は覆土2層、13～16は覆土1層、17は覆土上3層からそれぞれ出土したもので、1～16・18～21はI群D1類土器、12はI群E類土器、17はI群B類土器である。1は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には刺突文、沈線、鋸歯状沈線文が施文され、内面にはすり消し条痕文が見られ、外面には背圧痕が加えられている。2は41～31揚げ土出土の土器片と接合した平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上げられている。口唇外面にはヘラ状工具による粘土のつまみ上げがなされ、その下には櫛歯状腹線文が見られる。内外面にはすり消し条痕文が見られる。3は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には深く、粗いナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。4は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げられている。口唇部外面には連続腹線文、内面には貝殻腹線による連続押引文、口縁部外面には貝刻沈線文が施文されている。5は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹線圧痕文が施文され、その上に刺突文が加えられる。下端には鋸歯状沈線文が施されて、波頂部から刺突が垂下する。内外面にはナデ調整が加えられている。6は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹線圧痕文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。内面には貝殻腹線による押引文が施文される。7は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹線文と鋸歯状沈線文、内面には櫛歯状腹線文が施文される。外面には2条の刺突文と鋸歯状沈線文が施文される。胎土には小石を含み、粗い。8は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には貝殻による粘土のつまみ上げがなされている。外面には貝殻腹線圧痕文が施文されている。9は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹線文、口縁部外面には貝殻腹線圧痕文、刺突の加えられた沈線文が施文されている。10は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には刺突文、口唇部外面には沈線、刺突文が施されている。胎土は堅いが、粗い。11は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇部外面には連続腹線文、内面には押引文が施文されている。口唇部外面には沈線状に貝殻腹線文が刻まれ、刺突文も見られる。12は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。無文で、内外面にはナデ調整が加えられている。器表面はザラザラしている。13は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹線文、口縁部外面には貝殻腹線による押引文が施文される。口唇部内面には押引文が施文され、胴部内面は貝殻条痕文、外面にはすり消し条痕文が見られるが、ナデ調整が加えられている。器表面はザラザラしている。14は44～33I層出土の土器片と接合したもので、口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には、貝殻腹線圧痕文の上下に縦位の貝殻腹線圧痕文が施文されている。内外面には背圧痕が見られる。15は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。外面には連続腹線文と鋸歯状沈線文が施文され、胴部外面には背圧痕が見られる。焼成良好で堅緻。16は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇外面には刺突文、口縁部外面には粗い貝殻腹線圧痕文が見られる。内面にはロッキング状の貝殻腹線圧痕文が施文される。焼成良好で堅緻。17は胴部破片で、外面には貝殻腹線圧痕文、内面には目の細かな貝殻条痕文が加えられている。薄手のもので、焼成良好で堅緻。18～21は乳房状の尖底部。18の外面には縦方向のケズリ痕が見られる。19の内面には櫛歯状腹線文が見られる。21の外面には指頭圧痕が残っている。緻密である



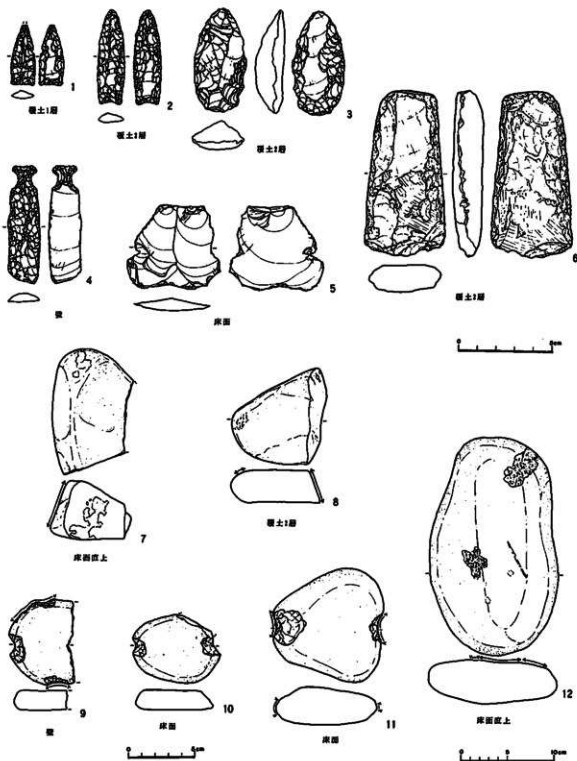


図Ⅲ-150 H-465出土土器

が軟質である。

石器：1は1b類、2は2b類の石鏃。3は鏃状石器。4は2a類の石匙。5は床面出土のRフレイク。6は打製の石斧。7・8は砥石。ともに2面の砥面をもつ凝灰岩製のもので、7は床面直上出土のものである。9～11は石鏢。10・11は床面出土。9は4ヵ所に抉り部をもつ。12は床面直上出土の石鏢である。

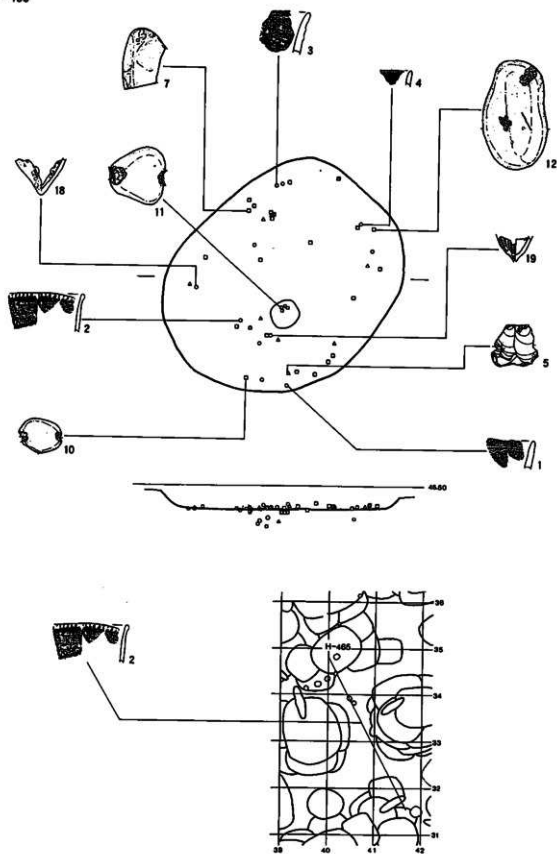
(和泉田 毅)



図Ⅲ-151 H-465出土石器

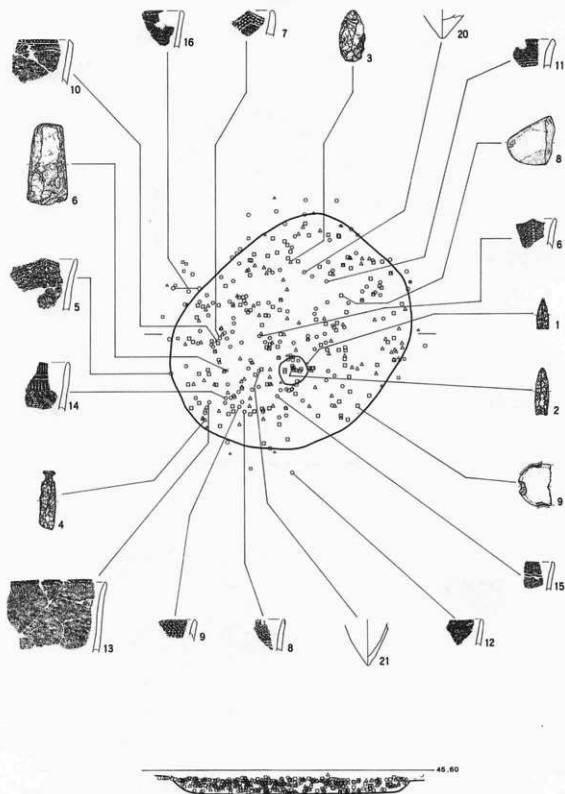


H-465



図Ⅲ-152 H-465床面出土遺物分布・接合図

H-465



図Ⅲ-153 H-465覆土出土遺物分布・接合図

H-466 (図Ⅲ-154～159, 図版26・109・110・134・174)

位置: 41-30・31 標高44.44m～44.77mの北から南へ若干傾斜するが、ほぼ平坦地に位置している。  
規模: 4.34m/3.68m×4.28m/3.60m×0.40m 床面積: 11.17㎡ 平面形: 円形状

確認・調査・土層: 41-30・31の包含層調査中、Ⅲb層中でⅢa層の広がり確認された。遺構を想定し、土層観察用の土手を設定、精査し、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出した。Ⅲb>Ⅴの下で黒褐色土の堆積が見られ、この上面付近で一括土器が出土した。遺物出土状況の実測、写真撮影ののち取り上げ、順次覆土を掘り下げる。Ⅴ層中で軽石まじりのやや堅い黄色土の面が検出され、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中である。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢb>Ⅴ、覆土2層は粘質の黒褐色土で、この上面付近で遺物が多く出土している。覆土3層は暗黄褐色土、覆土4層は床面上に堆積する土で、軽石を多く含む砂質の暗灰黄色土である。なお北側の覆土2層上には灰褐色土が流れ込みの状態で堆積していた。重複関係: 本住居跡はH-462・504・508・552と重複しており、これらより新しい。ただし、H-462との新旧関係は明瞭でない。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: Ⅴ層を深く掘り込んで構築されている。北西から南東へゆるやかに傾斜している。

壁: 立ち上がりはやや急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が43cm前後、西壁が27cm～44cm、南壁が21cm～26cm、東壁が27cm～44cmである。

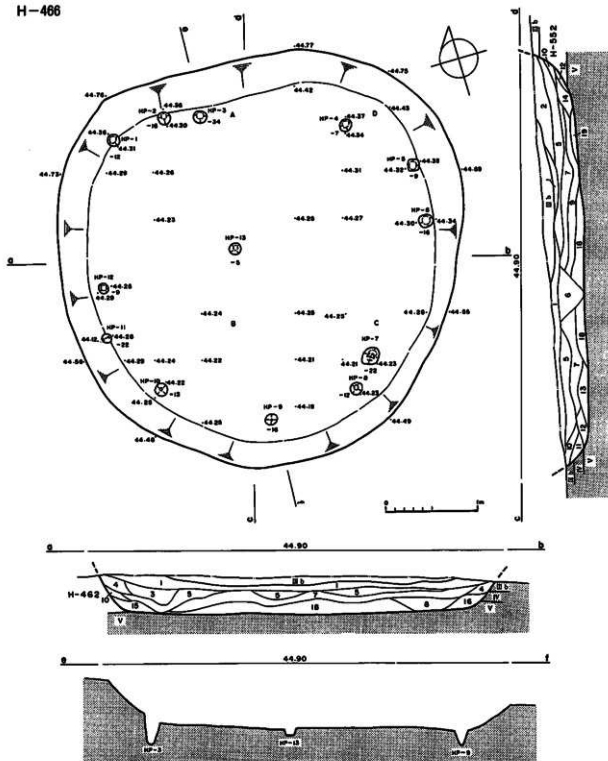
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは13個検出されている。HP-1～12は壁際をめぐるもので、すべて直立している。HP-13は床面のほぼ中央部にあり、浅いが直立している。1本柱かと考えられる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は884点である。この内訳は土器702点、石器182点である。床面付近からは遺物は出土していない。遺物は覆土中、とくに覆土1・2層で多く出土しており、覆土2層上面付近では横倒しの状態でI群D1類土器が一括出土している。すべてがI群D1類土器である。石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、砥石、石鏃(45点)などが出土している。

土器: 9は覆土3層、1～7・11～13は覆土2層、8・10・14・15は覆土1層からそれぞれ出土した土器で、すべてI群D1類土器である。1はH-467覆土1・2層、H-462覆土2層、H-405覆土1層、41-31 I・Ⅲ層、46-32 I層、43-30揚げ土出土の土器片が接合したもので、胴部下半は欠失している。口径21.2cm。4つの波頂部と低い副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。文様は口縁部から胴部中位ほどまで施文されている。口唇部内外面には連続腹縁文が施文される。外面には、刺突を加えた沈線文を上・下端に、その間には菱形に施文し、棒状工具による沈線文を充填する。その上に横走する鋸歯状沈線文が施文されている。内外面にはナデ調整が加えられている。焼成良好で、つくり、文様とも丁寧である。補修孔がある。2は覆土2層から一括出土した土器で、ほぼ全体が復元できた小さな乳房状平底をもつものである。口径24.6cm、器高約32.8cm。胴部中位にややふくらみをもつ。口縁部はやや外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁文が施文される。胴部内面にはすり消し条痕も見られるが、内外面ともナデ調整が加えられている。3は41-31Ⅲ層、41-30Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、底部は欠失する。口径18.6cm。平縁で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口縁部から胴部にかけての外面には、2～3条の沈線が大きく、粗雑に菱形を作っている。その上に小さな円形刺突文が2条横環している。内外面にはすり消し条痕が認められる。胎土には小石などが混入し、文様、

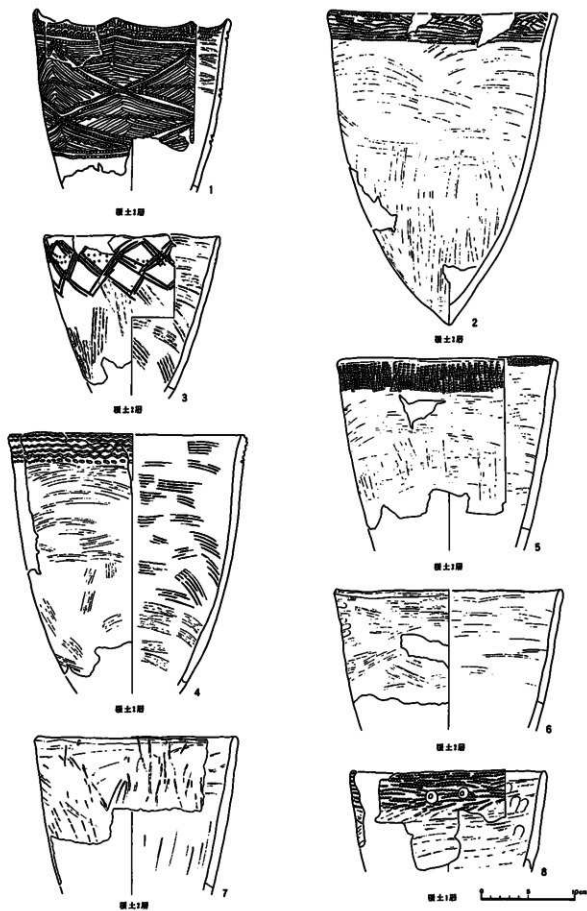
H-466



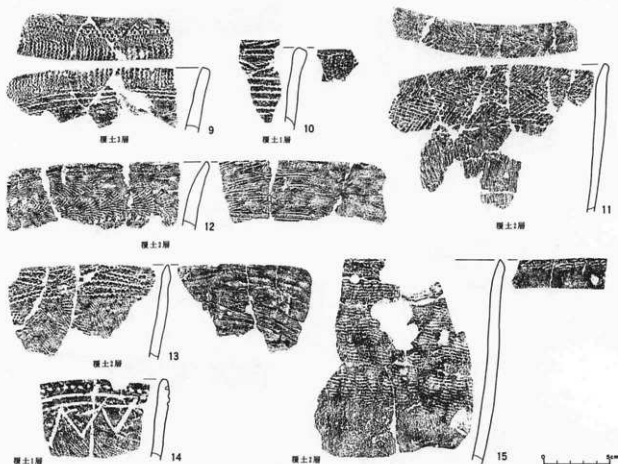
H-466の土層

1. Ⅲb>V (暗褐色土。覆土1) 2. 暗灰褐色土 3. Ⅰ+V (褐色土、ブロック状混入) 4. 暗褐色土 (Ⅲb>V、かたい) 5. 黒褐色土 (粘質。覆土2) 6. Ⅲb+V (暗灰褐色土) 7. 5>暗黄褐色土 8. 暗茶黄色土 (軽石混入、軟質) 9. 灰褐色土 (軽石少量混入) 10. ≈5 (5より少量Vを混入)
11. Ⅱより黒褐色土多い (軟質) 12. 暗黄褐色土 (軽石混入) 13. ⅡよりV、軽石多い 14. 黄茶色土 (砂質、軽石少量混入) 15. 暗灰褐色土 (粘質) 16. ≈8 (8よりⅢbを多く含む) 17. 灰黄色土 (粘質)
18. 暗灰黄色土 (砂質、軽石混入。覆土3)

図Ⅲ-154 H-466実測図

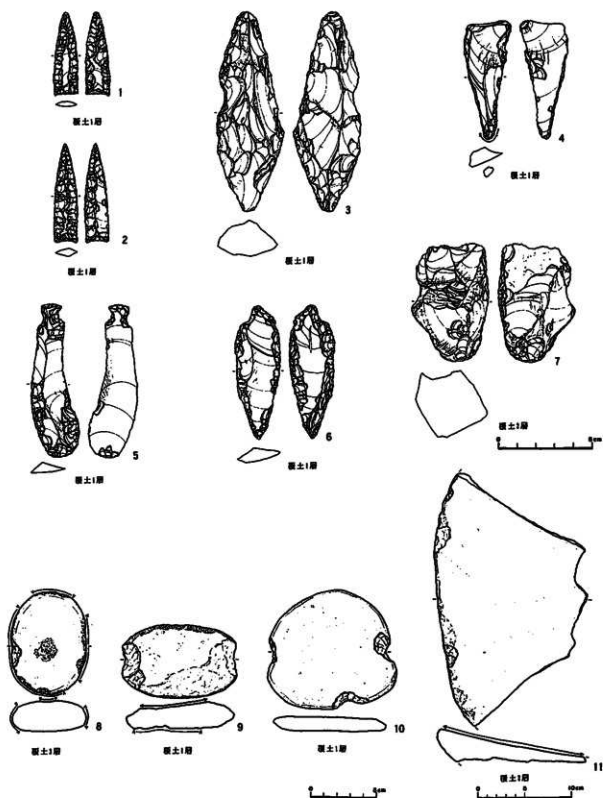


図Ⅲ-155 H-466出土土器 (1)



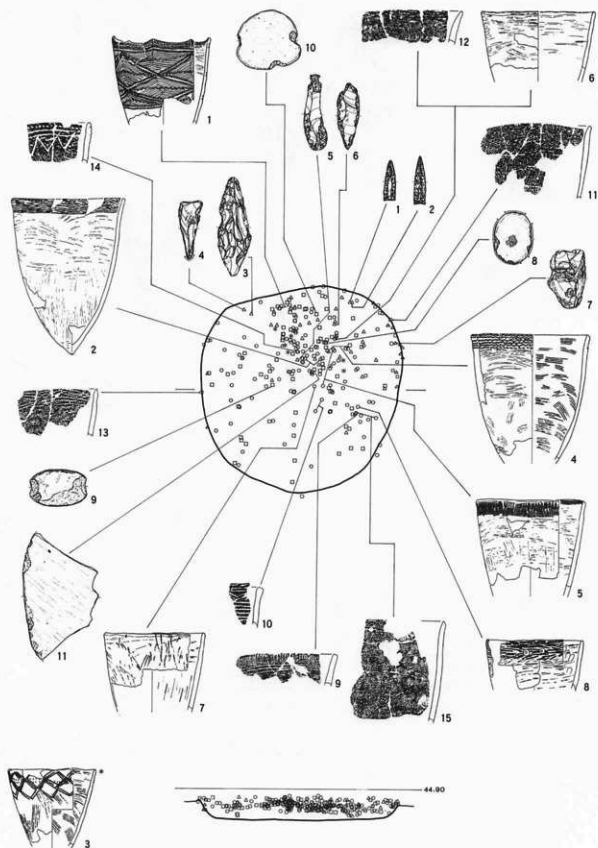
図Ⅲ-156 H-466出土土器(2)

つくりとも粗雑である。4は覆土2層で一括出土したもので、底部は欠失する。口径25.4cm。胴部中位が若干ふくらみ、口縁部はわずかに外反する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には5条の鋸歯状沈線文が、下端には刺突文が横環する。胴部外面はナデ調整、内面にはすり消し条痕が見られる。文様は明瞭で、丁寧に施文されており、器形は丸味をもち、美しい。5は覆土2層で一括出土したもので、41-30Ⅲ層出土の土器片と接合している。胴部下半は欠失する。口径23.4cm。胴・口縁部はほぼ直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面、口唇部内面には貝殻腹縁による押引文が施文される。口縁部内面には貝殻条痕文も見られるが、内外面とも丁寧なナデ調整が加えられている。6は覆土2層で一括出土したもので、H-74覆土1・2層、39-35Ⅲ層、39-29Ⅲ層出土の土器片が接合した土器である。口径24.2cm。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。内外面にはナデ調整が加えられている。7は40-30Ⅲ層、41-30Ⅰ・Ⅲ層、42-30Ⅲ層出土の土器片と接合したものである。口径21.5cm。胴・口縁部は直線的に外傾する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。内外面ともに丁寧なナデ調整が加えられている。8はT-165覆土、42-30Ⅲ層、42-31Ⅲ層出土の土器片と接合したものである。口径20.4cm。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には横位の粗い貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面ともナデ調整が加えられ、内面には指頭圧痕が残っている。補修孔が見られる。9は39-32Ⅰ層出土の土器片が接合した平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口縁部内外面には連続波状文、横位の貝殻腹縁圧痕文が施文されている。焼成良好で堅緻。10はH-467から同一個体が出土している。平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口縁部内面には連続腹縁文、口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕



図Ⅲ-157 H-466出土石器

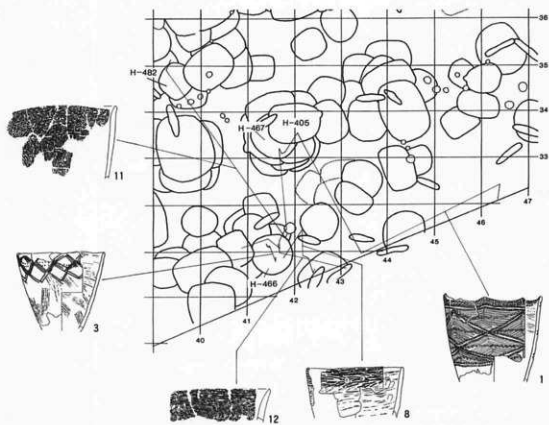
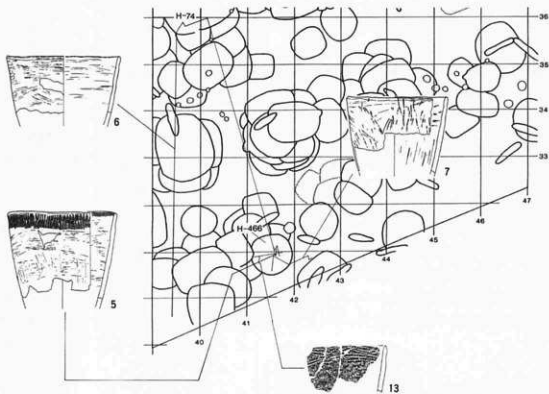
H-466



図Ⅲ-158 H-466出土遺物分布図



H-466



图Ⅲ-159 H-466出土遗物接合图

文が施文されている。11は39-35Ⅲ層出土の土器片が接合する平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部、口縁部外面には無肋筋の貝殻により斜位、羽状、横位に粗い腹縁圧痕文が施文され、口唇部内面には歯状腹縁文が施文されている。胴部外面には貝殻条痕文、内面にはすり消し条痕文が加えられている。全体に脆弱である。12は41-30Ⅲ層出土の土器片が接合した平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には1条の刺突文が横走し、全体に背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。13は41-31Ⅲ層出土の土器片が接合した波状の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。14は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には沈線上に刺突を加え、口縁部外面には沈線と鋸歯状沈線文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。堅いが、器表面はザラザラしている。15は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、横位の貝殻腹縁圧痕文が施文され、口唇部内面には貝殻腹縁による押引文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。胎土は緻密であるが、やや軟質である。

石器：1・2は2b類に属する硬質頁岩製の石鏃。3は1b3類の石槍。4は石錐。5・6は石匙で、5は2a類、6は3類に属するものである。7は石核。8は閃緑岩製のたたき石である。9・12は石錘。9は両面にすり痕が残る安山岩製、10は3カ所に挟り部をもつ閃緑岩製のものである。11は石皿。

(和泉田 毅)

H-467 (図Ⅲ-160~165, 図版27・111・138・175)

位置：41-33, 42-33 標高45.23m~45.37mの平坦地に位置している。

規模：5.04m/4.53m×(4.40)m/(4.00)m×(0.34)m 床面積：(15.36)m<sup>2</sup>

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-37°-W

確認・調査・土層：41-33, 42-33の包含層調査中、I層を除去したところで覆土状の土の広がりや確認され、遺物も多いことから土層観察用の土手を設定し、周辺を精査する。この結果、黒味のあるⅢb層、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、暗茶褐色土と黄色土のまじり合った粘質で硬い土が薄く見られ、この下に黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ二層である。覆土1層はやや黒味のあるⅢb層に黄色土がまじる軟質の土である。覆土2層は暗茶褐色系の土で、やや堅い。

重複関係：本住居跡はT-163、H-405・473・474・490と重複しており、T-163、H-405より古く、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

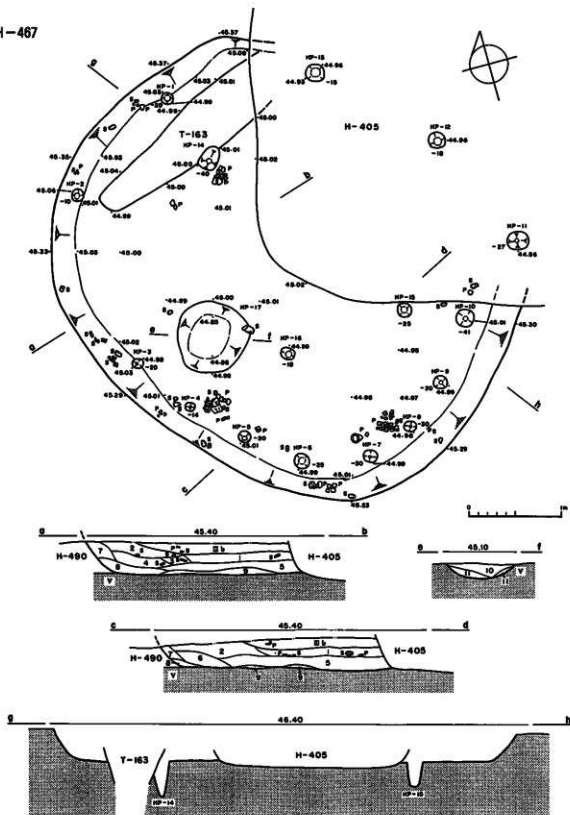
床面：V層を掘り込んで構築されている。平坦で堅い。

壁：立ち上がりはほぼ急傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が33cm前後、南西壁が22cm~30cm、南東壁が22cm~28cmである。他遺構の覆土が壁となっており、不明瞭であったが、堅い面があったので、この面を壁とした。

炉跡：焼土などは検出されていない。ただHP-17の覆土中に炭化物が混入し、またこの南西側の床面には火を受けて赤色化したと思われる暗黄褐色土の広がりが見られることから考えて、HP-17は掘り込みのある炉跡の可能性もある。

付属ピット：柱穴状小ピットは16個検出されている。このうちHP-11~13はH-405の構築面で検出

H-467



H-467の土層

1. Ⅲb>V (暗褐色土。礫土1) 2. 1より黒っぽい 3. 茶灰色土 (かたい) 4. 3より黄色土がやや多い
5. 暗茶褐色土 (礫土2) 6. 5より黄色土がやや多い 7. Ⅲb>V 8. Ⅲ5 (かたい) 9. 5+V (粘質、かたい) 10. 暗茶褐色土 (炭化物混入) 11. 1+V

図Ⅲ-160 H-467実測図

されたものである。HP-1～13は壁際をめぐるもので、直立し、杭状のものが無い。また全体に深い。とくにHP-6・7・8・10・14・15は25cm～41cmの深さがある。HP-14・15は主柱穴と思われる。

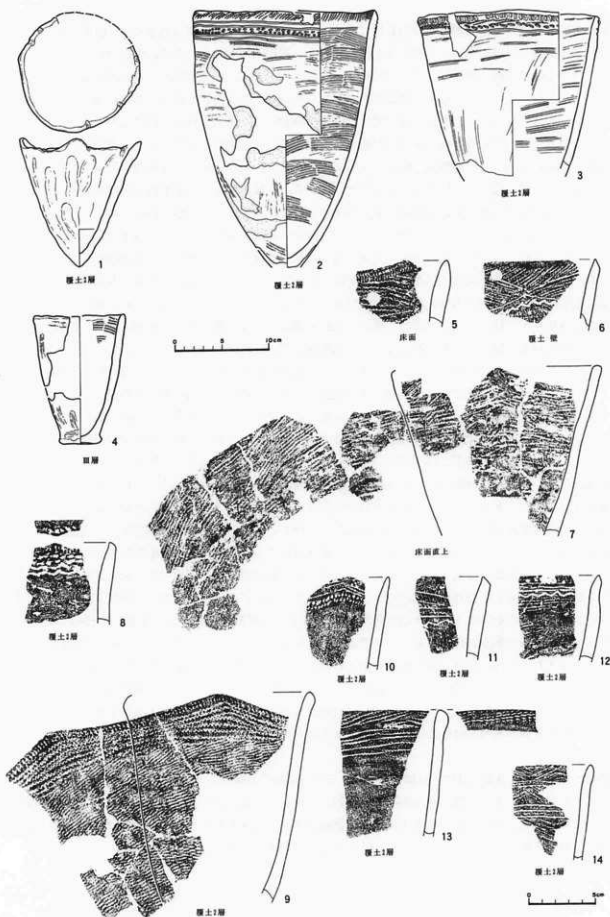
遺物出土状況：出土遺物総数は1,675点である。この内訳は土器796点、石器等877点、土器片2点である。床面・床面直上付近などからはI群D1類土器が27点、石器は18点出土しているが、97%以上は覆土中から出土したものである。遺物は覆土上Ⅲ層、覆土1・2層で多く出土し、とくに南壁近くの覆土2層の上層で、一括土器が出土している。またHP-17覆土中でI群D1類土器が出土した。出土した土器はI群D1類、同E類（覆土1層で1点）のもので、石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、筒状石器、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、砥石、石鏃(99点)などが出土している。覆土2層中で剥片が300点出土しているが、まとまった出土状態ではない。

土器：5は床面、7は床面直上、6は壁、1～3・8～16・31・34は覆土2層、17～24・35は覆土1層、25～30・32・33は覆土上Ⅲ層からそれぞれ出土したもので、30はI群D2類土器、他はすべてI群D1類土器である。1は覆土1層と2層出土の土器片が接合し、全体が復元できた個体である。口径13.0cm、器高13.7cm。4つの波頂部と低い副突起をもつ波状口縁である。胴部は直線的に外傾し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸く仕上げている。内外面とも粗い指ナデ調整で、指頭圧痕が残っている。口唇部には幅約4mm、深さ2mmほどの丸い棒状の圧痕が5ヵ所残っている。胎土には小石を多く混入し、つくりは粗雑である。2はH-473覆土2層、H-490覆土1・2層から出土した土器片と接合したもので、尖底部は欠失するが、ほぼ全体が復元できた個体である。口径19.7cm、器高約29cm。胴部中位にやや小さくふくらみをもつ。口縁部はわずかに外反する。平縁で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内外面には連続腹縁文が施文される。口縁部外面は、2条の刺突文の上下に沈線文が施文される。胴部外面はナデ調整。内面には貝殻条痕文が加えられている。3は平縁の土器で、底部は欠失する。口径19.2cm。胴・口縁部は直線的に外傾する。口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げ、刺突文、細く浅い沈線文が施文される。胴部外面は丁寧なナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられる。4は口径9.8cm、器高13.6cmの平底の土器である。胴・口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸く仕上げている。底部は張り出す。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。5は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。やや軟質。円孔がある。6は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には沈線で区画し、貝殻腹縁による押引文を充填している。下端には鋸歯状沈線文が加えられている。内面には貝殻条痕文が見られる。円孔がある。7は覆土1・2層、41-32Ⅲ層、T-163覆土出土の土器片と接合したもので、4つの波頂部をもつ波状口縁である。口唇部は丸く仕上げている。内外面には粗い貝殻条痕文が加えられている。胎土は粗く、つくり、調整は粗雑である。8は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、内面には刺突文が施文される。口縁部外面には刺突文、鋸歯状沈線文が見られる。内外面はナデ調整。9は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部は連続腹縁文、口縁部外面には丁寧な貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面には引摺り背圧痕と押引文が加えられる。内面にはナデ調整。焼成良好で堅緻。10は波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には鋸歯状腹縁文、沈線文が施文され、背圧痕が見られる。11は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文、沈線、鋸歯状沈線文が施文され、ミガキ痕が見られる。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、軟質である。12は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には沈線、鋸歯状沈線文が施文され、内外面には貝殻条痕文が加えられている。13は平縁の口縁・

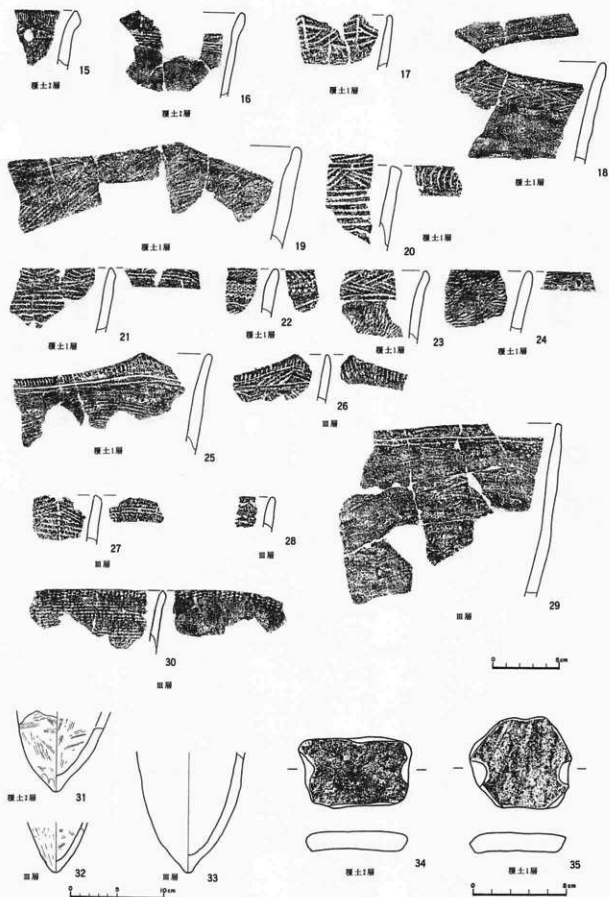
胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、口唇部内面には貝殻腹縁による押引文が施文される。胴部内外面はナデ調整。焼成良好で、非常に堅い。14は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には歯状腹縁文、刺突文、沈線が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻。15は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には歯状腹縁による連続腹縁文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。16は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、沈線文が施文され、胴部外面には背圧痕が加えられている。17は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には菱形状に貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂部には縦位に貝殻腹縁圧痕文を加えている。外面には背圧痕、内面にはすり消し条痕文が見られる。軟質で、つくりは粗雑である。18は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には羽状に貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。胴部外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられる。19は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。20は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、外面には貝殻腹縁圧痕文、連続波状文が施文され、口唇部内面には連続腹縁文が施文される。21は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文、口唇部内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。22は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続腹縁文が施文される。23は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には羽状、横位の貝殻腹縁圧痕文が施文され、背圧痕が見られる。内面はナデ調整。24は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部内外面には引摺り背圧痕が加えられている。焼成良好で堅緻。25は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部外面には連続腹縁文、その下には沈線と貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内面には貝殻条痕文が加えられ、外面には引摺り背圧痕が見られる。26は波状口縁部の破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には歯状腹縁文、内面には連続腹縁文が施文される。やや軟質である。27は小波状口縁の破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、口唇部内面には貝殻腹縁による押引文が施文される。波頂部から刺突が垂下する。28は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には刺突文、沈線文が見られる。内面に爪痕が残る。胎土は脆弱である。29はT-163覆土上層出土の土器片と接合したもので、平縁の口縁・胴部破片である。口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には沈線、貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面には貝殻条痕文が加えられる。30は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。31～33は乳房状尖底部。33の内面には貝殻条痕文が加えられている。34・35は土器片。34は2ヶ所の打ち欠きがあり、外面には貝殻腹縁による押引文が見られる。35は2ヶ所の打ち欠きがあり、外面はナデ調整。

石器：1は石鏃。黒曜石製で2b類に属する。2は1b1類の石槍。3・4・5は石鏃。3・4は石鏃からの転用品で、5は4類。6は両面調整石器。7～12は石匙。7・8のつまみ部はT字状。11のつまみ部は欠損し、12の刃部には使用による剥離痕がある。13は床面出土のスクレイパー。背面に稜が残る。14は床面出土のすり石。15は41-31揚土出土の破片と接合したものである。

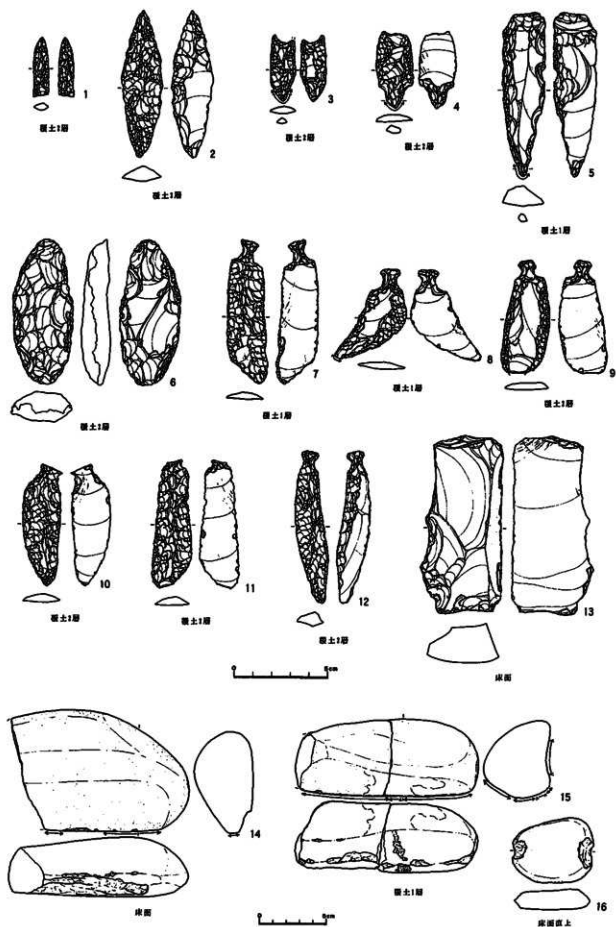
(和泉田 毅)



図Ⅲ-161 H-467出土土器 (1)

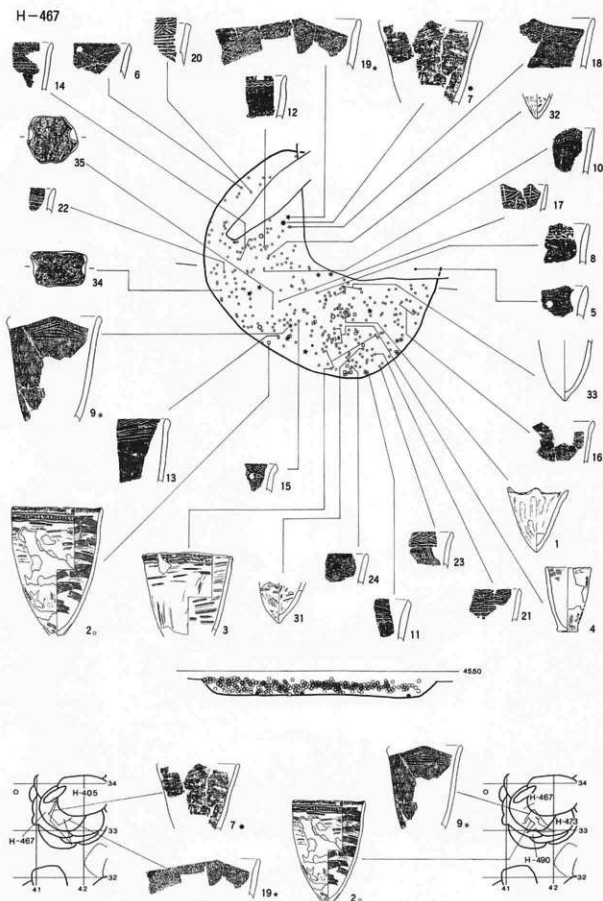


図Ⅲ-162 H-467出土土器(2)



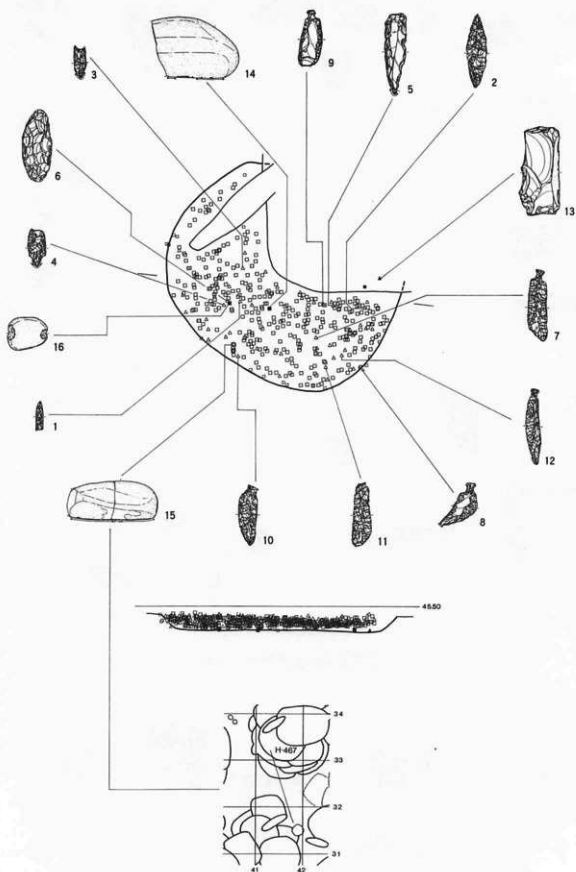
図Ⅲ-163 H-467出土石器





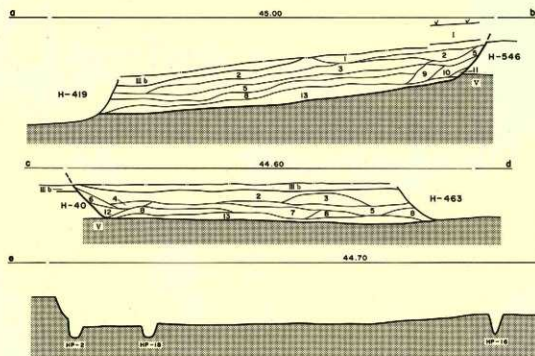
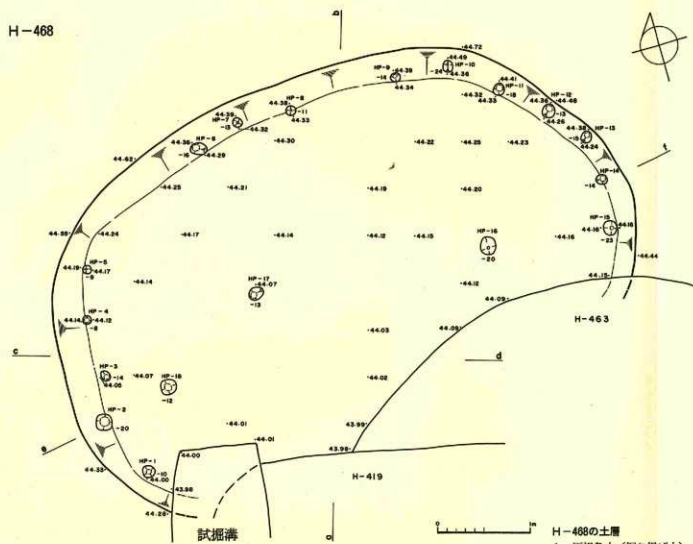
図Ⅲ-164 H-467出土土器分布・接合図

H-467



図Ⅲ-165 H-467出土石器分布・接合図

H-468



H-468の土層

1. 灰褐色土 (掘り揚げ土)
2. 暗褐色土 (重b>V。覆土1)
3. 黒褐色土 (やや粘質、黒褐色土>V。覆土2)
4. 6に軽石、黄色土が混入
5. 3>8
6. 暗褐色土 (かたい、黄色土、覆土2)
7. 暗茶黄色土 (軽石を含まない)
8. 13>5 (暗茶黄色土、軽石混入。覆土3)
9. 3+8 (黄褐色土)
10. ~8 (軽石混入せず、やや軟質)
11. 暗黄褐色土
12. 6>13 (暗黄褐色土、砂質)
13. V>重b (暗黄色土、軽石混入。覆土4)

図III-166 H-468実測図

H-468 (図Ⅲ-166~169, 図版27・139・175)

位置: 39-30・31, 40-30・31 北から南へゆるやかに傾斜する標高44.28m~44.64mの緩斜面上に位置している。規模: 6.30m/5.80m×——/——×(0.44)m 床面積: (18.15)㎡

平面形: 隅丸長方形か? 長軸方向: N-82°-E

確認・調査・土層: H-462の調査中、H-462覆土2層の南西側で、黒褐色土>Vの落ち込みを確認した。H-462より新しい遺構が予想されたため周辺を精査し、P.D.3、Ⅲa層の広がりを確認した。土層観察用の土手を設定し、P.D.3、Ⅲa層を掘り下げ、Ⅲb層>Vの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中でやや堅い明黄色土の面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢb>V、覆土2層はやや粘質の黒褐色土>Vである。覆土3層は軽石がまじりで軟質の暗茶黄色土である。覆土4層は床面直上の土で、軽石を含む暗黄色土である。また北壁側の覆土2層上には掘り掘げ土状の灰褐色土が流れ込んでいた。

重複関係: 本住居跡はH-40・419・462・463・504・545・546と重複しており、H-419・463より古く、他よりは新しい。

時期: I群D1類土を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層中に構築されている。北から南へ傾斜し、平坦である。やや堅い。

壁: 立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が31cm~38cm、南西壁が30cm~40cm、北東壁が20cm~40cmである。

伊跡: 焼土などは検出されていない。

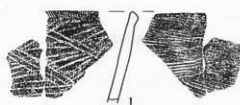
付属ピット: 柱穴状小ピットは18個検出されている。HP-1~15は壁面および壁際にある。全体にわずかに内傾しているものが多い。HP-16・17・18は主柱穴と思われる。直立している。2本柱か?

遺物出土状況: 出土遺物総数は73点である。この内訳は土器35点、石器等38点である。遺物はすべて覆中から出土したもので、土器はI群D1類のもののみである。石器ではスクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石錘(10点)などが出土している。

土器: 1は覆土1層、2は覆土上Ⅲ層で出土した土器である。1・2ともI群D1類土器である。1は39-30 I層出土の土器片と接合した平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部・胴部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。口唇部内面には貝殻腹縁による押引文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。2は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には沈線、鋸歯状沈線文が施文され、刺突文が加えられている。内面はナデ調整。胎土は粗い。

石器: 1はスクレイパー。2側縁に直線的な刃部をもつ。2はたたき石。両側縁にたたき痕が見られる。3・4は石錘。ともに円礫を使用している。

(和泉田 毅)



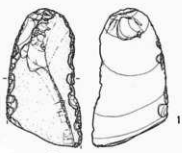
覆土1層



3層



図Ⅲ-167 H-468出土石器



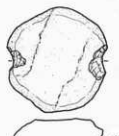
覆土1層



覆土1層



覆土1層

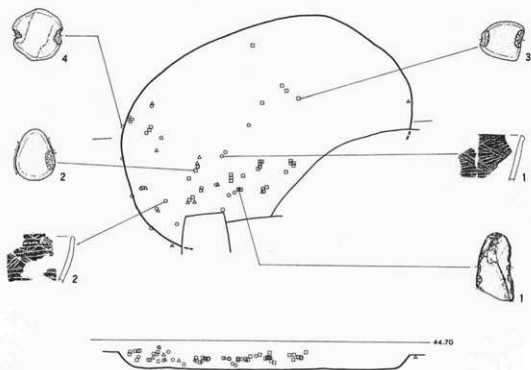


壁



図Ⅲ-168 H-468出土石器

H-468



図Ⅲ-169 H-468出土遺物分布図

H-469 (図Ⅲ-170~173, 図版28・139・176)

位置: 41-35、42-35 標高45.46m~45.60mの平坦地に位置している。

規模: 3.67m/3.24m×3.08m/2.70m×0.26m 床面積: 7.37㎡ 平面形: ほぼ隅丸長方形  
長軸方向: N-85°-E

確認・調査・土層: 41-35、42-35の包含層調査中、IV層直上付近でⅢb>Vの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ調査を行う。軟質の暗黄色土の下で、やや堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。影掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Vである。覆土3層は軟質のやや汚れの目立つ暗黄茶色土である。床面直上には軟質、部分的に粘質の暗黄色土が薄く見られた。覆土の堆積状態は木の根痕や風倒木痕のために全体的に不安定である。

重複関係: 本住居跡は他遺構と重複していない。

時期: 覆土および周辺包含層出土の遺物などから判断して、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。木の根痕や風倒木痕の影響で、やや凹凸がある。平坦。壁: 立ち上がりは全体的にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が14cm~19cm、西壁が15cm~19cm、南壁が18cm前後、東壁が15cm~19cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1~8は壁際をめぐるもので、直立している。HP-9は主柱穴と思われ、1本柱が想定される。HP-4にはすり石が埋っていたことから半截したところ、杭状の柱跡が中央部に見られ、掘り方の土と異なっており、すり石は掘り方中程に直立するように埋まっているのが判明した。柱を固定するために入れられたものであろう。

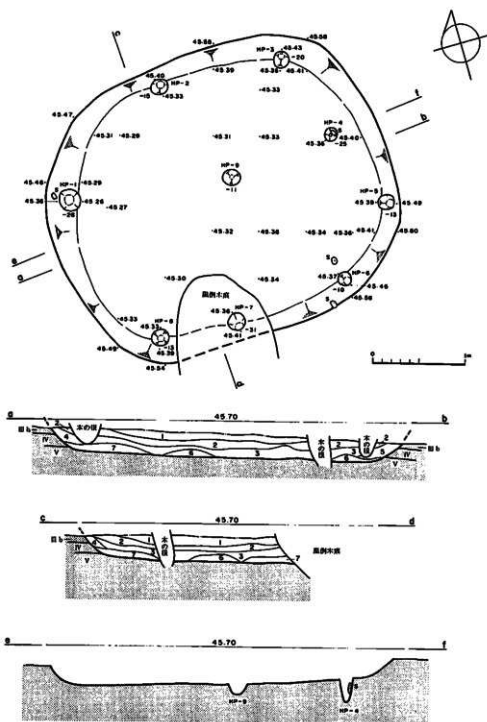
遺物出土状況: 出土遺物総数は104点である。この内訳は土器30点、石器等74点である。床面・床面直上付近からはI群D1類土器が9点、石器が3点出土しただけで、覆土1層から多く、散在的に出土したものである。出土した土器は、I群D1類のものが大半を占め、他にI群E類土器も8点出土している。石器では石鏃、スクレイパー、すり石、石皿、石錘(10点)などが出土している。

土器: 1・6は床面直上、2は覆土2層、3・4は覆土1層、5は覆土上Ⅲ層からそれぞれ出土したもので、1・3・6はI群D1類土器、2・4・5はI群E類土器である。1は口縁・胴部の破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には羽状、横位に貝殻腹縁による連続押引文が施文され、背圧痕も見られる。内面はナデ調整。2は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。内外面には貝殻腹縁文が加えられる。焼成良好で堅緻。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には背圧痕が見られる。内面には貝殻腹縁文が加えられている。4は39-34Ⅲ層出土の土器片と接合した胴部破片。外面には沈線文が、内面にはミガキ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。5は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には棒状工具による浅い沈線文が見られる。内面には貝殻腹縁文が加えられている。6は乳房状の尖底部である。

石器: 1は石鏃。五角形状を呈する。2はHP-4から出土したすり石。断面三角形である。3は床面出土の石錘。円錐使用。4はH-473覆土3層出土の破片と接合した石皿である。

(和泉田 毅)

H-469



H-469の土層

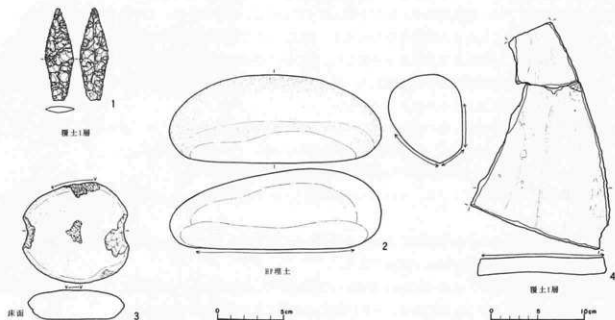
1. Ⅲb>V 2. Ⅲb>V 3. 暗茶黄色土（軟質） 4. 暗茶色土（軟質、3よりVが少ない） 5. 明褐色土（軟質） 6. 暗茶色土（粘質） 7. 暗黄色土（Ⅲbがごく少量混入、軟質）

※全体に軟質で、風倒木、木の根などで擾乱されており、層位は不安定である

図Ⅲ-170 H-469実測図

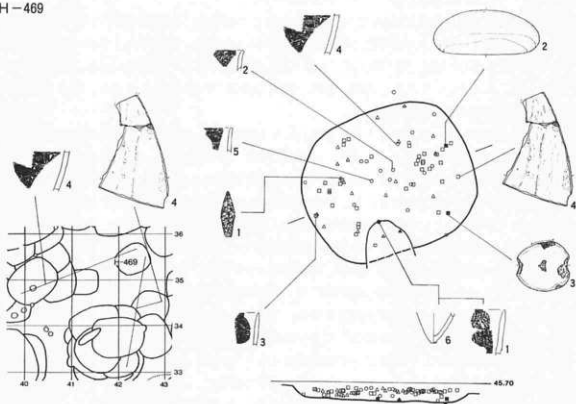


図Ⅲ-171 H-469出土土器



図Ⅲ-172 H-469出土石器

H-469



図Ⅲ-173 H-469出土遺物分布・接合図



H-470 (図Ⅲ-174~177, 図版28・139・176)

位置: 42-33・34, 43-33・34 標高45.25m~45.45mの平坦地に位置している。

規模: 4.67m/4.30m×(3.52)m/(3.20)m×0.25m 床面積: (11.67)㎡

平面形: ほぼ隅丸長方形 長軸方向: N-S

確認・調査・土層: 42-33・34, 43-33・34の包含層調査中、Ⅲb層中でP.D.3、黒味のあるⅢb層の広がりか確認され、またⅢb>Vの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。覆土2層上面で焼土の広がりが見られ、この面が一時期生活面であった可能性も考えられる。軟質の暗茶灰色土+黄色土の下で柱穴状小ビットが検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Vの褐色土である。覆土3層は床面直上の土で、暗茶灰色土+Vの汚れた土である。

重複関係: 本住居跡はH-405・408・478・484・506・512と重複しており、H-405より古い、他よりはあたらしい。H-408とは新旧関係は明確ではないが、古い可能性がある。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: IV層中に構築されている。北西から南東にゆるやかに傾斜しており、ほぼ平坦であるが、軟質である。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が18cm前後、西壁が15cm前後、南壁が13cm~19cm、東壁が14cm~23cmである。

炉跡: 覆土2層上面で0.44m×0.34mの範囲に火熱を受けた赤橙色の広がりが見出されている。凹地を利用した生活面に伴うものである。本住居跡に伴う焼土などは検出されていない。

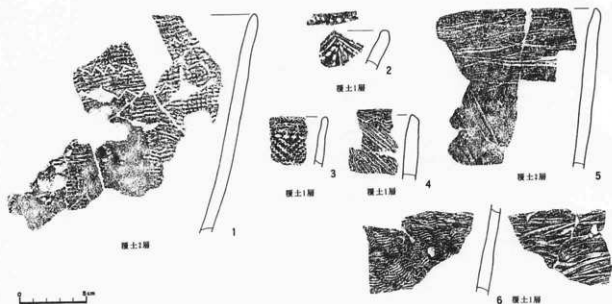
付属ビット: 柱穴状小ビットは7個検出されている。HP-2~6は壁際をめぐるもので、直立している。HP-1・7は主柱穴と思われ、2本柱が想定される。

遺物出土状況: 出土遺物総数は143点である。この内訳は土器49点、石器等94点である。床面から、石皿1点が出土している。大半が覆土1層から出土したものである。出土した土器はI群D1類のもので、わずかにI群D2土器、同E類土器、I群土器も出土している。石器では石鎌、石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘(19点)などが出土しており、覆土1層からは黒曜石製の異形石器が1点出土している。

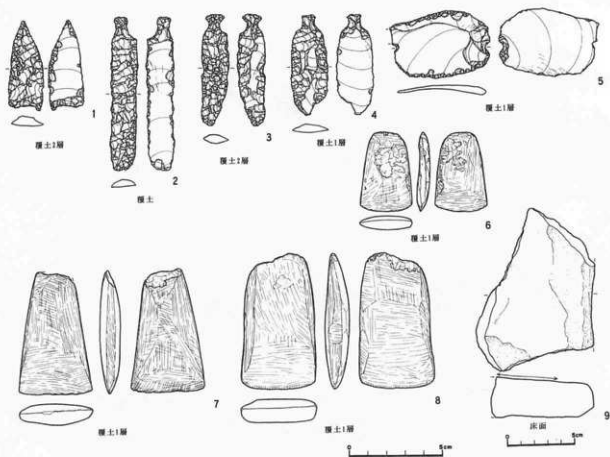
土器: 1は覆土2層、2~6は覆土1層から出土した土器で、2~5はI群D1類土器、1はI群D2類土器、6はI群E類土器である。1はH-405覆土1層、42-43Ⅲ層出土の土器片が接合した口縁・胴部の破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁による押引文、鋸歯状沈線文が施文され、内面にはすり消し条痕文が見られる。胎土は緻密で、やや軟質。2は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部には刺突文、外面には沈線、刺突文が施文され、内面には連続押引文が見られる。胎土は緻密である。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、連続押引文が施文される。内面は粗いナデ調整。4はH-478覆土上Ⅲ層出土の土器片と接合したものである。平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には鋸歯状沈線文、外面には沈線と刺突文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。5は42-32Ⅲ層、42-33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、平縁の口縁・胴部破片。口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻条痕文、内面にはナデ調整が加えられている。6は胴部破片。外面には引摺り背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。

石器: 1は1b類の石鎌。2~4は石匙。2・3は2a類、4は周辺加工のものである。5は両端扶





図Ⅲ-175 H-470出土土器

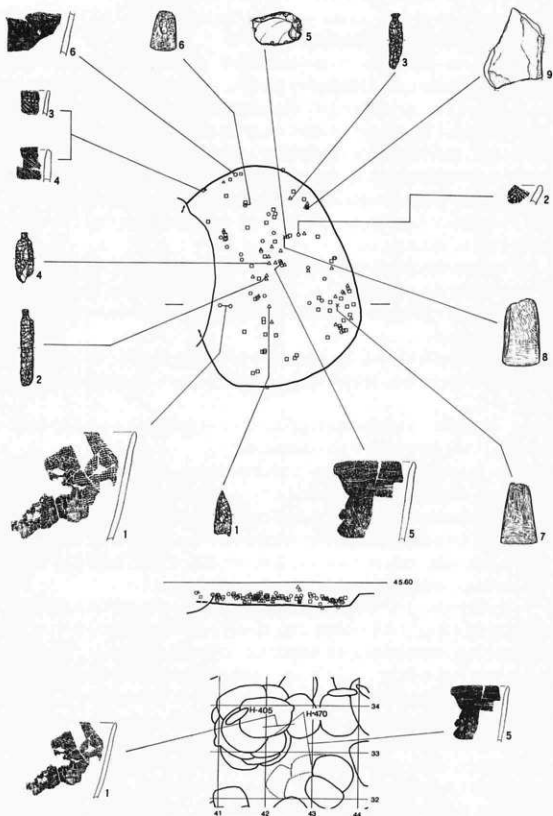


図Ⅲ-176 H-470出土石器

入石器。6～8は蛇紋岩製の石斧。9は床面出土の石皿である。

(和泉田 毅)

H-470



図Ⅲ-177 H-470出土遺物分布・接合図

H-471 (図Ⅲ-178~181, 図版29・111・139・177)

位置: 43-34・35, 44-34・35 標高45.44m~45.71mの平坦地に位置している。

規模: 5.74m/5.32m×——/——×0.34m 床面積: (16.00)㎡

平面形: ほぼ隅丸長方形か? 長軸方向: N-70°-E

確認・調査・土層: 43-34・35, 44-34・35の包含層調査中、IV層直上でⅢb層の広がりが見られ、Ⅲb>Vの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。覆土2層中で一括土器が出土し、それらを取り上げ、混合土状の暗茶灰色土の下で、柱穴状ピットを検出した。この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土で、壁の周辺にはⅢb>Vの堆積が見られた。覆土2層は混合土状の暗茶褐色土である。覆土3層は覆土2層と酷似するが、黄色土がやや多い混合土の暗茶灰色土である。床面直上には汚れの目立つ暗茶黄色土と砂質の暗茶褐色土が薄く見られた。重複関係: 本住居跡はT-161、H-406・408・481・512・513・532と重複しており、T-161、H-406・408より古い、他より新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。やや凹凸があるが、ほぼ平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が26cm~33cm、西壁が17cm~24cm、東壁が26cm~32cmである。

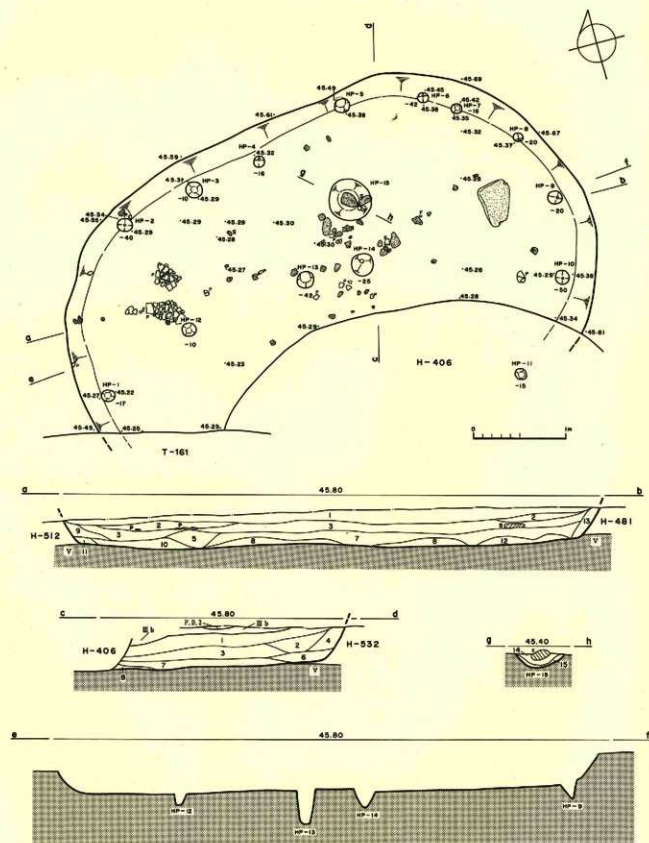
炉跡: 焼土などは検出されていない。HP-15は0.46m×0.43m、深さ0.14mほどの浅いピットである。覆土は混合土の茶褐色土である。炭化物などは余り混入していないが、掘り込みの炉跡に類するものかとも考えられる。

付属ピット: 柱穴状小ピットは14個検出されている。HP-1~11は壁際をめぐるもので、直立している。HP-12・13・14は支柱穴に関係するものと思われる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は503点である。この内訳は土器285点、石器等218点である。床面、床面直上付近などから土器が15点、石器が21点出土している。遺物は大半が覆土2層から出土したものである。とくに西壁付近で内面を上にし、ほぼ水平の状態ではI群D1類土器が一括出土した。出土した土器は、I群のもの2点、I群E類のもの2点が出土しているが、他はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、石槍、石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錐(60点)などが出土しており、また覆土2層から黒曜石製の異形石器が1点出土した。

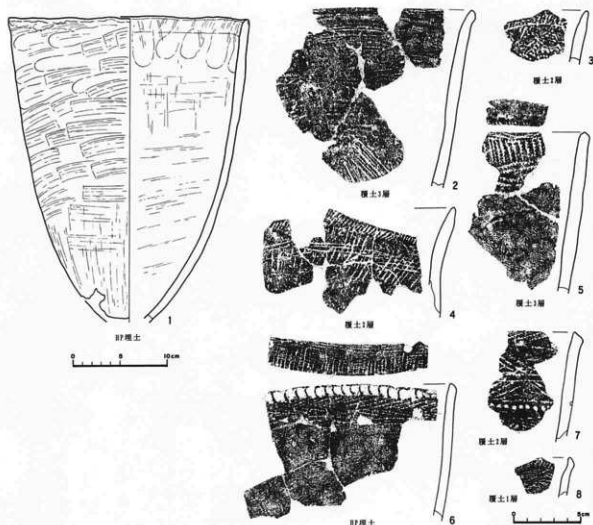
土器: 1・2は覆土3層、3~7は覆土2層、8は覆土1層からそれぞれ出土した土器である。1~8はI群D1類土器である。1はH-406覆土2層、43-34 I・Ⅲ層出土の土器片と接合したもので、尖底部は欠失するが、ほぼ全体が復元できた個体である。口径25.5cm、器高約34cm。胴部下位にふくらみをもつ。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部内外面には指頭圧痕や胴部内外面には貝殻条痕文も見られるが、全体的には丁寧なナデ調整が加えられている。焼成良好で堅い。2は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。3は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部外面には連続波状線文が施文され、外面には刺突文、沈線文が縦に施されている。内外面はナデ調整。内面にはススの付着がある。4は43-33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部外面には連続波状線文、口縁部外面には連続押印文、櫛歯状波状線文が粗雑に施文されている。内面には貝殻条痕文が見られ、外面にはミガキ痕が残る。胎土は緻密で、軟質である。5は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部、口縁部外面には貝殻波状線文、口唇

H-471



- H-471の土層
1. 黒b>V (暗褐色土、  
覆土1)
  2. 黒b>V (褐色土、  
覆土1)
  3. 暗茶褐色土 (覆土2)
  4. 暗褐色土 (2よりV  
が少ない)
  5. 明黄褐色土 (3+V)
  6. 3+V (褐色土、軟  
質)
  7. 暗茶灰色土
  8. 7+V (暗茶黄色土)
  9. 黒b>V (暗褐色土、  
2より黒bが多い)
  10. 黒b+V (黄褐色土)
  11. 暗黄褐色土 (砂質)
  12. 明黄褐色土 (砂質土)
  13. 黄褐色土 (軟質)
  14. 茶褐色土
  15. 14+V

図Ⅲ-178 H-471実測図

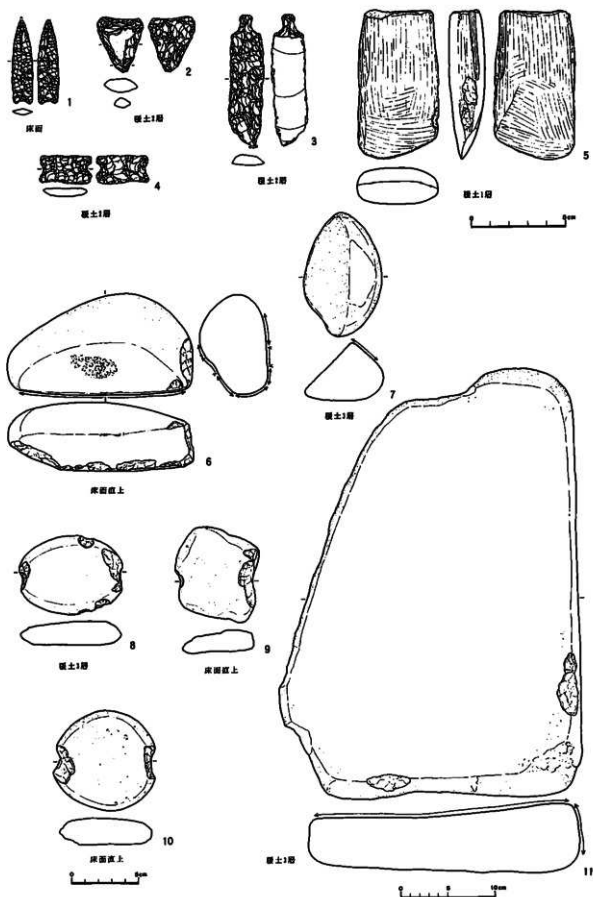


図Ⅲ-179 H-471出土土器

部内外面には連続腹縁文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。胎土には砂粒を含み、脆弱である。6はH-406覆土2層出土の土器片と接合した口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口唇部内面には櫛歯状連続腹縁文、口縁部外面には羽状の櫛歯状腹縁文が施文される。口唇部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、胴部外面には連続押引文が見られるが、全体にナデ調整。内面には貝殻条痕文が加えられている。7は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には刺突文、貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられる。胴部外面は背圧痕、内面はナデ調整が見られる。8は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状気味である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内面にはすり消し条痕文が見られ、外面はナデ調整。胎土には砂粒を含み、脆弱である。

石器：1は床面出土の石鐮。両面加工で、長身のものである。2は黒曜石製の石錐。3は2b類の石匙。4は黒曜石製の異形石器。5は石斧。6は床面直上出土のすり石。断面三角形で、稜をすっている。7は砥石。8～10は石錘。8は挟り部が4ヵ所ある。11は石皿。

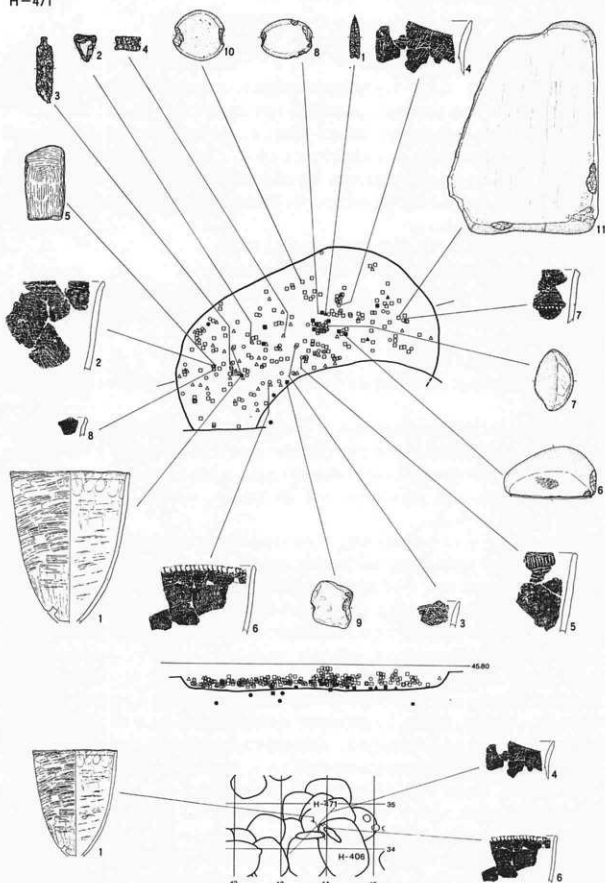
(和泉田 毅)



図Ⅲ-180 H-471出土石器



H-471



図Ⅲ-181 H-471出土遺物分布・接合図

H-472 (図Ⅲ-182~188, 図版30・31・112・140・178)

位置: 42-32, 43-31・32 標高44.88m~44.97mの平坦地に位置している。

規模: 3.95m/3.40m×(2.70)m/(2.26)m×0.32m 床面積: (7.23)㎡ 平面形: 卵形

長軸方向: N-18°-W

確認・調査・土層: 42-32, 43-31包含層調査中、灰褐色土、Ⅲb層の広がり確認された。H-450との重複関係ははっきりしないため、土層観察用の土手に沿って小トレンチを入れ、調査を行った結果、H-450を切っている黒褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中でやや堅い面が検出され、また柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層は灰褐色土で、遺物が多量に混入している。覆土2層は粘質で、堅い黒褐色土である。覆土3層は軽石を多く混入する汚れた暗黄茶色土である。

重複関係: 本住居跡はH-450と重複しており、これより新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。北から南へゆるやかに傾斜し、やや軟質である。

壁: 立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が30cm~36cm、南西壁が33cm~41cm、南東壁が33cm~37cmである。

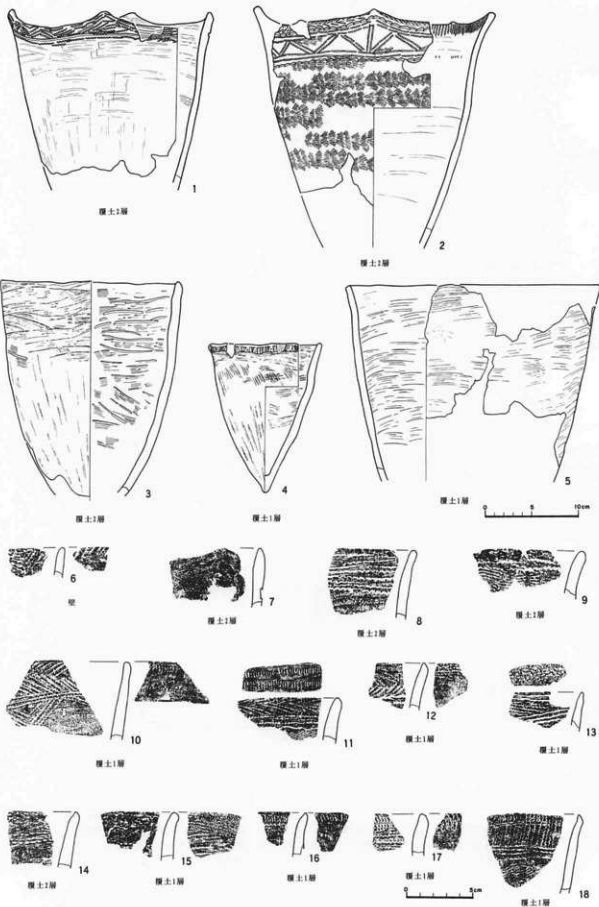
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは10個検出されている。これらは壁際をめぐるもので、直立し、杭状のものである。

遺物出土状況: 出土遺物総数は955点である。この内訳は土器537点、石器等418点である。床面付近からは土器1点、礫1点が出土しただけで、出土遺物の大半は覆土1層から出土したものである。出土土器は、I群D1類のものがほとんどで、同D2類(3点)、同E類(4点)のものの出土している。石器では石槍、石錐、石匙、スクレイパー、石斧、擦り切り残片、たたき石、すり石、石皿、石鏝(83点)などが出土している。

土器: 6は壁、1~2・7~9は覆土2層、4・5・10~28は覆土1層からそれぞれ出土したものである。1~24・28はI群D1類土器、25・26はI群D2類土器、27はI群E類土器である。1はH-480覆土2層、H-484覆土2層、H-450覆土1層出土の土器片が接合したものである。口径21.8cm。口縁部は肥厚し、ゆるやかに外反する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。上面観は丸味のある方形である。口縁部外面には貝殻腹縁による連続波状文横走する沈線、下端には貝殻腹縁文が施文される。胴部内面にすり消し条痕も見られるが、内外面ともナデ調整が加えられている。2は覆土2層で一括出土した土器で、H-472覆土1層、42-33揚土出土の土器片が接合したものである。底部は欠失する。口径25.7cm。胴部上位にふくらみをもち、口縁部は外反する。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続腹縁文が施文される。口縁部外面は、2条の横環する貝殻腹縁文の間に鋸歯状に貝殻腹縁文が見られ、この上下に小波状の沈線文が施される。胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整が加えられている。3はH-473覆土1層、42-32Ⅲ層、43-32Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径19.6cm。平縁で、口唇部断面形は切り出し状気味である。内外面には粗い貝殻条痕文が加えられる。4は43-31揚土出土の土器片と接合したもので、全体が復元できた個体である。口径12.0cm、器高15.9cmの乳房状尖底土器である。平縁で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部で屈曲し、外反する。口唇部外面にはへら状工具による粘土



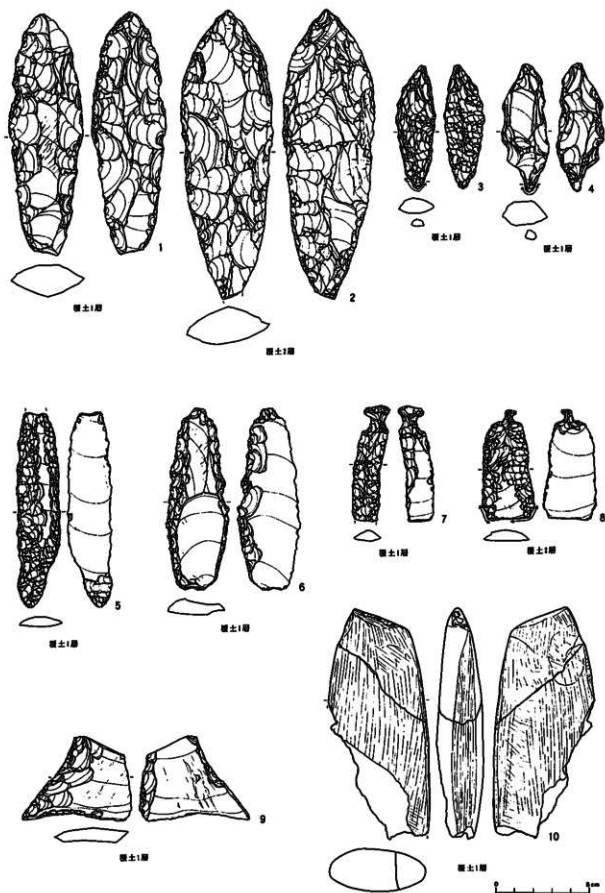


図Ⅲ-183 H-472出土土器(1)

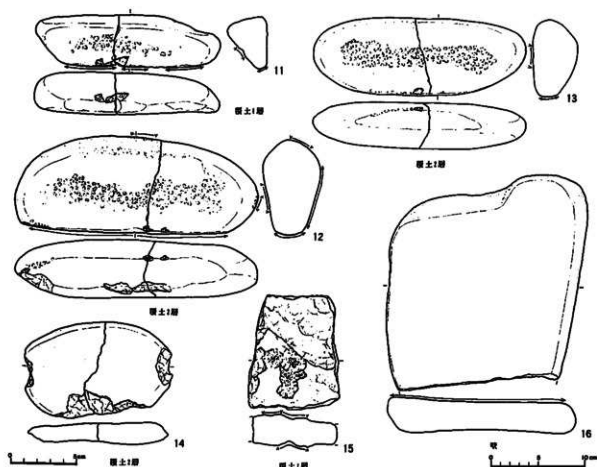


図Ⅲ-184 H-472出土土器(2)

のつまみ上げがなされている。内外面に貝殻条痕文が見られるが、全体的にナデ調整が加えられている。つくり、調整は粗雑である。5はT-171覆土下層、44-32Ⅲ層、45-32Ⅰ層、46-33Ⅰ層出土の土器片が接合したもので胴部下半は欠失している。口径27.1cm。胴部はほぼ直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。平縁で、口唇部は角形に仕上っている。内外面ともナデ調整が加えられている。6は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面に櫛歯状腹縁文が施文されている。焼成良好で堅緻。7は小波状口縁の破片で、口唇部は丸く仕上っている。内面はナデ調整、外面には背圧痕が加えられている。8は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。胎土には砂粒が多く、器表面はザラザラしている。9は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文、連続押引文が施文されている。内外面はナデ調整。10は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。11は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には貝殻腹縁文、鋸歯状沈線文が施文され、内面には連続腹縁文が施文される。胴部外面には背圧痕が見られる。12は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には、貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文、刺突文が施文され、内面には連続押引文が施文される。13は波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。外面には沈線、貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面には連続押引文が見られる。14は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には沈線上に刺突を加えている。内外面はナデ調整。胎土には砂粒を含む。15は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には連続波状文、細く浅い鋸歯状沈線文、刺突文が施文され、口縁部内面にはロッキング状に貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内面はすり消し条痕。焼成良好で堅緻。16は平縁の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。17は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部内外面には連続波状文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。18は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が丁寧に施文され、背圧痕も見られる。内面には貝殻条痕文が加えられている。19は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には櫛歯状腹縁文、沈線文が施文され、内外面には貝殻条痕文が加えられている。20は平縁の口縁部破片で、



図Ⅲ-185 H-472出土石器 (1)



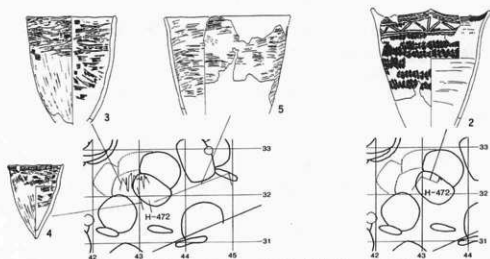
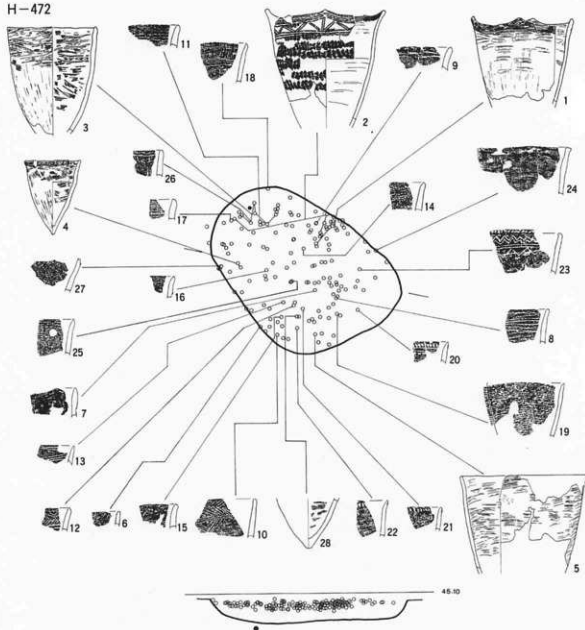
図Ⅲ-186 H-472出土石器(2)

口唇部断面形は切り出し状である。口唇外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、外面には沈線と刺突文が施文されている。口唇端部には丸いヒモ状の圧痕が見られる。21は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げがなされ、内外面はナデ調整。22は波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇外面にはへら状工具による粘土のつまみ上げが見られる。内外面はナデ調整。23は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部は刺突文、口縁部外面には上から2条の鋸歯状沈線文、2条の沈線、鋸歯状沈線文が施文される。内面はナデ調整。24はH-450覆土2層出土の土器片が接合したもので、小波状口縁で、口唇部は角形に仕上げている。内面はナデ調整。外面はすり消し条痕。焼成良好で堅く、補修孔がある。25は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口唇部内面、口縁部外面には連続押引文が施文される。補修孔がある。26は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には刺突文、口縁部外面には貝殻条痕文が加えられる。27は胴部破片で、外面には引摺り背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。28は乳房状の尖底部で、内面には貝殻条痕文が加えられている。

石器：1・2は石槍。1は木葉形、2は1a3類。3・4は石錐。3は4類、4は3類のものである。5～8は石匙。9はスクレイパー。10は43-31Ⅲ層出土の破片が接合した石斧。11～13はすり石。ともに平坦面に連続した斑状のたたき痕が残り、途中で折れている。11は43-31揚げ土、12は42-31揚げ土、13は42-32揚げ土からそれぞれ出土した破片と接合した。14は石鏝。15は台石。回転痕のあるくぼみを残す。16は石皿。

(和泉田 毅)

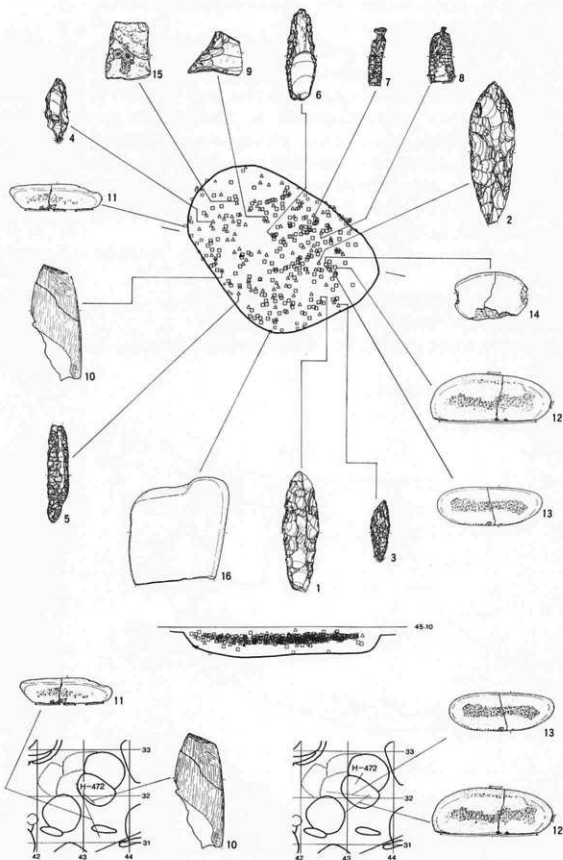
H-472



図Ⅲ-187 H-472出土土器分布・接合図



H-472



図Ⅲ-188 H-472出土石器分布・接合図

H-473 (図Ⅲ-189～195, 図版30・31・112・113・141・142・179)

位置: 41-32・33, 42-32・33 標高45.25m～45.30mの平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 41-32・33, 42-31・33の包含層調査中、覆土状の土の中でⅢb層の広がりや確認され、堅い暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から順次掘り下げ調査を行う。覆土上層で遺物が多く出土し、それらを取り上げつつ掘り下げ、暗茶褐色系の土と黄色土がまじり合った土の下で黄色土の堅い面を検出した。この面を床面とし、壁の立ち上がりを確認したが、ただ、他遺構の覆土が壁になっており、またV層の立ち上がりも明瞭でなかった。遺物の出土状態、土の堅さ、また柱穴状小ピットの検出位置などから壁の立ち上がりを確定した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢb>V(暗褐色土)、覆土2層はⅢb>V(褐色土)である。覆土3層は茶褐色系の土で、やや堅い部分も含む混合土状の土である。覆土4層は床面直上に見られる茶褐色土+Vの混合土である。

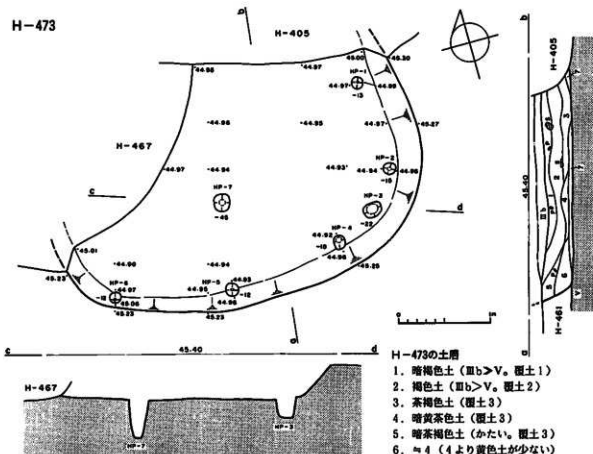
重複関係: 本住居跡はH-405・467・461・490・506と重複しており、H-405・467より古い、他より新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。堅く、平坦である。

壁: 残存部分の立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、南壁が26cm～32cm、東壁が30cmである。

伊跡: 焼土などは検出されていない。

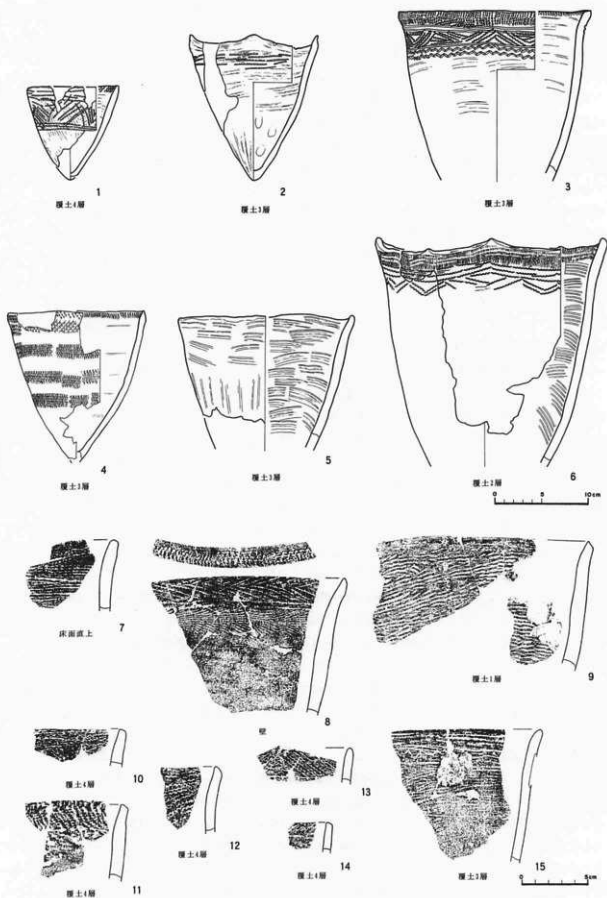


図Ⅲ-189 H-473実測図

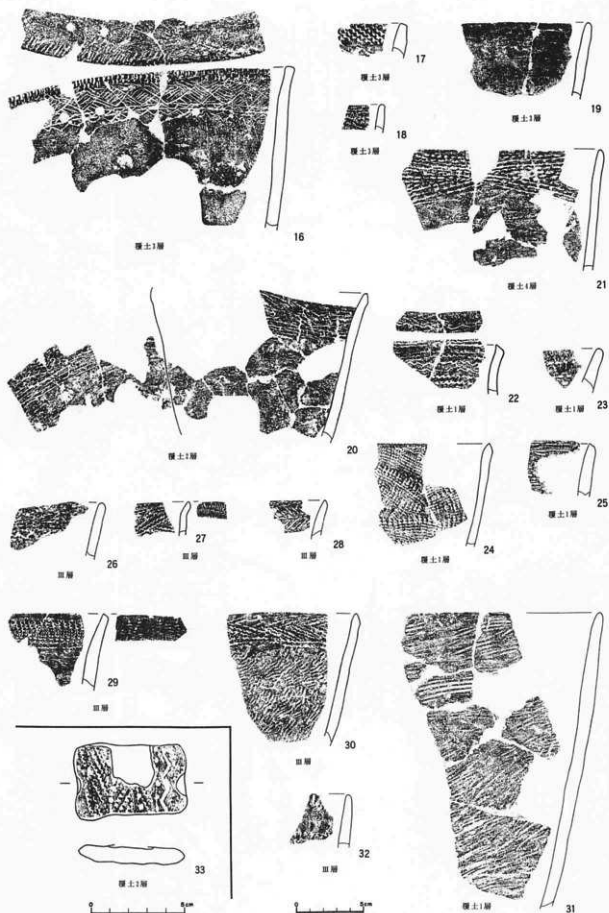
付属ピット：柱穴状小ピットは7個検出されている。HP-7は主柱穴と考えられ、他は壁際をめぐるもので、直立している。

遺物出土状況：出土遺物総数は977点である。この内訳は土器627点、石器等349点、土器片鍾1点である。床面、床面直上付近からは土器20点、石器が10点出土している。遺物は覆土中から多く出土している。とくに覆土1層と覆土2層（覆土3層上面付近）で多く出土し、覆土3層上面付近では、内面を上にし、水平の状態でI群D1類土器の口縁部破片が一括して出土した。HP-7の覆土からもI群D1類土器が出土した。出土した土器は、覆土1層でI群D2類のものが4点、同E類のものが2点出土した以外は、すべてI群D1類土器である。石器では石匙、鋤状石器、石斧、たたき石（6点）、すり石（10点）、砥石（6点）、台石、石錘（82点）などが出土している。

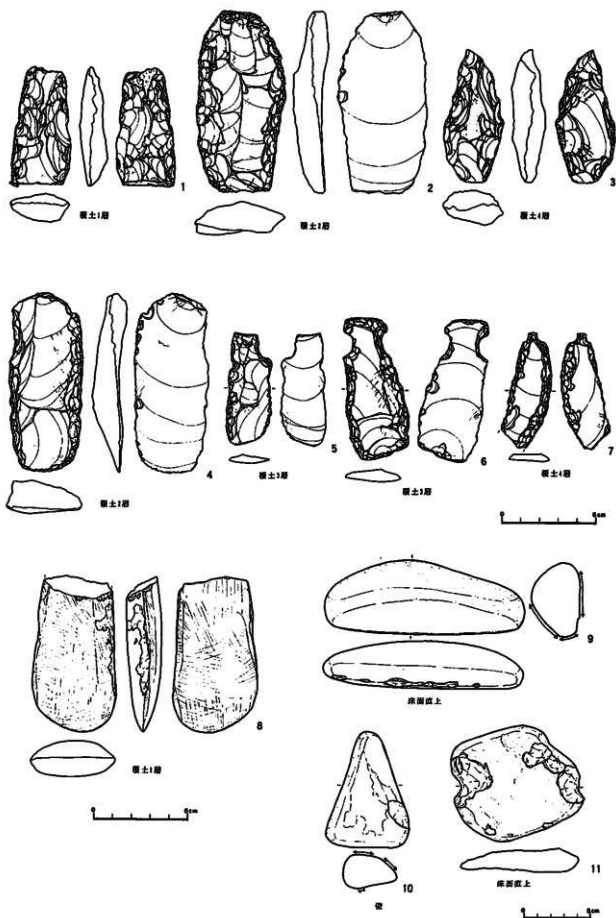
土器：7は床面直上、8・9は壁、1・10～14は覆土4層、2～5・15～19は覆土3層、6・20・21・33は覆土2層、22～25は覆土1層、26～32は覆土上Ⅲ層からそれぞれ出土したものである。1～8・10～23・26～30・33はI群D1類土器、9・24・25・31はI群D2類、32はI群E類土器である。1はH-461覆土1層、H-490覆土2層出土の土器片が接合したもので、底部が一部欠失しているが、ほぼ全体を復元できた個体である。口径9.6cm、器高約10.3cm。胴部は直線的に外傾し、口唇部は鋭角的に仕上げている。平縁の尖底土器である。文様は胴部中位程まで施文している。口縁部内面には連続腹縁文、口縁・胴部外面には横走する貝殻腹縁圧痕文、連続波状文が施文されている。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。2はH-461覆土1層、H-410覆土1層、41-32Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、口径13.4cm、器高15.3cmの尖底土器である。ほぼ全体が復元できた個体である。胴部中位がややふくらみ、口縁部は直線的に外傾する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には横走する粗い貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面にはナデ調整が加えられる。つくり、文様は粗雑である。3はH-405覆土1層出土の土器片と接合したもので、底部は欠失している。口径20.2cm。胴部中位が丸味をもち、口縁部は外反する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面は連続腹縁文、口縁部外面には、連続押引文、沈線、連続波状文、沈線、鋸歯状沈線文が施文されている。胴部内外面にはナデ調整が加えられている。焼成良好で、つくりは丁寧で、丸味をもち、美しい。4はH-410覆土1層出土の土器片と接合したもので、尖底部は欠失する。口径14.8cm、器高約16.5cm。平縁で、口唇部は肥厚し、端部は鋭角的に仕上げている。口唇部内外面は連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、胴部外面にはロッキング状に貝殻腹縁文が3段施文されている。内面には貝殻条痕文が見られるが、全体にナデ調整が加えられている。器表面はザラザラしている。5はH-410覆土1層、H-472覆土1層、H-405覆土上Ⅲ層、40-31Ⅰ層、42-31・43-31揚土出土の土器片が接合したもので、底部は欠失する。口径18.8cm。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。外面はナデ調整、内面は貝殻条痕文が加えられている。胎土には小石が混入し、器表面はザラザラしている。6はH-461覆土1層、41-32Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失する。口径24.4cm。口縁部はゆるやかに外反する。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。上面観は八角形である。口縁部内外面にはロッキング状の貝殻腹縁圧痕文、その下に横走、鋸歯状の貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面には丁寧なナデ調整が加えられている。7は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面は連続押引文の上に波状、横位の沈線が加えられ、口唇部には連続腹縁文が施文される。内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、脆弱である。8は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には羽状と横位の貝殻腹縁圧痕文が施文される。口唇部内面には連続押引波状文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられる。9はH-478壁・覆土1層出土の土器片が



図Ⅲ-190 H-473出土土器(1)

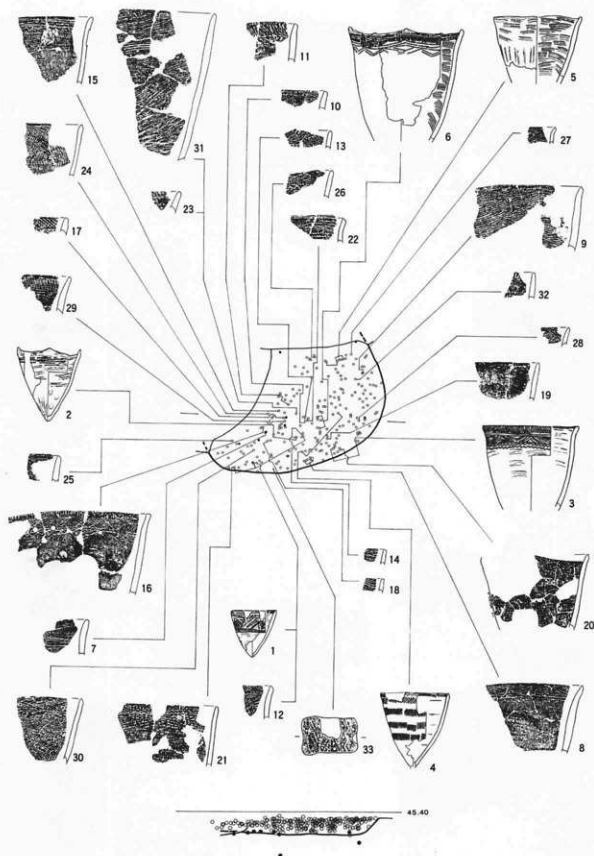


図Ⅲ-191 H-473出土土器(2)



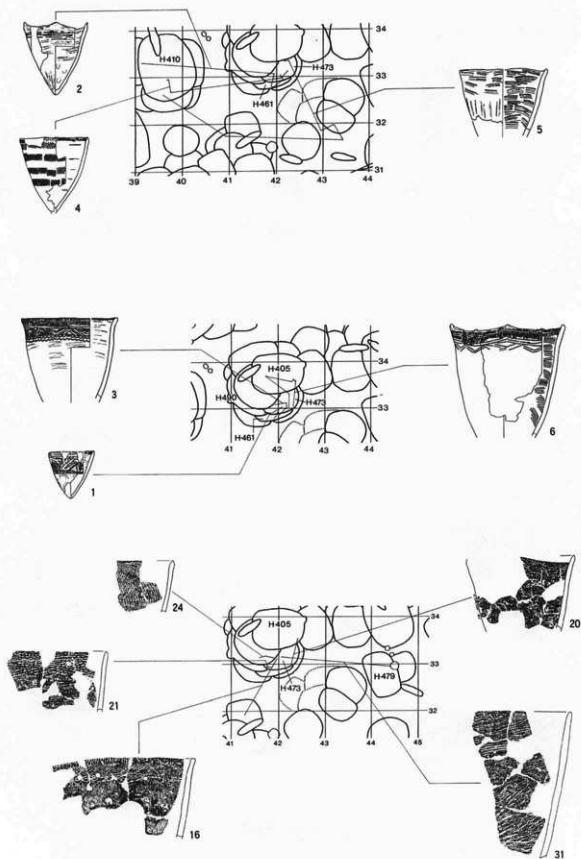
図Ⅲ-192 H-473出土石器

H-473



図Ⅲ-193 H-473出土土器分布図

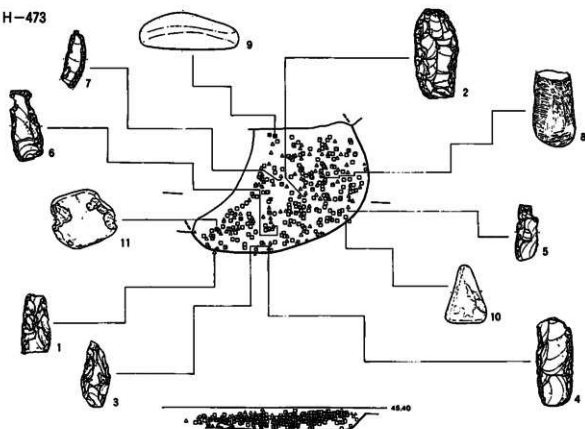
## H-473



图Ⅲ-194 H-473出土土器接合图



H-473



図Ⅲ-195 H-473出土石器分布図

接合した平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面に引摺り背圧痕、内面にはすり消し条痕文が加えられる。焼成良好で堅緻。10は小波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げられている。外面には貝殻腹縁圧痕文、沈線が施文される。11は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁による連続押引文、刺突文が施文される。内外面はナデ調整。12は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。13は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面はナデ調整。口唇部は丁寧なナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。14は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が見られる。胎土は粗く、脆弱である。15は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には沈線、貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、内面はナデ調整、外面はすり消し条痕。16は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、内外面には連続腹縁文、口縁部外面には細く浅い沈線で、鋸歯状や横走する文様を描いている。胴部内外面にはナデ調整が加えられている。17は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。18は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。19は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面はナデ調整で、粗い鋸歯状沈線文が加えられている。内面には貝殻条痕文が加えられている。20はH-506覆土1層、H-454覆土1層、H-497覆土1層、43-31掘げ土出土の上器片と接合したものである。波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面には

貝殻条痕文が加えられ、口縁部外面には粗い櫛歯状腹縁文が施文されている。胎土は緻密であるが、やや軟質。21は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部外面には沈線上に刺突を加えている。内外面はすり消し条痕。胎土粗く、器表面はザラザラしている。22は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁文、口縁部内面には鋸歯状沈線文が施文されている。23は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には刺突文が見られる。24は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には貝殻腹縁により連続押引文が施文され、刺突文が加えられている。内面はナデ調整。25は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には沈線文が見られる。胎土は緻密であるが、軟質である。26は小波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁により押引文が施文され、鋸歯状沈線文が見られる。胎土には砂粒を含み、軟質で、脆弱である。27は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上っている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、口唇内面には連続押引文が施文される。28は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には羽状の沈線文と刺突文が施文される。内面には貝殻条痕文が加えられている。29は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部内外面には連続押引文、下端には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面にはナデ調整が加えられる。30は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は鋭角的に仕上られている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が羽状、横位に施文される。外面には背圧痕、内面にはすり消し条痕が加えられている。31はH-479覆土上のⅢ層、44-33Ⅰ層、44-32Ⅰ層出土の土器片が接合したものである。平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面に貝殻条痕文が加えられる。胎土には砂粒が多く、軟質で、脆弱である。32は口縁部破片。口唇部は丸く仕上げる。内外面はナデ調整。33は口縁部破片を利用した土器片である。打ち欠きが2カ所あり、外面には貝殻腹縁圧痕文、刺突文、鋸歯状沈線文が施文され、内面には連続押引文が見られる。やや軟質である。

石器：1～4は鏃状石器。1・3は1a類、2・4は2a類に属するもの。5～7は石匙。5は薄い剥片を素材とし、周辺を加工したものである。8は基部が欠損する石斧。9は床面直上出土のすり石。断面三角形で、稜をすっている。10は砥石。11は床面直上出土の石錘である。

(和泉田 毅)

H-474 (図Ⅲ-196～199, 図版32・113・143・179)

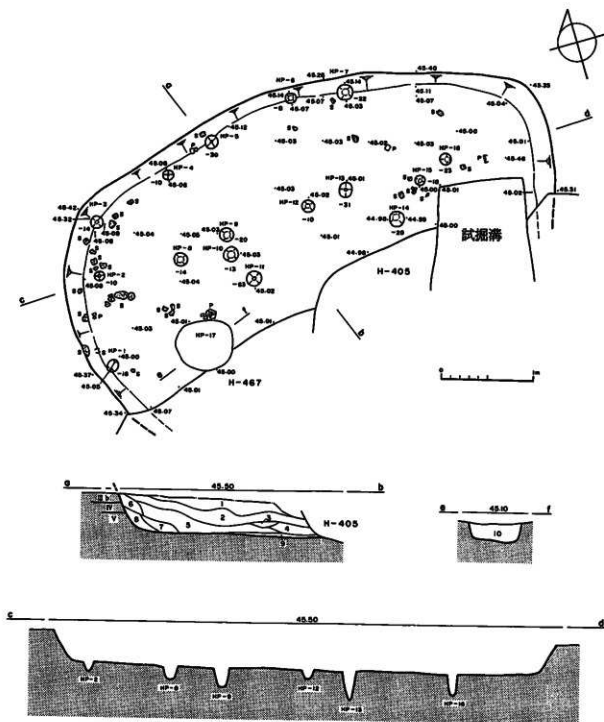
位置：40-33・34 41-33・34 標高45.48m～45.31mの平坦地に位置している。

規模：5.43m/5.00m×——/——×(0.38)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：40-33・34、41-33・34の包含層調査中、Ⅳ層直上でⅢb>Ⅴの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、順次掘り下げ、調査を行う。覆土を掘り下げ茶褐色系の土の下に同層と黄色土がまじり合った土が薄く見られ、この下でⅤ層の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出したことから、この面を床面とした。Ⅴ層の立ち上がりも見られ、ほぼ壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。また、北西側で暗黄色土の広がりが見られたが、本住居跡がこれを切っていることも明らかになり、他住居跡の掘り掘り土を切って構築されているものと考えられる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Ⅴの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Ⅴの褐色土である。覆土3層は茶褐色系の混合土で、床面直上まで見られ、中央部分ではやや堅くなっている。

重複関係：本住居跡はH-405・467・484・490・505と重複しており、H-405・467より古く、他より新しい。

H-474



## H-474の土層

1. Ⅲb>V (覆土1) 2. Ⅲb>V (覆土2) 3. 5に黄色土粒が多く混入 4. 暗茶褐色土 (ややかたい。覆土3) 5. 茶褐色土 6. 暗褐色土 (1よりかたい) 7. 暗茶褐色土 (軽石少量混入) 8. 暗黄褐色土 9. 5+V 10. 暗茶褐色土 (V・炭化物を少量含む)

図Ⅲ-196 H-474実測図

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を深く掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

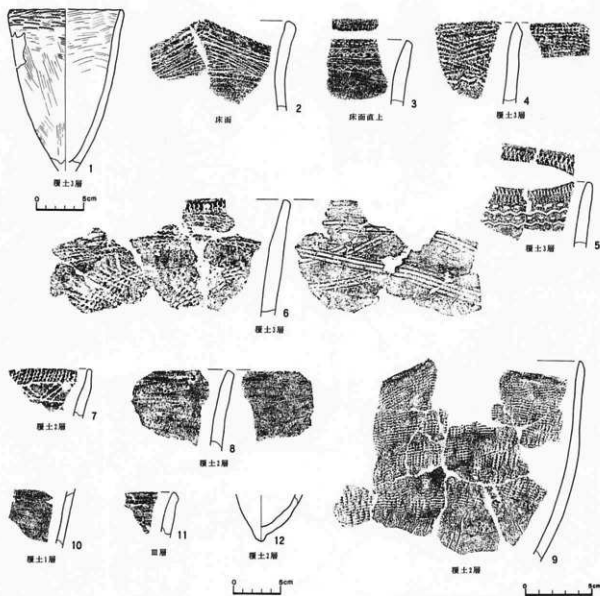
壁：全体に立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁高が17cm～42cm、西壁高が23cm～34cm、東壁高が30cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは16個検出されている。HP-1～7は壁際をめぐるもので、直立している。HP-8～16は直立しており、主柱穴と思われる。HP-11とHP-14、HP-10とHP-15、HP-8・12・16がそれぞれ伴うものと想定される。建て替え、拡張が行われたものだろう。HP-17は0.6m×0.5m、深さ約0.2mのビットで、床面で検出した。この上層付近で遺物が多く出土し、覆土は混合土状の暗茶褐色土が墳底まで堆積しており、炭化物を混入していることなど、小型のフラスコ状ビットに酷似している。

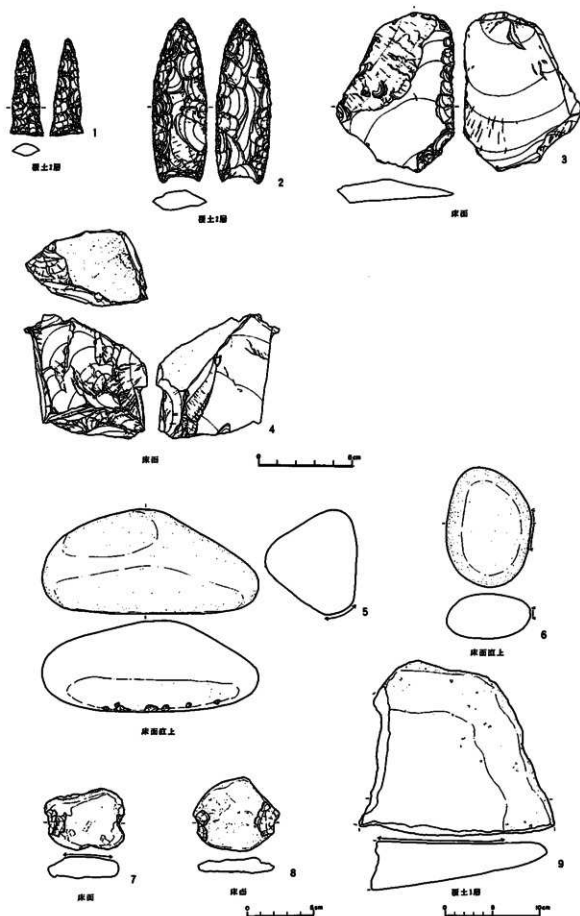
遺物出土状況：出土遺物総数は523点である。この内訳は土器269点、石器等254点である。床面、床面直上付近からはI群D1類土器が14点、たたき石(3点)、すり石、砥石、石錘(16点)などが出土している。遺物は覆土3層の北～西側で多く出土した。ただまとまりは見られない。出土した土器はI群D1類(267点)、同E類(2点)のもので、石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、砥石(7点)、石錘(63点)などが出土している。

土器：2は床面、3は床面直上、1・4・5は覆土3層、6～9・12は覆土2層、10は覆土1層、11は覆土上Ⅲ層からそれぞれ出土したものである。1～8・11・12はI群D1類土器、9はI群D2類土器、10はI群E類土器である。1は底部は欠失するが、ほぼ全体を復元できたものである。口径約12.4cm。平縁で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には横位の貝殻腹縁圧痕文が施文される。胴部外面は貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整。内面には貝殻条痕文が加えられている。堅いが、つくりは粗雑である。2は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には櫛歯状腹縁文、口縁部外面には沈線状に貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。外面はナデ調整、内面はすり消し条痕。3は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面には連続腹縁文が見られ、口縁部外面には刺突文、沈線、櫛歯状沈線文が施文されている。内面はすり消し条痕、外面はナデ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。4は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、口縁部内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文されている。5は40～33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、波状の口縁部破片である。口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面には連続波状文、口縁部外面には刺突文、波状の沈線文が施文されている。内面はナデ調整。胎土は粗い。6はH-490覆土2層出土の土器片が接合した平縁の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には沈線状に貝殻腹縁文が加えられ、胴部外面には連続押引文、内面には貝殻条痕文が加えられている。7は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文が施文され、口縁部外面には沈線状に刺突文が加えられている。8は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。内外面にはすり消し条痕文が加えられている。9はH-405覆土上Ⅲ層出土の土器片と接合したものである。波状の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。内面はナデ調整が加えられている。10は胴部破片。内外面はナデ調整。焼成良好で堅い。11は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。内面には貝殻条痕文、外面にはナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が多く、器表面はザラザラしている。12は乳房状の尖底部。



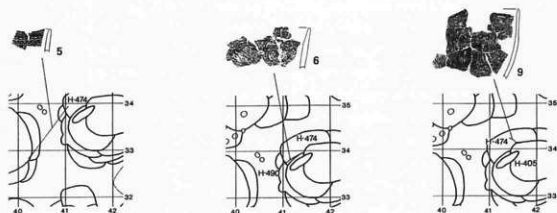
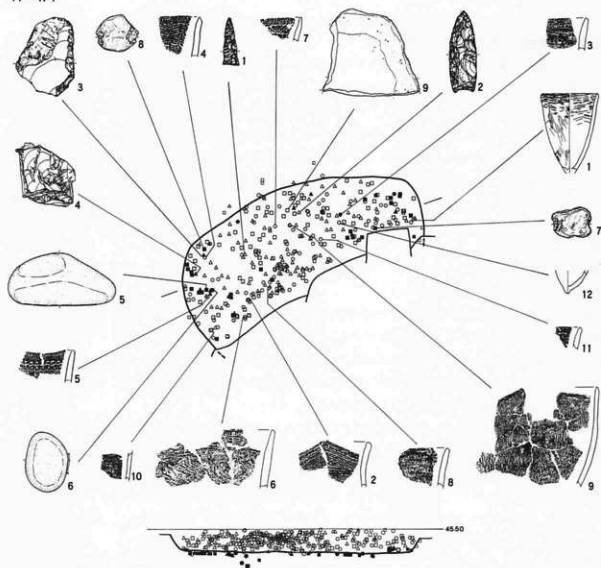
図III-197 H-474出土土器

石器：1は2b類の石鏃。2は4類の石槍。3は床面出土のスクレイパー。4は床面出土の石核。原石の鏃面が一部に残存している。5は床面直上出土のすり石。断面三角形で、稜をするもの。6は片岩製のたたき石。側縁部を使用している。7・8は床面出土の石鏃。7は凝灰岩製、8は流紋岩製である。9は石皿である。  
(和泉田 毅)



図庫-198 H-474出土石器

H-474



図Ⅲ-199 H-474出土遺物分布・接合図

H-475 (図Ⅲ-200~203, 図版32・114・143・180)

位置: 39-33, 40-32・33 標高45.11m~45.28mの平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: IV層直上付近でⅢb>Vの広がり確認され、暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。覆土3層を掘り下げ中に東壁付近で灰褐色土が見られた。これを壁と考えたが、床面調査で壁の確認を行ったところV層の立ち上がりが見出され、この灰褐色土が取れることが判明した。また壁外にも同じような土が広がっており、他遺構の掘り揚げ土ではないかと思われる。本住居跡が廃棄され、覆土3層が堆積する前にこの土が流れ込んだものと考えられる。暗茶褐色系の土と黄色土がまじり合った土の下にV層の堅い面が見出された。この面を床面とし、壁の立ち上りを見出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は3層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Vの褐色土である。覆土3層は茶褐色の混合土である。

重複関係: 本住居跡はH-410・477・517と重複しており、H-410より古く、H-517より新しいが、H-477との新旧関係は明瞭でない。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を深く掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

壁: 残存部分の立ち上がりは急傾斜である。全体に壁高は26cm~34cmである。

炉跡: HP-4とHP-5の間の床面で径0.45mほどの円形状の部分が黄褐色に変色し、粘質になっていた。恐らく、火熱を受け赤色化したものと思われる。

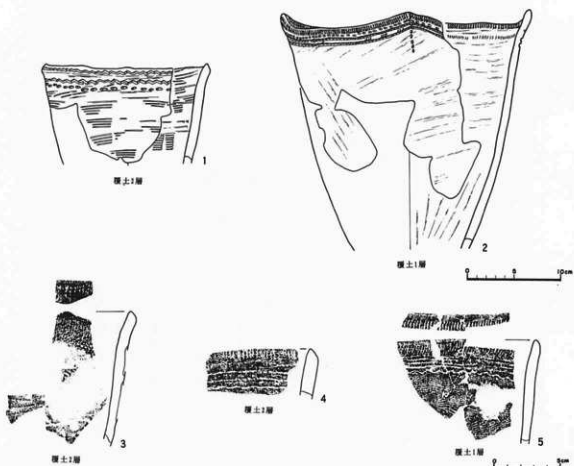
付属ピット: 柱穴状小ピットは5個検出された。HP-1~3は壁をめぐるもので、直立している。

遺物出土状況: 出土遺物総数は344点である。この内訳は土器188点、石器等156点である。土器は床面付近では出土していない。石器はHP-2・5の覆土中から石鏃が1点づつ出土している。遺物は覆土中から出土したもので、土器は覆土1層、石器は覆土2層から多く出土しているが、まともは見られない。土器はすべてI群D1類のもので、石器では石鏃、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、砥石、石鏃(45点)などが出土している。

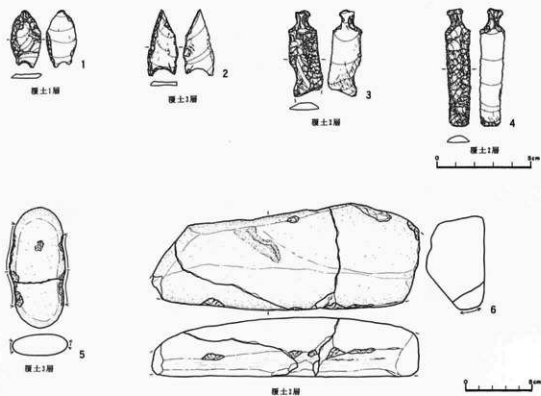
土器: 1・3・5は覆土2層、2・5は覆土1層から出土したもので、これらはI群D1類土器である。1はH-410壁・覆土1層、40-33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、胴部下半は欠失している。口径18.4cm。口縁部は外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には鋸歯状沈線文、刺突文が施文される。内外面には貝殻条痕文が加えられている。つくりは粗雑である。2はH-410壁、40-33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径25.9cm。胴部中位がわずかにふくらみ、口縁部は外反する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部はやや鋭角的に仕立てている。上面観は丸味をもつ方形状である。口唇部内外面には連続腹縁文が施文される。口縁部外面には刺突文、沈線上に貝殻腹縁文が刻まれ、波頂部から刺穴が垂下する。内面に貝殻条痕文が見られるが、内外面とも丁寧なナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。3は鋸歯状口縁の破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には連続押引文、口縁部外面には貝殻腹縁文が施文されている。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。4は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には連続押引文、口縁部外面には鋸歯状腹縁文、鋸歯状沈線文が施文される。胴部内面には貝殻条痕文、外面はナデ調整が加えられる。焼成良好で堅緻。5は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕立てている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁文、鋸歯状沈線文が施文される。胴部外面には背圧痕が加えられ、内面はナデ調整。





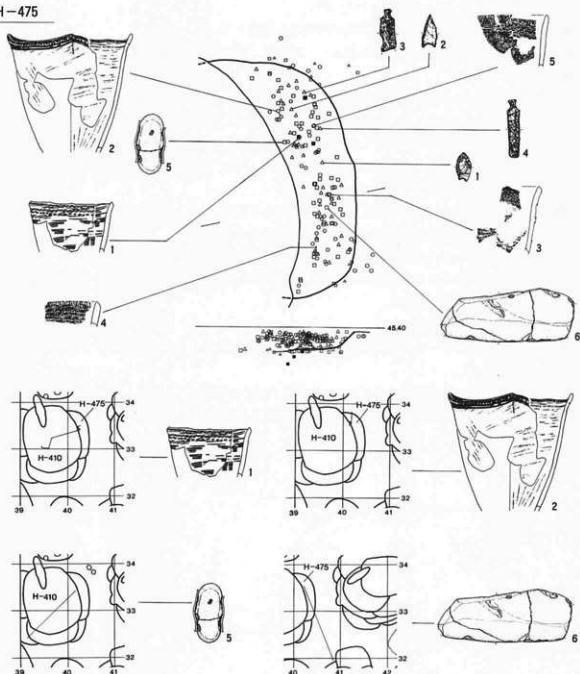


図Ⅲ-201 H-475出土土器



図Ⅲ-202 H-475出土石器

H-475



図Ⅲ-203 H-475出土遺物分布・接合図

石器：1・2は石鐮。1は腹面左側に厚みがあり、調整を加えている。3・4は石匙。5はH-485覆土1層出土の破片と接合したたたき石で、両側縁と平坦面に使用痕がある。6は40-31・40-33Ⅲ層出土の破片が接合したすり石である。

(和泉田 毅)

H-476 (圖Ⅲ-204~206, 圖版33·143·180)

位置：41-34・35 標高45.40m～45.49mの平坦地に位置している。

規模：——/——×3.65m/3.28m×0.23m 床面積：不明 平面形：隅丸長方形狀か？

長軸方向：N-73°-W

確認・調査・土層：41・34・35の包含層調査中、IV層直上付近で、Ⅲb層の広がり方が確認され、またⅢb＞Ⅴの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb＞Ⅴの暗褐色土と、覆土2層はⅢb＞Ⅴの褐色土である。ともに軟質である。覆土3層はやや粘質の暗灰黄色土である。木の根腐が多く、堆積状態は不安定である。

重複関係：本住居跡はH-483と重複しており、これより古い。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

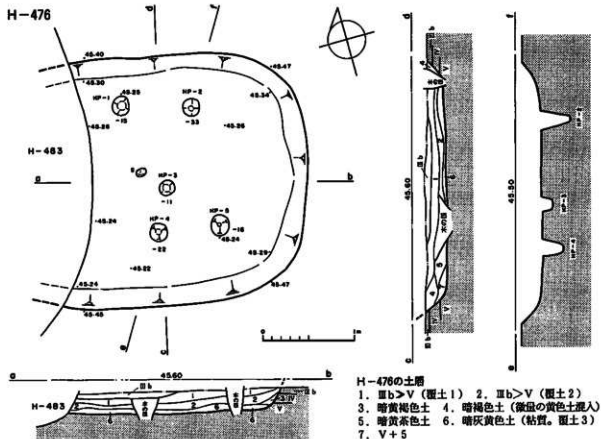
床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。やや軟質であるが、ほぼ平坦である。

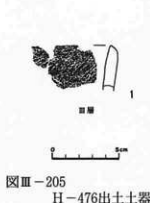
壁：立ち上がりは全体にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が10cm～14cm、東壁が15cm～21cm、南壁が20cm前後である。

伊藤：雄土などは検出されていない。

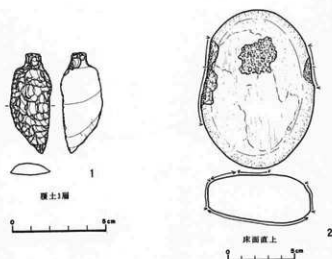
付属ビット：柱穴状小ビットは5個検出されている。すべて直立しており、壁際をめぐる小ビットは検出されていない。

遺物出土状況：出土した遺物は17点である。床面直上でたき石が1点出土した以外はすべて覆土中から出土したものである。出土した土器はすべてⅠ群D1類のもので、石器では両面調整石器、石匙、たき石、石鏟などが出土している。





図Ⅲ-205  
H-476出土土器



図Ⅲ-206 H-476出土石器

土器：1は覆土Ⅲ層出土のⅠ群D1類土器である。波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。

石器：1は石匙。片面を加工する。2は床面直上出土のたたき石で、両側縁と平坦面に使用痕がある。  
(和泉田 毅)

H-477 (図Ⅲ-207～210, 図版32・143・180)

位置：39-32 40-32 標高45.01m～45.11mのほぼ平坦地に位置している。

規模：——/——×——/——×(0.22)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-410の南壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。H-410の南側を精査し、Ⅳ層直上付近でⅢb>Vの落ち込みを検出した。ほぼ南北に土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げる。Ⅲb>Vの下に暗茶褐色土が薄く見られ、これを除去し、黄色土のやや堅い面を検出した。また柱穴状小ビットが検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面は明瞭でないが、おそらくⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vで、ほとんどがH-410に切られており、わずかに残っていただけである。覆土2層はⅢb>Vである。覆土3層は床面直上の土で、暗茶褐色の汚れた土である。

重複関係：本住居跡はH-410・475・485・517と重複しており、H-410より古く、他より新しい。ただ、H-475との新旧関係は明瞭でない。

時期：周辺包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

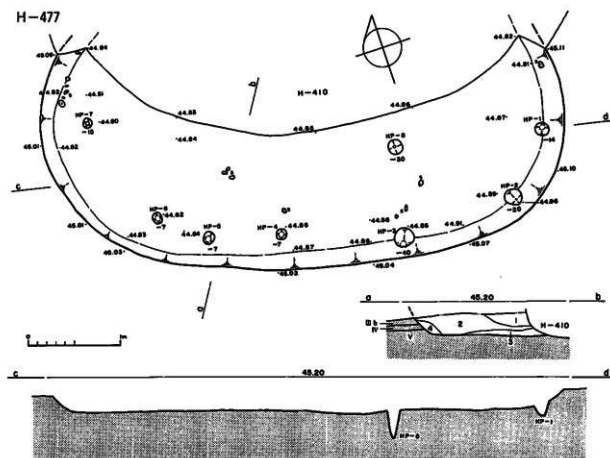
床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。やや凹凸はあるが、堅く、ほぼ平坦である。

壁：残存する壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、西壁が19cm～25cm、南壁が12cm～20cm、東壁が14cm～20cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは8個検出されている。HP-1～7は壁際をめぐるもので、直立している。HP-8は直立し、深く、杭状である。主柱穴か？

遺物出土状況：出土遺物総数は188点である。この内訳は土器45点、石器等143点である。床面で石楯、



H-477の土層

1. 暗褐色土 (Ⅲb>V) 2. 褐色土 (Ⅲb>V) 3. 暗茶褐色土 4. 黄褐色土 (2>V)

図Ⅲ-207 H-477実測図

石皿、砥石、石鏝（6点）、黒曜石製の剥片などが出土し、床面直上でI群D1類土器が3点出土している。HP-2覆土でたたき石1点が出土しているが、遺物の出土状態にまともは見られない。石器では上記のもの以外に、石錐、石匙、スクレイパー、石斧、すり石なども出土している。

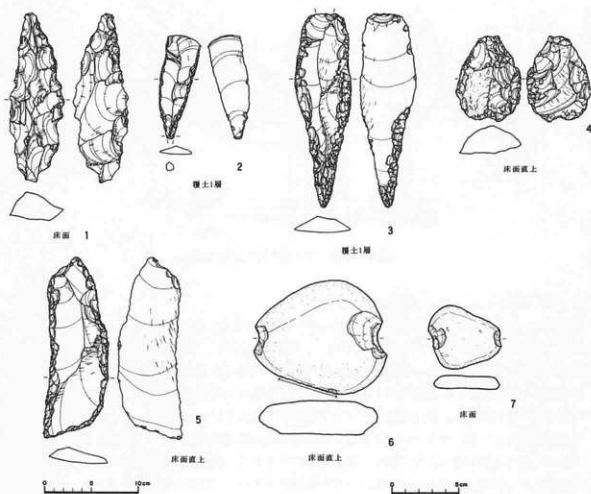
土器：1は床面直上、2・3は覆土3層、4は覆土1層からそれぞれ出土したもので、すべてI群D1土器である。1は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、口縁部外面には鋸歯状沈線文が施文されている。内面にはミガキ痕が残る。胎土は粗く、脆弱である。2は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、口縁部外面には沈線、刺突文、鋸歯状沈線文が見られる。内面にはナデ調整。内面にはススの付着がある。3は乳房状の尖底部である。4は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には鋸歯状沈線文が施文されている。

石器：1は頁岩製の石槍。床面出土。2は頁岩製の石錐。剥片の一部に尖頭部をつくっている。3は石匙。両側縁の刃部が端部で収束する。4・5は床面直上出土のスクレイパー。4は黒曜石製、5は頁岩製である。6・7は石鏝。6は床面直上出土、側縁部にたたき痕があり、7は床面出土で、安山岩製のものである。

(和泉田 毅)

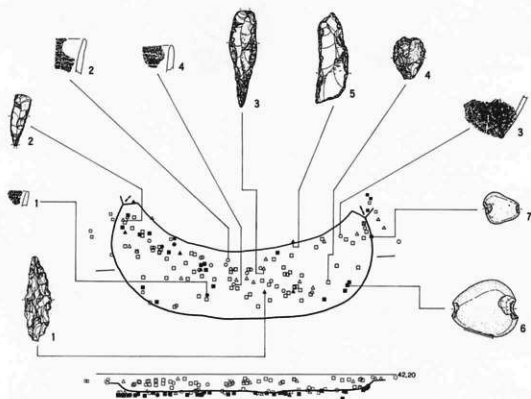


図Ⅲ-208 H-477出土土器



図Ⅲ-209 H-477出土石器

H-477



図Ⅲ-210 H-477出土遺物分布図

H-478 (図Ⅲ-211~214, 図版34・144・181)

位置: 42-34, 43-34 標高45.30m~45.53mの平坦地に位置している。

規模: 3.50m/3.12m×——/——×0.32m 床面積: 不明 平面形: 隅丸形状か?

**確認・調査・土層:** 42-34, 43-34の包含層調査中、IV層直上付近でP.D.3まじりのⅢb層の広がりが見られたため、土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から掘り下げる。Ⅲb層を除去し、Ⅲb>Vの落ち込みを検出した。覆土を掘り下げ、V層中で柱穴状小ピットを検出した。やや軟質であるがこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢb>V、覆土2層はⅢb>Vである。覆土3層は床面上にある土で、暗茶灰色系の汚れた、軟質の土である。東側には木の根痕状の黒いシミ状のものが多く見られ、覆土の堆積状態は不安定である。

**重複関係:** 本住居跡はH-470・485・512と重複しており、H-512より新しいが、他よりは古い。

**時期:** I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

**床面:** V層を浅く掘り込んで構築され、北から南へ若干傾斜している。やや軟質で、凹凸が見られる。

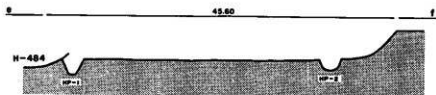
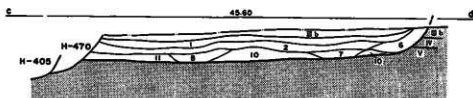
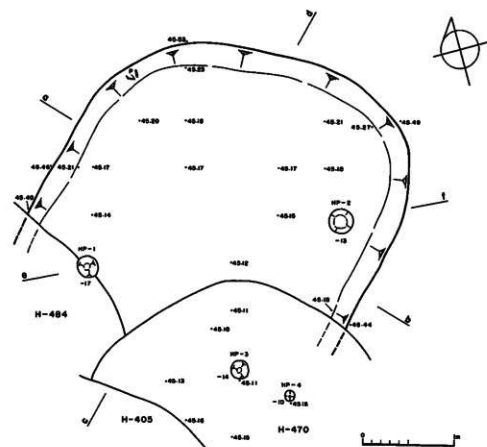
**壁:** 立ち上がりはややゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が22cm~25cm、北東壁が22cm~30cm、南東壁が25cm~28cmである。

**付属ピット:** 柱穴状小ピットは4個検出されている。HP-4は壁際にあるもので、直立し、杭状である。HP-1~3は主柱穴と思われる。直立している。4本柱が想定される。

**遺物出土状況:** 出土遺物総数は86点である。この内訳は土器30点、石器等56点である。壁付近でI群



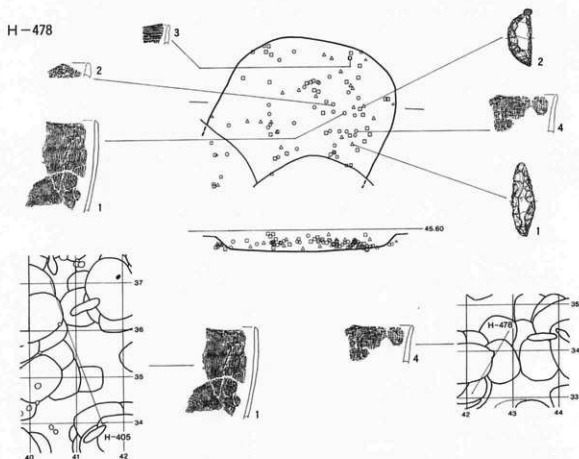
H-478



H-478の土層

1. IIIb>V (層土1) 2. IIIb>V (層土2) 3. 明褐色土 4. 暗褐色土 (軽石少量混入) 5. 褐色土+茶灰色土 6. 2+暗褐色土 (ブロック状) 7. 暗黄茶色土
8. 暗茶褐色土 9. 暗灰褐色土 10. 暗茶灰色土 (層土3) 11. 茶褐色土

図Ⅲ-211 H-478実測図



图Ⅲ-212 H-478出土遗物分布·接合图

D1類土器が3点出土した以外はすべて覆土中から出土したものである。遺物は散在的で、まとまった出土状態ではない。出土した土器ではI群D1類のもの、同D2類（覆土1層で1点）のもの同E類（覆土1層で1点）のものが出土しており、石器では石槍、石匙、たたき石、すり石、砥石、石錘などが出土している。

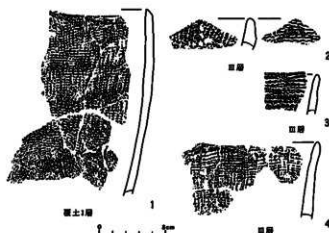
土器：1は覆土3層、2～4は覆土上Ⅲ層出土のもので、1・4はI群D2類土器、2・3はI群D1類土器である。1はH-405覆土1層、40-37Ⅲ層出土の土器片が接合した小波状の口縁・胴部破片である。口唇端部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁による連続押引文が施文される。内面には貝殻条痕文も見られるが、全体にナデ調整を加えている。胎土には砂粒が混入し、脆弱である。

2は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。内面には貝殻腹縁による押引文が施文されている。焼成良好で堅緻。

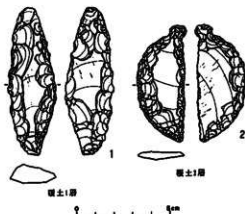
3は口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内面にはスガが付着している。

4は42-33Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、波状の口縁・胴部破片である。口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には櫛歯状腹縁文、外面には櫛歯状腹縁による押引文が施文されている。内面はナデ調整。

石器：1は石槍。背面に綾が残り、腹面には原石の礫面が残る。2は石匙。腹面の右側縁に調整が施される。(和泉田 毅)



図Ⅲ-213 H-478出土土器



図Ⅲ-214 H-478出土土器

H-479 (図Ⅲ-215～218, 図版34・35・144・181)

位置: 43-32・33, 44-32・33 標高45.02m～45.30mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.90m/4.50m×3.24m/3.00m×0.31m 床面積: 11.95㎡ 平面形: 隅丸方形状

長軸方向: N-S

確認・調査・土層: 43-32・33, 44-32・33の包含層調査中、遺物を多く混入する灰褐色土中で、Ⅲb層の広がり確認された。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層を掘り下げる。Ⅲb層を除去し、Ⅲb>Vの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、軽石を混入する灰褐色土の下で、やや堅い暗灰黄色土の面が検出され、柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Vの褐色土である。覆土3層は中央部付近は灰褐色土で、壁近くは軽石を多く混入する茶褐色土である。

重複関係: 本住居跡はP-270・291、H-511と重複しており、P-270より古く、H-511より新しい。P-291との新旧関係は不明である。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。北から南へゆるやかに傾斜している。ほぼ平坦で堅い。壁: 立ち上がりは、南から西にかけての壁はゆるやかな傾斜であるが、他はほぼ急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が18cm～35cm、西壁が9cm～22cm、南壁が15cm～21cm、東壁が22cm～29cmである。

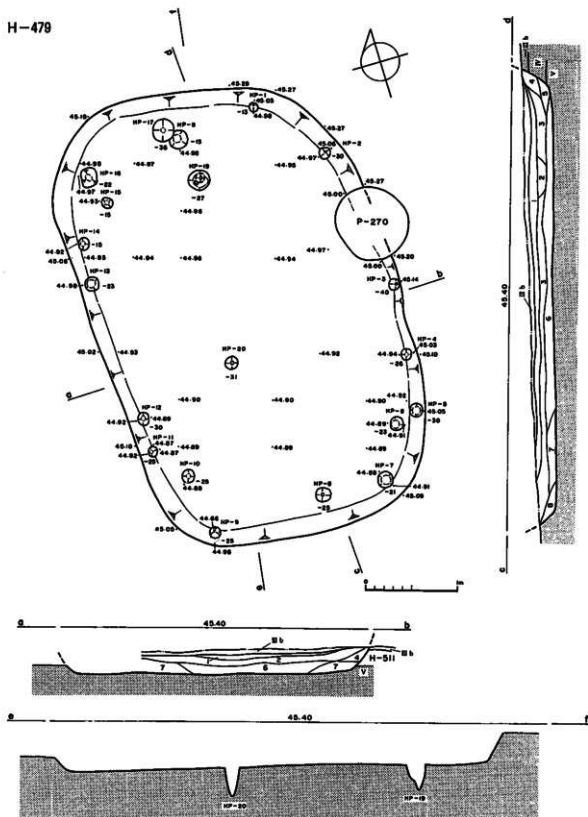
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは21個検出されている。HP-19・20は主柱穴と思われる。直立し、杭状で深い。他は壁際をめぐるもので、全体に深く、杭状のものが多く。

遺物出土状況: 出土遺物総数は126点である。この内訳は土器67点、石器等59点である。床面直上付近からは、礫が2点、柱穴状小ビットからすり石1点、剥片1点が出土しただけで、他はすべて覆土中からの出土である。遺物はまとまった出土状態ではない。出土した土器はI群D1類のもので、石器では石鏃、スクレイパー、たたき石、すり石、石錘などが出土している。

土器: 1・2は覆土1層、3～5は覆土上Ⅲ層から出土したものである。1～3はI群D1類土器、4・5はI群D2類土器である。1は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁

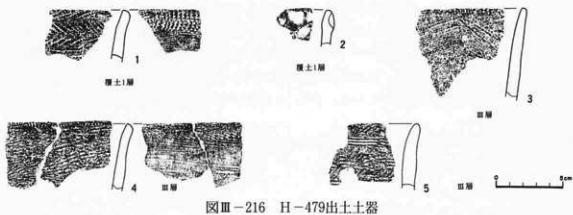
H-479



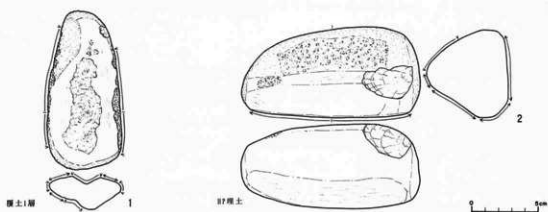
H-479の土層

1. Ⅲb>V (覆土1) 2. 黒褐色土 3. Ⅲb>V (覆土2) 4. 暗褐色土 5. 褐色土 6. 灰褐色土 (覆土3) 7. 茶褐色土 (軽石多く混入) 8. 暗黄褐色土

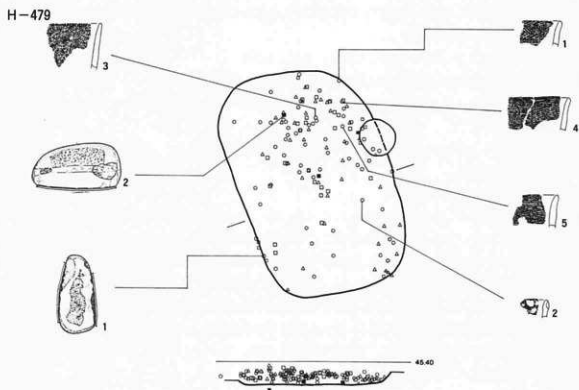
図Ⅲ-215 H-479実測図



図Ⅲ-216 H-479出土土器



図Ⅲ-217 H-479出土石器



図Ⅲ-218 H-479出土遺物分布図

部内面には貝殻腹縁による連続押引文、外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。2は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には指頭による粘土のつまみ上げが見られる。3は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面にはすり消し条痕文、内面にはナデ調整が加えられる。4は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文、内面にはすり消し条痕文が見られ、外面には連続押引文が施文される。焼成良好で堅緻。5は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には沈線状の貝殻腹縁文、連続押引文が施文される。内面はナデ調整。

石器：1は片岩製のたたき石。両面にはくぼみ状の使用痕が見られる。2はHP-3覆土出土のすり石。断面三角形で、稜をすっている。(和泉田 毅)

H-480(図Ⅲ-219~222, 図版35・114・115・144・181)

位置：43-31, 44-31 ほぼ北から南へゆるやかに傾斜する標高44.44m~44.93mの緩斜面に位置している。

規模・平面形・床面積：不明 長軸方向：N-52°-E

確認・調査・土層：43-31、44-31の包含層調査中、Ⅲb層中に灰褐色土が広がり、遺物が多量に混入していた。その中にⅢb層の広がりが見られたため、土層観察用の土手を設定し、調査を行う。Ⅲb層、灰褐色土を除去し、粘質の黒褐色土の落ち込みを検出した。黒褐色土を除去し、汚れた茶黄色系の土の下に軽石を混入するやや堅い暗灰黄色土を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とする。全体を掘り下げ、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。Ⅲb層の下には灰褐色土が約10cmほど見られ、遺物を多量に混入していた。覆土1層である。覆土2層は粘質の黒褐色土である。中心部では厚く(25cmほど)堆積している。覆土3層は床面上に堆積している土で、軟質の汚れた茶黄色系の土である。軽石を多く混入している。また北東壁付近には覆土2層の下に軽石まじりの汚れた灰褐色土の広がりが見られた。掘り揚げ土が流入したものと思われる。

重複関係：本住居跡はT-189と重複しており、これより古い。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を少し掘り込んで構築されている。北東から南西へゆるやかに傾斜している。やや凹凸があり、やや堅い。

壁：残存部分の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が15cm~24cm、北東壁が25cm~33cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-1~8は壁際をめぐるもので、直立している。ほぼ杭状で、浅い。HP-9・10は主柱穴で、2本柱が想定される。柱穴状小ピットの位置関係から、4.20m×3.40mの規模をもつ隅丸長方形の住居跡が考えられる。

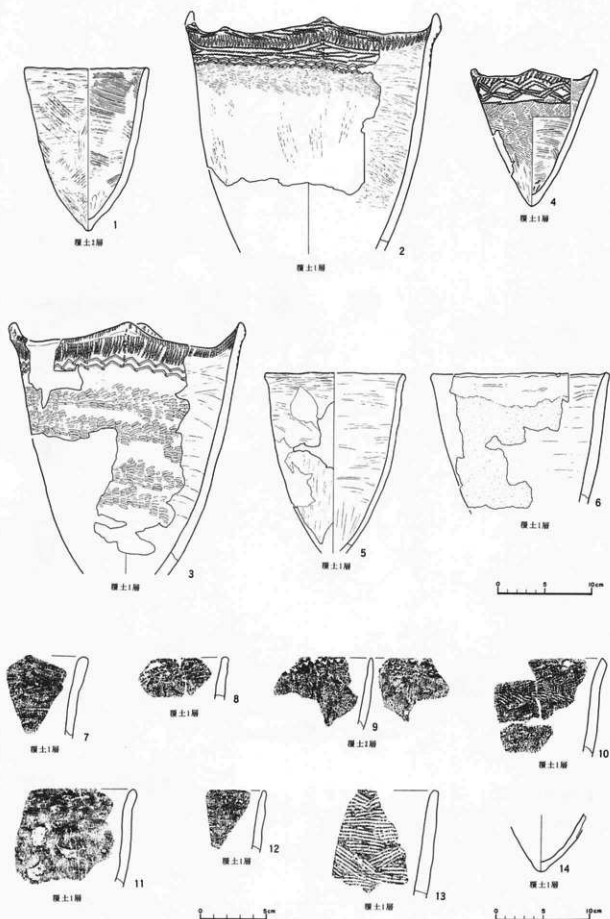
遺物出土状況：出土遺物総数は383点である。この内訳は土器277点、石器等106点である。遺物は覆土1層で多量に出土した。内面を上にし、水平の状態で一括出土した土器も多く見られた。床面、床面直上付近からは遺物は出土していない。覆土1層でI群B類土器1点、同D2類土器が4点出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石槍、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石錘などが出土している。



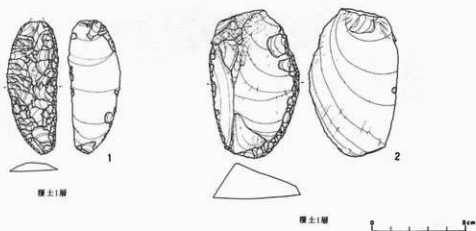
土器：1は覆土2層、2～14は覆土1層からそれぞれ出土したものである。1～12・14はI群D1類土器、13はI群D2類土器である。1は45-31I層出土の土器片と接合し、ほぼ全体が復元できた個体である。口径13.3cm、器高17.2cmの乳房状尖底土器である。胴部下位がわずかにふくらみ、胴・口縁部は直線的に外傾する。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。内外面に貝殻条痕文が見られるが、全体にナデ調整が加えられている。2は覆土1層で一括出土した土器で、44-31Ⅲ層、42-31揚げ土出土の土器片と接合したものである。口径26.5cm。胴部中位でわずかにふくらみ、口縁部で肥厚し、口唇部は丸く仕上げている。4つの波頂部と副突起をもつ波状口縁で、上面観は丸味のある方形状である。口唇部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、口縁部外面には連続波状文、貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文される。口縁部内面には連続波状文が施文される。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。3は43-30I層、44-31I・Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口径25.2cm。胴部下位にふくらみをもち、直線的に外傾する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状である。上面観は丸味をもつ方形状である。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面にはロッキング状の貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文されている。波頂部から刺突が垂下する。胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられる。4は44-31Ⅲ層出土の土器片が接合し、全体が復元できた個体である。口径13.4cm、器高14.4cm。胴・口縁部は直線的に外傾する。4つの波頂部をもつ波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状で、上面観は丸味をもつ方形状である。口縁部外面には、連続腹縁文、貝殻腹縁圧痕で菱形に文様をつくり、下端には横走る貝殻腹縁文を施文する。胴部外面には背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。5は覆土1層で一括出土した土器で、底部は欠失している。口径15.0cm。胴部中位にふくらみをもつ。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。内外面にはナデ調整が加えられている。6は44-31Ⅲ層、46-32揚げ土出土の土器片が接合したもので、底部は欠失している。口縁部はゆるやかに外反する。口径19.0cm。平縁で、口唇部は丸く仕上げている。内外面はナデ調整。胎土に多量の長石、石英が含有する。7は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。内外面はナデ調整。8は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には無筋の貝殻により粗い腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。9は波状の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。内外面はナデ調整。薄手の小型土器で、つくりは粗雑である。10は平縁の口縁・胴部破片である。口縁部外面には背圧痕、内面にはケズリ痕が見られる。11は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内面にはケズリ痕が見られる。内外面はナデ調整。12は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には刺突文、内面には貝殻条痕文が見られる。焼成良好で堅緻。13は口縁・胴部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には連続押引文が施行され、口唇部内面には貝殻腹縁圧痕文がわずかに見られる。内面はナデ調整。14は乳房状の尖底部。

石器：1は石匙。つまみ部は欠損する。2はスクレイパー。背面に稜が残り、刃部は急角度に調整されている。(和泉田 毅)

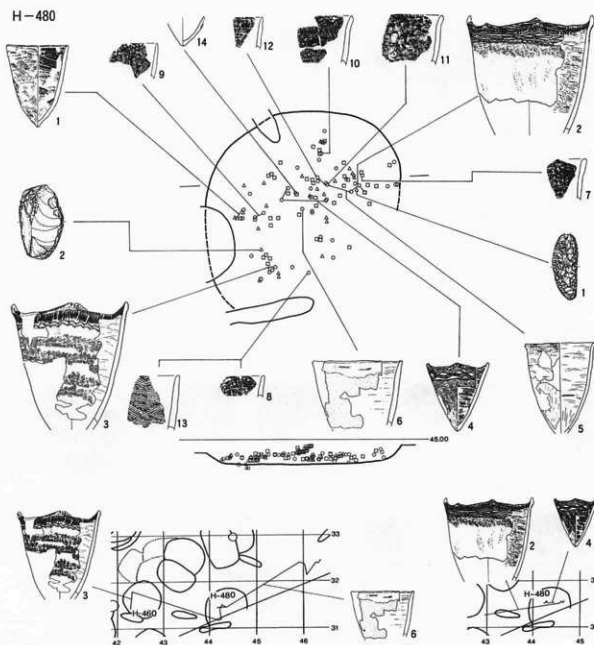




図Ⅲ-220 H-480出土土器



図Ⅲ-221 H-480出土石器



図Ⅲ-222 H-480出土遺物分布・接合図

H-481 (図Ⅲ-223~226, 図版35・36・66・144・181)

位置: 44-34, 45-34 標高45.53m~45.62mの平坦地に位置している。

規模: 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 44-34の包含層調査中、IV層直上付近で黒味のあるⅢb層の広がりを確認し、Ⅲb>Vの落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から順次掘り下げ、調査を行った。砂質の黄茶色土を掘り下げやや軟質の暗黄灰色土を検出し、柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は全体にⅢb層と黄色土がまじり合った土で、ほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>V、覆土2層はⅢb>Vである。覆土3層は、床面上の土で、砂質で、やや汚れが目立つ黄茶色土である。覆土は全体に軟質で、木の根痕などの影響を受け堆積状態は不安定である。

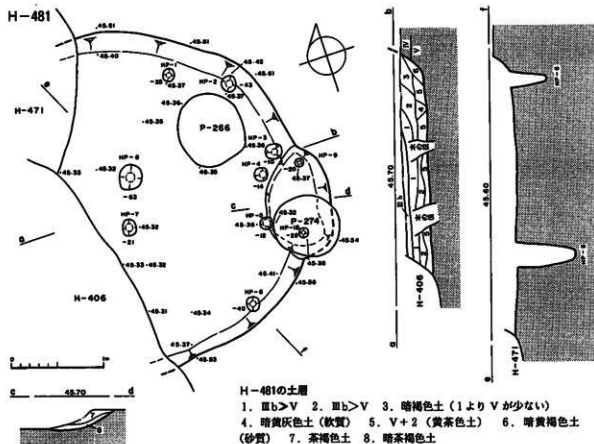
重複関係: 本住居跡はP-266・274、H-406・471と重複しており、これらより古い。P-266・274は本住居の床面で検出したものであるが、P-266の覆土、形態などからフラスコ状ビットで、住居跡を切っている他のものと同じものであり、またP-274は壁を切っているのが確認されており、ともに本住居跡より新しいものであると判断した。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

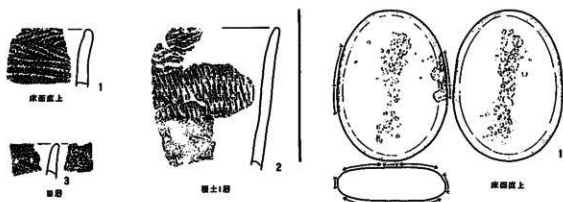
床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦であり、やや軟質である。

壁: 立ち上がりの傾斜は全体にゆるやかである。残存部分の検出面からの壁高は、ほぼ15cm~22cmである。

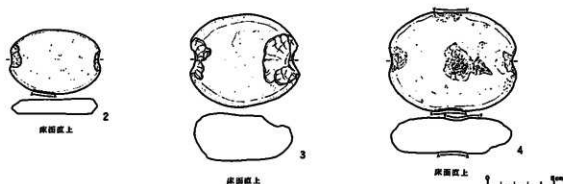
炉跡: 焼土などは検出されていない。



図Ⅲ-223 H-481実測図



図Ⅲ-224 H-481出土土器



図Ⅲ-225 H-481出土石器

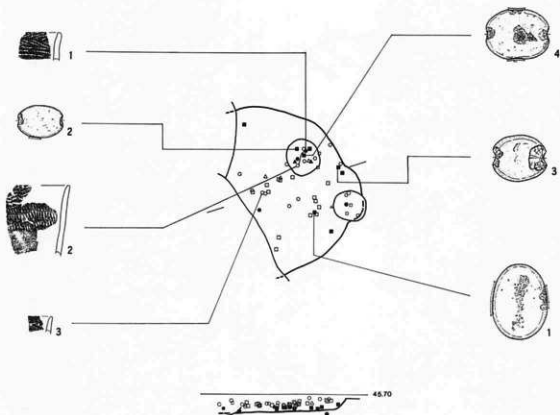
付属ピット：柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-1～3・7は壁際をめぐるもので、直立している。HP-9・10は張り出し部分の墳底で検出されたものである。東壁中央部付近で、1.10m×0.70mの楕円形状の張り出し部分が見つかった。深さは約0.20mほどで、床面より若干深くなっている。HP-4・5、HP-9・10はこの張り出し部分と何らかの関連を有するものと思われる。HP-7・8は主柱跡と思われるが、どちらが本来的なものかは不明である。

遺物出土状況：出土遺物総数は59点である。この内訳は土器31点、石器等28点である。床面直上、柱穴状小ピットから土器13点、石器10点が出土した。床面直上の北東壁際で石鍾が6個かたまって出土した。土器はすべてI群D1類のものである。石器はたたき石、すり石、砥石、石鍾（14点）などが出土している。

土器：1は床面直上、2は覆土1層、3は覆土上Ⅲ層出土のもので、1・3はI群D1類土器、2はI群D2類土器である。1は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。内外面はナデ調整。2は44～33Ⅲ層出土の土器片と接合した口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部には刺突文、口縁部外面には鋸歯状波線文が施文される。胴部外面には貝殻腹縁による連続波状文が施文されている。口縁部内面には鋸歯状波線文が施文される。3は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続波線文が施文されている。焼成良好で堅緻。

石器：1は床面直上出土のたたき石。平坦面にすり痕、両側縁にたたき痕がある。2～4は床面直上出土の石鍾。2には被熱の痕が残っている。4は4カ所に袈が見られる。（和泉田 毅）

H-481



图Ⅲ-226 H-481出土遗物分布图

H-482 (图Ⅲ-227~230, 图版36·145·181)

位置：39-34・35 標高45.26m～45.35mの平坦地に位置している。

規模：3.60m/3.06m×3.40m/3.00m×0.28m 床面積：8.61㎡

平面形：隅丸方形状      長軸方向：N-59°-E

確認・調査・土層：39・34・35の包含層調査中、Ⅲb＞Vの落ち込みを検出し、H-405の西壁面で覆土状の土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、西側に見られたⅢb層から掘り下げ、覆土を順次掘り下げて、調査を行った。やや汚れた軟質の暗黄灰色土の下で堅いV層の面が検出され、また柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb＞Vの褐色土である。覆土2層は覆土1層と3層がまじり合った暗茶灰色土である。覆土3層は暗黄灰色土で、床面上にある土である。

重複関係：本住居跡はH-465・524・551と重複しており、H-465より古く、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

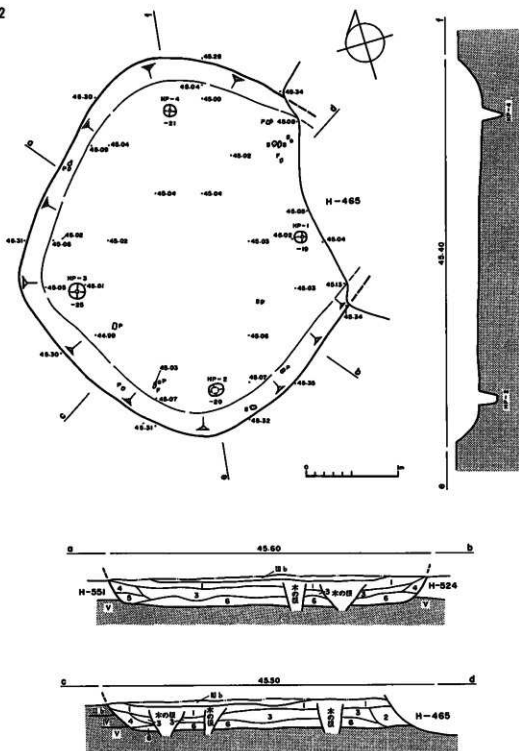
床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

壁：立ち上がりはやや急傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁は21cm～25cm、南西壁が24cm～27cm、南東壁が23cm前後、北東壁が25cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは4個検出されている。HP-2～4は壁際であり、直立している。HP-

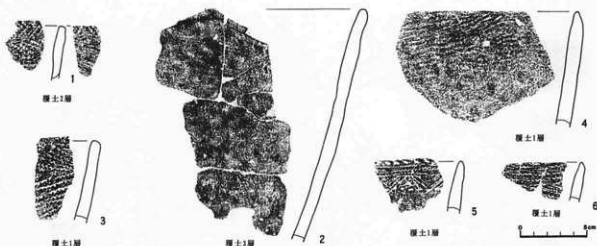
H-482



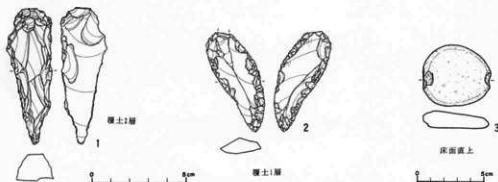
H-482の土層

1. Ⅲb>V (図土1) 2. 暗茶灰色土 3. 1+6 (図土2) 4. 暗黄褐色土  
5. 暗褐色土 6. 暗黄灰色土

図Ⅲ-227 H-482実測図



図Ⅲ-228 H-482出土土器



図Ⅲ-229 H-482出土石器

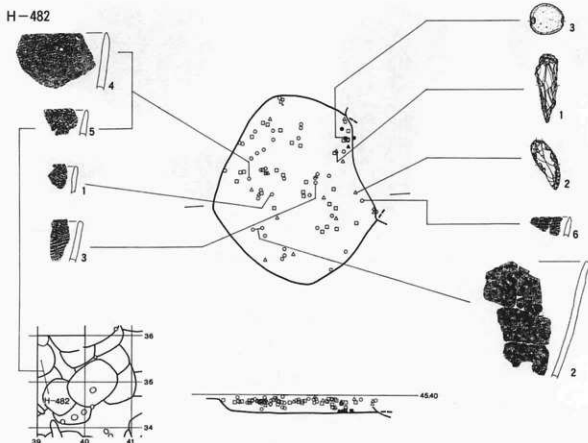
1は支柱穴と思われる。

**遺物出土状況：**出土遺物総数は167点である。この内訳は土器107点、石器等60点である。床面直上でI群D1類土器が1点、石錘が1点出土した。遺物は覆土1層で多く出土しているが、まとまった出土状態は見られない。覆土上のⅢb層中で円礫、すり石、スクレイパーなどが一括出土したが、本住居跡に伴うものではない。出土した土器は覆土1層でI群D2類のものが4点出土した以外はすべてI群D1類のものである。石器では石錐、石匙、たたき石、すり石、砥石、石錘などが出土している。

**土器：**1は覆土2層、2～6は覆土1層から出土した土器で、すべてI群D1類土器である。1は波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部、内面、口縁部外面には粗い貝殻腹縁圧痕文が施文される。内外面には貝殻条痕文が加えられている。2は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内面にはすり消し条痕文、外面にはナデ調整が加えられている。つくりは粗雑である。3は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面には貝殻条痕文が加えられている。4は平縁の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁による連続押引文が施文され、内面にはナデ調整、外面には背圧痕が見られる。5は39～35Ⅲ層出土の土器片が接合した平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部には刺突文、外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文、刺突文が施文され、内面には連続押引文が部分的に見られる。6は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面にはすり消し条痕文が加えられる。

**石器：**1は4類の石錐。2は石匙。つまみ部が欠損している。3は床面直上出土の石錘。

(和泉田 毅)



図Ⅲ-230 H-482出土遺物分布・接合図

H-483 (図Ⅱ-231~234, 図版33・115・145・182)

位置: 40-34・35, 41-34・35 標高45.44m付近の平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-476の調査中、西側に茶褐色土の落ち込みが検出されたことから、H-465周辺を精査し、IV層直上付近で、Ⅲb層、茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から順次掘り下げ、調査を行った。やや汚れた軟質の暗茶灰色土を掘り下げ、V層の堅い面を検出した。柱穴状小ビットも検出されたため、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層である。覆土1層はⅢb>Vの褐色土、覆土2層は混合土状の茶褐色土である。覆土3層は床面上にある土で、やや汚れた軟質の暗茶灰色土である。

重複関係: 本住居跡はH-465・476・498と重複しており、H-476より新しく、他より古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

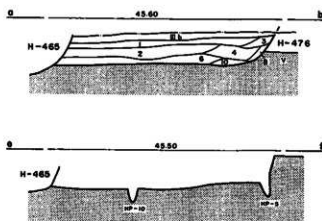
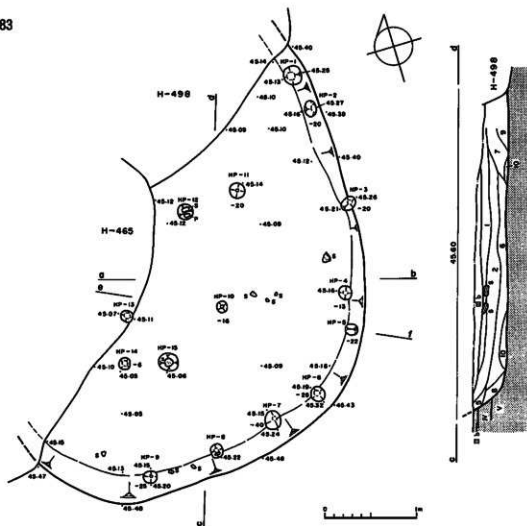
壁: 南側の壁の立ち上がりは急傾斜である。東側の部分はH-476の調査で壊されており不明であるが、検出面からの壁高は、南壁が34cm前後、北東壁が24cm前後である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは14個検出されている。HP-1~9はほぼ壁際をめぐるもので、やや内傾しているものが多い。HP-10~14は床面上にあり、直立している。どれが主柱穴になるかは判断しがたい。



H-483



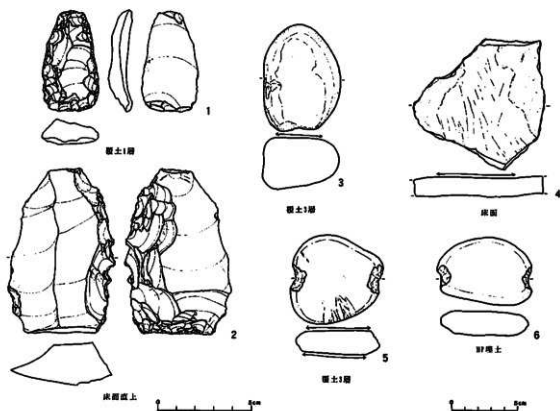
H-483の土層

1. Ⅲb>V (覆土1)
2. 茶褐色土 (覆土2)
3. Ⅲ1 (1より黄色土が多い)
4. 暗茶褐色土 (覆土2)
5. 黄褐色土
6. 暗茶灰色土 (覆土3)
7. 暗茶灰色土 (軟質、2と6がまじり合っている)
8. 暗黄褐色土
9. 暗灰色土 (軟質)
10. 6<V

図Ⅲ-231 H-483実測図



図Ⅲ-232 H-483出土土器

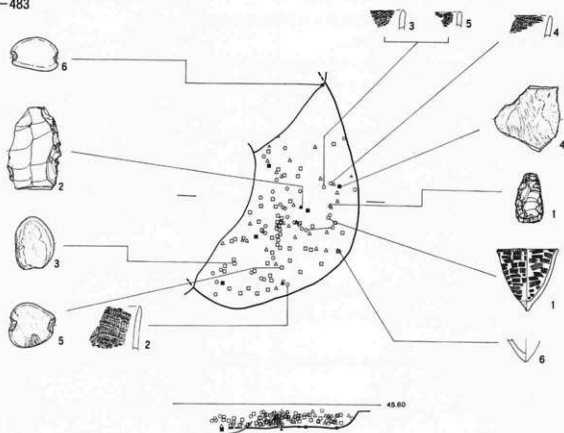


図Ⅲ-233 H-483出土石器

遺物出土状況：出土遺物総数は321点である。この内訳は土器86点、石器等234点である。床面、床面直土などからは石器等が9点出土しただけである。またHP-12覆土中からは1群D1類土器とたたき石が出土した。他はすべて覆土中から出土したものである。中央部西側の覆土3層上面付近で剥片の集中が見られ、122点出土している。土器はすべて1群D1類のものである。石器では石匙、鏃状石器、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石鋸、石錘（28点）などが出土している。

土器：1は覆土3層、6は覆土2層、2～5は覆土1層からそれぞれ出土したもので、すべて1群D1類土器である。1は全体が復元できた個体で、口径13.0cm、器高13.1cmの乳房状尖底土器である。口縁部は外反する。平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文が施文されている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。つくりは丁寧である。2は波状口縁の副突起部分の口縁・胴部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上っている。外面は鋸歯状沈線文で区画し、その間に縦位の連続腹縁文が施文される。口唇部内外面には同じ連続腹縁文が施文されている。焼成良好で堅緻。3

H-483



図Ⅲ-234 H-483出土遺物分布図

は平縁の口縁部破片。口唇部が肥厚し、端部は鋭角的に仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続波状文が施文されている。4は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には沈線状の連続押引文が施文されている。5は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には鋸歯状沈線文、刺突文が見られる。

石器：1は篋状石器。腹面にパルプが残り、厚さを減じる調整をしている。2はスクレイパー。背面に稜が残り、刃部は鋸歯状を呈する。3・4は砥石。3は円礫を使用し、4は床面出土で、数条のすり痕が残る。5・6は石錘。5は側縁に数条のすり痕がある。

(和泉田 毅)

H-484 (図Ⅲ-235~238, 図版37・145・182)

位置: 41-34, 42-34 標高45.23m~45.34mの平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-478の調査中、その南西側の覆土中で茶褐色土の落ち込みが検出された。そのため周辺を精査し、IV層直上付近でⅢb層の広がりを確認した。またH-405の北壁、H-474の東壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から掘り下げ、調査を行う。北壁付近で、Ⅲb層下に灰褐色土が約10cmほどの厚さで壁に沿って見られた。掘り揚げ土が流れ込んだものと思われる。茶褐色土が厚く堆積しており、これを除去し、非常に堅い暗黄色土を検出する。この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ二層である。覆土1層はⅢb>Vの褐色土である。覆土2層は混合土状の茶褐色土である。中程と壁土層に暗茶褐色土が見られるが、覆土2層は床面直上まで深く、厚く堆積している。

重複関係: 本住居跡はH-405・470・474・478と重複しており、H-478より新しいが、他よりは古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

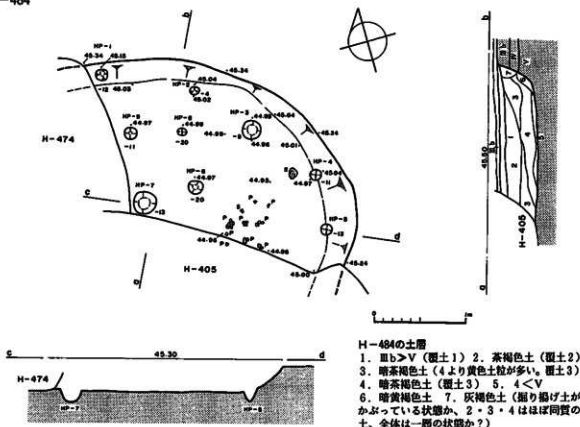
床面: V層を深く掘り込んで構築されている。非常に堅く、平坦である。H-405・478の床面とほぼ同じレベルである。

壁: 立ち上がりは急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、23cm~32cmである。

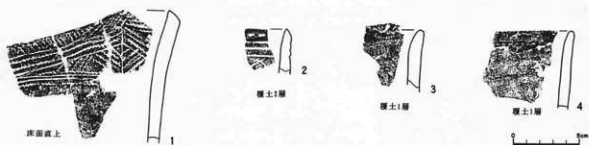
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは9個検出されている。HP-1~5は壁際をめぐるもので、直立している。

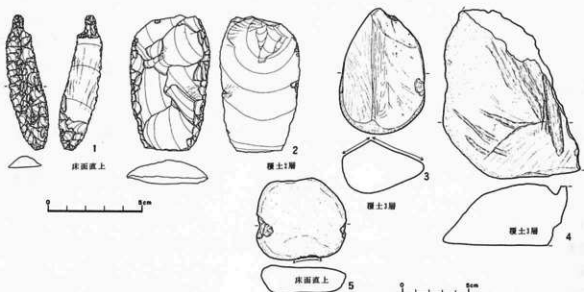
H-484



図Ⅲ-235 H-484実測図

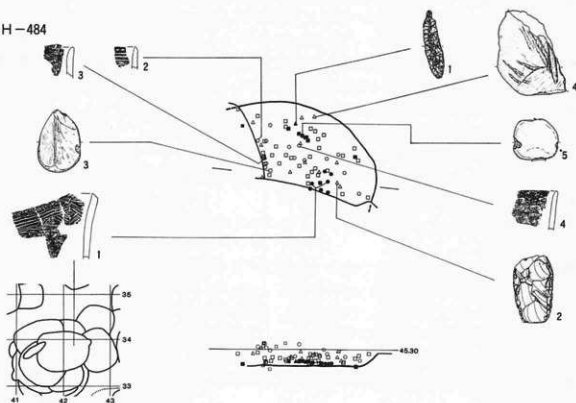


図Ⅲ-236 H-484出土土器



図Ⅲ-237 H-484出土石器

H-484



図Ⅲ-238 H-484出土遺物分布・接合図

遺物出土状況：出土遺物総数は111点である。この内訳は土器50点、石器等は61点である。床面、床面直上からはⅠ群D1類土器が23点、石器は15点出土している。HP-4の覆土中で石鏝が2点出土している。床面直上出土の土器片は、貼り付いたような状態で出土している。土器はすべてⅠ群D1類のものである。石器では石匙、匏状石器、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、有溝砥石、石鏝などが出土している。

土器：1は床面直上、2は覆土2層、3・4は覆土1層で出土した土器で、すべてⅠ群D1類土器である。1は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には連続腹縁文が施文される。口唇部外面には口縁に沿って貝殻腹縁圧痕文が施文され、無肋筋の貝殻腹縁圧痕文が横位、波頂下に加えられている。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。2は口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。外面には刺突文、沈線、鋸歯状沈線文が見られ、内面には貝殻条痕文が加えられている。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面はナデ調整。胎土に砂粒多く、器表面はザラザラしている。4は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には無肋筋の貝殻により腹縁圧痕文、刺突文が施文される。内外面はナデ調整。

石器：1は床面直上出土の石匙。2a類。2は匏状石器。3・4は砥石。3は円礫素材、4は凝灰岩製で、有溝砥石。5は床面直上出土の石鏝。短軸に1ヶ所たたき痕がある。

(和泉田 毅)

H-485 (図Ⅲ-239~242, 図版145・182)

位置：39-32 標高44.96m付近の平坦地に位置している。H-477・34と重複し、西側は平成4年度調査区で削平されており、全体は不明である。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：39-32の包含層調査中、Ⅲb>Vの広がりを確認し、また暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を南北に設定し、調査を行う。Ⅲb>V、暗茶褐色土を掘り下げ、V層中で堅い面を検出した。柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層かと思われる。覆土は三層である。覆土1層はⅢb>Vで、薄く堆積しており、その下は覆土2層で、床面まで厚く堆積している。混合土で、やや堅くなっている。重複関係：本住居跡はH-34・410・477と重複しており、これらより古い。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、ほぼ15cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは4個検出されている。HP-1~3は壁際にあり、浅く、皿状のものである。

遺物出土状況：出土遺物総数は35点である。この内訳は土器8点、石器等27点である。床面直上からは剥片、スクレイパーが各1点出土しただけである。土器はⅠ群D1類のもので、石器では石鏝、石鏟、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石鏝などが出土している。

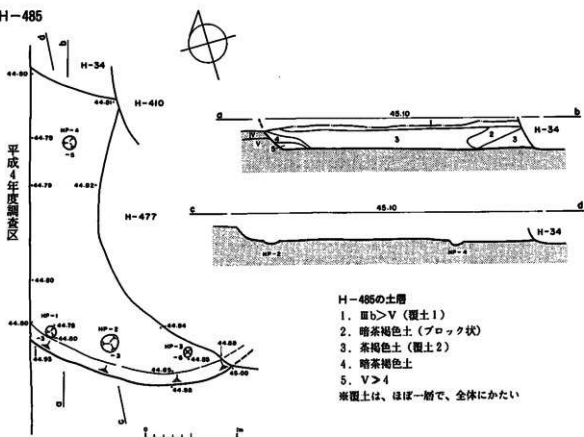
土器：1は覆土1層で出土したⅠ群D1類土器である。口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には横位の鋸歯状腹縁文が施文されている。焼成良好で堅い。

石器：1は黒曜石製の石鏝。2は2a類の石匙。3は床面直上出土のスクレイパー。石匙の未製品か？

4は砥石。

(和泉田 毅)

H-485



図Ⅲ-239 H-485実測図

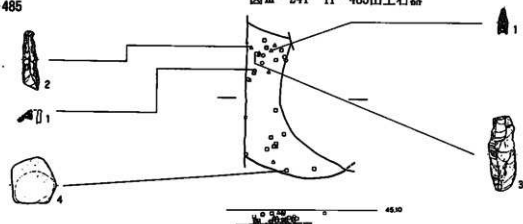
図Ⅲ-240

H-485出土土器



図Ⅲ-241 H-485出土石器

H-485



図Ⅲ-242 H-485出土遺物分布図

H-486(図Ⅲ-243~246, 図版37・66・145・183)

位置: 45-34, 6-34・35 標高45.54m~45.69mの平坦地に位置している。

規模: 3.43m/3.02m×3.10m/2.78m×0.30m 床面積: (6.98)㎡ 平面形: 台形状

長軸方向: N-78°-W

確認・調査・土層: 45-34、46-34・35の包含層調査中、Ⅲb層中で黒味のあるⅢb層の広がり方が確認された。土層観察用の土手を設定し、Ⅲbを掘り下げ、Ⅳ層直上付近で、Ⅲb>Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を掘り下げ、軟質で、汚れのある暗黄灰色土の下で、やや軟質の暗黄色土の面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。また北西コーナー付近で暗茶褐色土の半円状の落ち込みが見られ、周辺を精査し、円形状の落ち込みが検出されたため、調査を行ったところ、ほぼ段状の張り出しとなった。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Ⅴの褐色土である。覆土2層は覆土1層と3層がまじり合った土である。覆土3層は軟質で、やや汚れのある暗黄灰色土である。覆土には木の根痕が多く、堆積状態は不安定である。

重複関係: 本住居跡はH-510・541・550と重複しており、これより新しい。P-294との新旧関係は明らかでない。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を掘り込んで構築されている。やや軟質であるが、ほぼ平坦である。

壁: 立ち上がりは全体にほぼ急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁がほぼ26cm前後、西壁が26cm前後、南壁が20cm~27cm、東壁が23cm~29cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは15個検出されている。HP-1~9は壁際にあり、直立している。HP-10・11は主柱穴と思われ、2本柱が想定される。HP-12~15は張り出し部分に伴うものと考えられる。浅く、杭状のものである。北西壁コーナーで検出された張り出し部分は、ほぼ段状となっており、上段面・下段面ともに非常に堅く、下段は床面より若干低くなっている。

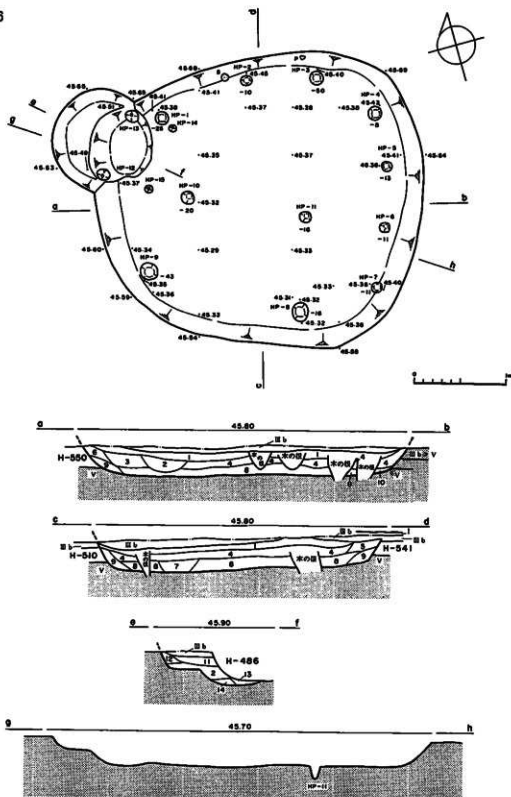
遺物出土状況: 出土遺物総数は112点である。この内訳は土器75点、石器等37点である。壁でI群D1類土器5点、すり石1点が出土した以外はすべて覆土中からの出土であるが、覆土4層で取り上げた石器は床面直上付近のものである。遺物は散在的な出土で、出土した土器は、覆土1層でI群D2類、同E類のものが各1点づつ出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石匙、たたき石、すり石、石皿、砥石、石鏝などが出土している。

土器: 1・2は覆土1層、3は覆土上Ⅲ層出土の土器で、I群D1類土器である。1は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、口縁部内面には連続押引文が施文される。胴部外面には背圧痕が加えられている。焼成良好で堅緻。2は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部には沈線、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文される。内面にはすり消し条痕文が加えられている。胎土はやや軟質であるが、緻密である。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は鋭角的に仕上げている。口唇部には貝殻腹縁圧痕文、口縁部外面には肋骨が内面のみの貝殻腹縁押引文が施文されている。胎土には小石を含み、脆弱である。石器: 1はたたき石。被熱により細かく割れている。2は安山岩製のすり石。平坦面にすり痕が残る。

(和泉田 毅)



H-486



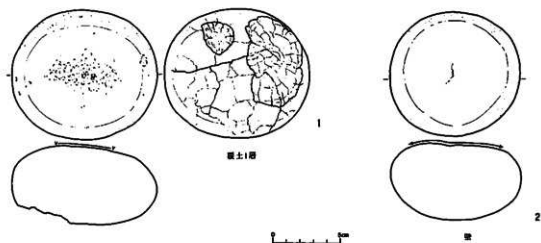
H-486の土層

1. Ⅲb>V (覆土1) 2. 暗茶褐色土 3. 茶褐色土 4. 1+8 (暗黄茶褐色土。覆土2) 5. 暗茶褐色土に少量の黄色土が混入 6. 茶褐色土に少量の黄色土が混入 7. 暗黄茶褐色土 8. 暗黄灰色土 (覆土3) 9. 暗灰黄色土 10. 暗黄褐色土 11. Ⅲb>V 12. 暗褐色土 (軟質) 13. 3+V 14. 3>V

図Ⅲ-243 H-486実測図

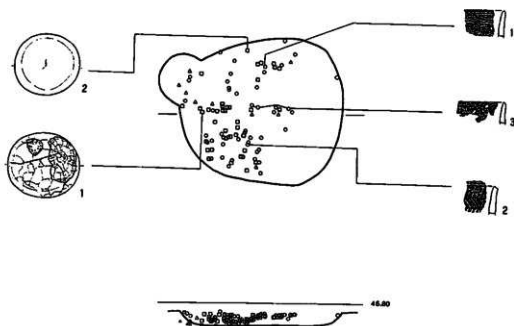


図Ⅲ-244 H-486出土土器



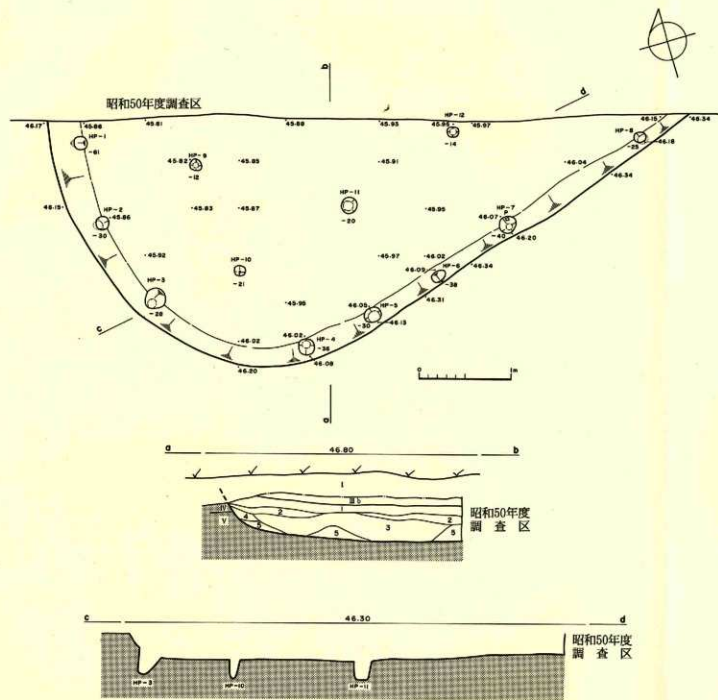
図Ⅲ-245 H-486出土石器

H-486



図Ⅲ-246 H-486出土遺物分布図

H-487



H-487の土層

1. Ⅲb>V (Ⅲ土1) 2. Ⅲb>V (Ⅲ土2) 3. 蒸灰色土 (Ⅲ土3) 4. 黄褐色土 5. 暗灰黄色土 (軟質)

図Ⅲ-247 H-487実測図

H-487 (図Ⅲ-247~250, 図版38・145・183)

位置: 46-38, 47-38 標高46.15m~46.35mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 46-38の包含層調査中、Ⅲ b層中で黒味のあるⅢ b層の広がり確認された。このため47-38も掘り下げ精査したところ、Ⅲ b層中で黒味のあるⅢ b層の広がりを確認した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲ b層を掘り下げ、Ⅲ b層中でⅢ b>Vの落ち込みを検出した。茶灰色土を掘り下げ、V層中の黄灰色土を検出し、また柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ b層中と思われる。覆土はほぼ三層で、覆土1層はⅢ b>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢ b>Vの褐色土である。この層は10cm前後の薄い堆積である。覆土3層はやや汚れた、軟質の茶灰色土である。層厚は30cmほどあり、床面上まで見られる。床面には部分的に軟質の暗灰黄色土が堆積している。

重複関係: 本住居跡はH-489と重複しており、これより新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、軟質である。

壁: 立ち上がりは、全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、南西壁が18cm~31cm、南東壁が19cm~27cmである。

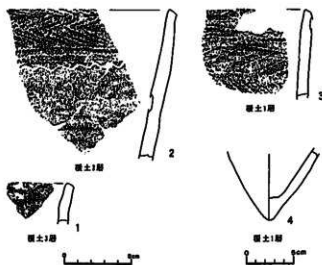
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは12個検出されている。HP-1~8は壁際にあり、やや内傾気味のものが多い。HP-1が60cm、HP-7が40cmと深く、他もほぼ20cm以上の深さがあり、しっかりしている。HP-9~12は主柱穴と思われる。直立している。

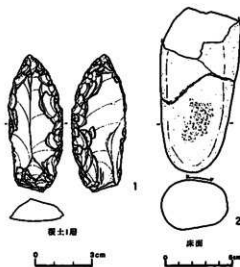
遺物出土状況: 出土遺物総数は64点である。この内訳は土器が44点、石器等が20点である。遺物は床面でたたき石が2点出土した以外は覆土中から出土したものである。まとまった出土状況ではなく、散らばった状態で出土した。土器はすべてI群D1類のものである。石器では石槍、たたき石、すり石、石鏝などが出土している。

土器: 1は覆土3層、2は覆土2層、3・4は覆土1層出土のもので、すべてI群D1類土器である。

1は平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には貝殻条痕文が見られるが、内

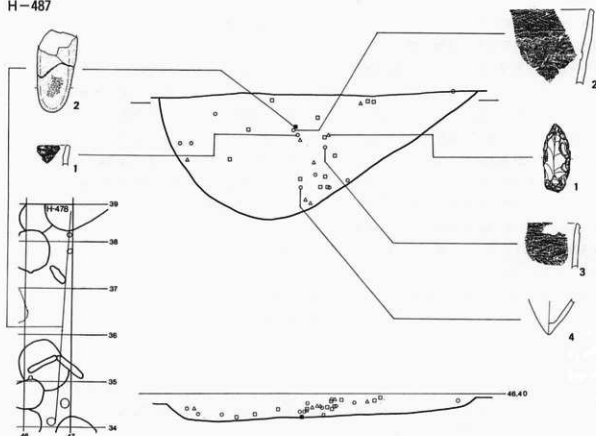


図Ⅲ-248 H-487出土土器



図Ⅲ-249 H-487出土石器

H-487



図Ⅲ-250 H-487出土遺物分布・接合図

外面ともナデ調整が加えられている。焼成良好で堅緻。2は口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、他はナデ調整が加えられている。3は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、内面にはすり消し条痕文が加えられる。胎土には砂粒が多く、粗い。4はわずかに乳房状尖底になっている。

石器：1は石槍。2は46-34Ⅲ層出土の破片と接合したたたき石。平坦面にたたき痕がある。

(和泉田 毅)

H-488 (図Ⅲ-251~254, 図版38・66・115・146・183)

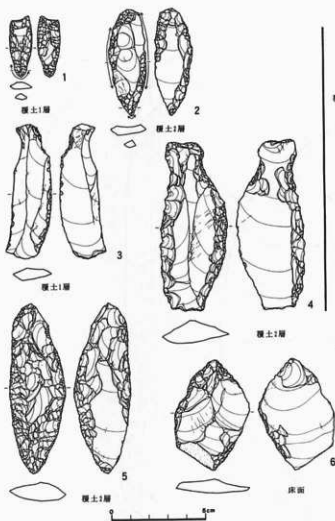
位置：45-37・38, 46-37・38 標高45.95m~46.19mの平坦地に位置している。

規模：4.45m/4.20m×3.72m/3.40m×0.34m 床面積：(10.84)㎡

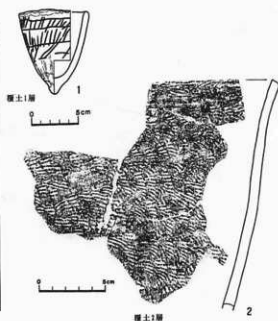
平面形：ほぼ隅丸長方形と思われる。長軸方向：N-20°-E

確認・調査・土層：46-37・38、46-37・38の包含層調査中、Ⅳ層直上付近でP.D.3まじりのⅢb層の広がりが確認された。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層を掘り下げ、Ⅲb≫Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、調査を行った。覆土は茶褐色土や黄褐色系の土が部分的に見られ、不安定な堆積状態を示しており、床面の検出がむずかしかった。ほぼ暗灰黄色土の下で、やや軟質であるが、安定した暗黄色土の面を検出し、柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりも検出した。また南壁際の床面上で茶褐色土の半円状の落ち込みが見られたため、周辺

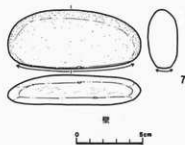




図Ⅲ-253 H-488出土石器



図Ⅲ-252 H-488出土土器



を精査したところ壁面にも覆土状の土の落ち込みがあり、半截して調査した。やや段状に張り出した部分であることが判明した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は不安定な堆積であるが、ほぼ四層に分けることができる。覆土1層はⅢb>Vの暗褐色土、覆土2層はⅢb>Vの褐色土で、ほぼ全体に見られる。覆土3層は覆土2層と4層がまじり合った土であるが、この2層と3層の間に部分的に茶褐色土が堆積していた。覆土4層はやや粘質の暗灰黄色土で床面上にあるものである。

重複関係：本住居跡はH-489と重複しており、これより新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

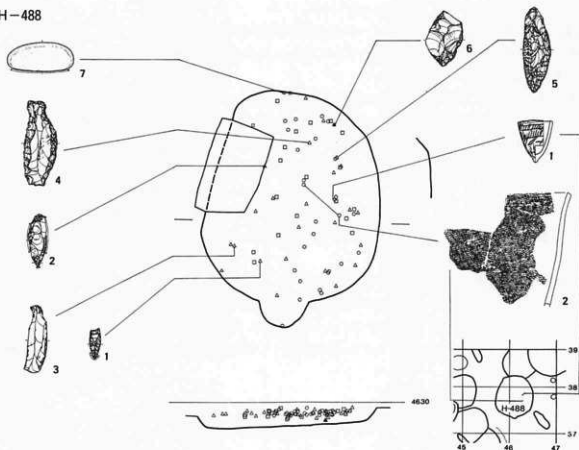
床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや軟質である。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が20cm～30cm、西壁が20cm前後、南壁が23cm～28cm、東壁が28cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは12個検出されている。HP-1～7は壁際であり、全体に浅く内傾気味である。HP-8は主柱穴と思われ、2本柱が想定される。HP-9～12は張り出し部の調査で検出されたものである。南壁中央付近で検出された張り出し部は、ほぼ0.8m×0.6m、床面との高低差はほぼ5cm～10cmほどのものであるが、段状になっており、墳底は非常に堅くなっている。HP-9～12は浅

H-488



図Ⅲ-254 H-488出土遺物分布・接合図

いがほぼ杭状で直立しており、この張り出し部分に関連するものと考えられる。

**遺物出土状況：**出土遺物総数は98点である。この内訳は土器50点、石器等48点である。遺物は床面でRフレイクが1点、壁ですり石が1点出土した以外はすべて覆土中で出土したものである。出土状態にまともは見られない。土器は覆土2層でI群E類のものが3点出土しているが、他はI群D1類土器である。石器では石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、両面調整石器、たたき石、すり石、砥石、石錘などが出土している。

**土器：**1は覆土1層、2は覆土2層から出土したものでI群D1類土器、2はI群D2類土器である。1は46-37Ⅲ層出土の土器片が接合したもので、全体が復元できたものである。口径7.4cm、器高8.9cmで、ミニチュア型の乳房状尖底土器である。底部付近でふくらみをもち、胴部は直線的に外傾する。口唇部は丸く仕上っている。平縁である。口縁から胴部にかけての外面には細く浅い沈線が4条描かれ、同じ工具により斜位に、粗い沈線文を加えている。外面にはケズリ痕も見られるが、内外面全体にナデ調整が加えられている。つくりは粗雑である。2は46-37Ⅲ層出土の土器片が接合した平縁の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。外面には引摺り背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。つくりは粗雑である。胎土は軟質で、緻密である。

**石器：**1・2は石錐。1は6類で、石鏃2b類の転用品。2は4類に属するもの。3・4は石匙。3の刃部には刃こぼれが見られる。4類。4の刃部は鋸歯状を呈する。3類。5はスクレイパー。6は床面出土のRフレイク。7は側縁部に使用痕の見られるすり石である。

(和泉田 毅)



H-489(図Ⅲ-255~258, 図版39・146・184)

位置: 45-38, 46-38 標高46.09m~46.15mの平坦地に位置している。

規模: (3.40)m/(3.10)m×(3.20)m/(2.80)m×(0.28)m 床面積: (8.59)㎡

平面形: 隅丸方形か? 長軸方向: N-47°-E

確認・調査・土層: 45-38、46-38の包含層調査中、Ⅲb層中でP.D.3まじりのⅢb層の広がりや確認され、H-487の西壁とH-488の北壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層から順次掘り下げ、調査を行った。Ⅲb層を除去し、Ⅲb>Vの落ち込みを検出した。やや汚れた暗黄灰色土の下でやや堅いV層の土が検出され、柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりも検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの褐色土、覆土2層は覆土1層と3層のまじり合った土である。覆土3層は汚れの目立つ、やや粘質気味の暗灰黄色土で、中央部では20cm~30cmと厚く堆積している。床面上にある土である。

重複関係: 本住居跡はH-487・488と重複しており、これより古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。やや堅く、ほぼ平坦である。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が18cm前後、西壁が15cm~20cm、南壁が21cm前後である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは7個検出されている。HP-1・2は壁コーナーにあり、直立している。

HP-4・5・7は主柱穴と思われる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は45点である。この内訳は土器20点、石器等25点である。覆土上のⅢb層中でやや遺物は多かった。壁際で石鍾が1点出土した以外は、覆土中から出土したものである。出土状態にまともは見られない。土器は覆土1層でI群E類のものが2点出土しているが、他はI群D1類土器である。石器ではスクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石鍾などが出土している。

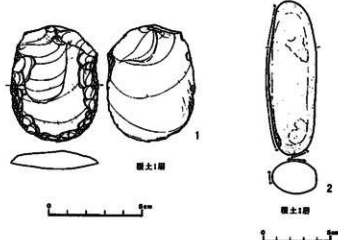
土器: 1は覆土2層出土のI群D1類土器である。口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面にはすり消し条痕文が加えられている。焼成良好で堅緻。

石器: 1はスクレイパー。2は棒状のたたき石である。

(和泉田 毅)

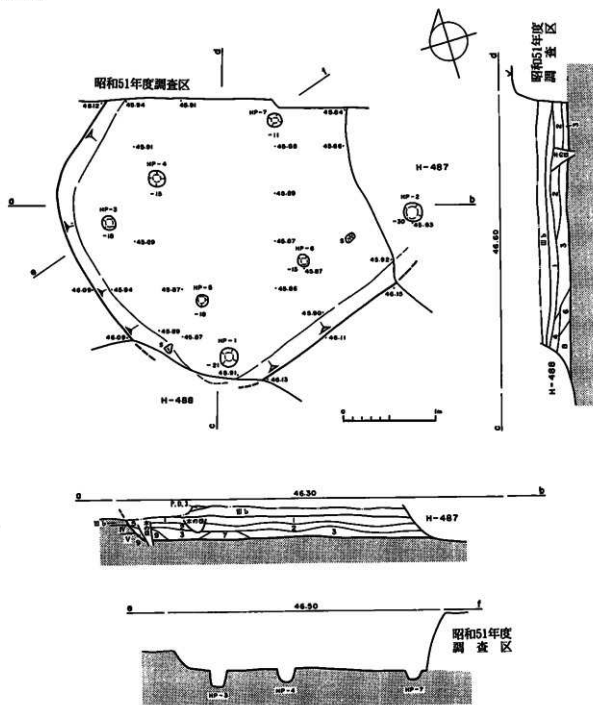


図Ⅲ-255 H-489出土土器



図Ⅲ-256 H-489出土石器

H-489

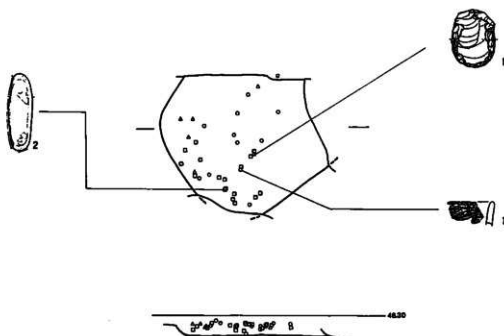


H-489の土層

1. IIIb>V (覆土1) 2. 1+5 3. 暗黄灰色土 4. 褐色土>V 5. 暗褐色土 6. 暗黄色土 7. 暗黄茶色土 8. 暗茶灰色土 9. 黄灰色土

図Ⅲ-257 H-489実測図

H-489



図Ⅲ-258 H-489出土遺物分布図

H-490 (図Ⅲ-259~262, 図版39・66・146・184)

位置: 40-33, 41-32・33 標高45.21m~45.36mの平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-467の西壁で、覆土状の土の落ち込みを確認した。周辺を精査し、IV層直上で茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。覆土は茶褐色系の土でほぼ一層である。これを掘り下げ、H-467の床面と同一レベル付近で、非常に堅い面を検出し、これを床面とした。また壁中央付近の壁面で茶褐色土の落ち込みが見られたため、周辺を精査した結果、半円状の落ち込みが検出され、半載する。ほぼ段状の張り出しであることが判明した。掘り込み面はⅢb層中かと思われる。覆土はほぼ一層である。全体に軽石が混入し、下層が黒っぽい茶褐色土である。床面まで堆積している。

重複関係: 本住居跡はH-461・467・473・474・505・507と重複しており、H-467・473・474より古く、他より新しい。

時期: I群DI類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を深く掘り込んでいる。平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりは急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、ほぼ20cm~30cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

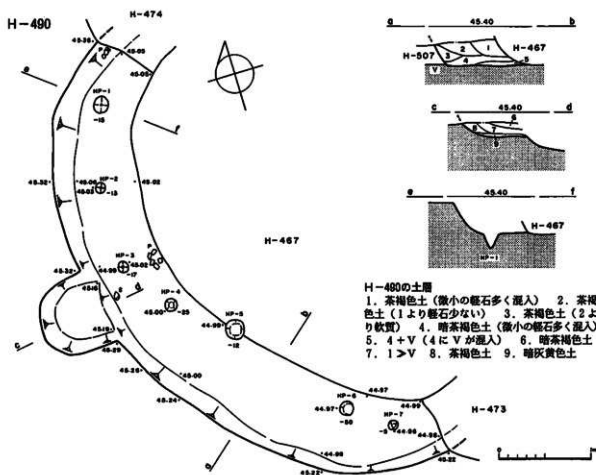
付属ピット: 柱穴状小ピットは7個検出されている。直立している。壁中央部には0.80m×0.70mの張り出し部分があり、床面との高低差は13cm~17cmで、段状になっている。張り出し部分の墳底面は非常に堅くなっている。

遺物出土状況: 出土遺物総数は596点である。この内訳は土器148点、石器等444点、土器片鍾4点である。床面直上付近から土器、土器片鍾など8点が出土した。南西側の壁付近では流れ込み状の土器が26点出土している。また張り出し部分付近の床面直上、北端部の壁際ではそれぞれ床、壁に貼り付くような状態で土器がまとまって出土した。剥片が365点出土しているが、剥片集中というまとまり

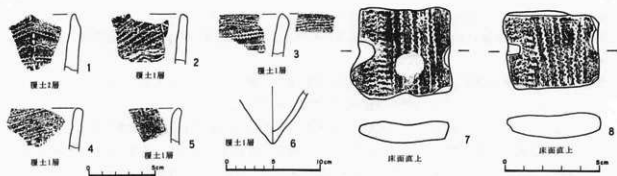
は見られず、覆土中の広い範囲から出土したものである。また石鍾が26点出土している。出土した土器はすべてI群D1類のものである。石器では、石斧、たたき石、すり石、砥石、石鍾などが出土している。

土器：7・8は床面直上、1は覆土2層、2～6は覆土1層からそれぞれ出土したもので、すべてI群D1類土器である。1は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口縁部外面には口縁に沿って貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。口唇部内面には連続腹縁文が施文されている。内外面はナデ調整。焼成良好で堅緻。2は小波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁圧痕文、波状の沈線文が施文されている。内面はナデ調整。器表面はザラザラしている。3は平縁の口縁部破片で、口唇部は貼り付けで肥厚し、丸く仕上げている。内面には貝殻腹縁による連続押引文が施文されている。4は波状の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には鋸歯状腹縁文が施文される。内面には連続押引文が施文され、すり消し条痕が見られる。胎土は堅いが粗く、器表面はザラザラしている。5は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻腹縁文が見られる。焼成良好で堅緻。6は乳房状の尖底部。7・8は床面直上出土の土器片鍾。口縁部破片を利用したもので、同一個体である。2ヵ所に打ち欠き部がある。口唇部内面には連続腹縁文、外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、7には補修孔と思われる円孔が見られる。

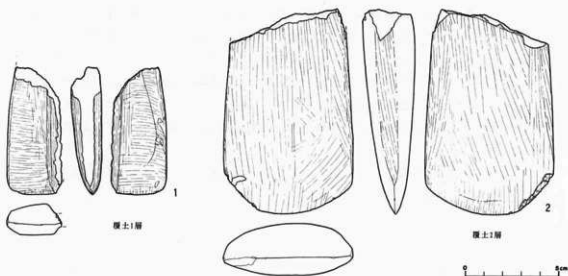
石器：1・2は石斧片である。1はI類に属するもので、擦り切り痕が残っている。2は3類に属するもので、研磨により擦り切り痕は見られない。  
(和泉田 毅)



図Ⅲ-259 H-490実測図

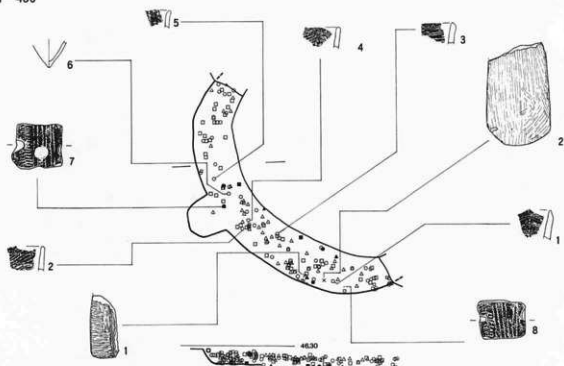


図Ⅲ-260 H-490出土土器



図Ⅲ-261 H-490出土石器

H-490



図Ⅲ-262 H-490出土遺物分布図

H-491 (図Ⅲ-263~266, 図版40・115・116・146・184)

位置: 42-36, 43-36

規模: — / — × — / — × (0.45) m

床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-457調査中に、南側でしまりが強く粒子の粗い堅穴状の落ち込みを確認した。内部は掘り揚げ土と思われるロームがブロック状に多く混入する暗茶褐色土である。直交する土層観察用のベルトを設定して、順次掘り下げを開始した。覆土は大きく四層に分けられ、下位にいくに従い炭化物を多く含む。覆土4層はしまりの強い暗黄褐色土で床面と思われ、若干掘り過ぎた感がある。重複関係: H-457・500・535と重複し、H-457より古く、他より新しい。

時期: 掘り込み面はⅢb層中と思われる。出土土器はすべてⅠ群D1類であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉のものと思われる。

床面: やや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。V層をわずかに掘り込んで構築されている。

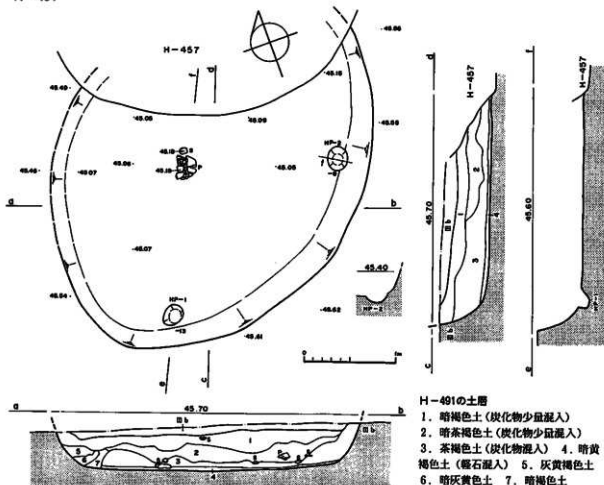
壁: 残存する壁の掘り込みは深く、急傾斜で立ち上がっている。壁高は約50cmである。

炉跡: 焼土は検出されていない。

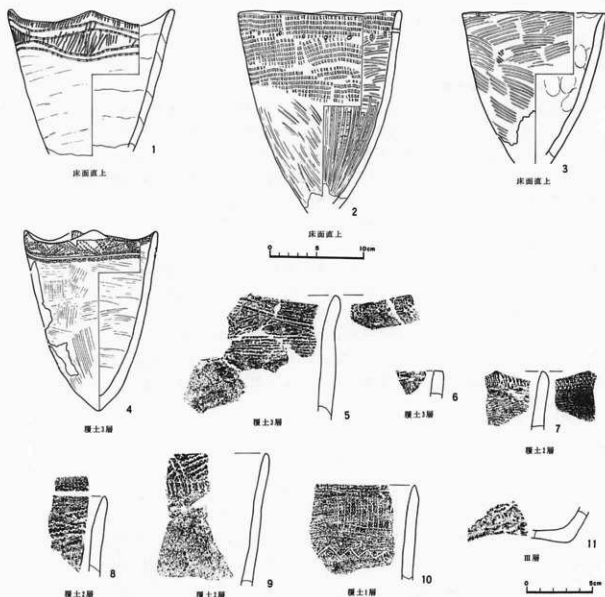
付属ピット: 柱穴状小ピットは2個検出されている。いずれも浅く明瞭でない。

遺物出土状況: 出土遺物総数は607点で、土器483点、石器等124点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器17点、礫石器67点である。土器はすべてⅠ群D1類で、ほぼ4個体分の土器が床面直上・覆

H-491



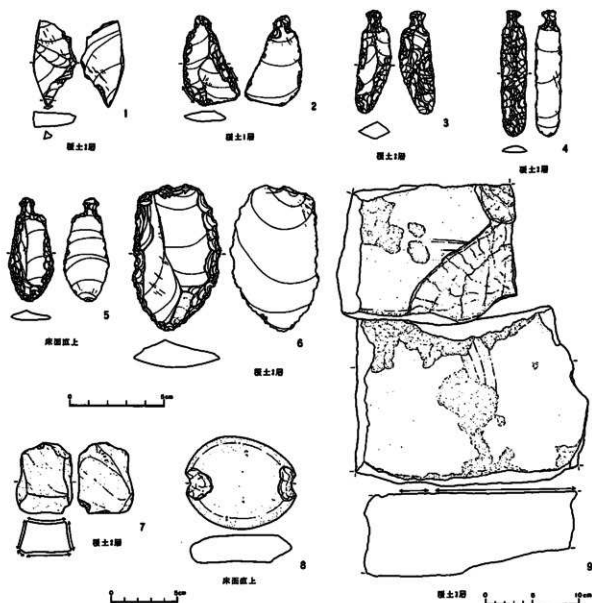
図Ⅲ-263 H-491実測図



図Ⅲ-264 H-491出土土器

土から出土し、復元された。床面直上のものは、横倒しのまま押しつぶされた状態を呈していた。石器は石匙、砥石、石錘等が出土している。

土器：すべてⅠ群D1類である。1は床面直上とH-457の覆土と接合した。底部は欠損している。器形は4カ所に大きな山形の波頂部を持つ波状口縁で、口縁部はほぼ直立する。口唇断面は丸形である。文様は刺突の加えられた沈線と肋筋のない貝殻腹縁圧痕で構成される。胎土はやや粗い砂礫粒混じりであるが、焼成は良い。2は床面直上より横倒しのまま押しつぶされた状態で出土した。底部は欠損している。器形は砲弾形尖底になるものと見られる。口唇断面は丸形である。器表面上段と口縁内部に押し波状文が施され、施文後、円孔がめぐらされる。胎土は細かい砂粒がはいる。3はH-453・457覆土出土の破片と接合した。底部は欠損している。器表面全体に貝殻腹痕文が施され、内面は指でおさえたと思われる調整が施されている。4は覆土3層・H-483覆土3層出土の破片と接合した。4カ所の波頂部を持つ波状口縁で、器形は砲弾形の尖底である。口縁部に櫛歯状に加工された貝殻腹縁文と、横環する沈線を間に挟む刺突の加えられた沈線2条がめぐる。口縁部内面にも貝殻腹縁文が



図Ⅲ-265 H-491出土石器

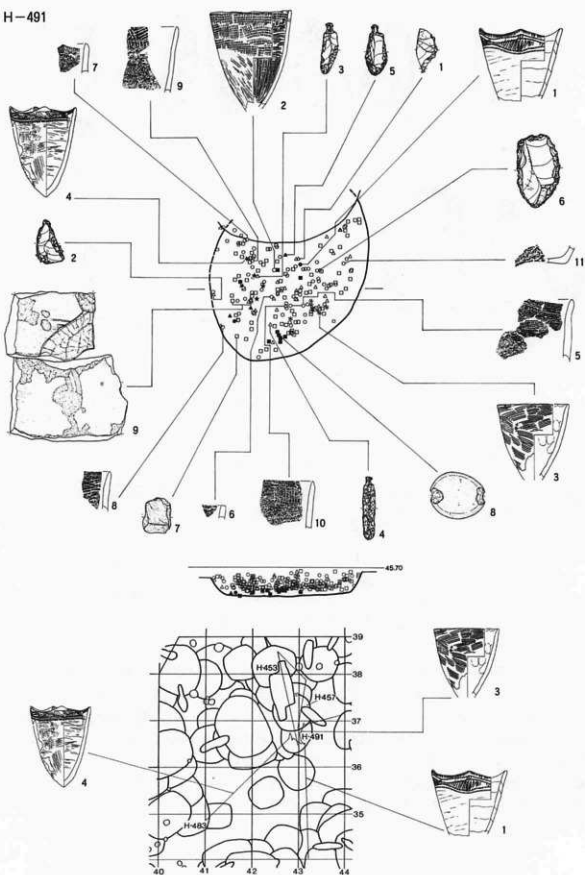
施され、横位に細かい条痕がある。5～8は波状口縁の破片で、5は鋸歯状と横位の腹縁文が施される。6は内外面にナデ調整が施され、口唇部は角形である。7は連続波状文と貝殻背圧痕で文様が構成され、内面に押引が施される。8は羽状の腹縁文が施される。9・10は平縁と思われる口縁部の破片で、9は鋸歯状に腹縁文が、10は貝殻腹縁文が縦位、横位に組み合わせられ、その下位に鋸歯状沈線が横環する。11は平底の底部で、胎土は粗い砂粒を多く含む。

石器等：1は剥片の一部に尖頭部を作りだした石錐。2～5は石匙、6はスクレイパー、7は折断面がすべて研磨されている砥石、8は石錘、9は石皿である。

(笠原 興)



H-491



図Ⅲ-266 H-491出土遺物分布・接合図

H-492 (図Ⅲ-267~270, 図版41・146・185)

位置: 42-37

規模: —/—×—/—×(1.30)m

床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 防空壕、H-453・454調査後、V層直上でⅢ b+褐色土の堅穴状の落ち込みを確認した。内部はローム粒がブロック状に多く混入する。掘り込み面はⅢ b層中と思われる。

重複関係: 防空壕、H-453・494・535と重複しており、防空壕、H-453より古く、他より新しい。

時期: 出土土器はすべてⅠ群D1類であることから、本遺構は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: やや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。V層をわずかに掘り込んで構築されている。

壁: 緩傾斜で立ち上がっている。検出面からの壁高は約30cmである。

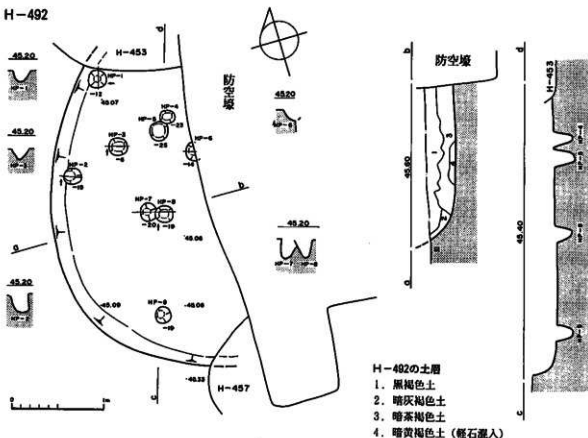
炉跡: 焼土は検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1・2は壁際であり、やや内傾する。HP-4・8・9はほぼ等間隔で直線上に並ぶものである。

遺物出土状況: 出土遺物総数は197点で、土器73点、石器等124点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器11点、磨製石器1点、礫石器37点である。土器は大半がⅠ群D1類で、床面に近い覆土からの出土はわずかである。石器は石槍、石斧、砥石、石錘等が出土している。

土器: 1・3は波状口縁。口唇部は、1が外傾し、3は丸形である。口縁部には共に櫛歯状腹縁文が施される。1には並行する沈線に鋸歯状沈線が組み合わされ、3にはすり消し条痕が加えられる。2

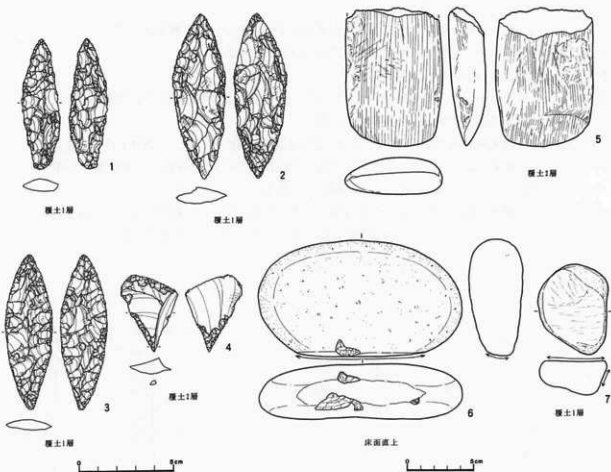
H-492



図Ⅲ-267 H-492実測図



図Ⅲ-268 H-492出土土器



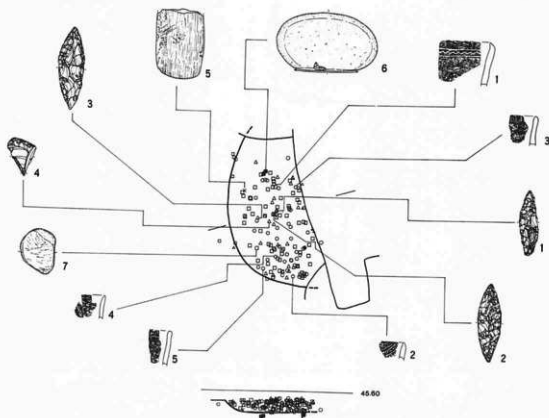
図Ⅲ-269 H-492出土石器

は口縁部破片で斜位に腹縁文が施される。4・5は内外面にナデ調整が施される。

石器：1～3は石槍。4は石錐。5は擦り切り痕の残らない石斧。6はすり石。7は2面に砥面を持つ円礫素材の砥石である。

(笠原 興)

H-492



図Ⅲ-270 H-492出土遺物分布図

H-493 (図Ⅲ-271～274, 図版41・42・116・146・185)

位置: 41-35・36, 42-36

規模: 5.20m/4.95m×(3.40)m/(3.00)m×0.35m

床面積・平面形: 不明 長軸方向: N-85°-W

確認・調査・土層: H-454調査後、南壁付近で暗茶褐色土の落ち込みを確認した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。

重複関係: H-454・497・533と重複し、H-454より古く、他より新しい。

時期: 出土土器はⅠ群D1類、同D2類であることから、本遺構は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

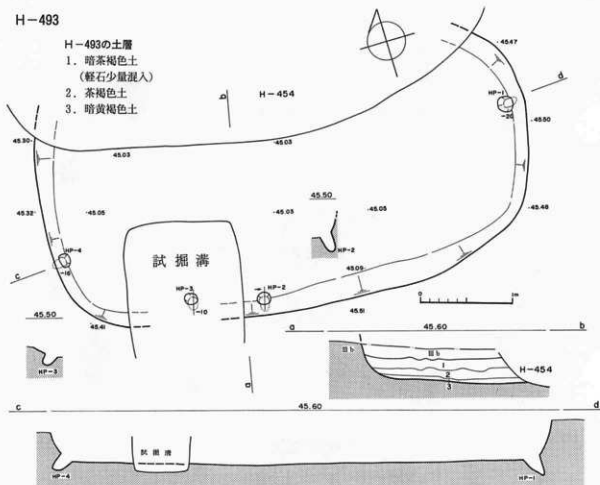
床面: 残存する床面にはやや凹凸があり、わずかに北側に傾斜する。Ⅴ層を掘り込んで構築されている。

壁: 残存する壁は急傾斜で立ち上がっている。壁高は約40cmである。

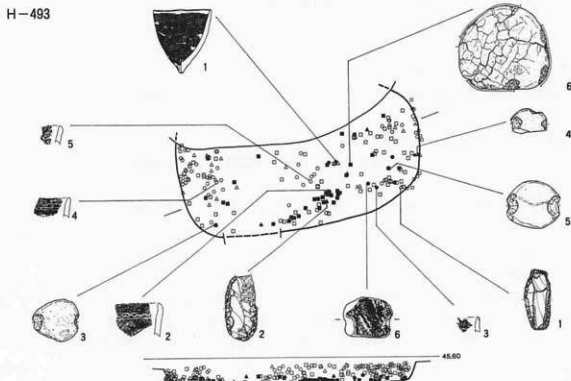
炉跡: 焼土は検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは4個検出されている。すべて壁際のもので内傾し、杭状である。

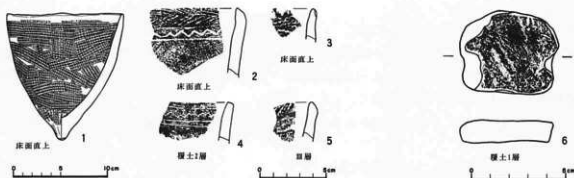
遺物出土状況: 出土遺物総数は268点で、土器117点、石器等150点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器10点、礫石器87点である。土器はⅠ群D1類の他、床面直上からはほぼ完形のⅠ群D2類の小型の土器が横倒しの状態で出土している。石器は礫石器が主体である。床面付近からはスクレイパー、たたき石、石錘、すり石、台石が出土し、特に台石は床面直上出土のD2類土器の東隣より出土している。



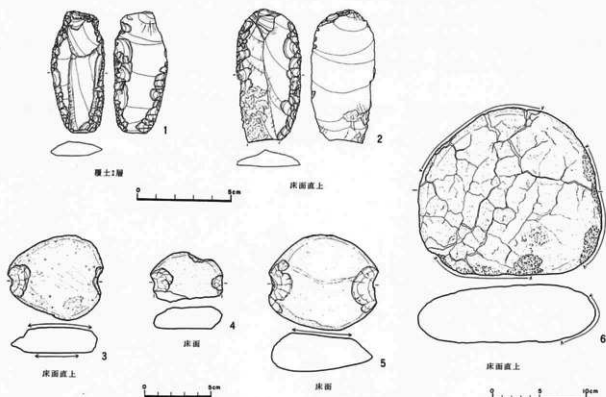
図Ⅲ-271 H-493実測図



図Ⅲ-272 H-493出土遺物分布図



図Ⅲ-273 H-493出土土器



図Ⅲ-274 H-493出土石器

土器：1はI群D2類の乳房状尖底土器である。口縁部形態は平縁で、口唇部はやや尖る。胴部に張りはない。文様は器面全体が押引文で構成されており、尖底部のみミガキ調整が施される。2・4は共に波状口縁の破片で、平行する沈線と鋸歯状沈線が組み合わされたもの。2はこれに橢圓状腹縁文が施される。3はヘラ状工具による摘み出しによるもの、5は肋筋のない貝殻腹縁圧痕文がロッキングで施される。6はI群D1類の土器片鍾。

石器等：1は両側縁に刃部をもつ石匙形を呈するスクレイパー。2は床面直上出土のスクレイパー。3～5は石鍾。6は風化の著しい台石である。

(笠原 興)

H-494（図Ⅲ-275～277，図版42・186）

位置：41-37，42-37

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-492調査後、周辺包含層調査中にH-455との間で、V層を掘り込んだと思われる黒褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトは残せなかった。掘り込み面は不明である。重複関係：H-453・455・492と重複し、これらより古い。

時期：出土土器はすべてI群D1類であることから、本遺構は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：残存する床面は堅く、ほぼ平坦である。

壁：残存する壁はわずかで明瞭でない。

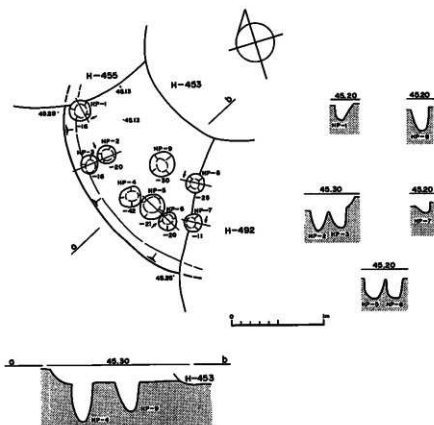
炉跡：焼土は検出されていない。

付属ビット：柱穴状ビットは9個検出されている。HP-4・9は中でも深く、ほぼ直立する。HP-2・3・5・6はそれぞれが切り合い、他のものは木の根痕の可能性がある。

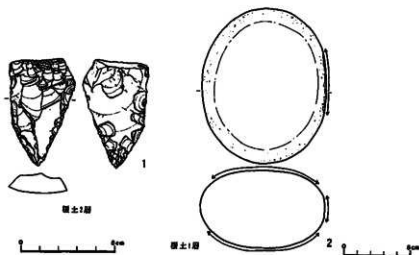
遺物出土状況：出土遺物総数は26点で、土器10点、石器等16点である。礫を除く石器は剥片石器2点、礫石器8点である。土器はすべてI群D1類。HP-4の覆土よりI群D1類の破片3点と石錘2点が出土している。

石器等：1は両側縁に刃部を持ち、尖頭状になるもの。2はすり石である。（笠原 興）

H-494

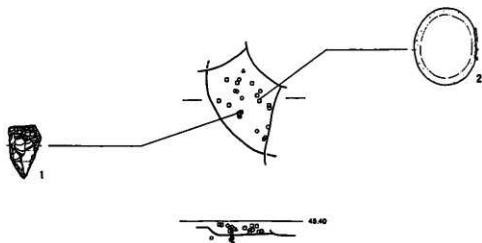


図Ⅲ-275 H-494実測図



図Ⅲ-276 H-494出土石器

H-494



図Ⅲ-277 H-494出土石器分布図

H-495 (図Ⅲ-278~280, 図版43・147・186)

位置: 39-35, 40-35 ほぼ東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模: ———/———×———/———×(0.29)m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

調査・確認・土層: H-74調査中、周辺に遺構が存在することが予想されたため、東西、南北に土層観察用のベルトを残し、順次掘り下げて調査を行った。P.D.3は認められなかった。Ⅲ層を除去後、遺構検出をⅣ層上面で行い、H-74に切られた半円形の黑色土の落ち込みを確認した。B調査によって南北に切られた断面から南壁の立ち上がりを確認し、プランとクロスチェックしながら全体に掘り下げ、覆土は六層に分層された。覆土4層を除去するとほぼ平坦となり、柱穴が確認されたため、この面を床面と判断した。

床面: 床面はⅤ層にまで掘り込まれていない。概ね平坦だが、踏み固めは目立たない。

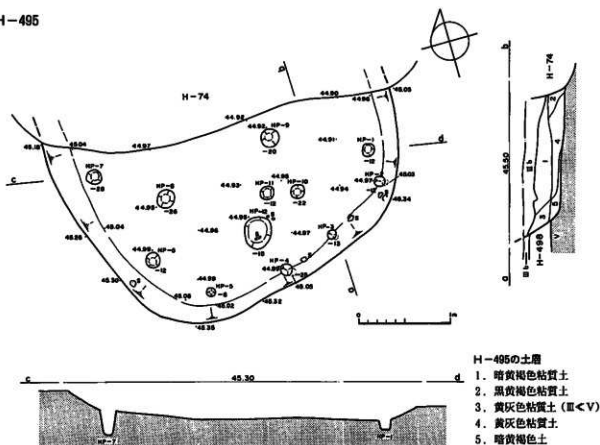
壁: 斜めに立ち上がり、かなり崩壊している。東方向では床と壁裾の境界が不明瞭だった。

炉跡: 確認されなかった。

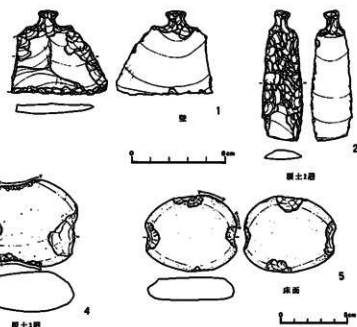
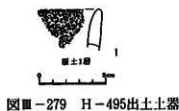
付属ビット: 柱穴状の小ビットは12ヶ所確認された。壁際にある柱穴はいずれも径10cm余りで、個別に変化に富み、柱穴を認定することは難しい。床面中央部落ち込み周辺ではHP-7が明瞭な掘り方



H-495



図Ⅲ-278 H-495実測図



図Ⅲ-280 H-495出土土器

を持つ。倒木痕など自然の攪乱かと思われるものは削除した。竪穴外の柱穴は確認できていない。  
遺物出土状況：遺物総数は51点。29点出土した土器のすべてがⅠ群D1類である。石器等は22点出土、うち剥片石器群は14点、礫石器群は8点を占める。

重複関係：H-74より古く、H-496・H-498より新しい。

時期：遺物出土状況からⅠ群D1類期、縄文時代早期中葉と考えられる。

土器：1はⅠ群D1類の口縁部破片である。平縁口縁を呈し、口唇部は丸形。口縁部文様帯は横位に刺突文を施し、内部を貝殻腹縁の刺突を連続移動させて充填している。内面はナデ調整。

石器類：1・2は石匙で硬質頁岩製。3～5は石錐で、3は片岩製で、砥石から転用されている。4・5は閃緑岩製で、挟りが四ヶ所に入る。  
(富永 勝也)

H-496 (図Ⅲ-281～284, 図版43・116・147・186)

位置：39-35,40-35 ほぼ東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模：——/——×——/——×(0.29)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

調査・確認・土層：H-74・451調査中、周辺に遺構が存在することが予想されたため、東西、南北に土層観察用のベルトを残し、順次掘り下げて調査を行った。P.D.3は認められなかった。Ⅲ層を除去後、遺構検出をⅣ層上面で行い、H-74に切られた半円形の黒色土の落ち込みを確認した。覆土は3層に分層された。覆土1層を除去すると、東壁付近に土壌を確認し、P-285とした。覆土3層を除去すると、遺物が多く出土した。これを除去するとほぼ平坦となり、柱穴が確認されたため、床面と判断した。炭化物の散在や焼土は検出されなかった。

床面：床面はⅤ層にまで掘りこまれていない。概ね平坦だが、踏み固めは目立たない。

壁：斜めに立ち上がり、かなり崩壊している。東方向では床と壁裾の境界が不明瞭である。

炉跡：確認されなかった。

付属ビット：柱穴状の小ビットは11ヶ所確認された。床面中央部周辺ではHP-1・4が明瞭な掘り方を持つ。竪穴外の柱穴は確認できない。

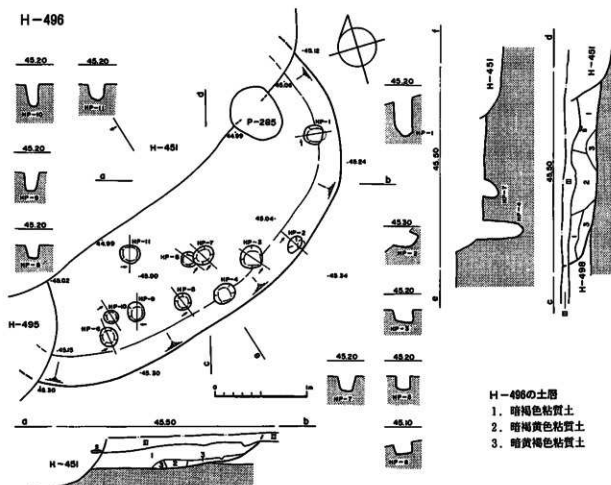
遺物出土状況：遺物総数は137点。91点出土した土器のすべてがⅠ群D1類である。石器等は46点出土。うち剥片石器群は13点、礫石器群は33点である。

重複関係：H-451・495より古い。

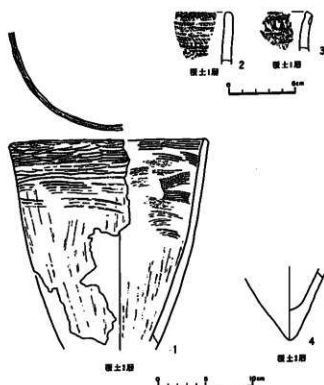
時期：遺物出土状況からⅠ群D1類期、縄文時代早期中葉と考えられる。

土器：1はⅠ群D1類土器。H-452・496・519出土の土器片と接合する。口唇部は角形。口唇端部と口縁部には肋筋のない貝殻腹縁を横位に刺突している。胴部内面は肋筋のある貝殻腹縁である。2～4はⅠ群D1類の口縁部破片である。2は波状口縁の波頂部破片である。口唇部は角形で、外端に爪による連続移動文が施され、文様を構成する沈線に刺突が施される。内面はナデ調整を施されるが、ススの付着が著しく煮沸に利用されたことがわかる。3は口唇部が外傾する。外方に肥厚し張り出した稜部分の下面を利用して、へら状工具によって粘土を右方向から左に掻き分け摘み出している。通常の摘み出しは、左右に掻き分けるもので、一方向からの施文は珍しい。摘み出しはⅠ群D1類に特徴的にみられる手法で、他地域のほぼ併行する早期の遺跡からは同様の手法は観察されず、函館地域に特有の地域色と考えられる。内面は貝殻腹縁文が横位に施され、2同様にススが付着している。4はⅠ群D1類の尖底部で、突起が目立たない。

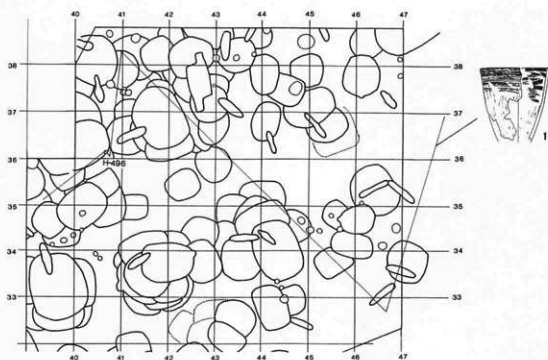
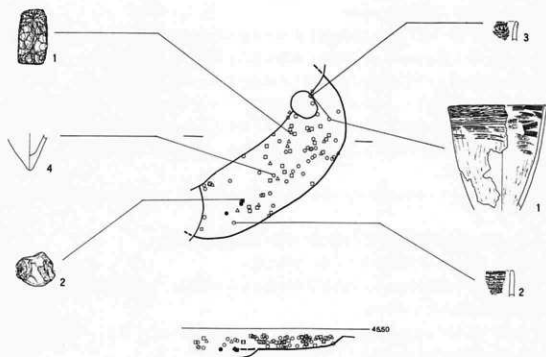
石器等：1は筒状石器。硬質頁岩製で腹面のバルブ部の厚みをとる調整が入る。覆土2層から出土している。2は石錐で凝灰岩製。床面から出土した。  
(富永 勝也)



図Ⅲ-281 H-496実測図



H-496



図Ⅲ-284 H-496出土遺物分布・接合図

H-497 (図Ⅲ-285~288, 図版44・147・186)

位置: 41-36 標高45.27m~45.39mの平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-454・493の西壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。そのため周辺を精査し、IV層直上付近で、Ⅲb層の広がり、茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲb層、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。覆土の茶褐色系の土が厚く堆積しており、これを掘り下げ、V層の堅い面を検出した。H-454の床面とほぼ同一レベルで柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層と思われる。覆土はほぼ一層で、茶褐色土の混合土である。上層はやや黒味があり、床面直上には黄色土がブロック状に混入する土が薄く見られた。

重複関係: 本住居跡はT-162、H-454・493・518と重複しており、H-518より新しいが、他より古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を深く掘り込んで構築されている。平坦で堅い。

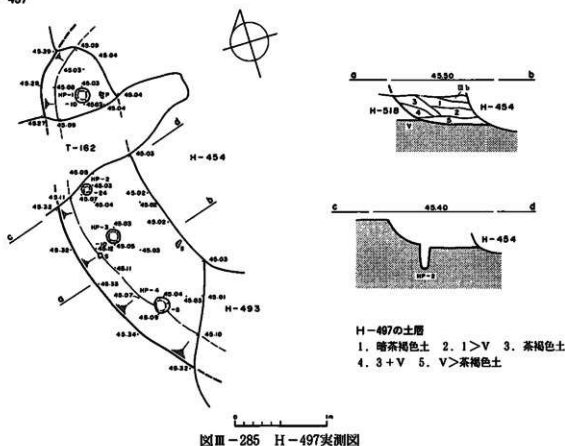
壁: 立ち上がりはやや急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、ほぼ22cm前後である。

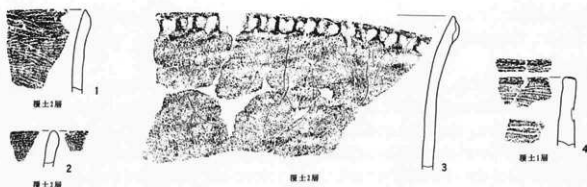
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは4個検出されている。これらは壁際にあり、直立している。HP-2がやや深い、他は全体に浅いものである。

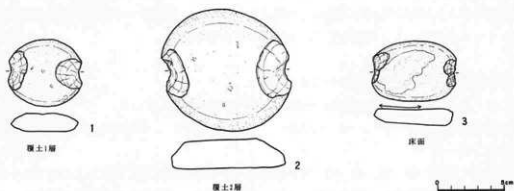
遺物出土状況: 出土遺物総数は83点である。この内訳は土器54点、石器等29点である。床面からはI群D1類土器3点、石錘、礫が各1点づつ出土しただけで、他は覆土中から出土したものである。遺

H-497



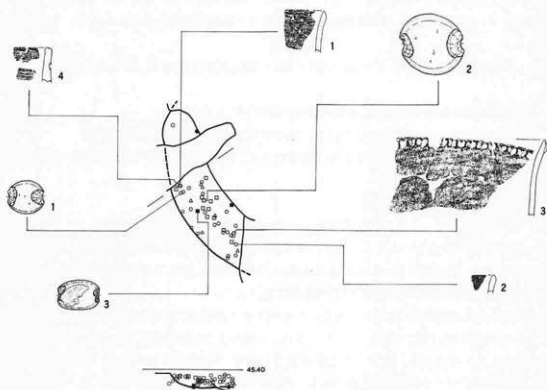


図Ⅲ-286 H-497出土土器



図Ⅲ-287 H-497出土石器

H-497



図Ⅲ-288 H-497出土遺物分布図

物の出土状態に、まともは認められない。出土した土器は覆土中でI群D2類のものが8点出土した以外は、I群D1類土器である。石器ではスクレイパー、たたき石、すり石、石錘などが出土している。

土器：1～3は覆土2層、4は覆土1層で出土した土器で、これらはI群D1土器である。1は波状口縁の破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、内面には連続押引文が施文されている。胴部外面には背圧痕、内面はナデ調整が加えられている。2は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。外面には貝殻条痕文上に連続腹縁文が施文される。内面には連続押引文が施文される。3はH-493壁出土の土器片と接合した平縁の口縁・胴部破片である。口唇部断面形は切り出し状である。口唇部外面には指頭による粘土のつまみ上げがなされ、外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。4は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。口唇部には刺突を加えた沈線、外面には沈線文が施文されている。内面はナデ調整。焼成良好で堅緻。

石器：1～3は石錘。3は床面出土で、平坦面にすり痕が残る。(和泉田 毅)

H-498 (図Ⅲ-289～292, 図版44・147・187)

位置：39-35, 40-35 標高45.29m～45.42mの平坦地に位置している。

規模：5.97m/5.49m×——/——×0.35m 床面積：不明 平面形：楕円形状か

長軸方向：W-E

確認・調査・土層：39-35、40-35の包含層調査中、IV層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。茶褐色土はやや厚く堆積しており、この下層の茶褐色土<Vを除去し、やや軟質の暗灰黄色土を検出し、柱穴状小ピットを検出したことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層である。覆土1層はⅢb>Vの褐色土で、中央部に一部残存していただけである。覆土2層は茶褐色土の混合土で、20cm～30cmと厚く堆積していた。覆土3層は床面直上の汚れた土で、茶褐色土<黄色土である。

重複関係：本住居跡はP-272、H-465・483・495・496と重複しており、H-483より新しく、他より古い。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を少し掘り込んで構築されている。ほぼ平坦であるが、やや軟質である。

壁：残存部分の壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、西壁が29cm前後、東壁が19cm～27cmである。

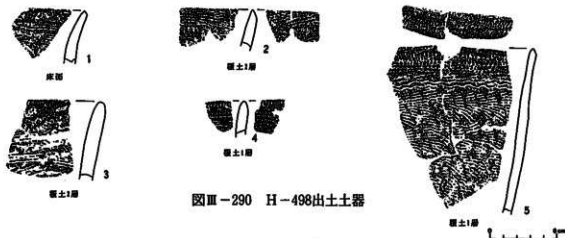
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは13個検出されている。HP-1～9は壁際にあり、直立している。HP-8はH-405の床面で検出されたものである。HP-10・12は主柱穴と考えられるが、2本柱かどうかは不明である。HP-10は杭状で、33cmと非常に深い。HP-12は、床面で茶褐色土の落ち込みで検出したもので、壁面で軽石状の礫片が張り付いた状態で出土した。

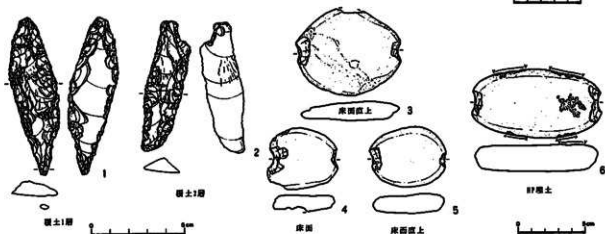
遺物出土状況：出土遺物総数は124点である。この内訳は土器63点、石器61点である。床面、床面直上付近からはI群D1類土器が14点、すり石、台石、石錘などが10点出土している。遺物の多くは覆土中から出土したものである。出土した土器は覆土1層でI群D2類のもの2点、同E類のものが4点出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石錘、石匙、スクレイパー、すり石、砥石、石錐などが出土しており、床面、床面直上、HP覆土から石錐が5点出土した。







図Ⅲ-290 H-498出土土器

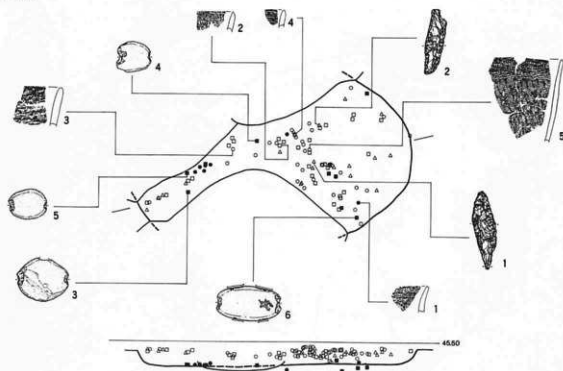


図Ⅲ-291 H-498出土石器

土器：1は床面、2・3は覆土2層、4・5は覆土1層からそれぞれ出土のもので、すべてⅠ群D1類土器である。1は口縁部の破片で、口唇部は丸く仕上げている。内面には貝殻条痕文、外面はすり消し条痕文が加えられている。2は平縁の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文が見られる。内面には連続押引文が施文されている。3は平縁の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上げている。内外面には粗い貝殻条痕文が加えられている。4は波状の口縁部破片で、口唇端部は鋭角的に仕上げている。口唇内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文が施文されている。胎土には小石を含むが、焼成良好で堅緻。5は波状の口縁・胴部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内外面には連続腹縁文、口縁部外面には貝殻腹縁圧痕文、鋸歯状沈線文が施文されている。胴部外面には背圧痕、内面にはナデ調整が加えられている。胎土には砂粒を含み、粗い。

石器：1は3類の頁岩製の石錐。2は2a類の石匙で、片面加工されている。3～6は石匙。3は床面直上出土で片岩製、4は床面出土で安山岩製、5は床面直上出土で閃緑岩製。6はHP-6出土の閃緑岩製のもので、平坦面、側縁にたたき痕が残る。(和泉田 毅)

H-498



図Ⅲ-292 H-498出土遺物分布図

H-499 (図Ⅲ-293~296, 図版45・147・187)

位置: 42-35・36, 43-35・36 標高45.46m~45.61mの平坦地に位置している。

規模: 4.10m/3.82m×3.62m/3.30m×0.25m 床面積: 9.59㎡ 平面形: 長円形

長軸方向: N-22°-W

**確認・調査・土層:** 42-35・36、43-35・36の包含層調査中、IV層直上でⅢb>Vの広がりが見られ、暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行った。覆土1層を除去したところで、南側にⅢb層と黄色土のまじり合った汚れた土の落ち込みが検出されたため、土壌を想定し、半截したところ、風倒木痕と判明した。暗灰黄色土を掘り下げ、V層のやや堅い暗黄色土の面を検出した。また柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢb>Vの褐色土で、中央部に薄く認められた。覆土2層は暗茶褐色土で、混合土である。覆土3層は、覆土4層に2層が少量混入する暗黄茶色土である。覆土4層はVに褐色土が少量混入する暗灰黄色土で、床面直上の土である。

**重複関係:** 本住居跡はH-500・533と重複しており、これらより古い。

**時期:** I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

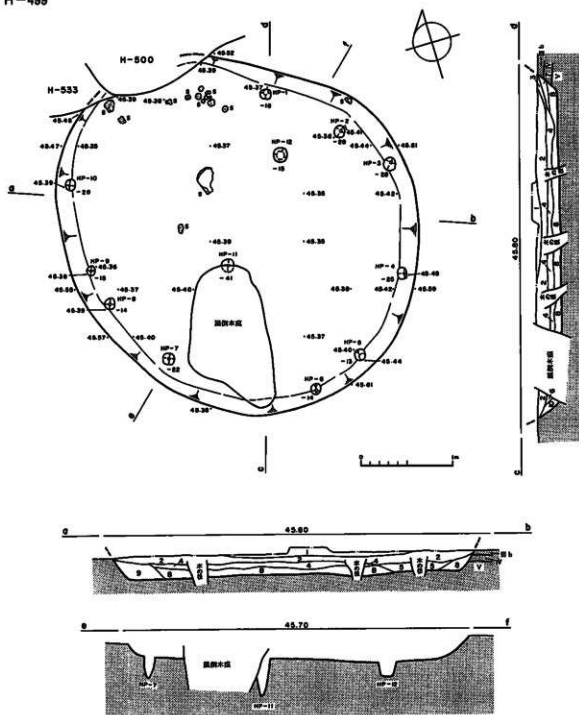
**床面:** V層を少し掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや堅い。

**壁:** 立ち上がりは全体的にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、南西壁が13cm~25cm、南東壁が14cm~20cm、北東壁が14cm~19cmである。

**炉跡:** 焼土などは検出されていない。

**付属ビット:** 柱穴状小ビットは12個検出されている。HP-1~10は壁際にあるもので、直立している。全体に杭状のものが多く、やや深い。HP-11は直立し、杭状で41cmと深い。位置的にやや南東寄りに

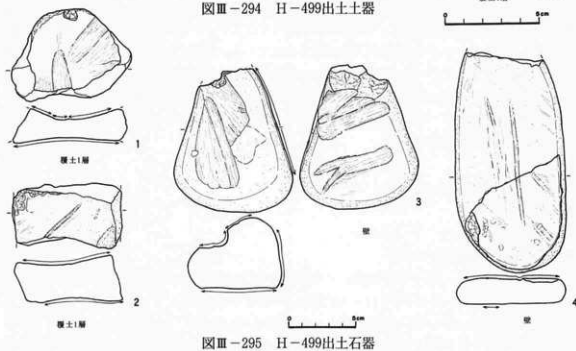
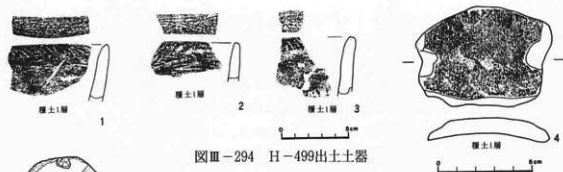
H-499



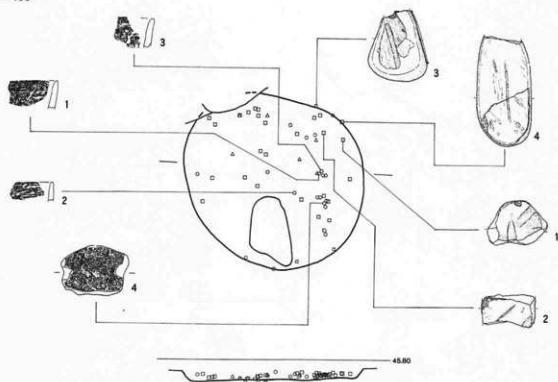
H-499の土層

1. Ⅲb>V (褐色土。覆土1) 2. 暗茶褐色土 (覆土2) 3. 2に微量のVが混入
4. 2<8 (覆土3) 5. 暗黄茶色土 (砂質、軽石・小石混入) 6. 暗茶褐色土+V
7. 暗黄褐色土 8. 暗灰黄色土 (覆土4) 9. 暗茶灰色土 (Vが少量混入)
10. 暗黄灰色土

図Ⅲ-293 H-499実測図



H-499



あるが、深さなど非常にしっかりしていることから、主柱穴と思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は60点である。この内訳は土器21点、石器等39点である。遺物は床面直上から礫が2点出土した以外は、覆土中からの出土である。出土した土器はすべてI群D1類土器である。石器では台石、砥石、石錘などが出土している。中央部やや北西寄りの覆土1層上面で台石が1点水平の状態で出土した。遺物の出土状態にまともは見られない。

土器：1～4は覆土1層から出土したI群D1類土器である。1は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げられている。口唇部内外面には連続押引文が施文され、内外面にはナデ調整が加えられている。胎土は堅いが粗い。2は平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面には貝殻腹縁文、内面には連続押引文が施文され、その上に貝殻条痕文を加えている。胎土には砂粒を含む。3は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上げている。口唇部外面には連続腹縁文、内面には連続押引文が施文されている。胎土には砂粒を含み、堅いが粗い。4は土器片錘である。内面には貝殻条痕文が加えられている。

石器：1～4は砥石。1・2には研ぎ面が2面あり、2には溝状のすり痕が残る。3には数条のすり痕、4には溝状のすり痕が見られる。

(和泉田 毅)

H-500 (図Ⅲ-297～300, 図版45・147・187)

位置：42-36

規模：—/—×—/—×0.45m

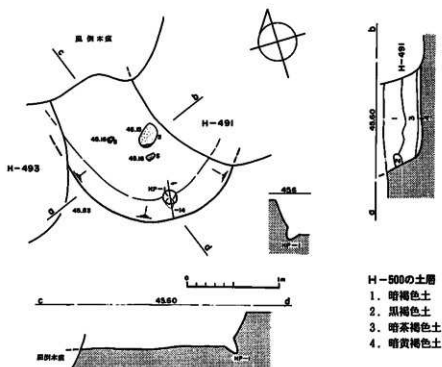
床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-491・493調査後、この両遺構の間に暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを行った。掘り込み面は不明である。

重複関係：H-491・493・499・533と重複し、H-499・533より新しく、他より古い。

時期：出土土器はI群D1類・同D2類であることから、本遺構は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

H-500



図Ⅲ-297 H-500実測図

床面：残存する床面はほぼ平坦で固くしまる。

壁：壁の掘り込みは急傾斜で立ち上がっている。壁高は約40cmである。

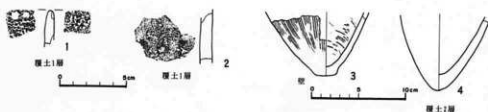
炉跡：焼土は検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは1個検出されている。壁際にあり、やや浅めの杭状で内傾する。

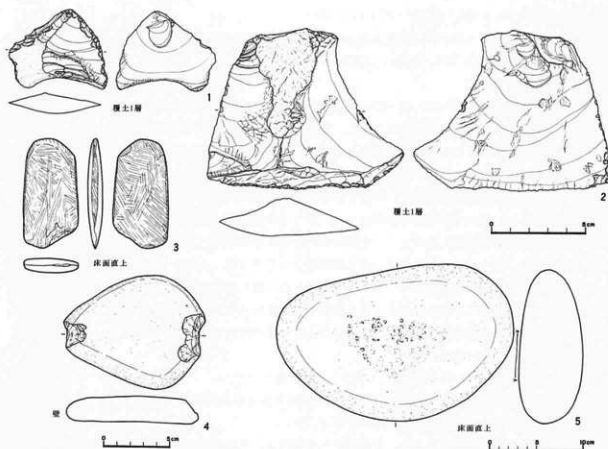
遺物出土状況：出土遺物総数は43点で、土器13点、石器等30点である。石器は剥片と礫を除くと、剥片石器3点、磨製石器1点、礫石器15点である。床面付近からの出土は磨製石斧と台石で、また壁面に張り付くように1群D2類の土器の底部が見つかった。

土器：1は丸型の口唇部外面に、摘みあげ手法による爪形文が施されるもの。2は無文で表裏ともナデ調整が施される。3・4は砲弾形の尖底で、ともに胴部上半を欠損している。3は内外面に貝殻条痕による調整が施される。尖底部の突起先端は平坦に成形されている。

石器等：1・2はスクレイパー。3は床面直上出土の刃縁が斜めに片寄った磨製石斧で、擦り切り痕を残さないもの。4は石鍾。5は床面直上出土の台石で平坦部に使用痕を残す。(笠原 興)

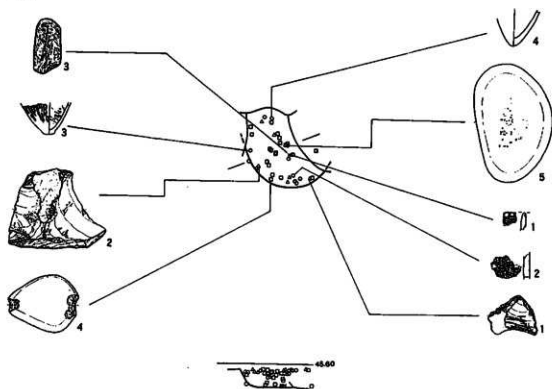


図Ⅲ-298 H-500出土土器



図Ⅲ-299 H-500出土石器

H-500



図Ⅲ-300 H-500出土物分布図

H-501 (図Ⅲ-301~304, 図版46・47・147・188)

位置: 44-37・38, 45-37・38 標高45.80m~45.99mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 3.53m/3.12m×3.38m/2.95m×0.42m 床面積: 7.76㎡ 平面形: ほぼ隅丸形状  
長軸方向: N-S

**確認・調査・土層:** 44-37・38、45-37・38の包含層調査中、黒味のある暗褐色土の広がりが見られ、東西方向で黒褐色土の落ち込みが検出された。このため土層観察用の土手を設定し、暗褐色土から順次掘り下げ、調査を行った。南側では風倒木痕状の黒色土の落ち込みが見られ、南壁の確定はむずかかった。また黒褐色系の土がやや深く落ち込んでおり、それらを除去し、砂質の暗茶灰色土の下で、V層のやや固い暗黄色土を検出した。壁際と思われる付近から柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は四層に分けられる。覆土1層は暗褐色系の土で、上層は小石を混入する暗褐色土、下層は黄色土をやや多く混入する土である。覆土2層はやや粘質のある黒褐色系の土である。南側ではあまりはっきりとは堆積していなかった。北側では遺物がやや多く混入していた。覆土3層は覆土2層とⅢ層がまじり合った汚れの目立つ暗茶黄色土である。覆土4層は砂質の暗茶灰色土で、床面上に見られる土である。また東壁側、南壁側、また中央部の覆土3層の下には茶褐色系の汚れた混合土が堆積していた。全体に覆土の堆積状態は不安定である。

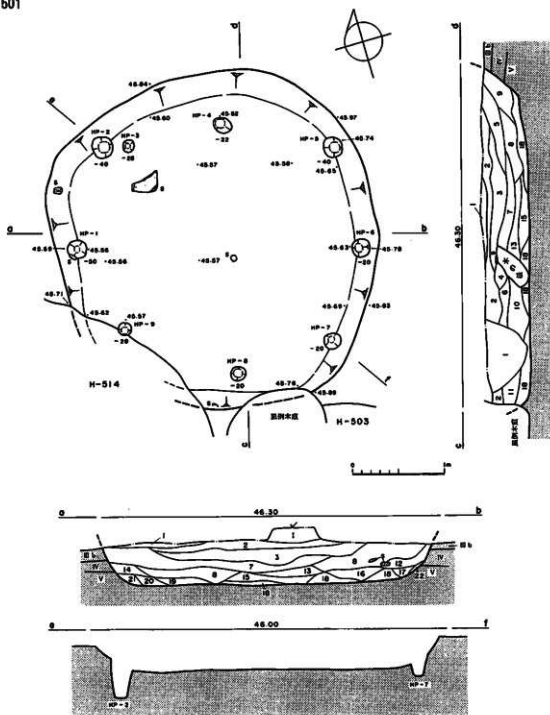
**重複関係:** 本住居跡はH-514と重複しており、これよりも古い。

**時期:** I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

**床面:** V層を掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

**壁:** 立ち上がりはやや急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が23cm前後、西壁が14cm、南壁が15

H-501



## H-501の土層

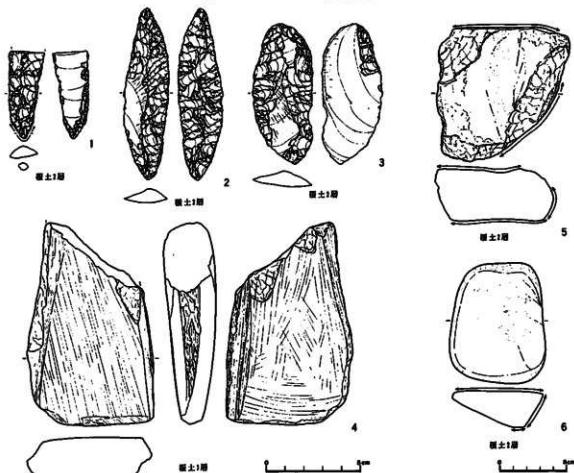
1. 暗褐色土>黄色土粒 2. IIIb>V (小石混入) 3. 黒味のある暗褐色土
4. IIIb>V 5. IIIb>V (ボソボソ) 6. 暗黄褐色土 (砂質、軟質) 7. 3>18
8. 黒褐色土>V 9. IIIb>V (軟質) 10. 暗茶黄色土 (汚れている、6よりVが多い)
11. 茶褐色土 12. 茶灰色土>V 13. 7>18 14. IIIb>黄褐色土 15. 明茶褐色土
16. 茶褐色土+V 17. 茶褐色土 18. 暗黄灰色土 (砂質)>V 19. 暗黄茶褐色土 (砂質)
20. 19+V 21. 暗黄褐色土 22. 暗黄色土 (粘質)

図Ⅲ-301 H-501実測図





図Ⅲ-302 H-501出土土器



図Ⅲ-303 H-501出土土器

cm前後、東壁が24cm～31cmである。

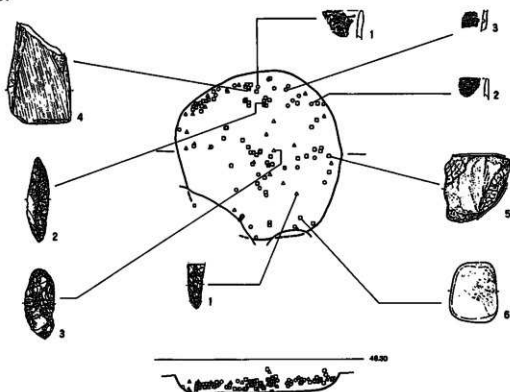
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは9個検出されている。すべて壁際にあり、直立している。全体に深くとくにHP-1が50cm、HP-2が40cmと非常に深いものである。

遺物出土状況：出土遺物総数は153点である。この内訳は土器36点、石器等115点である。遺物の出土状態にまともりは認められない。床面直上から石鍾が1点出土しただけ、他は覆土中から出土したものである。土器はⅠ群E類、同G類のものとⅠ群D1類土器が出土している。石器では石槍、石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石鋸、石鍾などが出土している。HP-1の南西壁には縦に張り付いた状態で石鍾が1点出土した。

土器：1～3は覆土2層出土の土器で、1はⅠ群D1類土器、2・3はⅠ群E類土器である。1は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。内外面には貝殻条痕文が加えられている。堅緻であるが、つくりは粗雑である。2は口縁部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には引摺り背圧痕、

H-501



図Ⅲ-304 H-501出土遺物分布図

内面には貝殻条痕文が加えられている。胎土には微細な雲母粒を含有し、焼成良好で堅緻。3は胴部の破片で、外面には引摺り背圧痕、内面には貝殻条痕文が加えられている。胎土には微細な雲母粒を含有し、焼成良好で堅緻。

石器：1は石匙欠損品の転用と思われる石錐。2は石槍。3は硬質頁岩製のスクレイパー。4は製作途中で折れたものと思われる石斧である。5・6は砥石。5は研ぎ面が3面、6は円礫を素材とし、研ぎ面は2面である。  
(和泉田 毅)

H-502 (図Ⅲ-305・306, 図版46・47・147)

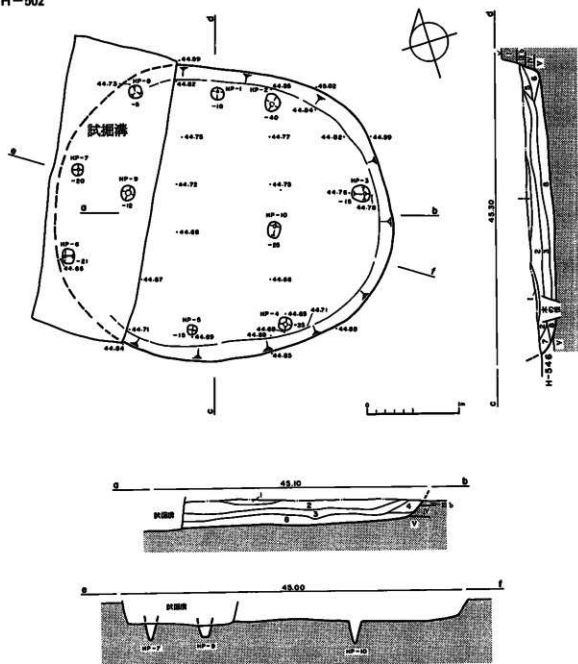
位置：39-31 40-31 北から南へ若干傾斜する標高44.84m～44.99mの緩斜面に位置している。

規模：(3.60)m/(3.30)m×3.12m/2.86m×0.20m 床面積：(7.73)m<sup>2</sup> 平面形：長円形状  
長軸方向：N-60°-W

確認・調査・土層：39-31、40-31の包含層調査中、Ⅳ層直上付近でⅢb>Ⅴの広がりが確認され、また試掘溝の東壁面で覆土状の土の堆積と、壁の立ち上がりと思われるⅤ層の立ち上がりを確認した。このため土層観察用の土手を設定し、調査を行った。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で暗黄灰色の堅い面を検出し、また柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層である。覆土1層はⅢb>Ⅴの暗褐色土、覆土2層は覆土1層と3層がまじり合った土である。覆土3層は床面上にある上で汚れた軟質の黄茶色土である。なお覆土上には掘り揚げ土状の灰褐色土が、ほぼ0.6m×0.6m、層厚0.05m～0.07mほど堆積していた。

重複関係：本住居跡はH-546と重複しており、これよりも新しい。

H-502



H-502の土層

1. 灰褐色土 (掘け土状) 2. Ⅲb>V (覆土1) 3. 2+8 (覆土2)
4. 褐黄色土 5. 暗黄褐色土 6. 暗黄灰色土 7. 暗褐色土 (わずかにVが混入、軟質) 8. 黄茶色土

図Ⅲ-305 H-502実測図

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。全体的には皿状で、中央部がくぼんでいる。堅い。

壁：立ち上がりは全体にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、ほぼ13cm～18cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは10個検出されている。HP-1～8は壁際があり、直立している。杭状のものが多く、HP-6～8は試掘溝の墳底面で検出されたものである。HP-9～10は主柱穴と思われる。

遺物出土状況：遺物は覆土1層中でⅠ群D1類土器7点が出土しただけである。

土器：1は覆土1層のⅠ群D1類土器である。胴部破片で、内面には貝殻条痕文が見られる。外面にはケズリ痕が残る。胎土は緻密で、軟質である。



図Ⅲ-306  
H-502出土土器

(和泉田 毅)

H-503 (図Ⅲ-307～310, 図版47・147・188)

位置：44-36・37, 45-36・37 標高45.67m～45.98mのほぼ平坦地に位置している。

規模：5.52m/5.14m×(3.50)m/(3.36)m×0.41m 床面積：(13.72)㎡

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-73°-E

確認・調査・土層：44-36・37、45-36・37の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で、Ⅲa、Ⅲb層の広がりを確認し、土層観察用の土手を設定して調査を行う。Ⅲa、Ⅲb層を掘り下げ、暗褐色土≫V、黒味のある暗褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲb+V、暗黄灰色土を掘り下げ、V層中でやや堅い暗黄灰色土を検出した。また柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層はⅢb≫Vの暗褐色土である。覆土2層は上層が黒味のある暗褐色土、下層は暗褐色土+黄色土である。覆土3層は床面直上のものでやや粘質の暗黄灰色土である。覆土は全体に風倒木痕や木の根痕の影響を受けて不安定な堆積状態である。また西、東側で、覆土1層と3層の間に茶褐色系の土が15cm～20cmほど堆積していた。更に北側では覆土2層と3層の間に掘り揚げ土状の灰褐色土が20cm～30cmほど堆積しているのが確認された。

重複関係：本住居跡はT-185、H-514・542と重複しており、T-185、H-514より古く、H-542より新しい。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

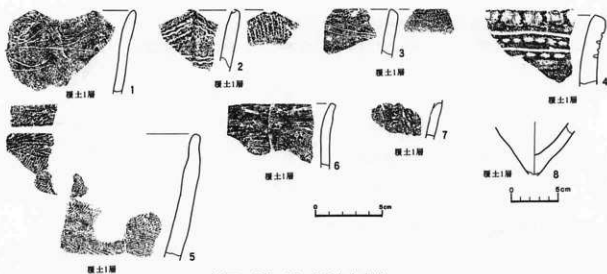
床面：V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや堅い。

壁：立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が21cm～28cm、西壁が19cm～31cm、南壁が21cm～34cm、東壁が23cm～29cmである。

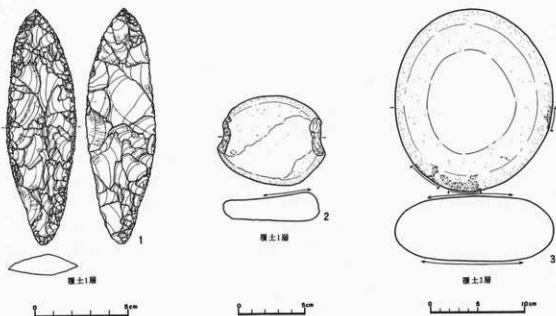
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは16個検出されている。HP-1～4は壁際にあり、若干内傾している。HP-15・16は主柱穴と思われ、二本柱が想定される。

遺物出土状況：出土遺物総数は100点である。この内訳は土器46点、石器等54点である。遺物は覆土中、とくに覆土1層から多く出土している。土器は覆土1層でⅠ群E類のもの2点、Ⅰ群G類のもの1点出土している以外は、Ⅰ群D1類のものである。石器では石槍、石錐、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。



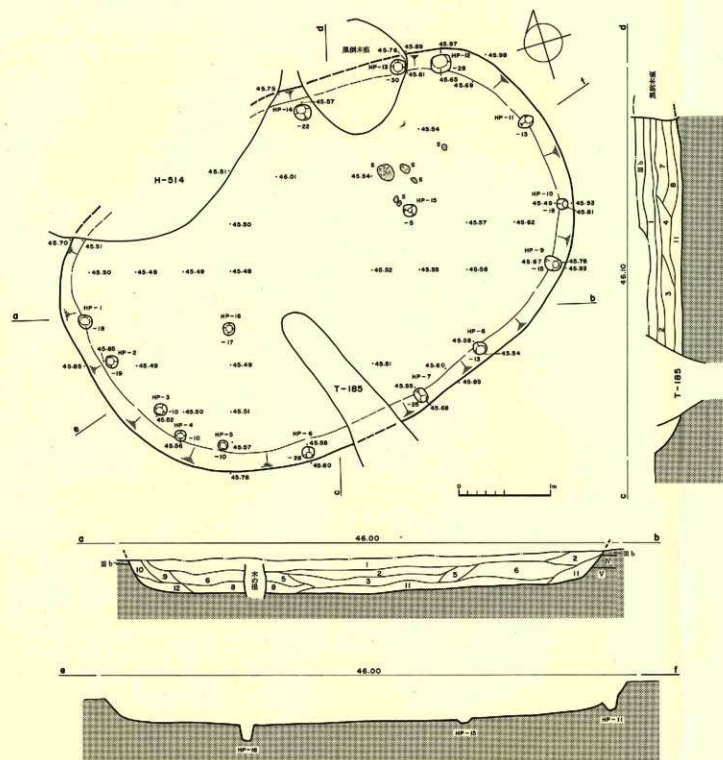
図Ⅲ-307 H-503出土土器



図Ⅲ-308 H-503出土石器

土器：1～8は覆土1層から出土したもので、1～5・8はI群D1類土器、6はI群E類土器、7はI群G類土器である。1は波状の口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。外面には無肋筋の貝殻による腹縁圧痕文、浅い鋸歯状沈線文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。内面には貝殻条痕文が加えられている。焼成良好で堅い。2は波状口縁の波頂部破片で、口唇部断面には波状の沈線文、貝殻腹縁圧痕文が施文され、波頂部から刺突が垂下する。口縁部内面には連続腹縁文が施文されている。3は波状の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状である。口唇部、外面には貝殻腹縁圧痕文、沈線が施文され、口唇部内面にはロッキング状の連続腹縁文が施文される。胎土には砂粒を含む。4は小波状の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。口唇部外面には指頭による粘土のつまみ上げがなされている。口縁部外面には沈線、刺突文が交互に施文される。内外面はナデ調整。5は口縁・胴部破片で、口唇部は丸く仕上っている。口縁部内外面には貝殻腹縁圧痕文が施文され、胴部外面には背圧痕が加えられている。6は44～37層出土の土器片が接合した口縁部破片で、口唇部は角形に仕上っている。外面には貝殻条痕文、内面にはナデ調整

H-503

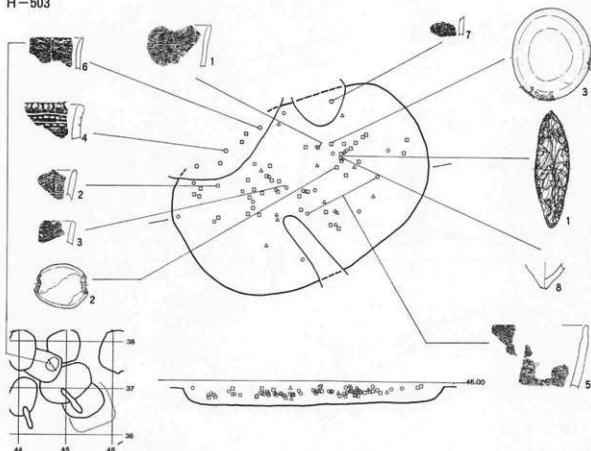


H-503の土層

1. Ⅲb>V 2. Ⅲb>V (小石まじり) 3. 暗褐色土 (黒味あり) 4. 3+V (黄褐色土) 5. 赤褐色土>V  
 6. 赤褐色土+V 7. 暗灰褐色土 8. 7+V (暗黄灰褐色土) 9. 褐色土 10. 暗褐色土 11. 暗黄灰色土  
 (6+Ⅲb) 12. Ⅲ>V

図Ⅲ-309 H-503実測図

H-503



図Ⅲ-310 H-503出土遺物分布・接合図

が加えられている。内外面の色調は暗赤橙色。焼成良好で堅緻。7は胴部破片。外面に縄の側面圧痕文が見られる。胎土は軟質であるが、緻密。8は乳房状尖底部。

石器：1は1a1類の石槍。2は平坦面にすり痕が残る石錘。3は石皿。

(和泉田 毅)

H-504 (図Ⅲ-311・312, 図版47・148)

位置：40-30、41-30・31 北から南へゆるやかに傾斜する。標高44.38m～44.70mの緩斜面に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

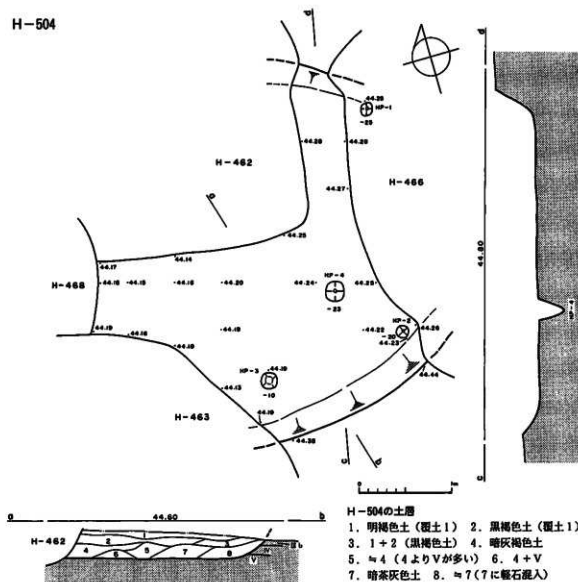
確認・調査・土層：40-30、41-30・31の包含層調査中、周辺のⅢb層中で遺物が多く出土していたことから、遺構が予想された。そのため土層観察用の土手を設定し、遺構検出作業を行ないつつⅢb層を掘り下げた。Ⅳ層直上付近で黒褐色土の落ち込みを検出した。覆土を掘り下げ、Ⅴ層中で、やや堅い軽石を多く含む暗灰黄色土を検出し、柱穴状小ビットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層は明褐色土、掘り揚げ土状の土である。覆土2層はやや粘質の黒褐色土である。覆土3層はやや砂質の暗灰褐色土で、南壁側では軽石を多く混入する暗茶灰色土が見られた。

重複関係：本住居跡はH-462・463・466・468と重複しており、これらより古い。

時期：I群D1類土器と伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦である。

H-504



図Ⅲ-311 H-504実測図

壁：南東壁はゆるやかな傾斜の立ち上がりである。北壁はわずかに残存しているが、急傾斜の立ち上がりである。検出面からの壁高は、北壁が32cm、南東壁が13cm～21cmである。

伊跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは4個検出されている。HP-1はH-466の床面で検出されたものである。HP-1～3は壁際にあるものと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は72点である。この内訳は土器47点、石器25点である。遺物は覆土中から出土したもので、覆土2層からは跡が8点出土した以外はすべて、覆土1層中から出土したもので、出土状態にまともは見られない。土器はI群D1類のものが出土しており、石器ではスクレイパー、たたき石、すり石、石鏝などが出土している。土器：1は覆土1層出土のI群D1類土器である。平縁の口縁部破片で、口唇部は角形に仕上げている。外面はナデ調整、内面には貝殻条痕文が加えられている。胎土には砂粒多く、脆弱である。



図Ⅲ-312

H-504出土土器

(和泉田 毅)



北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第120集

函館市

中野B遺跡(Ⅳ)

函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

- I 遺跡の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺構と遺構出土の遺物

平成10年1月30日発行

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎011 (561) 3131

印刷 三陽印刷  
〒063-0061 札幌市西区西町北15丁目1番12号